
英雄都市のバカども
2
～女神と漢たちの祭り～
アサウラ
ILL. だぶ竜
ファンタジア文庫

アサウラ

●アサウラ

皆さん、こんにちは。
思いの外早く二冊目が出ることになり、驚くやら、スケジュールがえらいことになったりやらで大変でしたが……嬉しく、そして大変ありがたいです。
今回はモルトの日常がメインのお話です。ひたすらに気を抜いてお楽しみいただければ幸いです。
よろしくお願いいたします。



イラスト：だぶ竜
カバーデザイン：ムシカゴグラフィクス


人の子よ……
わらわはこの地、この山を治め、
水の恵みをもたらすもの……。
どれ、今、姿を見せよう。
英雄都市のバカども
2
～女神と漢たちの祭り～


ピンガ
モルト
クラッツ
サシャ
グレーン
リッツ
漢祭り、開催である!!


美女がゆっくりとやって来る。
彼女は顔を赤らめ、伏し目がちにして
モルトと目を合わそうとしない。
「……サシャ……の、妹?」
「……どう見ても私本体だろ、モルト」

英雄都市のバカども２

～女神と漢たちの祭り～

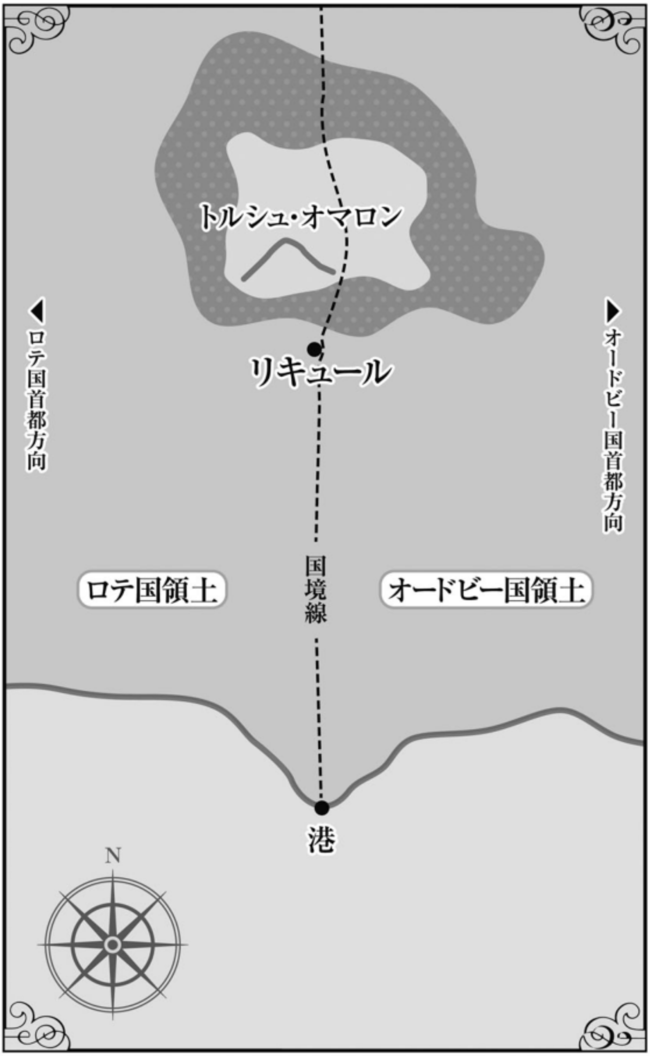
アサウラ

富士見ファンタジア文庫

口絵・本文イラスト　だぶ竜

目次

リキュール周辺地図



地名解説

リキュール

古代の少数民族の遺跡を利用して作られた英雄都市と謳われる街。オードビー国との大戦時にロテ国の防衛拠点となり、周辺一帯が不毛の荒野に成り果ててもなお、終戦に至るまで陥落しなかった。当時の英傑達の子孫が今もなお住み続けており、二国の首都間流通の要となっている。また、『アルコ・ホール』と呼ばれる街の大通りは常に大賑わい。

ロテ国

豊富な資源を有する広大な王国。

オードビー国

錬金術士達が作り上げた国だという伝説を持ち、かつては魔力の研究に勤しんでいたが、現在はそれらから手を引き、様々な物品の開発・改良に力を入れる技術国である。

トルシュ・オマロン

広大な森を引き連れた独立峰。かつては『トルシュ・オマロン火山』と呼ばれていたが、ここ数百年は噴火しておらず、火山の名は忘れ去られつつある。山や森には大量の魔獣が跋扈しているため、一般人はまず足を踏み入れない。森は年々拡がりつつある。

港

元々は嵐等を避けるために自然発生した船舶の避難場所であったが、漂流者などが流れ着いて住み始めたことから、現在は小さな名もなき港となっている。

リキュールの住人達



ライ

若き自警団団長。
年下ながらモルトの
兄弟子でもある。
姉にオリービーを持つ
筋金入りのシスコン



オリービー

小さな花屋の若き店長。
とても巨乳。
リキュール中の男子の
憧れの的だが、
ライが悪い虫を寄せ付けない



クラッツ

大衆酒場「安美亭」の看板娘。
セクハラを試みる客には
手にした盆で
鉄拳制裁がくだる



ピンガ

街のパン屋。
武器のパンは
鉄を凌駕する
硬さをもつ



グレーン

「安美亭」の主人。
フライパンを
武器として揮う
ことも



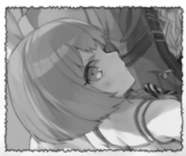
モルト

この町に転がり込んだ
何でも屋。
酒と女に目がなく、
万年貧乏で家賃滞納気味



サシャ

整った顔立ちの
抜け目ない何でも屋。
男も惚れる美形だが、
何やらワケありのようで……？



リッツ

モルトの住むアパートの
大家の娘。モルトから
家賃を取り立てるのを
主な日課とする

●あらすじ

　そこは、リキュールという街。

　山の麓ふもとにある、小さくも人で賑にぎわい、物が大きく行き交かう街。

　どこぞの国の首都ならいざ知らず、何故なぜ、こんな辺境の地に、山の湧わき水を利用した上水道はもちろん、下水道まで整備された街があるのか……遠方の人間からすると不思議に見えるはずだった。

　この不可思議な街の活気の秘密、それはそこを挟はさむ二つの大国にあった。

　一〇〇〇年もの昔、森を更さら地ちに、更地を砂さ漠ばくへ変えるほどの大戦争を行ったロテ国とオードビー国。かつて大戦争を行った二カ国ではあったが、今や王族は政略の思おも惑わくなく頻ひん繁ぱんに姻いん戚せき関係を結ぶほどの間あいだ柄がらとなり、両国の国境は実質的にないに等しいまでになっていた。

　だが、それらの間には戦争の傷きず跡あとが今もなお残り、不毛の土地は合がつ併ぺいに対する厚い壁かべとして数百年を過ぎてもなお変わらずにあり続け、人が生活を為なせる土地になるまでさらにもう一〇〇年の時は必要だと言われている。

　しかしながら、その不毛の土地こそが二国の首都を最短で結ぶ最重要ルートだった。それ故ゆえに、必然として人や物の多くがここを通るのだ。

　そして、その過か酷こくな道の中央に、それはあった。

　深い森を引き連れた山が一つ。その麓に長い歴史を持つ街、リキュール。

　魔ま力りよくが普ふ及きゅうするより前、はるか太古より、少数の民族が山を崇あがめて生活していた集落であり、かつての大戦に

おいてはロテ国の最前線基地ともなった、そこ。

それはロテ国最強と謳うたわれた軍勢が、その圧あつ倒とう的てきな力でもって鉄てつ壁ぺきとなり、オードビー国軍の侵しん攻こうの出鼻を挫くじき、さらに国だけでなくその豊かな山や森までをも守り抜ぬいた、奇き跡せきの領域だった。

そんな特とく殊しゆな歴史を持ち、今や世界中の人や物が行き交う街となったリキュール。

そこには不思議な魅み力りよくがあると人々は口を揃そろえる。それは――。

『どこか、懐なつかしい感じがする』

どこの誰だれであっても、まるで一度は訪おとずれたことがあるような……そんな街。

特殊な街であるくせに、どこにでもありそうな、ありふれた……そんな街。

辺境の地にある、物流の重要拠きよ点てんたる街。しかしながらそうであるが故に様々な人や物が入り込み、誰もが故郷を思い出せる不可思議な街ともなっていた。

旅人や商人にとっては、この街を訪れることが首都間の旅における最大の楽しみだとする者も少なくない。

様々な土地の人が行き交い、様々な物産が取引され、そして……それら以外の望まれざるものもまた……。

毎日のように巻き起こる様々な事件、事故、問題――。

だがそれでもなお、そこに住む人達にとって、全すべては当たり前の日常でしかない。

それが、リキュールという街なのだ。

●第一話『果てしなく透とう明めいなただ一つの純じゆん粋すいな願い』

「おっぱいを揉もみたいんです」

　ほぉ……。少年の熱意にモルトは思わず感かん嘆たんの息を漏もらした。

　──乳おつぱいを揉みたい。

　なんてシンプルで、なんて真まっ直すぐで、なんて普ふ遍へん的な男の子の願望だろう。

　いや、男の子だけではない。男という生き物全てにとって、生しよう涯がい追い求め続ける浪漫ロマンそのものだと言ったっていい。

　モルトは目の前の純じゆん朴ぼくそうな少年から窓へと視線を移した。

　午後の日差しを浴びながら大通りを行き交う大勢の人々を見ているのではない。窓にうっすらと映る自分を見たのだ。

　巨大な愛刀を立て掛かけたテーブル席に座っているのは二十代前半、黒くろ髪かみに黒い革かわのコートを羽織り、ヨレヨレのシャツにヨレヨレのネクタイを雑に締しめている、目つきの悪い男。

　そんな自分と、勉強漬づけで生きてきたかのような、小こ柄がらな少年、ヌヴォー。

　まったく違ちがう二人でありながら、その胸に抱いだく願いだけは同じ……。何とも不思議で、そしてどこか温かい気分になって、自然と微笑ほほえみが漏れてしまう。

「依い頼らいはわかった。任せろヌヴォー。この何でも屋であるモルトが思う存分女のおっぱいを揉ませてやる。そうと決まればまずは店の予約だ!!」

「あ、お店はダメです」

「任せろって。お前が一三歳だとしても、うまいこと潜もぐり込ませてやる」

　英えい雄ゆう都市とも言われるこのリキュールは、大国の首都間を結ぶ最短ルート上に存在する街である。北にある山と森を除けば、街の周辺は大戦時の影えい響きようで広大な不毛の荒こう野やと成り果てているため、どれほどの命知らずとて街ここを通らずに旅をすることは望まない、そんな所だ。

　当然、行き交う旅人は多く、彼らを相手にする商人達もまた群れを成す。

　そして、そんな賑やかな街であれば、当然ながら〝大人のお店〟もあるのだが、無論、未成年は入ることはできなかった。

「いえ、違うんです。……そういうお金が絡からむ感じの、プロの方々はちょっと避さけたい」

「何だ、差別は良くないぞ、ヌヴォー。おっぱいは平等におっぱいだ」

「モルトさん、よく見てください。僕です。僕を見るんです」

　思わずモルトは眉まゆ根ねを寄せて、ヌヴォーを今一度見やった。

　一三歳、綺き麗れいな真ん中分けのヘアスタイルで、後頭部は刈かり上げ、そしてアイロンが決まった白いシャツに恐おそろしく地味なベスト、少年らしいハーフパンツ……そしてトドメに瓶びん底ぞこ眼鏡めがねである。実にダサい。『ガリ勉』『クソ真ま面じ目め』という言葉を掛け合わせて生成された精せい霊れいか召しよう喚かん獣じゆうだと言われても納なつ得とくしそうな出いで立ちである。

　とはいえ、これでまだ子供らしい表情でもしていればそれなりに愛らしさもあるのだろうが……彼の小さい目はどこかの虐殺現場ジェノサイドから一人だけ生き残ったかのように哀あわれなほど荒すさみ、暗殺を生なり業わいとするかのように驚おどろくほど鋭するどい。……それが、真面目一いつ辺ぺん倒とうの他ほかの部分から浮ういていて、妙みような不気味さが漂ただよっていた。

「こんな薄うす気き味み悪わるいクソガキに嫌けん悪お感かんを抱かずに相手ができる女性がいるとでも？」

「……お前、それを自分で言うか……。でも、金さえ出せば幅はば広ひろく受け入れてくれるぞ。だからこそ、プロなわけだし」

「でも、嫌いやなんです。嫌悪感を抱かれたまま、お金のために作り笑いでいる女性のおっぱいを揉むなんて、ナンセンスだ」

　十代半ばにも達していない少年が結構な額の金を持って、乳を揉みたいと何でも屋に依頼してくる方がナンセンスだとモルトは思ったが、口には出さなかった。

　こんな彼でも、大事なお客様である。

「真面目というか、潔けつ癖ぺき性しようというか。面めん倒どうなガキだな」

「教師の家系でして。僕も将来は教師か、適性があるらしいのでギルド所属の魔ま導どう士しとか、そういうお堅かたい職に就つくようにと両親及および親族一同の願いで日々勉強漬けです」

「なるほどな。それでいろいろこじらせちまったわけだ」

「別にこじらせているわけではありません。僕はただ純粋におっぱいが揉みたいんです。風の妖よう精せいからの贈おくり物であるパンチラや、一いつ瞬しゆんの心の隙すきで開幕となるお風ふ呂ろという名の舞ぶ台たいで繰くり広げられる入浴という名のドラマを、窓の隙間という特等席でいくら鑑かん賞しようしたところで、それはファンタジーに等しい。……だからこそ本物を……この身の五感で、女性をしっかりと感じたいんです」

「うんよし、十分にこじらせているのはわかった。痴ち漢かんに走らなかったことを褒ほめてやる」

「人に迷めい惑わくをかけるのは、嫌ですから。先さき程ほど、僕がプロが嫌だと言ったように……おっぱいを揉むという幸せな行こう為いで誰かが悲しむなんて、ダメだ。だから、僕に揉まれることを嫌がる人のおっぱいは揉めない。もちろん、寝ね込こみを狙ねらってさりげなく、というのも望みません。……おっぱいには幸せだけが似合う。違いますか？」

「同意してやる、ヌヴォー。しかし、そうなると結局……カノジョが欲ほしいってことか？」

「いえ、僕は未成年ですし、遊びの恋こいなんてまっぴらですから、恋人はいりません。勉強の邪じや魔まにもなります。何よりこんな僕と付き合いたい女性など、地の果てまで捜さがしたとて皆かい無むでしょう。ですから、おっぱいです。乳さえあれば、それでいい」

「お前……願いが純粋過ぎて研とぎ澄すまされ過ぎだろ……。まぁいい。わかった。とにかく、おっぱいだな。……クラッツ！
ちょっと来てくれ」

　名を呼ばれ、店の奥から現れたのは金きん髪ぱつをバレッタでアップにまとめ、右目が半ば隠かくれている一七歳の女の子。化け粧しようもうまく、シックなアクセサリーで年ねん齢れいよりは大人に見られるが……それでも酒を主メインとした店に置くにはいささか若い。

　だが、彼女は店主の姪めいであるという以上に、この大衆酒場『安あん美び亭てい』の立派な看板娘むすめで、そして腕うでのいい女性バーテンダーバーメイドだった。

　人気の大衆酒場とはいえ昼過ぎの客のいない時間帯とあって──実際、店内にはモルトとヌヴォーしかいなかった──その綺麗な顔には『暇ひま』の文字が書いてあるようだった。

　伝票を手にした彼女がやって来ると、ヌヴォーは目を一層鋭くすると共に、テーブルに両りよう肘ひじを突ついて、指を組むとそこに鼻先を置く。まるで悪の総そう帥すいのような仕草と顔付きだ。

「どうした、ヌヴォー？」

「悪くないです。大人の雰ふん囲い気きを出しているものの齢としは僕より四つぐらい上かな？　足は細く美しいが、そのくせして尻しり周りの肉付きは実に理想的でタイトスカートを美しく張っている。また、今回の要かなめであるおっぱいは、ウェストを締めるコルセット風ベストによって強調されているものの、化粧具合やほどほどの胸のサイズが何ともバランス良く、下品にならずに爽さわやかさすら伴ともないつつ男を誘さそっているといっていい。……実に、揉みたい」

「……ほぉ。いい表現をするじゃないか。ということで、クラッツ、オーダーだ。おっぱいを彼に。その後で俺が揉み尽つくそう」

安美亭の注文捌さばきは早い。

オーダーを言い切ると同時に、二人の男の頭上には銀のお盆ぼんが丁重かつ強きよう烈れつに届けられたのだった。

「なるほどね。事情はわかった。しっかし何だね、モルト。何でも屋ってのは本当に何でも依頼を受けるんだね」

街の中にある広場、『処しよ刑けい台だい公園』にて、ガーナが一人で酒盛りをしているのを運良く見つけられた。そこでこれ幸いと事情を話したところ、急に同情の眼まな差ざしを向けられ、モルトは少し戸と惑まどっていた。

「別におかしなことじゃないだろ。犯罪をしようとしているわけじゃない。それにこいつ、地味に小こ遣づかいを貯ためててさ。報ほう酬しゅうが約束されていれば何でもするのが何でも屋だ。それで……どうだろ、姐ねえさん」

何が？　と、ガーナは芝生しばふの汚よごれを払はらいつつ立ち上がると、モルトを見上げた。

モルトが一八〇センチほどの身長に加え、鉄板仕込みで分厚い靴くつ底ぞこのブーツを履はいているからではない。彼女が、いささか小さいのだ。

「ここで会ったのも何かの縁えん。ヌヴォーこいつに姐さんの乳を……」

ガーナはワインの瓶を片付けながら、チラリとモルトの背後に立つヌヴォーを見やった。

「……歳としは二〇前後、スタイルは実に大人の女という体付きをしているくせに、その身長は少女のように小さい。小柄というよりは、全体的に小さい。遥はるか遠方の地に住むという、小柄な人種なのだろう。そのせいか、球のようなおっぱいは何とも大きく見えるが、実際のサイズとしては小さく、僕の手でさえ転がすに容易たやすそうだ。瞳ひとみや長い髪は燃え盛さかる炎ほのおのように鮮

あざやかに赤く、見かけた者達の目を強力に引っ張る。それはまるで彼女の勝ち気な精神を表しているよう。……そういう女の乳をしこたま揉むというのはある種、男にとって心擽くすぐられるものがある……」

「モルト……アタシを見た瞬間にスペックをブツブツ呟つぶやき出す根暗そうな眼鏡小こ僧ぞうに……何をしろって？」

「姐さんの形のいい自じ慢まんの乳を……その、なんだ……。お、おい、ヌヴォー！　壊こわれた測定器みたいに観察し続けるな、気味悪がられてるぞ！」

「これが普ふ段だんの僕です。何故なぜモルトさんに依頼を出したのか、わかるでしょう？」

　わかりすぎて、逆に嫌だった。

「と、ともかくだ。……姐さん、頼たのめないかな？　後で一いつ杯ぱい奢おごる。純じゆん粋すい無む垢くな少年の夢を叶かなえてやってくれないか」

　そんな頼み事をしている傍かたわらで、ヌヴォーが鋭えい利りなナイフのような目をし、スッと両りよう腕うでを持ち上げ、〝揉み〟の構えを取る。その無む駄だなく、隙もない構えはちょっとした拳けん法ぽうの達人を思わせるに十分であり、今すぐにでも地を抉えぐらんばかりの踏ふみ切りでもって、乳にむしゃぶりつかんとする彼の強固な意志を見る者に如によ実じつに伝えていた。

　この少年、全力である。全身全ぜん霊れいをかけて、乳に立ち向かう気なのだ。

「モルト……これが、純粋無垢かい？」

　真面目で理性があって、嫌がる女性のものではダメだとする真しん摯しさを持ち合わせつつ……そのくせして欲よく望ぼうにとてもつもなく素す直なお……。

　てっきり自分と同族だと思っていたが、この少年、平均的な男よりもはるかにおぞましき闇やみを抱かかえているのかもしれない。

「ま、お断りするよ。そもそも金積んで、頭下げてどうこうしようって考えるような奴やつに触さわらせる安い体じゃないのさ」

空き瓶を纏まとめた革かわ袋ぶくろを肩かたに担かつぐと、ガーナはさりげなく背せ伸のびをしてヌヴォーよりギリギリ目線を高くすると、彼の間近でその球体のような胸を張る。

「ヌヴォーだっけ？　こんな野や暮ぼな男に頼むより、友達と遊んで、女の子と仲良くして……それで口説き文句の一つでも学んできな」

ペチンっとガーナはヌヴォーの額をデコピンすると、毅き然ぜんとした足取りで去って行った。

「……それができないから、金にものを言わせてるんですけどね……」

「ヌヴォー、友達は？」

「いると思います？」

質問を質問で返されたが〝いない〟と本人の口で言わせることほど、酷こくなことはないとモルトも察し、口を閉じた。

肩に載のせていた数十キロの重さにして、一八〇センチにも及ぶ得物を担ぎ直して、モルトはため息を一つ。

正直言うと、もう、当てがなかった。

クラッツは無理だとわかってはいたが、姐あね御ご肌はだのガーナであれば、「仕方ないね」の一言と共に、この純じゅん朴ぼくな少年の切なる願いをさらっと嫌悪感を抱いだく間もなく叶えてくれると思っていたのだが……。

プロは相手にできない。痴漢等の相手に迷惑をかける手段はもってのほか。女性に好かれて自然とそういう関係になる流れは絶望的……。

今になってモルトはようやく気が付いた。──意外とこの依い頼らい、難易度が高い。

「さぁ、モルトさん、次の手を。……まさか、もう打ち止めとか言いませんよね？」

モルトは曖あい昧まいな笑え顔がおを浮かべて、歩き出す。

　まるで次の目的地があるようにしてはいたが……無論、当てなどなかった。

　乳を揉もむ。何と夢溢あふれる行為だろうか。しかし、現実に叶えようとするには何とも難易度が高いことでもある。世の中にはいとも容易たやすく多数の女性の胸を揉めるイケメンなる幻まぼろしの種族もいるらしいが、そうでない者にとってこれほどのハードルは他にない。

　それが目つきがクソ悪い生き真面目変態小僧となれば、難易度はさらに跳はね上がる。

　モルトは必死に頭を働かせてみるのだが……よくよく考えてみれば女性の乳を両手が望むままに思う存分に揉み尽くせる知り合いの当てや場所があるのならば、自分が毎日通っているはずだろうし、そうでなくとも地の果てまで延びる行列ができることは請うけ合いだ。

　それがないということは、ない、ということではないのか。

　ならば……いっそ、代用品はどうだろう？　世界一硬かたいパンを目指して日々鍛たん錬れんを積んでいるパン職人、ピンガに頼んでおっぱいのような感かん触しよくのパンを焼いてもらうというのはどうだ。あの剣けんをもへし折るパンを生み出しし職人ならやれるのではないか……いや、さすがにパンに夢を託たくしすぎか。

　モルトはチラリと後ろから付いてくるヌヴォーを振ふり返って見る。彼は両手を胸むな元もとにまで持ち上げ、何やら指を巧たくみに動かしていた。

　……こいつ、揉んでいる!?

　モルトには、何もない空間に二つの乳ち房ぶさが見えた気がした。

　ヌヴォーの左手は片方の乳房を覆おおい尽くしてゆったりと揉み込みながらも、右手はその逆……五本の指先は独立した生き物のように激しく動いている。

　特にその親指の卓たく抜ばつなる円運動は確実に乳頭を転がすイメージだろう。

エア乳揉みである。しかもエアで楽しんでいるわけではなく、これから訪おとずれるであろう本番に備えてのウォーミングアップか。

「……こりゃ偽にせ物もので誤ご魔ま化かしたり、依頼を断ったりできる空気じゃねぇな」

おっぱい、おっぱい、あぁおっぱい……。モルトは必死になって、おっぱいの可能性を探さぐった。そりゃおっぱいは無限の可能性を秘めていると言ってもいいだろう。横乳、下乳、谷間……少し顔を出すだけで世界に幸せをもたらす魔ま法ほうのアイテム。トップが現れようものなら天変地異ばりの大おお騒さわぎだ。

そんなことを考えながら歩いていると、背後から「……おっぱいだ」とヌヴォーの声が上がる。モルトが、何のこっちゃ？　と振り返ってみれば、ヌヴォーは乳揉み体勢のまま、街の大通り『アルコ・ホール』に立つ女性に目が釘くぎ付づけとなっていた。

彼女はアルコ・ホール三番街にある花屋の店主、オリービーだった。

「……リキュールの男なら誰だれもが憧あこがれる穢けがれ無き女性、オリービーさん。相変わらず噂うわさに違たがわぬ素晴らしいものをお持ちだ。亜あ麻ま色いろの長い髪かみも、柔やわらかな微笑ほほえみで接客する姿も、纏う雰囲気や香かおり……それら全すべてが人を笑顔にさせる力を持つ。だが、やはり見所はその胸か……。ゆったりとしたセーターを着ているものの、それだけでは隠しきれないだけの大きなそれは、神が大地に与あたえた宝ほう玉ぎょくに他ほかならない。また、太っているわけでもないのに、全身のどこをとっても柔らかそうなのも実にそそる。揉みたい。乳だけではなく、その全身を抱だき締しめたい。できることなら、その温ぬくもりや肌をより一層感じるために全ぜん裸らで飛び付きたい……」

どうやらおっぱいのことを考え続けていたら、モルトの足は自然とオリービーの所へと向かって来てしまったようだ。確かにリキュールでおっぱいについて考えるのならば、彼女抜ぬきには始まらない。だが……。

「おいヌヴォー、オリービーさんに手を出そうってんなら、俺が力ちから尽ずくで止めるぜ？」

「それは自分が狙ねらっているから、ですか？」

「それもあるけど……知ってるだろ？　アイツさ」

　モルトがクイッと顎あごで示した先にいたのは、人混みを掻かき分けて迫せまる十数人の集団だ。

　その者達は皆みな、筋きん骨こつ隆りゆう々りゆう、身長も二メートルにも及およぼうかという巨きよ漢かん達であり、その手にはモルトと同じ、刃は渡わたりと柄えが共に九〇センチという強大な鋼鉄の武器──長なが柄え刀とうが握にぎられていた。

　その集団の先頭を行く、一六〇そこそこの小こ柄がらな少年もまた、己おのれの身長を超こえる長柄刀を軽々と握っている。

　亜麻色の髪を短たん髪ぱつにまとめた彼は、ヌヴォーとは違った意味で純朴な少年らしい爽やかな顔付きをしていた。濁にごりのない透すき通った彼の瞳がモルト達を見つけると、その表情をオリービーに似た微笑みへと変える。

「……あぁ、オリービーさんの弟だっていう、自警団団長でしたっけ？」

「ライだ。噂は聞いてるだろ。オリービーさんに手を出そうとしたら、アイツに身も心もヤられちまうぞ」

　かつての大戦時で活かつ躍やくした英えい傑けつ達の技わざと伝統を受け継ついだリキュール自警団、それをわずか一八歳の身で治める男である。その実力は街でも五本の指に入るとされていた。

　モルトにとっては年下の兄弟で子しであり、一時は相棒という間柄でもあった。

「モルト、丁度良かった！　アパートで寝ねていたら引っ張っていこうと思ってたんだ」

　確かに三番街にはモルトが住む三階建てのアパートもあるのだが……。

「何だ、ライ。デカい事件でも起こったか？」

「街の外れで魔ま獣じゆうの群れが出た。山を下ってきたらしい。

狂きよう暴ぼうな種じゃないらしいけど、数が多いみたいだ。とにかく人手が必要……なんだけど、仕事中か？」

　魔獣が現れるのはこの街では比ひ較かく的てきよくあることだ。他の土地ならば大騒ぎになるだろうが、リキュールならば自警団だけで十分な対処が可能である。

　人類が扱あつかえる武器ではないとさえ言われる、リキュール伝統の巨きよ大だいな長柄刀は、魔獣相手ならば百の剣より頼たよりになった。

「仕事中なら仕方ねぇや。邪じや魔まはしたくないしさ」

　悪いな、とモルトが口にすると、ライは幼げな笑顔を向けて来る。

「いいって。浴びる返り血の量が少し増えるだけさ。……よし、そんじゃ、みんな行くぞ！」

　ライは長柄刀を掲かかげると、引き連れていた団員達に大声で指示を出す。すると、それで弟の姿に気が付いたのか、オリービーが手を振った。

　それを受け、ライは、少し誇ほこらしげな顔をして駆かけて行くのだった。

　そんな微笑ましい姉弟きようだいの姿に、モルトは頰ほおを掻く。

「やっぱ……あれは俺を呼ぶために三番街に来たんじゃなくて、オリービーさんに働いてる姿を見せに来たんだな、きっと。ったく、これだからシスコンは。……いいか、ヌヴォー？　オリービーさんに手を出そうとするとアイツを敵に回すことになるんだ。間ま違ちがってもアタックしようと思うなよ」

「はい、わかりました。では、早さつ速そくオリービーさんの乳を揉みに行くとしますか」

「お前……人の話、聞いてねぇだろ」

「聞いてました。ですが、その厄やつ介かいな弟は街外れまで仕事のために駆けて行った。即すなわち、今のオリービーさんはノー

ガード。……揉むなら今だ。違いますか？」

　ヌヴォーは分厚いレンズの眼鏡めがねをクイッと掛かけ直すと、またもおぞましい程ほどに鋭するどい目をして、モルトを見た。



「弟の鉄てつ壁ぺきなるガードによって、あれだけ魅み力りよく的な女性でありながら今も手つかずというのは噂に聞いたことがあります。つまり……男に免めん疫えきがない。どれほど激しく長い訓練を積んだ軍隊とて、実戦経験からのフィードバックなくして真の最強たり得ないと名だたる名将達が口をそろえるのを鑑かんがみるに、男女間においても同様のことが言えるのではないでしょうか。そして噂通りであるのならば、彼女の純真無む垢くで温おん柔じゅうなる精神は僕のような恐おそるべきクソガキ相手にでも真しん摯しに相手をしてくれる可能性が高い。……モルトさん、あなたがうまく交こう渉しようさえすれば僕の手が彼女の乳房に到とう達たつするのも夢ではないはずです」

「お、おぅ……その通りなんだが、どうした、お前、エロへの欲よつ求きゅうが強すぎてアグレッシブな策士家の才能に目覚めたのか？」

「エロではありません。おっぱいです。おっぱいを揉むという願いを胸に抱いただけの教師か魔ま導どう士しになるクソガキです。……さぁモルトさん、攻せめるなら弟さんがいない、今だ」

「若いな、お子ちゃまめ。確かにそれは正しいかもしれない。だが、揉んだ後はどうなる？　街中の男達の憧れであるオリービーさんのおっぱいだ。それに触ふれたとなれば噂は落らく雷らいの速度で街中を駆け巡めぐり、ライの耳に届くのにさほどの時間はかからないだろう。そうなれば奴やつは、魔獣の血で赤く染まった長柄刀を手に、天あま翔かけるが如ごとくの速度でお前の前に現れ、その両手、いや、体を真っ二つに斬きり飛ばすだろう。そこに幸せはない」

「……いや、ある。そこいらの女の乳を揉もむだけなら、確かに死のリスクに諦あきらめるところです。けれど、それが最上級の乳となれば話は違う。しかも僕も彼女も初体験となれば……その刹せつ那なの幸せは、残りの人生の全てと天てん秤びんに掛けてなお上回る。僕はね、モルトさん。乳を揉みたいんだ。この両手で、女性を感じたい。今僕は、その願いのためだけに生きているといっても過言ではない。それがオリービーさんのものとなれば……最高だ。僕は彼女の温もりと柔らかさの残ざん滓しを両手に宿したまま長柄刀の錆さびとなろう」

　その時、モルトは見た。あまりに純じゅん粋すい過ぎるが故ゆえ

に、ゲスな願いを抱いだきながらも澄すみ切っている少年の瞳ひとみを。

　情熱に己の全てを賭かけられる姿勢は、いずれ名の知れた名士になるのは確実と思われた。故にモルトは思う。この若者の未来をここで散らすわけにはいかない、と。何より……。

「ダメだ、ヌヴォー。お前をこんなところで失うわけにはいかない。お前の未来は、お前が考える以上に価値がある。俺が保証してやる。だから、死ぬな。生きろ。前を見み据すえろ。辛つらい時は空を見上げればいい。お前の未来は無限の可能性に満ち満ちているんだ」

　モルトはヌヴォーと視線の高さを合わせ、彼の肩かたに手を置くと、人生の先せん輩ぱいとしての言葉を放った。

「モルトさん……わかりました」

　言葉が彼の胸に届いたようだ。モルトは安心して、フッと慈じ愛あいに満ちた微笑みを見せる。が、一方でヌヴォーの目が鋭さを増した。

「自分が先に揉みたいってことですね？」

「よくわかったな」

「そりゃ台詞せりふの全部が薄うすっぺらい綺き麗れい事ですからね。びっくりするぐらい心が揺ゆれ動きませんでした。なので死んでもいいので、オリービーさんの乳が揉みたいです」

「ダメだ。俺が揉む。というより、俺だけが揉む。それ以外は全員が敵だ。ライの手を煩わずらわせるまでもなく、俺が殺す」

　モルトはみんなで一いつ緒しよに……ではなく、自分だけが幸せになりたいタイプである。

　近い将来自分のものになる──と信じている──おっぱいを、こんな童どう貞ていの権ごん化げみたいなガキに触さわらせる気はこれっぽっちもなかった。

　不満げな瞳で見据えてくるヌヴォーに対して、モルトは殺意を放ってその目を見据え返した。さすがに死よりもオリービーの乳を

取ると言うだけあって、まったく怯ひるまない辺りが、大したものである。

「モルト……子供相手に何してるの？」

　火花を散らして睨にらみ合う二人に声を掛けてきたのは、一人の幼い少女だった。

　フリルの付いたかわいらしい白のワンピースにサンダル履ばき。ボブヘアーでありながら左サイドだけ伸のばして三つ編みとする個性的なヘアスタイルの彼女は──リッツだ。

　モルトの住むアルコ・ホール三番街に建つアパートの大家、その娘むすめであり、モルトが滞たい納のうし続けている家賃の回収係でもある。

　かわいらしいポシェットを見るに、これから買い物にでも行こうとしていたようだ。

「……まさか、仕事もせずに路上で子供に喧けん嘩か売ってた、とか？」

「あぁ、リッツか。誰だれがそんなアホなことをするってんだ。……別に遊んでいるわけじゃない。このヌヴォーは依い頼らい人で、今、仕事中なんだよ」

　本当に？　と、リッツは大きな両目を訝いぶかしげに歪ゆがめ、モルトとヌヴォーを見る。

「……あ、そうだ！　そうだよ!!　なぁリッツ、実は今、ちょいと仕事で人手が欲ほしかったところなんだよ。リッツが手伝ってくれたらすぐに終わって、先月分の家賃が払はらえるかもしれない。どうだ、手伝ってくれるか？　もうお前にしか頼れないんだ」

「え？　えーっと、まぁ、家賃払ってくれるんなら……やるけど。なに？」

　実は……!!　と、前のめりになるモルトの肩を、ヌヴォーが手を伸ばしてつかむ。

　見やれば、彼は瞼まぶたを閉じてやや俯うつむき加か減げんに首を振ふっていた。

「モルトさん、ない。それは、ない。あまりにも……ない」

　言われてモルトが頭に『？』を浮うかべて小首を傾かしげているリッツを見る。

　……確かに、落ち着いて見てみると……なかった。胸が。

　リッツは一二歳。第二次性せい徴ちようが始まっていてもおかしくないのだが、相変わらずちっこく、胸の発育はからっきしである。ヌヴォーのエア乳揉みのテクを本番で行おうとしても、親指以外は動きようがないかもしれない。

「モルトさん、少年ぼくが初めて触れるというのならば、やはりそこは年上であってもらいたい。そこには不思議なロマンがあるとは思いませんか？　幼い少年が、ちょっとエッチな体験を年上の女性とする……それは生しよう涯がい輝かがやく思い出だ。異性との肉体関係というよりは母性本能から来る慈愛によって揉ませてくれる……それが理想だ。また、クラッツさんのような少し年上ぐらいの女性が、顔を赤らめながらも必死に大人ぶって揉ませてくれるというのも味わい深い。……ですが、こちらの……えっと、リッツさん？　は、大変かわいらしい。けれど、僕よりどう見ても年下だし薄うす気き味み悪わるい童貞を受け入れる心の広さもなさそうだ。何よりこの平たさでは……ふぅ、やれやれだ」

　手の平を空へ向けて、冷れい笑しようで首を振るヌヴォーに言われてみれば……なるほど、確かにその通りかもしれない。

「確かに……ないな、哀あわれなほど。気持ちはわかるけど……この際どれでも良くないか？」

「いやいや、せめて最低限のものはあって欲しい。もしくは年上のお姉さんだ。これでは、さすがに……」

「ちょっ、ちょっと、なに？　あたしを二人してじろじろ見て……何の話？」

「「おっぱいの話」」

　男二人が声をハモらせるとほぼ同時に、モルトの鳩尾みぞおちにリッツの膝ひざ蹴けりが叩たたき込まれる。そしてモルトがうつ伏ぶせで倒たおれ行く際、肩に担かついでいた長なが柄え刀とうの石いし突づき――刃やいばと反対側にある柄の先――がヌヴォーの後頭

部をしたたかに打ち付けた。

　二人が揃そろって路上に倒れると、その上をリッツは踏ふみ付け、去って行ったのだった。

「……モ、モルトさん……」

「い、言うな、わかってる。……今のは確かに、ヘタこいたな」

「ではなく……僕は、人が不快な思いをするのは耐たえられないと言ったはずです……」

「揉んでねぇから、セーフだろ」

「これ以上、失敗するようなら……僕は、もう……」

「わかった、わかった。……こうなりゃもう、最後の手段に出るしかねぇな……」

　モルトは長柄刀を杖つえ代わりにして立ち上がると、辺りを行き交かう人々に視線を走らせた。

「ついて来い、ヌヴォー。何でも屋を捜すぞ」

　何でも屋を見つけるのは、実はそう難しいことではない。人が多いところから順に当たっていけば、仕事中でもない限りほぼ確実に見つけられるのだ。

　それは人の集まりやすい場所ほどトラブルが起こりやすく、仕事のネタが多いのと、大勢と交流し、情報を常に仕入れることで今後の仕事に活いかすためである。

　だからこそ、モルトとヌヴォーは目当ての何でも屋をさほどの苦も無く、本日二度目になる安あん美び亭ていへの訪問で見つけることができたのだった。

「あっはっはっはっ！　それで私を捜していたと？　これはいい！」

　事情を話すなり、その何でも屋はカウンター席で、ひっくり返り

そうになりながら声を上げて笑った。

　カクテルマティーニに沈しずんでいた楊よう枝じに刺さるオリーブの実を口に運ぶも、それでもなお笑いが収まらなかったらしく、「……ククク」と声を漏もらしていた。

「あの、モルトさん、こちらの方は？」

「俺と同業、何でも屋のサシャだ。どうだ、イけてるだろ？」

「はい、とても。野の良ら犬いぬみたいなモルトさんとは全然違ちがう」

　サシャにとって、どうも今のモルトとヌヴォーのやり取りはツボだったらしい。

　口元に手グーを当てて、何とか笑いを堪こらえようとするが、肩が震ふるえ、白に近い金きん髪ぱつをまとめている簪かんざしの飾かざりが小さく揺れていた。

　サシャはリキュール最速とされる剣けんを使う何でも屋だ。腰こしには刀を帯び、異国のマフラーをその細い首に巻いて風に揺らす。その出いで立ちの見事さにはファンが多かった。

「事情はわかった、モルト。お前の頼たのみだ、承うけたまわろう。いろいろ教えてやれると思う」

「本当かサシャ!?　助かる！　やったな、ヌヴォー!!」

　はい!!　と、座りもせずに直立不動だったヌヴォーは大声で返事をした。

「そんなに感極きわまられると逆にこちらも緊きん張ちようするじゃないか。それじゃ早さつ速そくレッスンを……なぁ、モルト。何故なぜこの少年は私におぞましく鋭するどい目を向けて、研とぎ澄すまされた拳けん法ぽうの構えを取っているんだ……？」

「あー……これがこいつのやり方スタイルらしくてさ」

「凄すごいな、最近の子供は。隙すきが微み塵じんもないぞ。私の剣でも容易には斬り込めなさそうだ」

「俺も初めて見た時はビビッたよ。……ともかくサシャ、胸を張って相手してやってくれ」

　ヌヴォーが鋭い目つきのまま、目礼をする。

「サシャさん、胸を借りて勉強させていただきます」

「あ、あぁ。それじゃヌヴォー、ドンと来──」

　ヌヴォーは前動作なくトップスピードにまで瞬しゆん時じに加速し、胸を目指して飛び込んでいく。だが、サシャの反射的に飛び出た拳こぶしが顔面に突つき刺さってぶっ飛ばされた。

「なに物理的に来てるんだ!?　君はバカなのか!?」

「……チッ、惜おしいな。後少しでヌヴォーの手も届いたろうに」

「ちょっ!?　モルト、まさかお前、服装や髪かみ型がたのコーデ、口説き文句を勉強させるためじゃなく……私のを揉ませる気だったのか!?」

「うん」

「バカなのか!?　わ、私は……男だぞ!?」

「いや、お前綺麗だし、黙だまってりゃバレねぇかと」

「ちょっ、待っ、バ……あぁ、もう！　モルト、お前は!!」

　言葉をあれこれ迷って詰つまった挙げ句、サシャは苛いら立だち紛まぎれに頭を掻かいた。

　実際、綺麗ではあった。女性的な細身で、中性的かつ均整の取れた顔を持つ彼は、女性のファンが大量にいるのはもちろんのこと、男性にさえそれ相応のファンがいたりする。

　そっちの趣しゆ味みがないのに、サシャを間近で見た瞬間にやられてしまった、という話でさえ枚挙に遑いとまが無かった。

「それにお前、ホラ、鳩はと胸むねで膨ふくらんでるだろ？　リッツのよりは揉もみ応ごたえがあるかと」

「剣を使うための大胸筋もある！　って、そうじゃない!!」

あぁもう！　と、サシャは椅い子すに座り直すと頭痛がするように額を手で支え、そしてカクテルマテイーニを一息に飲み干した。

「だいたい私の……男の胸を揉んだところで依頼完かん了りようとなるのか？」

「よくよく考えてみたんだけど、そういや依頼される時に〝おっぱいを揉みたい〟とは言われたが、〝女の〟とは言われてないな、と」

「……酷ひどい……」

「まったくだ。本当に酷い話……あ、あぁ、ヌヴォー君だったかな。大だい丈じよう夫ぶか？　反射的とはいえ、殴なぐってしまったのはすまない。悪いのは全部モルトだ」

「そう、モルトさん……酷い！　話が違う!!　僕は何度も言ったはずです!!」

「いや、流れでは確かに幾いく度ども言ってたけど、依頼自体は〝女のおっぱいを揉みたい〟じゃなくて、ただおっぱいを──」

「そうじゃない！　サシャさんのなら男でも確かに……アリだ!!けど……」

──少年ヌヴォーよ、お前もか。

新たなる次元ステツプへの階段を昇のぼりつつあるヌヴォーを見ていると、自分はまた一つ罪を犯おかしてしまったのをモルトは自覚した。

「けど……おっぱいを揉むのに、人を不幸にしていいわけがない！　嫌いやがる人のを無理矢理揉むようなことは、嫌だと言ったでしょう!!」

「ふむ。私のがアリだというのはいささか気になるが……ともかく、モルトと違って、他人に迷めい惑わくをかけないというのは良い心がけだ。……ヌヴォー君、その気持ちを持って、少しお洒落しやれに気を遣つかってみるといい。そうすれば自ずと──」

「ではサシャさんのを揉ませてください、今」

「嫌だ」

「前借りで」

「断る」

「出しゆつ世せ払ばらい」

「却きやつ下か」

「男同士じゃないですか」

「むしろダメだろ」

「大人はいつもそうだ!!　勉強しろ、真ま面じ目めでいろ、将来は教師だ、いや魔ま導どう士しだ、全すべてはお前のため、将来のため……そんなことばかり言って、本当に僕が欲ほしいものは一つとして与あたえてくれない!!　建前ばかりの綺き麗れい事ばかり!!　もううんざりです!!」

　モルトは椅子を降りると、今一度ヌヴォーを真っ正面から見み据すえた。

「ヌヴォー、よく聞け。いいか、それらは与えられるもんじゃないんだ。自ら手を伸のばし、捕つかまえるものだ。そう、多少強引でもな。おっぱいってのは、そういうも──」

　ガンッ！　と、カウンターの中でグラスを磨みがくに徹てつしていたクラッツから銀のお盆ぼんを投げつけられ、モルトは床ゆかに倒れた。

「モルトさん、仕事はキャンセルです！　……初めからわかってたんだ、どうせ僕は……一生おっぱいが揉めないんだって!!」

　ヌヴォーは目め尻じりに涙なみだを溜ため、店内にいる大人達を睨にらみ付け、そして……店を飛び出して行ったのだった。

●

　通りを行き交う大勢の人々。その半数近くが女性、無論その服の下には乳ち房ぶさが二つ……つまり、この通りを行き交う人々とほぼ同数のおっぱいが周囲で自由気ままに揺ゆれている。

　ならば、状じよう況きようはまさに、おっぱいがいっぱい。

　それなのに自分が触さわっていいおっぱいは一つとしてない。

　それは息苦しいほどの絶望だった。一人で感じる孤こ独どくより、大勢の中で感じる孤独の方が苦しいように、おっぱいに囲まれながらそれに触ふれることができない苦痛は酷く辛つらい。

　結けつ婚こんしている人はもちろん、そうじゃなくてもイケメンとやらに生まれ落ちた男は一つならず二つ三つ四つと……いや、奇き数すうはおかしい。二つ四つ六つと、いっぱいのおっぱいを楽しんでいるに違いないというのに……。

　何故、自分には触っていいおっぱいがないのだろう。こんなにも恋こいしいのに。自分よりちょっと年上で、かといって母親よりは若くて……と、こんなにも幅はば広ひろい受け皿でありながら、苦痛を覚えずに揉ませてくれる人が一人もいないなんて。

「……もう、死んだ方がいいのかな。おっぱいが揉めない人生なんて……」

　ヌヴォーはポケットの中の金を意識する。本当は何でも屋に支し払はらうはずだったお金だ。

　……いっそ、これで大人のお店に……。

　ダメだ、それは嫌だ。たとえお金のために好き勝手させてくれるのだとしても━笑え顔がおを見せているのだとしても、嫌がる人の胸を揉むのは……嫌だ。

　プロだろうが何だろうが……心の奥底に嫌けん悪お感かんを抱いだいている人のおっぱいなんて、とてもじゃないが揉めやしない。……いや、揉めたとしても心の底から楽しめない。

　おっぱいには、幸せだけが似合うのだ。

　楽しめないのなら、幸せでないのなら……何のために乳を揉むというのか。

おっぱいは揉めない。ならば、この金にも意味などない。いっそ腹いせにバラ撒まいてしまったら気が晴れたりするだろうか……。

無論、真面目な自分だ。そんなことをするわけがない。そう、ヌヴォーは頭の片かた隅すみで冷静に思う。けれど、手はポケットの中の金を鷲わし摑づかみにして取り出していた。

「毎度ありぃ!!」

そんな威い勢せいの良い女性の声にヌヴォーはビクッと驚おどろき、思わず飛とび跳はねる。

見てみれば、露ろ天てん商しようである。大通りアルコ・ホールには商店が建ち並んでいるが、それに加えて蚤のみの市いちのように露天商も至るところにあるのだ。

どうやら偶ぐう然ぜんその前で金を取り出してしまったようだと、ヌヴォーは気が付いた。

「で、どの商品をお買い上げでざごいます!?」

無論商品なんて買うつもりもなかったヌヴォーは、しどろもどろに「あの、いや、その……」と口ごもる。

はい？　と、女性露天商が小首を傾かしげる。改めて見てみれば意外と若い。クセッ毛は雑に伸ばされ、肌はだは露天商らしくこんがりと焼けて小麦色。やけに健康的な肌はだ艶つやで、化け粧しようっ気けもないが……それがむしろ、この二十歳はたちに達していないであろう娘むすめを魅み力りよく的に見せていた。健康美というやつなのだろう。

この女性はもう、ヌヴォーが買うものと思っている。その期待を裏切るのは心苦しい。ならば、何か適当な安物を購こう入にゅうしてお茶を濁にごし──。

「……おっぱいだ」

おっぱいが、そこにあった。露天商の娘のおっぱいではない。いや、確かにノーブラで薄うす手でのシャツを着ているものだから、なかなかのおっぱいが美しい曲線ライン＆ポッチを表してもいるが……そうではない。

彼女が路上に広げていた商品の中に、おっぱいがあったのだ。

「あぁ！　お客さん、お目が高い！　おっぱい型のそれは、古代遺い跡せきより発はつ掘くつされた奇き形けい魔ま導どう球で、共にあった記録からすると遣い手の願いを叶えてくれるとか！　……とはいえ、知り合いの魔導士が魔力を込こめても発動しなかったんですけどね……。ま！　それはそれとして、モノは本物に違ちがいありません！　どうです、いつか全ての願いを叶かなえてくれるかもしれないアイテムを抱だいて、明るい未来を想おもい、眠ねむれぬ夜を過ごしてみる……そんなのって素す敵てきだと思いません？」

うまいんだかヘタなんだかよくわからない正直な口上に、ヌヴォーは思わず失しつ笑しょうした。

必死に語る彼女に、ではない。魔導球に、だ。

魔導球は魔法を起こすための道具である。人が発する精神の力――魔力を込めることで発動し、魔法を発現させるものではあるが……本来のそれは大小の差こそあれ、綺麗なガラス球である。

しかし目の前にあるそれは赤子の頭ほどのものが二つ、融ゆう解かいしてくっつき、少しとろけたかのようになっていた。それ故ゆえにおっぱいのような形になり、表面滑なめらかで女の肌のように見えるのだ。それに加えて、白く均一な濁りを有しているのもおっぱいを連想させるものがあった。

恐おそらくただのガラス工芸か、魔導球の製造工場で出た失敗作なのだろう。そもそも魔導士としての勉強もしているヌヴォーからすれば、遣つかい手の願いを叶えるなんていう曖あい昧まいな魔導球があるとも思えない。

魔導球は古代科学の結けつ晶しょうである。曖昧なものではなく、明確な目的のために論理的に造られる道具だ。お伽とぎ噺ばなしのような都合のいいものではない。

「どうです、今ならお値打ち価格で！　あ、触ってみます⁉」

差し出されたおっぱい型魔導球に、ヌヴォーは金をしまうと自然と両手を伸ばした。

そう、その手はエア揉みで訓練した通りの、左手は全体を、右手は各おの々おのの指に独立性のある動きを与えつつ、親指は乳頭を

転がして……。

　しかし、ない。当たり前だ。魔導球の出で来き損そこないに乳首があってたまるか。

　何より……冷たく、硬かたい。いくら滑らかでも、こんなもの……おっぱいではない。

「……お、お客さん？」

　魔導球を持ちながら商人の女がおろおろとし始める。

　それもそうだろう。ヌヴォーにだって、わかっている。

　ヌヴォーは、両手を冷たく硬い魔導球を必死に柔やわらかくしようとするかのように揉みしごきながら、泣いていたのだ。

　俯うつむき、唇くちびるを噛かみ締しめ、声だけは漏もらすまいとして……。

　哀かなしかった。まるで〝お前に揉める女の柔やわ肌はだはない、これで我が慢まんしろ〟と神に嘲あざ笑わらわれているかのようだ。

　そう、これが自分の人生なのかもしれない。硬く、冷たく、寂さびしく……ただ、無意味。

　では、そんな人生を送る意味は？　生き続ける意味があるのか？

　風の強い日、パンチラ目当てに街を徘はい徊かいし、いつも窓を閉め忘れる近所のお姉さんのお風ふ呂ろを天体望遠鏡で覗のぞくだけのそんな人生に、価値があるのか……。

　─ない。あるわけがない。無意味だ。生きるだけ無む駄だ。悲しむだけ損。望むだけ……哀あわれ。愚おろか。苦痛。全ては、虚きょ無む……。

「え、えーっとぉ、お客さん、ど、どういたしましょう……か？　如何いかがしたら……？」

「ぼ、僕は……」

　ヌヴォーは歯を喰くい縛しばり、その隙すき間まから漏らすようにして言葉を紡つむいだ。

　商人の女が「は、はい？」と俯くヌヴォーの顔を覗き込もうとしてくる。

　そうされること自体が、彼女に不ふ審しんに思われていることが……嫌いやだった。

　きつく閉じた瞼まぶたから涙がボロボロと零こぼれていく。

「お、おっぱいが、揉もみたい……僕はっ！　ただ、おっぱいが揉みたいだけなんだ!!」

　その瞬しゅん間かん、硬く冷たいだけだった奇形魔導球が激しく光り、辺り一帯に悲鳴が迸ほとばしったのだった。

○

「女の胸を追い掛かけるよりも、もっと打ちこむことがあるだろうにな。若いのだし」

「そういう薄うすっぺらい言葉の数々がヌヴォーの心を捻ひねくれさせちまったんだろう。〝正しい〟言葉かもしれないが、人間は〝正しさだけ〟で生きているわけじゃない」

　モルトはサシャと共に安あん美び亭ていのグラスに口を付ける。サシャのはワインだが、モルトの口に入ってきた液体は水である。金がなかった。

「あら。モルトにしては珍めずらしく含がん蓄ちくのある言葉に聞

こえるわね」

　クラッツがカウンターの中でグラスを拭ふきつつ、クスリと笑った。

「実際そうだろ。みんな本当は正しいことだけで生きているように見せかけているけど、どんなに真ま面じ目めで立派なイケメン紳しん士しだって、若い女のスカートが捲まくれれば鼻息荒あらくするし、目の前でおっぱいが揺れていれば手を伸ばす。……そういうもんさ」

「手を伸ばすのはダメだろう」

「サシャ……格好つけるなよ。素直になれって。お前だって、クラッツが今モロンと両胸を出したら、カエルのオモチャみたいに飛び付くだろ？」

「……モルト、お前は私を何だと思っているんだ？」

「一人の男だよ。何だ、違うのか？」

　うっ……と、何故なぜかサシャは言葉に一瞬詰つまるも、顔を少し赤らめつつ咳せき払ばらいをした。

「と、ともかくだ！　そういう即そく物ぶつ的な物の見方でしか女性を捉とらえられないのは哀れだぞ。真まことの紳士はちゃんといる。女性の心の在あり方、生き方に共感したり、尊敬したりすることで、人は愛を育はぐくみ──」

　ヌヴォーの叫さけびもわかる気がした。今のサシャの言葉はお堅かたく、お利口で、〝正しい〟のだろうが〝正しいだけ〟の役立たずな言葉にしか聞こえない。

　人は正しさだけでは生きてはいない。それなのに〝正しいだけ〟の言葉を吐はく。

　それはまるで童どう貞ていが得意げに口にするエロトークだ。所しょ詮せんは夢物語、小こ綺ぎ麗れいなファンタジーでしかない。

　こんな言葉だけを与あたえられて育ってきたとしたら、ヌヴォーの人生はまさに哀れという他ほかにない。

一部の男好きを除けば、女体に興味のない健全な青少年などいないのだ。それなのに教師を筆頭とする〝立派な大人達〟は誰だれもがそれが異常であるかのように毛け嫌ぎらいする。

押しつけと現実の狭はざ間までヌヴォーは藻も掻がくしかなかったのだろう。

歪ゆがむな、という方が無理な話だ。

モルトはやれやれというようにグラスを口にするが……水である。切なかった。まだ真っ昼間なのでウィスキーとは言わないまでも、せめてアルコールの類たぐいであって欲しかった。

「もう少し……あのガキに何かしてやれれば良かったかな」

仕方ない、同じ男だ。モルトは水を飲み干すと席を立った。長なが柄え刀とうを肩かたに載のせる。

「あら、もう行くの？」

「たまには人生の先せん輩ぱいとして、骨折り損のくたびれ儲もうけでもしてやるさ。……ヌヴォーを捜さがしてくる」

「ふむ。君モルトのそういうところは嫌きらいじゃないぞ。……手伝ってやってもいい」

「じゃ、揉ませてやってくれ」

「ヌヴォー君の探たん索さくだ!!」

わかってる、とモルトはサシャに軽く笑いかけた……と、まさにその時だった。

店の前を大勢の人々が走り抜ぬけていくのが窓から見え、辺り一帯が瞬時に騒さわがしくなる。

何だ？　と思い、モルトが安美亭のドアに手を伸のばすが、それは触ふれるより先に来客によって乱暴に開かれたのだった。

店内に飛び込んできたのは……傷だらけのヌヴォーだ。

彼、そして開け放たれたドアから店内に流れ込む騒そう乱らんの

気配。遠くの方からの阿あ鼻び叫きよう喚かんが聞こえてきていた。

　サシャが素早く立ち尽つくすヌヴォーに駆かけ寄り、血が流れている頬ほおの傷口にハンカチを当てた。

「ヌヴォー君、なんて格好だ!?　この短い時間に何が……何だ、この首の縄なわは……？」

　ヌヴォーの服は破れ、泥どろにまみれ、そして痣あざのできた首からは荒あら縄なわが垂れ下がっていた。

「ま、まさか、君は首を……バカなのか!?　あんなくだらないことで!?」

　サシャがヌヴォーの肩をつかむと、口こう角かく泡あわを飛ばすようにして声を張り上げる。

　しかし、そのヌヴォーは彼の腕うでを払はらいのけ、割れた眼鏡めがね越ごしに平然とモルトを見上げ、傷だらけの手で金を差し出したのだった。

「モルトさん、依い頼らいです。僕を殺してください。今すぐです」

「その様子じゃ首つりはうまくいかなかったんだな」

「はい。路上に落ちてた荒縄を使ったのが悪かったのか、途と中ちゅうで切れました。死ぬんだったら手っ取り早く殺してもらった方が確実だろうと思いまして」

　サシャやクラッツが息を呑のむ気配があったが、そちらに構っている暇ひまはなさそうだ。

　モルトは店外の騒乱に意識を尖とがらせた。……やはり何かが近づいて来ている気配がある。

　ヌヴォーはモルトを見上げたまま、首を伸ばす。

　ここを斬きれ、ということなのだろう。

「理由を言え。俺は詳しよう細さいを知らずに仕事の依頼は受けな

い」

「見た方が早い。えぇ、すぐにわかります。わかったら、すぐに……お願いします」

　ヌヴォーが店の外に出ると、叫び声が近づいて来る方を指さした。

　モルトとサシャはクラッツを店内に残して外に出る。すると……それは、いた。

「ま、魔ま獣じゆう!?　いや……人工的な姿からすると……あれは古代兵器ではないのか!?」

　サシャが声を荒げるのも無理はなかった。見えてきたのは、家一いつ軒けんはあろうかという化け物だ。人間の左右の手を手首で繋つなげ、カニのように横歩きで大通りを突つき進んで来る。

　それを見た市民達はまさにパニックである。誰も彼もが家の中に飛び込み、またある者はひたすら化け物から遠ざかるように逃にげ惑まどっている。……しかし、化け物の方が速い。

「そうです、多分古代兵器の類でしょう。……僕が起こしてしまったんです。実は──」

　ヌヴォーが事情、そしてガリ勉らしい的確な推測を口にした。

　恐らくあのおっぱい型魔ま導どう球は古代兵器であり、使い魔生成の類であったのだ。以前試ためしても発動しなかったのは単に魔力が足りなかったのではないか。それが、ヌヴォーの魂たましいの叫びが魔力に変へん換かんされ、大量に注ぎ込まれたことで発動してしまった……そんなところなのだろう。

「恐らく〝願いが叶かなう〟というのは解読の綾あやで、実際には〝意のままになる〟というのが正しかったんだと思います。ただ、発動する魔力はあっても操あやつる技術が僕にはなかった。だから……暴走しているんです」

「それでも主あるじであるヌヴォー君が死ねば、あれも止まるのではないか、と？」

「はい、兵器としての使い魔はその手のシステムが多いと以前、書

物に。……なのですぐに手近な商店の軒のき先さきで首をくくってみたのですが、うまくいかず。素す早ばやく、確実に死ぬ方法が見当たらなかった。だから……」

　淡たん々たんと言葉を連ねていくヌヴォーをサシャは怪け訝げんな目で見やった。

「いろいろ言いたいことはあるんだが……君はいったいどれだけ女性の胸が揉みたかったんだ……？」

「ご覧の通りです」

　巨きょ大だいな両手を模した化け物……そのサイズや素早い動きからするに、注ぎ込まれた魔力は相当なものだと知れた。

　その化け物は近づいて来るにつれて、モルトの目を細めさせる。

　なるほど、そういうことか、と。

　暴走している割に家を壊こわしたりはせず、きちんと通りを駆けて来るのは何故かとモルトは疑問に思っていたが、どうやら通りに沿って逃げている人々を追っているためらしい。

　より正確に言うには……逃げている女性を、だ。

　化け物に追いつかれた男達はそのまま突き飛ばされたり、指先に踏まれて呻うめくだけだが、女性は違ちがう。

　巨大な手、その甲こうの部分から飛び出てくる大量の触しよく手しゆによって捕つかまえられていた。

　当然、女性の体に巻き付いた触手がどのような動きをするかは……呼び起こした主の意向に沿っている。

「あっ、ダメ……うぅ!!　こいつ、さ、さっきのお客さんと同じ手の動きで……乱暴で、執しつ拗ようで……あぁ!!」

　浅黒く健康的に肌はだを焼いた女が、触手に絡からまりながら悲鳴とも喘あえぎともつかない声を上げていた。

　薄うす手でのシャツの上からはもちろん、その下にも触手は滑すべり込み、激しく、しかし時に優やさしく脈動を繰くり返している

のがわかる。

　彼女を始めとした一〇人ほどの女性達もまた同じように触手に蹂じゅう躙りんされ、顔を赤らめ、悲鳴混じりの嬌きよう声せいを上げ……そして拘こう束そくされていない足をバタつかせていた。

「……アレだな。胸しか狙ねらってない辺りに、ヌヴォーの真面目さが出て……って、あれ!?　おい、リッツ!?」

　逃げ惑う人々の最さい後こう尾びで息を切らせていたのは、紛まぎれもなくリッツだ。

「モ、モルト!?　お願い、助けて!!」

　モルトは思わず駆け出しそうになったが……まぁいいか、とすぐに体から力を抜いた。

「ちょっと、嘘うそ、見捨てる気!?　モルト、ちょっ、あっ!!」

　リッツが転てん倒とう。すぐに化け物が迫せまり来るも……奴やつは彼女を気にするでなく、当たり前に通り過ぎて行った。

「え……？　な、何で……？」

　呆あっ気けに取られているリッツにはわからないだろうが、男なら考えるまでもなかった。

　おっぱいを揉もみたいとする気持ちの権ごん化げならば、リッツがその対象になるわけがない。……ないのだから。

　おっぱいを揉みたい。その極きわめて純度の高い一つの願いだけで現代に蘇よみがえった古代の使い魔……おぞましい外見だが、その成り立ちはどこか微笑ほほえましさをモルトは感じた。

「わかるでしょう。僕が言うのも何ですが、あれはおぞましい化け物です。今すぐ止めないといけない。だから……」

「人死にが出るタイプじゃない。自警団が……あ、魔獣退治に出で払はらってるのか!?」

「そうです。そして人死にが出なくとも、あの化け物は嫌いやがる女性のおっぱいを揉んでいる！　おっぱいを揉むという幸せな行こ

う為いに、苦しみを伴ともなわせている!!　こんなの……こんなの許されるわけがない!!　僕のおっぱい美学に反しているんです!!　我が慢まんできない!!」

　サシャが困こん惑わくした顔で化け物とその上で喘ぐ女性達、そしてヌヴォーを順に見る。

「だ、だが、それで君を死なせるというのはあまりに……うっ!?　何だ、今、強烈な悪お寒かんが……」

「お、どうやらあの化け物、次はサシャに狙いを定めたな。……来るぞ、これは」

「な、なに……？　だが、モルト、ヌヴォー君の願いはおっぱいだろう、何で私を……!?」

「サシャさんはアリです」

「サラッと言うな、ヌヴォー君！　えぇい、私は逃げるぞ！　とにかく一いつ旦たん退いて、状じよう況きようを立て直した方がいい、行こう！」

　サシャが素早く身を翻ひるがえして駆けて行くが、それにモルトもヌヴォーも続かない。

　男と少年は、迫せまり来る化け物を見つめていた。

「……ヌヴォー。訊きくが、本気だな？」

「えぇ、本気です」

「そうだな。お前はずっと本気だったもんな。全力だった」

「僕は、おっぱいが好きです。その気持ちは嘘うそ偽いつわりのない、僕の本心です。だから……こんな状況は看過できない。おっぱいには、幸せだけを添そえていたい」

　モルトは薄うすら笑いを浮うかべつつ、肩に載せていた長なが柄え刀とうに巻き付けていた鞘さや代わりの帯バンドを解く。長く、重く、硬かたく、決して折れも欠けもしない巨大な刃やいばを空気に晒さらした。

「それで、お願いします。モルトさん。僕の首を……それで、終わります。一秒でも早く女性達を解放してあげてください」

「クソ真ま面じ目めなガキだぜ、ったくよ」

「自分に素直なんです。……それに、どうせ女性のおっぱいを揉めない僕の人生なんて……価値ないですから」

「そうかよ。……この、バカが……!!」

　モルトは小さく呟つぶやくと、数十キロに及およぶ長柄刀を振ふり上げ、そして……その切っ先で激しく突き刺したのだった。

●

　──数十年後。

　学校の裏庭、そこに生える大きな木を、初老の男が見上げていた。その木から伸びる太い枝には荒縄がかけられ、首つり用の輪があり、木こ漏もれ日びの中で揺ゆれていた。

　垂れ下がる縄の下には、倒たおれた椅い子すと、俯うつむき膝ひざを抱かかえている少年が一人。

　初老の男は、そっと少年の頭に手を置いた。

「……その時、先生はね、本気で死のうと思っていた。おっぱいを揉むのに誰だれかに迷めい惑わくをかけるのだけは我慢できないと、心の底から思っていたし、おっぱいを揉めない人生に価値などないと確信していたんだ」

　少年が泣き顔を上げ、見上げてくる。その顔には殴なぐられた跡あと。胸むなぐらを乱暴につかまれたのか、上着のボタンも取れ掛かかっているようだった。

　また、あのいじめっ子達に狙われてしまったのか。かわいそうに。

「でも……ヌヴォー先生は、生きている……」

　初老の男──ヌヴォーは、ゆっくりと頷うなずいた。

「そう。あの、何でも屋……モルトさんが、殺してはくれなかった。彼は長柄刀を地面に突き刺すと、膝を突いて、当時小さかった先生と視線を同じ高さにして、言ってくれたんだ。……だから、生きている」

「言ってくれた……って、何を……？」

　ヌヴォーは苦く笑しようしつつ、少し照れるようにして頬ほおを掻かく。

　ヌヴォーもまた、あの時のモルトと同じように地面に膝を突き、少年と目線の高さを同じにする。

　そして……乱暴に彼の頭を鷲わし摑づかみにし、鼻先がくっつく程ほどに互たがいの顔を近づけた。

　驚おどろき、呻く、少年に……ヌヴォーは心の底からの声で喉のどを震ふるわせる。

「おっぱいも揉まずに、男が死のうとしてんじゃねぇ──!!」

　驚きよう嘆たんして固まる少年の頭を今一度撫なで、ヌヴォーはまた木を見上げた。

「絶望しても、今がどれほど苦しくとも……生きろ。少なくともおっぱいを揉むその日まで。死ぬのはそれからでも十分だろ。……おっぱいはな……お前が考えている以上に凄すげぇんだぞ……ってね」

　おっぱいが揉めないから死んでもいい。そう思っていた。

　おっぱいも揉まずに死ぬな。そう言われた。

　同じようで、それらはまったく、あまりにも……違う。

　同じ場所に立っていながら……俯くか、空を見上げるか。まさに、その差だ。

今まで出会ってきた大人達が口にしてきた幾いく千せん、幾万の綺き麗れい事や〝正しい言葉〟よりも、彼の言葉はずっとずっと価値があり、そして正しいことだと思った。

いや、正しいのではない。真実なのだと、そう思えたのだ。

何故なぜなら……彼は、本気だったから。

微み塵じんも嘘も格好付けも加えていない、ありのままの言葉。彼の本心。……それを本気で言ってくれた。

だからヌヴォーはそれ以上殺してくれとは言わず、ただ、長柄刀を肩かたに担かつぎ直し、たった一人で化け物へと向かっていくモルトの大きな背を見ていたのだった。

黒くろ髪かみと革かわのコートを揺らし、身長と同じだけの大きな武器を持ち、ゴツイブーツで硬い足音を鳴らし、まるで黒い大型犬が散歩にでも出かけるように、のそりのそりと……当たり前のように、迫り来る巨大な古代兵器へと向かって行ったのだった。

その背、その姿……それこそが本当の男だと……本物の大人だと思った。

だからこそあの背を目指して、ヌヴォーは今まで生きてきたのだ。

教師でも魔ま導どう士しでもなく、心のケアをするスクールカウンセラーとなった。目の前にいる自殺を計ろうとした少年のような、かつての自分に似た子供達の支えになるために。

「君は、おっぱいを揉んだことがあるかい？」

少年は照れつつ、そして躊躇ためらいながら、首を振った。ヌヴォーは微笑んだ。

「なら……死んでる場合じゃないな」

ハッとする少年の姿にヌヴォーは安あん堵どした。

この少年は、もう、大だい丈じよう夫ぶだ。どれだけの逆境でも生きていける。

　おっぱいを揉みたいと願う無限のエネルギーを未来へ向ければ、越こえられない現実なんて何もない。男は、男の子とは……そういうものだ。

「そうだ、これから先生と一いつ緒しよに、お洒落しやれなファッションと会話術でも勉強してみないかい？　図書館にオススメのいい本があるんだ」

「は、はいっ……先生っ……お願いします」

　涙なみだぐむ少年にヌヴォーは背を向け、荒あら縄なわを解き、倒れていた椅子を小こ脇わきに抱えた。

　──モルトさん。僕の背は、あの時のあなたのように勇ましく立派でしょうか。少しでもあなたに近づけているのでしょうか。

「先生……その、一つだけ、質問してもいいですか。……女性の、お、おっぱいって……どんな感かん触しよくなんですか？」

　風が吹ふき抜ぬけていく。初夏の汗あせばむ肌はだを拭ぬぐう、温かながら爽さわやかな風。

　それに促うながされるように、ヌヴォーは目を細め、爽やかで温かな笑みで少年を振り返った。

「先生も、それが知りたくて生きているんだ」

●第二話『職業：女体さすり』

「結局、人生ってのは堅けん実じつこそ一番の近道なんだ。地味でやる気が起きないかもしれない。けれど、それをやり通すことで楽イージーで愉快コミカルな生活を人は手にできる。……クラッツも、そうは思わないか？」

　客が増えつつある宵よいの口の安あん美び亭てい、そのカウンター席に着くなり、モルトは爽やかに、そして優やさしげな微笑ほほえみでそんなことを口にする。

　呆あきれのため息を吐つきかけたクラッツの柔やわらかな唇くちびるに、モルトは己おのれの人差し指をそっと当て、ウィスキーをストレートで注文した。一八年もののシングルモルト。安美亭でもかなり上等な部類のそれは、モルトのオーダーでは冗じよう談だんにしか受け取られないだろう。

　けれど唇を押さえられていたクラッツは、モルトの指を払はらいつつ「本気？」と尋たずねた。モルトの気配から何かを察したらしい。

　実に察しのいいバーメイドだと、モルトは思う。

「あぁ、本気だ。俺がクラッツ……君を想おもうぐらいに」

「あ、冗談ね。わかった」

「違ちがう違うマジだって。本気だって。実はさ、今し方デカい仕事を終えてきたんだよ。……え？　仕事内容か？　なぁに、ゴミ溜ためになってた倉庫の片付けさ」

「水？　それとも一番安いワイン？」

「聞けって、クラッツ。そんでだ、ゴミの中に欲ほしいものがあったら持っていっていいと言われたから……その全すべてを売りに売ったら、これが予想以上に儲もうかって今笑いが止まんねぇのさ。古くせぇ本ってたまにすげぇのがあるのな」

「ゴミ漁あさりに、せどり……何でも屋は廃はい業ぎようにしたら？」

「何でもするのが何でも屋さ」

　呆れながらも納なつ得とくしてくれたらしいクラッツは、ショットグラスに半分ほどの琥こ珀はく色いろを注ぎ、チェイサーとして氷とレモンを浮かべた水のグラスをモルトの前へ。

　その小さなグラスを鼻に近づけ、そっとその香かおりを嗅かぐ。

　鼻び腔こうへ滑すべり込む芳ほう醇じゆんな香り。高いアルコール濃のう度どによるとげとげしさなどこれっぽっちもなく、ただひたすらに濃密な味わいを感じさせるもの。

　全身がとろける。鼻から吸い込んだ空気を、吸う以上にゆっくりと吐はき……金を持っているということの幸せを噛かみ締しめたのだった。

「ねぇモルト。お楽しみのところ悪いけど、そのお金、先にリッツちゃんに渡わたしちゃった方がいいんじゃない？　うちとしては嬉うれしいけど……お酒それ口にしたら、そのまま全部使い切っちゃうでしょ」

「笑いが止まらないのさ、クラッツ。滞たい納のう分全部払ったってまだ余よ裕ゆうがある。これぐらい屁へでもない」

　ピンっとショットグラスを指で弾はじき、モルトは再びその香りに酔よいしれた。

　大おお柄がらの男が、手の平に収まる小さなグラスでスゥーハァースゥーハァーしているという、ヤバゲな薬物に手を出しているようにしか思えない光景で、やたらと店内の注目を集めていたが、当の本人はそれに気付くことはなかった。

　なかなか口を付けず、匂においだけで長く楽しむのは貧びん乏ぼう性しよう故ゆえだが、さすがにそのまま揮き発はつしていくのを良しとするほどモルトもバカではない。

　チェイサーで口内を軽く流して一息吐く。そして美女の服を脱ぬがすように、モルトはショットグラスに唇を寄せた。丁てい寧ねいに慎しん重ちように、しかし怯おびえず優ゆう雅がに、胸を期待に

弾はずませて。

「隣ここ、いいかな？」

突とつ如じよとしてかけられた声に、モルトは慌あわててグラス から唇を離はなした。

優しくも渋しぶく、囁ささやくような口調なのにしっかりと耳に届く心地ここち良い声……だが、男である。オッサンの声。そんなものを耳にしながら口にしたくはなかった。

モルトが不満げに声の主を見やれば、声の印象そのままの男が立っていた。

しっかりとした体つきをし、落ち着いた雰ふん囲い気きの五十代半ば過ぎと思おぼしき男。額がやや拡ひろがっているものの頭とう髪はつが薄うすいという印象はなく、好ましいものだった。恐おそらく年相応のものだからだろう。変な執しゆう着ちやくを持っていないからこそ、見み窄すぼらしさがない。また、やや長い無ぶ精しよう髭ひげが鼻下や顎あごに現れており、シャツや羽織ったジャケットもまた旅の疲つかれを感じさせていたが、不思議と粗そ雑ざつな印象は与あたえていない。

その姿は、まさに大人の男。

ダンディというのは、こういう男のことをいうのだろう。二十代前半の若造がどう逆立ちしても立ち向かえそうにない貫かん禄ろくがあった。

彼はモルトと視線が合うと、意外なほどかわいらしく微笑む。

その姿、その微笑みに、お楽しみを邪じや魔まするなと文句の一つでも言うつもりでいたモルトは完全に毒気を抜かれてしまい、ただ会え釈しやくするように頷くだけだった。

「ありがとう。お嬢じようさん、彼と同じもの……は、少し贅ぜい沢たくかな。うん、よし、お任せで何か作ってくれないかな」

慣れた所作で席に着くと共に、流れるように注文を出すと、彼はカウンターに肘ひじをついて指を組み、にこやかにモルトを見る。

てっきりモルトが金を持っていると踏ふんで酒をたかりに来たの

かとも思ったが、どうもそうではなさそうだ。そういう気配がない。

　彼の笑顔を見ていると、何だかモルトは、自分がやけに子供のような気がしてきてしまう。実際、彼の半分も生きていないから……というのではない。人生経験が比べようもないぐらいに違う……それを感じて、彼が大人に見えてしまうのだ。

　モルトはチラリと店内を見み渡わたした。夕飯と酒を求めて仕事の終わった者達が次々にドアのカウベルを鳴らす時間帯。とはいえ、まだ宵の口だ。忙いそがしくなるのはこれからで、席はまだまだ空いていた。

「何故、その席に？」

「君が大きく儲かったと丁度聞こえた。あぁ、安心して欲しいんだが、別にその懐ふところのものを狙ねらっているわけじゃない。私の、ジンクスなんだ」

　そう言われても疑わしいものである。男は詐さ欺ぎ師しには見えないが……腕うでの良い詐欺師ほど詐欺師に見えないものだ。

　モルトは疑ぎ惑わくの目を向け続けるも、男はにこやかな笑みを崩くずさない。それどころか「疑われるのも当然かな」と、笑みを濃こくした。

「こうしよう。握あく手しゆだ。それでわかる」

　差し出された手にモルトは素す直なおに応じる。だが、それで何がわかるというのか。

「少し、妙みような手だろう？　柔らかいくせに、その奥には芯しんのような硬かたさがあるはずだ」

「……確かに、言われてみれば……」

「これが商売道具なんだ。私の名はジュクセン。よろしく。君は？」

「モルト。何でも屋をしている。それで、ジンクスってのは？」

　ジュクセンはモルトがカウンターに立て掛かけていた長なが柄え

刀とうに少し目をくれると、ほぅ、と感心したような息を吐く。
……手は、まだ放してはくれない。

「世界を旅し、その場その場で仕事をしている。当然いい街もあれば、悪い街もある。当たり外れがあるのは当然だが、少しでもいい仕事がしたい。誰だれでもそうだろ？　だから、ジンクスだ。私はその土地でうまくやっている人間と接することで、その人から運を分けてもらうことにしている」

　クスリ、と小さな笑みが聞こえ、手を繋つなげたまま男二人はカウンターの中を見た。クラッツである。

「失礼。それでしたら他ほかの方にした方が。彼、万年金欠のダメ人間ですよ。……〝ゴッドファーザー〟です」

　クラッツがコースターに載のせたグラスをジュクセンに差し出す。氷がカランと小さく笑うように鳴った。

　ジュクセンは今一度モルトをにこやかな目で見つめ、握手を解く。そして見つめたまま、グラスを手に取った。

「彼がいい。彼はできる男だ、私にはわかる。……乾かん杯ぱい」

　年上のダンディな男にそう言われれば、誰だって嬉しくなる。

　照れ笑いを浮うかべそうになるのを堪こらえつつ、その見る目がある男と共に、モルトもまたグラスを掲かかげ、そして酒を口にする。

　頭がクラリとする程ほどに素晴らしい味わいだ。ジュクセンの空気に飲まれてついつい自分が手にしていた酒が特別なものであるのを、モルトは忘れてしまっていた。

　酒を飲みに来て男に飲まれるとは、何たる不覚。モルトは舌打ちしそうになるのを堪えて、口の中の液体に意識を集中して転がし、喉のどへと通す。

　不覚だなんだとどうでもよくなる素晴らしい味わい。

　吐き出す息すら愛いとおしい。

　リッチな、と表現することこそが何ともチープに感じる、そんな

上物だ。

……男ジユクセンに押されて飲まされた印象もあるが、しかし、こういういい酒は、こういう男と飲むからこそ味わい深くなるのかもしれない。そんな気すらしてくるから不思議である。

ジュクセンはグラスから口を離すと、どこか自じ嘲ちようするようにしてモルトからクラッツへと視線を移す。

「お嬢さん、私は一つ謝らなければいけない。……君がやけに若いなと、内心少し侮あなどっていた。いいチョイスに、いい味わいだ。探しても文句が見つけられない」

「そんなものは探さず、良い所だけを探していただければ。……ありがとうございます」

ジュクセンがあのにこやかな笑みをクラッツに向け、クラッツは平静とした中に嬉しさを滲にじませながら一礼する。

モルトは軽く咳せき払ばらいをして、ジュクセンの意識を引き戻もどした。

「それで？　お宅は、その、何をしているんだ？」

「その話の前に、一ついいかな？　何か肴おごってくれないか」

おい、話が……、とモルトは口にしかけるが、ジュクセンの擡もたげた手の平が止める。

「ジンクスだ。言ったろ、運を分けて貰もらう。だから、君から何かを貰いたい。安いものでいい。同じ程度のものを私から君へ奢り返そう。そうすることで君と私の運は程良くステアされる」

わかるだろ、そう言うようにジュクセンは眉まゆ毛げとグラスを擡げてみせ、唇くちびるを湿しめらせる。

クラッツが出したゴッドファーザーはウィスキーとアーモンドに似た香りを持つアマレットを、氷の入ったグラスで合わせ、軽く混ぜたステアしたものだった。

なるほど、それなら……と、モルトはジュクセンへハードチーズを、一方の彼はドライフルーツとチョコレートの盛り合わせを注文

した。

　それぞれのオーダーが相手の元へ出されるのを待って、モルトは先程と同じ問いを口にした。するとまた手の平を出されたので、モルトはまたも口を閉じる。

「ははは、さっきとは違うよ。手の平だ、これが私の仕事道具だと最初に言っただろう？　私は旅をしてその土地の女性達にサービスを提供するんだ」

「女限定の、か。何だ、化け粧しようとか？」

「私の職業は……『女体さすり』」

　高級な酒は酔いが回るのが早いのかもしれない。

　悪酔いはしないが、アルコールのトゲトゲしさがないから、ついつい飲み過ぎて……というのはよく聞くが、モルトはまだ一いつ杯ぱい目だった。

　おかしいな、と感じつつ、モルトはチェイサーを口にした。

「あー……ジュクセン、その、もう一度訊きくんだが……職業は、何を？」

「女体さすり、だ。聞き慣れない職業だろうが、ちゃんとしたものだ。言葉の通りに、女性の体をさするのを生なり業わいとしている」

　モルトはチェイサーを一気に飲み干し、今し方耳に入ってきた言葉を反はん芻すうし、どうやら酔いは関係ないことを確信すると、うん、と一度頷うなずき、息を吸い、そして――。

「何だ!?　その夢のような職業は!?」

　――腹の底から、叫さけんだ。

「驚おどろくのも無理はないね。でも、君も感じたはずだ。この私の不思議な手の感かん触しよく、そして……妙な温かみがあっただろう？　それこそが職人としての証しよう拠こだ」

　言われれば確かにその通りだと、モルトは思った。手の感触は独

特で、先程長く握手している間も、思い出してみると妙に温かかったような気が……。

「女体さすり……その起源は古い。最古の職業といわれるのは娼しよう婦ふだが、女体さすりはそれに続くものだとされている。勘かん違ちがいしないで欲しいのは、私の手が女体をさする時、そこにいやらしさはない。施せ術じゆつはただただ彼女らにくつろぎリラクゼーションを与えるためのものだ。癒いやしを与え、私は対価を得る……簡単だろ？」

「それは、つまりは……マッサージ？」

「似ているが、別物だ。マッサージは筋肉や骨、関節に直接的に訴うつたえかけるものだが……こちらは違う。女体さすりは女体が持つ力そのものを活性化させると共に、人の手が持つ温かさや優やさしさといったものを女体に送り込み、そこに快さを感じてもらう……そういうものなんだ」

優しく、しかし渋くて深い。そんな声と口調で、ジュクセンはモルトの耳と胸に言葉を刻んでいく。

信じられなかった。女体をさすることで対価、即すなわち金銭を得る……そんなことが許されるのか、この世界は。

──女体さすり。その不思議な音の響ひびきにモルトは身も心もかき乱され、あれだけ力強かったウィスキーの味さえわからなくなっていた。そのままお代わりをもらいかけて、さすがにこれは無む駄だだと思い、ジンのロックに変えてしばし女体さすりの神秘について傾けい聴ちようを続ける。

どうやら本当にそれは存在するものらしい。

女体さすりははるか昔より営々と受け継つがれ続ける職人的技術であり、女体本来が持つ力の活性化、そして手の平が持つ不思議な力を駆く使しするのが基本で、現在のそれは、はるか東からやってきた、身体からだを流れるとされる〝気〟という概がい念ねんと交わることによって完成を得たのだという。

モルトが先程そうであったように、非常に誤解を受けやすい職のため、おおっぴらに商売をすることは少ないが、リキュールよりはるか遠方の地、女体さすり発はつ祥しようの地とされる国では国営

の『女体さすり研究所』なるものさえも存在し、今こうしている間にも何十人にも及およぶ女性達がその体をさすられ続けているのだという。

　そんな話を聞けば聞くほどに、モルトは後こう悔かいした。

　何故なぜ、女体さすりというものがあるにも拘かかわらず、自分は何でも屋などという曖あい昧まい模も糊ことして、不安定な職業を選せん択たくしてしまったのか。

　男として生を受けたのならば迷わず人生の全すべてを女体さすりにぶっ込むべきだった。

　なのに、何故、何故……。

「俺は……この二〇年、無駄な人生を歩んできたということか……!!」

　何杯目になるかわからないジンのロックを一気に飲み干すと、モルトはグラスが割れそうな程にその手に力を込こめる。

　その手を温かく、大きな手が包む。女体さすり師──ジュクセンの手だ。

「女性を幸せにしたい。それは男が生まれ持った基本的な欲よつ求きゅうであり、生きる意味でもある。だが、そのためには必ずしも女体さすりである必要はない。その大きな武器を手に、君は多くの人々を助けてきたのではないのかな？　……わかるよ。私もプロだ。手を握にぎれば、君は誤解されやすいが、本当は誠実で真まっ直すぐな男だということがすぐにわかった。……君は、素晴らしい手をしている。自信を持っていい」

　柔やわらかいくせに、その奥に硬さがある。握っていると温かみをはっきりと感じる。ジュクセンの手。女体をさすり続けた、その手……。

　考えれば考える程に今の自分の状じよう況きようがおかしいことがわかる。このロテ国のリキュールでは職業選択の自由があるというのに、何故やりたい職業に就ついていないのか。わけがわからない。目の前に金を差し出されているのに受け取らずに自分は貧びん乏ぼうだと嘆なげいているかのようだ。あまりに愚おろかである。

いや、わかる。わかっている。これまでは『女体さすり』なる職が存在するという発想そのものがなかったのだ。だから……。

だが……知った。そう、今、ジュクセンという旅の女体さすりからその摩ま訶か不ふ思し議ぎにして夢のような職業の存在を知ってしまった。

今、自分はどうするべきなのか。モルトは、己おのれに問う。

……答えは、一つしかなかった。

「ジュクセン……教えてくれ。俺は、今からでも……女体さすりが可能か……？」

「それは……いや、やめておきたまえ。誤解を招き、冤えん罪ざいを叩たたき付けられる、そんな職業だ。君は―」

「ジュクセン、いや、師し匠しよう……！　どうか俺に女体さすりの技わざを教えてくれ!!　それとも、やっぱり……できないか、武器を扱あつかい続けたこの無骨な手では……」

ジュクセンが困ったような顔で、首を振ふった。

「君は生まれついてのいい手をしている。そこは保証しよう。ただ、大事なのはその者の心だ。女性を想おもい、労いたわり、そして自分の全てを手の平に懸かける……それだけだ。無骨な手など女体の雄ゆう大だいさの前ではすぐに柔らかに解ほぐされる。だが、私は弟で子しは取らな―」

「師匠!!　そこをどうにか!!」

ジュクセンは困ったように額へ手をやり、そして、グラスを傾かたむけた。

「師匠……ダメ、ですか……やっぱり、俺の、こんな……」

「奢ってくれ」

え？　と、モルトは俯うつむき掛かけていた顔を上げる。

「とりあえず今夜の酒代だ。君は金を、私は技術を与あたえる。それでいいかな？」

　ジュクセンはまたあのにこやかな笑えみを浮かべ、飲み干したグラスの氷を鳴らした。

　それでモルトもようやくわかった。……二人をステアする、そういうこと。

　それはつまり……。

　モルトはクラッツに最高級の酒を二杯オーダーし、新たなる師と乾杯を上げた。

「俺の両手は、女体をさするためにあったんだ……！」

　ジュクセンは、若いね、と笑った。大人の笑みだと、モルトは思った。

1

「そうか、そんなことが……。だがモルト、本気なのか。本気で……長なが柄え刀とうを置くのか」

　酷ひどく哀かなしげな顔で俯くライの隣となりで、モルトははっきりとわかるように頷いて見せた。

　沈ちん痛つう、まさにそれだった。

　昨夜の出会いから半日、ジュクセンが泊とまっている宿の前で彼が出てくるのをモルトが待っていたら、慌あわてた様子でライが話しかけたのだ。

　確かにモルトが長柄刀を持っていなければかなり目立つものかもしれない。これまで四六時中、手にしていた得物なのだ。

「俺は、今まで武器を握り、あまりに多くの人々を傷つけてきた。……だから、これからは多くの人々を癒したい。そう、思うんだ。……主に、女性を」

「罪つみ滅ほろぼしとして？　よせよ、モルト。オレは死ぬまで握

る覚かく悟ごなんだぜ」

「お前はいいさ、ライ。お前は人を守り、人を救っている。けど、俺は……」

「同じさ、モルト。少なくともオレはお前と一いつ緒しよにいられたから……楽しかったんだ」

　かつて相棒と言ってくれたライの言葉は、ジュクセンとは違った意味で重みがあって、モルトは辛つらかった。

　モルトは、ライの小さいくせに頼たよりがいのある肩かたを抱だく。

　ライもまた、モルトの肩に手を伸のばした。

　言葉なく、ただ肩を組む。それでわかりあえた。十分だった。一〇〇の言葉より通じる。

「何にせよ……オレは応おう援えんする。モルト、お前の選んだ道だ」

「ありがとう、ライ。何でも屋をやってくって言った時も……お前はそんなふうに言ってくれたな」

「……相棒だろ。お前が長柄刀を置いても、それは変わらねぇさ」

　事務作業に戻もどるというライの背を、モルトはそっと押した。もうそろそろロテ国の国境警備隊とリキュール自警団による定期交流会がある頃ころなので、その準備なのだろう。

　ライはモルト同様に頭よりも体を使うのを得意とするタイプだ。その去りゆく背を見れば彼が酷く疲つかれているのがすぐにわかった。

「俺が一人前の女体さすりになったら……特別にお前もさすってやる。相棒」

　歩み行くライに向けて、モルトは小さく呟つぶやいた。

　女体さすりは女体のみをさするもの。男をさすることは女体さすりの仕事ではないし、男の体をさすりたいとも思わない。

だが、ライなら……。

いつだって自分を信しん頼らいし、背を押してくれる彼ならば……いいじゃないか。

「モルト君、待たせたね。行くとしよう」

ジュクセンが宿から出てくると、去って行くライを見る。

「君の友達かな？　昨日散々言い聞かせたが、女体さすりを習うということは……」

女体さすりはとにかく誤解を受けやすい。特にプロになる前の訓練生は、女性に対していやらしい気持ちを抱いだいてしまいがちで、実際に問題になるケースも多いのだという。

その際、師にまで被ひ害がいが及ぶ前に、切り捨てるために、技を習っていることは人に告げてはいけないのだという。そのためもし誤解を受け、捕つかまってしまった場合でも決して師のことは口にしてはいけないという鉄の掟おきてがあった。

だが、ライなら……いい。何より秘密を守れる男である。

「大だい丈じよう夫ぶです。言ってません。俺が長柄刀を持っていないことを不思議がってただけです」

「そうか。それならいい。……では、早さつ速そく……と言いたいところなんだが……」

ピッとジュクセンは宿のエントランスに親指を向ける。その先では、宿の主人が腕うでを組んで仁に王おう立ちをしていた。

「路銀をリキュールに到とう達たつするのに使い果たしてしまっててね。本当は昨夜にも客を取る気でいたんだが、あのうまい酒を前にしては……さすがに席を立つことができなかった」

「わかりました。ここは俺が。師匠の技を習い、俺は金を払はらう。当然です」

「いや、これは授業料から除こう。後で返すよ」

さすがに恥はずかしそうに自じ嘲ちようするジュクセンを横目

に、モルトはそこそこの額を払った。

「さて、それでは身軽になったところで急だが、モルト君、手を出したまえ」

　ジュクセンがモルトの手を揉もむ。

「よし、ちゃんとハンドクリームを塗ぬって手て袋ぶくろをして寝ねていたね。荒あら々あらしさが抜ぬけてきている。これを毎日、できるね？　……よろしい。では……ふむ、そうだな。軽く食事をして、それから客を探すとしよう。無論、見習い同どう伴はんとなるから、人を選ぶ……難しいかもしれないが……」

「大丈夫です。その間の損失分は、俺が補ほ塡てんします」

「はははは、そんなつもりはなかったんだが。どうやら私は気き遣づかいのできるいい弟子を持てたようだ。……よろしい、君の優しさに甘えるとしよう、行こう」

　そうして、一人前の女体さすりとなるための、モルトの長い道のりが始まったのだった。

　――あっという間に、一週間が経過した。

『秘伝　女体さすり』と表紙に書き足したモルトのメモ帳も、すでに半分がジュクセンの教えで埋うまり、残りの多くのページも、モルトの気が付いたことや〝気〟という慣れない概がい念ねんに対する解かい釈しやくと考察で占しめられていた。

　モルトは元来勉強家ではない。だが、女性に快感をもたらすためだと思えば、男はいくらでも勤勉になるものである。

　モルトはその日の教えをメモし終えると、ペンを置いて目め頭がしらを揉む。

　その指先を始め、モルトの手は、かなり柔らかなものになってきていた。

　多めにハンドクリームを塗って、手袋をして寝る。それに加えてジュクセンの手の温ぬくもりを与えられ、気の流れを整えてもらっ

ているからだろう。

　ジュクセンに言わせれば、もうそろそろ女体に触ふれてもいい状態らしい。

　それもあってなのだろう。今日、ついにモルトは……初めて施せ術じゆつに参加する。

　リキュールの片かた隅すみに建つ一いつ軒けんの家。その持ち主の未亡人、ハーシーはモルトが紹しよう介かいした三人目の客であった。

　彼女への施術は、今回ですでに二度目である。

「以前来た時も思ったが、随ずい分ぶんといい暮らしをしている。亡くなった旦だん那なさんはなかなかの豪ごう商しようだったようだ」

　ジュクセンは彼女の家の居間に並んでいる壺つぼや彫ちよう刻こくを軽く撫なでつつ、一つ一つをじっくりと見回していった。美術品に多少の知識があるらしい。

「商品と金をうまく流して稼かせいでいたとか。なかなかのやり手だったそうです。ほら、そこに旦那さんの……あれ？」

　モルトは居間の壁かべを指さすのだが……そこにあった主人の肖しよう像ぞう画ががなくなっていた。前回訪おとずれた時には確かにあったはずだが……。

「なるほど……。モルト君、そういえば新しいお客探しの方はどうなっているのかな？」

　あ、それは……。とモルトは思わず口ごもった。

　ジュクセンの客は難しい。何せ、三〇歳以上六〇歳未満の未亡人、または夫と距きよ離りを置いている人妻なのだ。

　曰いわく、ジュクセンの母は女手一つで彼を育ててくれた……。そんな母を助けたい、少しでも疲れを癒いやしたいとする気持ちが、彼の女体さすりへの第一歩だったのだという。

　――人の手が本当に強い力を持つのは、心の底から相手を癒したい

と思えた時だ。

　メモ帳に赤ペンで記しるしたその言葉を、モルトは忘れていない。

　だが……如何いかんせん、戦時中でもないリキュールで未亡人となると、なかなかに難しい。八〇を越こえていていいならそこそこいるが、六〇未満で、となると途と端たんに数が減る。

「そうか。まぁ、構わないよ。ハーシー夫人のようにリピーターになってくれる人が出て来たら、もうこっちのものだからね。焦あせらなくていい。何よりそんなに頻ひん繁ぱんに仕事をしていては君の懐ふところも苦しくなるだろう」

　モルトは苦く笑しょうした。

　施術費用は本来はかなり高額なものだ。しかし、モルトが見学する関係から現在患かん者じやから貰もらう額を極きわめてわずかなものにしていた。そして、その差分をモルトが勉強代として支し払はらっているのが実状だった。

「実はそろそろ底を突つきそうで……でも、大丈夫です。そこら辺は何とかしますから」

　ジュクセンは壺からチラリとモルトへ視線を移す。

「無理はしないように。人を幸せにするのが女体さすりの基本だよ。……不幸になる、そう思ったのなら手を引くのも勇気だ」

「いえ、大丈夫です。諦あきらめません。……一人前の女体さすりは……夢ですから」

　それはモルトの夢というだけではない。

　男誰だれしもの夢。女体をさすって金銭を得る……何と素す晴ばらしいことか！

　女体に触れたい、主におっぱい的な部位を……と強く願い過ぎたせいで、一時アルコ・ホールをパニックに陥おちいらせたヌヴォーというガキがいたように、男は誰もが女体に触れたい生き物なのだ。

だから、夢。男達の夢──女体さすり。

もし自分が一人前になった暁あかつきには、あのヌヴォーを弟子にしてやってもいいのかもしれない。疲れを取るためだと言えば喜んで乳を揉ませてくれる女だっているだろう。

「……そうか、そういう手もあるな……」

女体さすりの正しい知識を持つ者は少ない。それ故ゆえに、おっぱいを揉みしだくのも技わざの内と言えば案外通るような気がした。

これは素晴らしい発見だ、女体さすりへの夢が広がる、と、そんなことを考えていると、居間の扉とびらが開いて、バスローブ姿の夫人が現れた。

「先生、モルトさん、お風ふ呂ろ終わりました。寝しん室しつでよろし？」

モルトとジュクセンは目を合わせて頷うなずく。互たがいに上着を脱ぬぎ、袖そでをまくり上げる。モルトはそれに加えてネクタイをシャツのポケットに押し込んだ。

豪ごう奢しやな寝室へと向かうと、大きなベッドにバスローブ姿のハーシー夫人が腰こし掛かけ、足を組んで男達を待っていた。

モルトの記き憶おくが確かならば四〇も半ばのはずだが、彼女から溢あふれ出る色気はかなりのものだ。

体型はぽっちゃりと呼べる程度に垂れ、目め尻じりの皺しわや法ほう令れい線せんも見み逃のがせる程ほどに浅くはないのだが……何故なぜか、凄すご味みにも似たものがある。

これが大人の色いろ香か、というものなのかもしれない。顔や体が綺き麗れいだの胸が大きいだの、そういう即そく物ぶつ的なものではなく、身の内から滲にじむ女の魅み力りよく。

気を抜くと取り込まれそうな気がして、モルトは思わず寝室のドアノブをつかんだまま固まってしまった。

だが、ジュクセンは行く。躊躇ためらいなく、あのにこやかな笑えみを浮うかべてベッドへと近づいていく。

　サイドテーブルの上にあった灰皿に、線せん香こうを置き、火を付ける。施術の時間計測とリラクゼーションのための香かおりだ。

「マダム、では始めさせていただき──おっと」

　ハーシーがスルリとバスローブを脱ぎ捨てて一糸纏まとわぬ姿になったので、ジュクセンは慌あわてて顔を逸そらす。モルトもすぐさま顔を伏ふせた。

「女体さすりは本来、裸はだかが基本。しかしバスローブ越しにするのは教え子のモルトさんに見せるため、その分格安で……でしたね？　構いません。お金は払います、そしてモルトさんがいらっしゃっても、えぇ。見られて恥ずかしい体をしているとは思っていませんので。……だから、もっと強い刺し激げきをくださらない？　前回の施術は話通りに素晴らしかった、けど、もどかしさが……」

「女体さすりはマッサージとは違ちがいます。強しいて言うならば心と〝気〟のマッサージです。何より、モルト君の教育として今回は直接彼も手伝いを……」

「若いツバメがとまることを気に病やむ喬きよう木ぼくがありましょうか。……構いません」

「……わかりました。では素す肌はだに直接施術いたしましょう。……モルト君、マダムの気遣い、ありがたく受けるように」

　ハーシーがベッドでうつ伏ぶせになると共に、ジュクセンはすぐさま取りかかった。飢うえた者が食事に飛びかかるような、その激しい身のこなしにモルトは少しばかり驚おどろくが、しかし、彼の手の動きを見るに冷静だと知れた。

　丁てい寧ねいにゆっくりと。しかし着実にハーシーの気の流れを読み取り、整えていく……。

　モルトもまたジュクセンから指示を受け、ハーシーの手と足を中心にさすっていく……。

　初さすりだった。見み様よう見み真似まねではなく、きちんと教えを受け、毎日何時間もイメージトレーニングを積んだそれはすでに一人前の技といって良いものになっていた。

—あぁ、いい。でも、まだもどかしい。もっと、もっと強く……。—施術の流れがあります、マダム。—あの日、先生の手に触れた時から……こうしていただきたかったわ。—それは……私もです。再びあなたの肌はだに触れられればと思っていました。—あら、何故？　—教え子のためとはいえ、バスローブ越しでは私の全すべてをあなたに伝えられていない……その自覚がありましたので。—残念、わたくしとは少し違うわね。—おや……そうでしょうかね。—どういう意味……あっ、あぁ……。

大人達の湿しめり気けのある会話を耳に入れつつも、モルトは聞かないようにしていた。いや、聞こえなかった、と言う方が正しいだろう。

とにかく初さすりなのだ。モルトの神経は両手に集中し、ジュクセンの手助けを……いや、邪じや魔まになるまいと、そしてハーシーを癒すために全力をかけていたのだ。

だからなのか……どのくらいの時が経過しつつあるのか、すぐにわからなくなった。

端はたから見ていた時は、官能的な光景を眺ながめているだけだったので時の流れは速かったのだが、やってみるとどうにもわからない。

いつの間にか寝室の空気は妖あやしさを含ふくみ、ハーシーの肌は湿り気を帯び始めていた。

—先生、そろそろ、前の方も……。—もう少しお待ちを。ところでマダム、居間にあった額がく縁ぶちがなくなっていたようですが。—主人に見せるものではない、違う……？

ハーシーの指先が、彼女の手をさすっていたジュクセンの手を捕つかまえた。

渋しぶい声の悩なやましげな唸うなりが聞こえた気がしたが、単に一息ついただけだったようだ。

「モルト君、ここから先は私が一人でやろう。今日の働きを見る限り、君の熱心さゆえか、すでに十分な腕うで前まえに達している。センスがあったようだ。この先は実じつ践せんで磨みがいていくしかないだろうが……今夜はもう、帰りたまえ」

「え？　しかし、師し匠しよう……」

「女体さすりの奥おう義ぎは己おのれの内側から湧わき出る。……実践だ、モルト君。それで相手の女性が心より癒しを得られたのなら、一人前を名乗るに十分だ。もしわからないこと、不安なことがあればいつでも私の元へ来るといい。……だから、行け、モルト君。実践だよ」

　モルトは背を押され、寝室を追い出される。さすがにこのジュクセンらしくない強引さに、もしや……と思ったモルトは閉まった扉の前で耳を澄すますのだが……。

　━いいわ、先生、邪魔者はいなくなった。これで……。━いけません、マダム。私はさすらいの女体さすり……ただ、女体をさする、それだけの男です。━それでは物足りないと言っているの。━だとすれば私の未熟さ故……全身全ぜん霊れいをかけて、さすらせていただきます。━あら、んっ！　凄い……。いいわ、さすって。この熟うれた体を、枯かれた心を、わたしの全てを！　━受け継つがれ、磨かれた技の全てを今こそ……セイッ!!

「変な想像しちまった自分が恥はずかしいな。……師匠は、本物の女体さすりだ。そこに下心なんてあるわけがない、か」

　━下心があるのは、俺一人……。

　モルトは胸の内で唱え、寝室の前より歩み出す。

　背後からハーシーの嬌きよう声せいにも似た声が聞こえた。

2

　窓から差し込む光に、もう朝なのだとモルトは気付かされた。

　結局、あの夜はそのままアパートの自室に戻もどってきたのだが、ストックしていた安ワインを開け、ベッドに腰掛けたまま一夜を明かしてしまった。

　柔やわらかくなった手を見つめたまま、己と語り合っていたの

だ。

　最初は女体をさすって金を貰う……その魅力に心こころ惹ひかれていた。だが、ジュクセンと時を重ねている内に、その崇すう高こうな志を知り、いつしか感化されつつある自分がいる。

　心は、丁度半分半分といったところ。下心はある。だが、それ抜ぬきでもなお、女体さすりに魅力を感じている。

　誰かを……女性を幸せにする。それは男の基本的な欲よっ求きゅうだとジュクセンは言っていた。

　まさに、その通りだ。

　今まで多くの人々を傷つけてきた、だからこそ罪つみ滅ほろぼしとして誰かを幸せにしたい……そんな、ライに吐ついた口から出任せの嘘うそを、今では心のどこかで本気にしつつある。

　女性を幸せにしたい、女体に触ふれたい、お金も欲ほしい……全ての欲求を叶かなえる職業、女体さすり。

　何を迷うことがあるのか。男なら、それしかない。けれど、部屋の片かた隅すみに立て掛かけた長なが柄え刀とうを見ると、心がざわめくのだ。

　──それでいいのか、と。

　モルトの長柄刀は元々リキュール自警団員であった、ある男から引き継いだものだった。

　一〇〇年遣つかい続けてなお健在だとされるリキュールの特産物、それを安易に眠ねむらせることになる……それを想おもうと、心苦しい。しかも理由が〝女体をさするため〟という、一歩間違えるととんでもなくアホ臭くさいものだというのが、より一層モルトの心を締しめ上げる。

　女体さすりとしてやっていけるのか。

　女体をさするに値あたいする男なのか。

　さすった先に道はあるのか。

自分は何を……。

そんな自問自答の迷めい路ろを打ち破ったのは、ノックもなしに開いたドアの音。

鍵かぎをかけていた気もしたが、彼女の前では鍵などあろうがなかろうが関係なかった。

何せ大家の娘むすめ、リッツである。

「うわっ、珍めずらしく起きてると思ったら……朝からお酒⁉ ちょっと仕事は⁉　家賃、滞たい納のうしてんのわかってんの⁉」

肩かたを怒らせズンズンと進んでくるリッツだったが、一歩一歩モルトに近づくごとにその顔から怒りは失うせ、きょとんとし、そして、最終的には心配げな顔に変わった。

「……なに、どうしたの？　何か、あった？」

「いや、実は……転職しようかなって思っててさ。迷ってるんだ」

「転職って……なに、定職につくの？　そりゃウチとしてはありがたいけど……自警団じゃ、ないよね？」

「あぁ。……女体さすりだ」

「ん？」

「女体さすりだよ、リッツ。この両手を最大限に活用し、女性の体をさすって、金を得……え？」

俯うつむいていたモルトの頭をリッツの手が包み……というか、つかみ、そのまま彼女の膝ひざが強きよう烈れつに叩たたきつけられる。モルトはベッドの上をのたうち回った。

「何バカ言ってんの⁉　そんなこと言ってる暇ひまあるんだったら、仕事探しに行ってよ、このクソ何でも屋‼」

「リッツ、違う、俺は本気で……だからここ一週間かけて厳しい修しゅ行ぎようを……」

「そんな仕事があるわけないでしょ⁉」

「最初は俺もそう思ってたんだけどな、いいか、リッツ。順を追って話す……」

　ジュクセンとの出会い、彼のジンクスの話、そして女体さすりの概がい要ようと歴史……。それを踏ふまえた上でモルトのこの一週間の勉強を実際にメモった手帳を開いて語ってみれば、さすがに当初は疑っていたリッツも理解しないまでも、納なつ得とくを示してくれるようになった。

「それじゃ、辞やめちゃうんだ。何でも屋……」

　どこか寂さみしげな顔をしてリッツはチラリと長柄刀を見やった。

「長柄刀は……命賭かけてきただけであって、手放したくはない。けれど、女体さすりとなる俺の元で余生を送らせるのもしのびない……だから、そうだな……自警団に置いておくってのがいいかもしれない。次の遣い手が現れるのをそこで待っていてもらう、とか」

「……そっか」

　リッツの元気がなくなっていくのが如によ実じつにわかってしまい、モルトは何となく彼女の頭を撫なでた。考えてみればその長柄刀は、リッツとも長い付き合いなのだ。

「あの長柄刀は素す晴ばらしい得物だ。すぐに遣い手が現れて、また街を行く姿が見られるさ。大だい丈じよう夫ぶだ。……それに、俺だって何でも屋よりもずっと稼かせぎまくってやるからな」

「……うん」

　撫でられていたせいで俯き加減になっていたリッツは、その大きな瞳ひとみでモルトを上うわ目め遣づかいのようにして見る。

「そうだ、リッツ。良かったら……俺の最初のお客になってくれないか？」

「え、女体……さすり、の？」

「そう。ただしお値段は格安、家賃を少し待ってくれるだけでいい。どうだ？」

「それは、別に……でも……」

「どんな商売なのか、どんな魅み力りよくがあるのか、それがわかればリッツだって安心するだろ」

　あとは実践あるのみ。ジュクセンはそう言っていた。

　それがリッツだとするならば、最高じゃないか。

　未いまだ下心を捨てきれていないモルトだったが、情じよう欲よくをもたらさない幼い体のリッツ相手であるのならば、純じゆん粋すいにさすりの技わざの実践が可能だろう。

「……一人目、か。あ、でも今日は学校に行く日だから……夜で、いい？」

「もちろんだよ。何より最初だからな、酒も抜いて、全身全霊でやりたい」

　モルトは笑い、そして己の手にハンドクリームを塗ぬり始めたのだった。

　夜、夕ゆう餉げの時刻も過ぎ去った頃ころになって、部屋をノックする音。

　モルトは一日掛けて整理整せい頓とんし、掃そう除じしたことで見み違ちがえた自室の扉とびらを開ける。

　廊ろう下かに立っていたのは、俯き加減のリッツだ。

　普ふ段だんならばズカズカとモルトが拒こばんでも入り込んでくる彼女であったが、今回ばかりはなかなか一歩を踏み出さない。

　緊きん張ちようしているのかもしれない。頬ほおがほんのり赤いのは、風ふ呂ろ上あがりだからというだけではないのだろう。

　モルトはリッツの肩を抱だくようにして、彼女を招き入れるとベッドへと腰こし掛かけさせた。

「言われた通りお風呂入ってきたけど……普ふ通つうに入るので、

大丈夫だった？」

　もじもじしつつ、そんなことを不安がっているリッツにモルトはジュクセンの笑えみを意識して、優やさしく微笑ほほえんで頷うなずいてみせる。

　ジュクセン曰いわく、入浴させるのは施せ術じゆつに必要だからではない。その素す肌はだを晒さらす以上、女性が恥ずかしがるからだ。だから、そうなる前に先にこちらから入浴を勧すすめるのである。

「……本当に、脱ぬぐの？」

「恥ずかしかったら下着は付けたままでも。でも、できるだけ手の温ぬくもりを与あたえるために素肌と素手を触れ合わせたい」

　ベッドに上がったリッツは躊躇ためらいがちにパジャマ・ワンピースを脱いでいく。現れるのは白のインナー・キャミソール……いや、裾すそが長いのでミニ・スリップだろうか。リッツがそれにも手をかけたのを見て、モルトは部屋の魔ま光こう球の出力を最小限にする。これで少しは恥ずかしさが薄うすれるだろう。

「……下は、ちょっと……」

　いいよ、大丈夫。モルトはそう優しく告げつつ、シャツの袖そでを捲まくり、ネクタイの先を胸ポケットに押し込んだ。

　ミニ・スリップを脱ぎ、パンツ一枚だけとなったリッツは、ベッドの上に座ったまま、恥ずかしげに胸を両手で隠かくす。

　そんな彼女の肌はまるでぼんやりとした光を放つように薄うす暗くら闇やみの中でも浮うき上がるようにして見えていた。体が弱いせいであまり学校にも通えず、外で遊ぶこともほとんどない……そのせいで年とし頃ごろの娘達と比べれば肌が驚おどろくほど白いせいだろう。

　けれど、不思議と彼女の顔だけは、暗闇でもはっきりとわかるほどに、赤かった。

　ジュクセンから分けて貰もらった線せん香こうにモルトは火を付けて、灰皿に置く。麝じや香こうと何かを合わせたような香かおりがそっと漂ただよい始める。

「それでは、新人女体さすりモルト。施術に移らせて頂きます。……まずはうつ伏ぶせに」

　リッツが横になるために胸むな元もとから手を放しそうになるも、慌あわててすぐに押さえ直す。困り顔でこっちを見て来るので、モルトは忘れ物をしたかのように自然に彼女に背を向けた。

　ベッドシーツが擦こすれる音が聞こえてから、モルトは今一度リッツへ向き直り……そしてモルトもまたベッドに上って、緊張で硬かたくなっている彼女を跨またぐ。施術用の幅はばの狭せまいベッドなら傍そばに立ったままでいいらしいのだが、普通のベッドではこうするしかなかった。

「大丈夫、任せてくれ。この女体さすりのプロ、モルトに全すべてを」

「新人、でしょ……」

　その通り、とモルトは笑いつつ、リッツの両肩へ意識を向ける。

　まずは緊張を解ほぐすところから始めるのだ。

　触れた瞬しゅん間かんにリッツの全身がぴくんっと動き、全身に力が入ったのがわかった。それが抜けるまで、モルトは肩から手を動かさない。

　若く、そして風呂上がりのせいか、その肌はきめ細かく柔らかで、なんとも温かい。

　まだ全身赤子肌。若い女体独特のあの柔らかなくせに跳はね返すような張りを持ち始めるのはこれからなのだろう。

「ねぇ、モルト……あたし、変じゃない……よね？」

「変って、何が？」

「……え……えっと……ううん、いい……何でもないから」

　頃合いを見計らい、触れられてもさほど抵てい抗こうのない肩から手の平に向けてそっとさすっていく。優しく、子犬の頭を撫でるよりも、ソフトに。

男の手でありながらも母の手が如ごとくに、包み込むように。

そして、頼たよりがいのある父のように躊躇いなく。

左右の手の平に到とう達たつすると、リッツはモルトの手を握にぎってくるので、モルトもまた軽く握り返してやった。

彼女の指の力が抜けたのを見て、今度は手の平から肩に向かってさすり上げていく。

リッツの呼吸が深くなっていく中、肩に到達。そこからは背中へ。両手を交差させるように、滞とどこおりがちな気の流れを整えるように。

リッツの背が弓なりに反って、小さく呻うめく。それが恥はずかしかったのか、すぐに彼女は枕まくらを抱き寄せ、そこにバフンっと顔を押し当て、声を殺した。

背も半ばを過ぎた時、モルトの手は彼女の脇わきへと道を逸それる。予想外だったのか、リッツが驚いたような声を上げるが、躊躇わないモルトの動きにまた枕へと顔を戻もどすだけだ。

「いい、凄すごくいいよ。リッツ。凄く……綺き麗れいだ」

「なっ、なに言って……んっ！」

「君の肌さ。さすっている俺の方が癒いやされるよ」

ジュクセンは必ず女性を褒ほめつつさすっていた。その技──語ご彙いはモルトにもしっかりと受け継つがれている。

実際、リッツの肌は綺麗だった。まるで何ものにも接したことがないような……そんな無む垢くなる肌……こする手が、止まらない。

肋あばらの骨に沿うようにして手を回し、その手をベッドシーツと女体の間に差し入れていく。

端はたからみたらうつ伏せで寝ているリッツにモルトが後ろから抱きついているように見えるだろう。彼女の一二歳という年ねん齢れいを思うと犯罪以外の何物でもない光景ではあったが、女体さすりはあくまで施術だ。性的なものは一いつ切さいない。そのため

胸を揉もんだりはせず、その膨ふくらみの前までである。

　……が、問題はリッツの場合だと胸と胸以外の境目がわからない……というか、あるのかないのかもわからない。しかもそれがうつ伏せになってベッドに押し当てているとなると尚なお更さらだ。

　モルトは彼女の脇から鳩尾みぞおちの辺りまでをさすりつつ探さぐっていく。

「あっ、モルッ……ちょっ……ぅんっ！」

　何か突とつ起き物的なものを指先がさすった気もしたが……まさか、先端だろうか。

　いや、まさかではない。よくよく考えてみればそれがあってもおかしくない位置まで手を差し込んでいることにモルトは気が付いた。

　──しまった。境目がなさすぎてマジでわからなかった……。

　だが、ジュクセンによって鍛きたえられたモルトはここで慌てない。

　施術する側が慌てれば患かん者じゃは不安になる。歯医者に施術中に「……あ、ヤベッ」とか言われたら怖こわくて怖くて仕方がないのと同じだ。

　だからモルトはこれも当たり前なのだと言わんばかりに動きを止めることなく、堂々とさすり続けた。また、それ以降さすらないと失敗したように思われるので、意識的にはっきりとリッツのその小さい胸をさする。

　無論、ベッドとの間に差し込んでいるので刺し激げきは強めなのだろう。その辺りに行くとリッツは身をくねらせ、声を押し殺す荒あらい息づかいが聞こえ、モルトの手を反射的に押さえようとするが……止めはしなかった。

　モルトの手が再び背に戻り、そのままゆっくりと下って大だい腿たい部ぶに到達する頃には、リッツの体がじんわりと熱を帯びていた。

　その細い太ももを両手で挟はさみ込むようにしてさすっていく。

たるみやすく、そして気の流れが悪くなりがちな内ももは特に念入りにするのは、ジュクセンの大事な教えだった。

　そうして足の指先まで到達すると、またさする手を昇のぼらせていく。

　それをゆっくりと丹たん念ねんに繰くり返して行くのだが……やはり最初にしくじったことがバレないために、胸もさするしかなかった。

　罪悪感は二度往復した頃には消失し、ただひたすらに満足して欲しい、気持ち良くなって欲しい、癒されて欲しい……その純粋な願いだけでモルトは己おのれの手を這はわせていく。

　そうしてたっぷりと時間をかけて何往復もした時、線香はその全てを灰とし、さほど広くないモルトの部屋に濃のう密みつな香りを漂わせ、リッツの呼気を荒げさせていた。

　あれだけ白かったリッツの体も、血色が良くなったと見えて赤みと熱を帯びており、さすっていた肌も最後はしっとりと汗あせばむほどであった。

　最後に首筋を両手でさすって、フィニッシュだ。

「施術完かん了りよう。……どうだ、リッツ、リラックス……できたかな？　気持ち良かった？」

　モルトがベッドから降りると、リッツは少し眠ねむくなっていたのかどこか惚ほうけ顔で、手を突ついて体を起こそうとするも、力が入らなかったようで一度失敗する。

　その後両手で何とか体を起こして、胡う乱ろんな瞳ひとみでモルトを見るも、胸を丸出しなのに気が付いたのか、すぐにハッとして枕を抱いて体を隠かくした。

「リ……リラックスしたかは……わからないけど……気持ちは……良かった、よ？」

「本当か！　良かった、最初から最後まで一人でやったのは本当に初めてで……少し不安だったんだ。自分の手が人を幸せにできるのかってさ。リッツがそう言ってくれるのなら、これで俺も胸を張って客を取れる。……俺、女体さすりとして、やっていくよ」

「……モルト、女体さすりって、その……毎回、こんな感じなの？　こんなことを……いろんな、人に……」

「基本的にはだいたい同じかな。どうした？」

「え、別に……。何でも、ない。ただちょっと……その……気になったっていうか……ちょっと……嫌いやっていうか……」

「え？　うまくなかった、かな？」

「そ、それはっ！　……うまかった、と思うけど……。でも、比べようがないよ。……あたし……初めて……だったんだし……」

「それもそうか。……お互たがい初めて同士じゃ、わからないか」

「……でも……よ、良かったよ。……すごく、気持ち良かった」

　緊張を孕はらむリッツの言葉は、モルトには何とも嬉うれしかった。

　ベッドに腰掛けて、女体さすりのそれとは違ちがう手付きで、リッツの頭を撫なでた。

「ありがとう、リッツ。……やっていく自信が持てた」

　撫でられたまま、くすぐったそうにしてリッツが瞼まぶたを閉じて、体を寄せてくる。

「ちなみにリッツ、どの辺りのが一番良かったかな？　参考までに聞いておきたい」

「え？　えっと……どれも、良かったけど………………最後のが一番、かな」

　恥ずかしいのか、消え入りそうなほどにか細い声で、リッツは上うわ目め遣づかいでそんなことを囁ささやいた。

「最後っていうと、首筋のか。……よし、それを売りにしていくか……」

「ちが……あ、ううん、何でもない」

　リッツが体を寄せてくる。モルトが肩かたを抱だけば、彼女は枕

を除のけてモルトの胸に顔を埋うずめるようにして軽く抱きついた。

「……お仕事、頑がん張ばってね」

「あぁ。さすってさすって、リキュール中の女全ての体をさすりまくってやるさ。お前の家賃の心配なんてすぐに取り払はらってやる」

「……うん。……応おう援えん、してるよ」

　小さく頷うなずくリッツの顔は、どこか寂さびしそうに見える。

　それが何故なぜなのか、モルトにはわからなかった。

3

　熟考に熟考を重ね、モルトはついに打って出ることにした。

　女体さすりは誤解を招きやすく、冤えん罪ざいをかけられるのもしばしば……。だが、この街で七年も暮らし、住民達と信しん頼らい関係を結ぶモルトならばおかしな誤解をかけられる心配はないし、万が一の時でも女体さすりに理解を示してくれたライがいるのだ。大きな問題に発展する可能性は低い……そう目安をつけられる。

　だから、モルトは堂々と行くことにした。

「よしっ、これでいけるな」

　モルトは三日間部屋に籠こもり、拘こだわりに拘った大きな宣伝用広告を見事に造り上げていた。

　紙は雨に濡ぬれても一ヶ月は耐たえられる上質なもの。そこに記しるした文面は悩なやみ抜ぬいた末、シンプルイズベストを目指した。

　あえて女体さすりが如何いかなるものかに触ふれないことで人々に疑問と興味を与あたえるのだ。

　疑問と興味、それらは噂うわさを広める上で最大の燃料となる。しかし、何であるのかがわからないままでは商売にならない。だから最後に名前を付け加えた。そうすると住民達ならば「ありゃ、いったい何だい？」と直接訊きいてくるに違いなく、その時に女体さすりが如何なるものかを話して、最後に一つこう加えるのだ。

　──どうだい、試ためしに今から一度やってみないか？

　これだ。これで完かん璧ぺきだ。看板やチラシで「是ぜ非ひ一度お試しを」と書いたところで、人々はスルーするだろう。だが、対面ならばスルーしにくく、一度ぐらいなら……と受け入れてくれることだろう。あとはリッツも納なっ得とくのテクでリピーターにしてしまえばいいのだ。

　問題は訊いてくる者の九割以上が男だという予想なのだが、それでも低い知名度でやっていくよりはマシというものだろう。

　また、モルトの全力を投入したイラストのデキも悪くない。

　女体さすりの最大の武器である左右の手の平を、可能な限りリアルに描えがき、これがあなたの肌はだをさすります、というメッセージを暗に込こめた。

　ただ、手首から先だけをリアルに描き過ぎたせいか、何だか斬きり落とされた罪人の両手のようにもおどろおどろしく見えたりもするのだが……そこはご愛あい敬きようだ。

　数日間締しめ切っていたカーテンを開くと、驚おどろく程ほどの快晴。

　太陽の位置からするとまだ昼前だろう。

「仕事始めには最高じゃないか。……よっしゃいくぜ。女体さすり、モルト、初出勤だ！」

　皺しわにならないよう広告を丁てい寧ねいに丸めて手にすると、もう一方の手でモルトは久方ぶりに長なが柄え刀とうを握にぎった。使うわけではない。これを、自警団に置きに行くのだ。

　長柄刀を手放した瞬しゅん間かん、自分は正しよう真しん正しよう銘めいの女体さすりになる──その予感をモルトは感じていた。逆にいえば長柄刀がある限り半はん端ぱ者もの。何でも屋としての自分が強く残っている。

　全すべてを捨て、全てを変える──。その覚かく悟ごで、モルトは部屋を後にし、まずは二階の大家──リッツの両親に軽く挨あい拶さつしていくことにした。

　モルトが部屋に籠もったのと時を同じくして、リッツが何故か現れなくなっていた。

　無論、今後の自分について頭を巡めぐらす必要があったので現れないでいてくれるのはありがたいことなのだが、それでも毎日モルトを起こして、家賃を払えと脅おどし、仕事に行きたがらないモルトのケツを叩たたきに来ていたのに、急に来なくなると……それはそれで少し寂しく、不安になるものである。

　彼女の母親に話を聞けば一昨日おととい辺りから自室に引き籠もって呻うめいていたらしい。

　今朝も「モルト君の所に家賃の取り立て、行かないの？」と訊いたら理由も言わずに「行かない!!　絶対行かないから!!」と激しく抵てい抗こうされたのだという。

　話を聞いていて、モルトにはすぐにピンとくるものがあった。

　恐おそらくリッツはモルトに気を遣つかっているのだ。女体さすりとして稼かせぐ……その未来をあの子は確信している。だから取り立てる必要もないし、何より新規事業を起たち上げる時はどうしたって忙いそがしくなるから、邪じや魔まにならないように、という気き遣づかいである。

「よくわからないけど、多分大だい丈じよう夫ぶよ、心配しないで。確か……〝買い物に行かなきゃ〟とかボヤいていたしね。……だから、うん、大丈夫。すぐにまたモルト君の所に取り立てに行かせるから。全力で♡」

リッツの母親の笑え顔がおはたまに怖い。それを久しぶりに思い出しつつ、モルトはアパートを後にし、人混みで溢あふれるアルコ・ホールを進んだ。

ロテ国かオードビー国、そのどちらかに出発しようとする旅人達は今日も多い。肩に載のせた長柄刀が邪魔になる程だ。

しかし、そんな不便ももうすぐ終わり。これからは両手のみを得物とし、ひたすらに女体に立ち向かうのだ。

「ちょいとごめんよ、はいはい、ごめんごめん……ちょっと、ごめんよ」

街を十字に貫つらぬく大通り、その中央にある掲けい示じ板ばんの前はまさに大混雑だった。モルトは行き交かう人々、そして掲示板を見上げて立ち止まっている人々に、小さく謝りながらその図ずう体たいを押し進めていく。

途と中ちゆう、男女比を見てみるが、悪くない。これだけ女人がいれば、初日から客を取るのも可能かもしれない。

そしていざ掲示板の前に来た段階で、ようやくモルトは気付いた。

「先に自警団本部へ行って長柄刀を置いてくれば楽だったな……。まぁいい。広告貼はって、本部行って、んで戻もどってきた時には話題騒そう然ぜん……何だ、むしろ無む駄だがないじゃないか！　よっしゃっ！」

街の中央にある巨きよ大だい掲示板はある意味においてリキュールの特色でもあり、何でも屋のような、店を構えないフリーランスであればここを活用して仕事を為なすのが基本である。

探し人、探し物、恋こい人びと募ぼ集しゆうに待ち合わせ連れん絡らく、果ては誰だれかが毎日のように貼っている短編連れん載さい小説なんてものまである。リキュール議会を始めとした公共機関の告知用スペース以外であれば住民は誰もが自由に活用していいのだ。

……無論、女体さすりの宣伝広告だって、例外ではない。

「恐らく、リキュール史上、初めてこの掲示板に『女体さすり』の

文字が躍おどることになる……これは歴史的な瞬間だ。よし、できるだけ注目を浴びやすい位置に……人の身長より高い位置で……公共機関告知スペースの脇わきとか最高……お、空いてるじゃん！」

　これは僥ぎよう倖こうだ。最高の場所が空いている。

　刮かつ目もくせよ、リキュールの人々よ。これが女体──。

「……ん？」

　モルトは長柄刀を自らの体に立て掛かけ、手にしていた広告を拡ひろげ……かけた時だった。

　──今、かすかに『女体さすり』の文字が見えた……気がしたぞ？

　広告を拡げる手を止め、モルトはそっと視線を上げていく。視界いっぱいに広がる様々な貼り紙、無数の文字、差し込まれる絵……その中に……あった。

　紛まぎれもない、『女体さすり』の文字が。しかもジュクセンのリアルな似顔絵付きである。

「あぁなんだ、師し匠しようも堂々と商売始めてんのか。弟で子しが師匠の脇に広告貼っちゃ見み劣おとりしちまっ──なん、だと……？」

　ジュクセンの似顔絵の上に、『賞金首』の文字。それに続く文字には『詐さ欺ぎ師し』とある。

〈この者、ロテ国を始めとした無数の地にて様々な詐欺を働きし大罪人。自らを『女体さすり』なる奇きっ怪かいな職業の者だと名乗って女性（特に未亡人を始めとした熟女をメインとする）に近づき、その渋しぶい風ふう貌ぼうと卓たく抜ばつなるトークで術にハメ、金銭を騙だまし取る。なお、その土地ごとに共犯者を用意するなど周しゆう到とうな手段を用いるため、一層の注意が必要である〉

　──この賞金首、頭湧わいてんじゃねぇのか。女体さすりなんて……そんな夢のような職業を信じるバカがいるかってんだ。──バーカ、詐欺師ってのは騙されそうな奴やつを狙ねらっていくんだ。おれらのような常識ある一いつ般ぱん人が引っかかるわけねぇだろ。

　モルトは拡げかけていた広告を手にしたまま、冷ひや汗あせと脂あぶら汗あせが入り交じった不ふ審しんな汁しるを全身から吹ふき出した。

　……嘘うそだ。違う。きっと、師匠は誰かにハメられて……実際に師匠の手に触れた人なら誰だってわかるはず。あんなに柔やわらかいくせに芯しんがあって、不思議な温かさが……。

「……おい、まさか……」

　モルトが記き憶おくを遡さかのぼると、ふと、あることに気が付いた。

　柔らかいのに芯がある、不思議な温かさ……それらは女体さすりの手が持つ特とく徴ちようだという。だが、よくよく考えてみれば……それらは全てジュクセンが言った特徴だ。

　最初に握あく手しゆした時は何も感じていなかったのに、ジュクセンが言ったことで、モルトが「言われてみれば」と……。

　言われて気付く、ではない。言われて、そんな気がしないでもない、と思った……だけ。

　それはつまり……抱かされた感想ではないのか。

　何よりジュクセンは授業料としてモルトがせどりで稼いだ金の全てを……。

　━━これ、こんなリアルな似顔絵付きならすぐに捕つかまんだろ。二、三日前から貼ってあるけど、まだ捕まらないのか？　スゲー話題になってたろ。━━いや、確か……。

　二、三日前……リッツが引き籠もったのが二日前……。

　モルトの中で無数に散っていた点と点が線で結ばれ……全身の汗の量を増していく。

　リッツが引き籠もった理由がもし、これを知ったことに由来するのであれば……そして、この貼り紙が真実であるのなら……。

「……俺は、全力で、リッツの体をまさぐっただけ……？」

未成年に対するなかなかの犯罪である。

しかもジュクセンの教えにない、胸までをも含ふくんだことでより一層の犯罪感が強まっている気もしたが……しかし、さすりの技わざがないというのなら、何故なぜ癒いやされるというのだ。リッツはもちろん、ハーシーだって、あんなに……。

「リキュールの人々よ、道を開けよ！　ロテ国国境警備隊、罪人輸送の任務中である！　すまぬ！」

威い圧あつ的な声、というよりは、ちょっと困った感じの声が響ひびき、掲示板前に群れていた人々が道を開け始める。現れたのは馬に跨またがった四騎きと、その内の一騎と鎖くさりで手て錠じようが繋つなげられているボロボロのジュクセンだった。

騎士の一人が馬を下り、モルトの隣となりに来ると、彼は掲示板にあったジュクセンの似顔絵に赤い塗と料りようで×印を書き足す。

「英えい傑けつ達の子孫達よ、貴公らの活かつ躍やくによって罪人をまた一人捕ほ縛ばくすることができた！　見事なり、リキュール!!」

隊長格らしき男がそんな声を上げると、辺りが一いつ斉せいに沸わいた。

盛せい大だいな歓かん声せいが上がり、その中をゆっくりと騎馬隊は進んでいく。

後ろについていくジュクセンは……顔を歪ゆがめて路上に唾つばを吐はき捨てていた。

「あぁ、ジュクセン！　私の愛いとしき人……!!　どうして、どうしてあなたは連れて行かれてしまうの!?　どうして、どうしてえー!?」

ガウン姿のハーシーが走り寄ってくるも、それは路上の人々が慌あわてて止めた。

──アンタは騙されていたんだ！　──早く正気に戻りなさい！

住民達が一斉に声を上げるが、ハーシーは聞きもせずに連れて行

かれるジュクセンに手を伸のばす。

「あぁ、私が愛した男達は誰もが離はなれていく……なんてことなの。でも、ジュクセン、信じてる！　私、待ってるわ！　理由はわからないけれど、あなたが言ったように資産の全てを持ち運びしやすい金きんに替かえて……私、待ってる!!」

　―どうやら逃とう走そうする直前だったようだな。―よく捕まえたもんだよ、ホント。―あぁ、さすがだよ。―リキュールもまた名が上がるな。

「……といっても、私はリキュールの住民ではないんだがね」

　捕縛者を賞賛する声が辺りから聞こえてくる中、不意にモルトに向けられた声。

　不審な汁でびちゃびちゃの顔のまま、モルトが見やれば……苦く笑しようしていたサシャだ。

　彼は懐ふところからぷっくりと膨ふくれた革かわ袋ぶくろを取り出す。

　その際の音からすると中には硬こう貨かがビッシリのようだ。

「楽な仕事だったが、得られた賞金はたんまりだ。……そういえば、モルト、確かお前、何でも屋を辞やめるそうじゃないか。一体何を始める気なんだ？」

「いや、その、あの……いやぁ……」

　サシャはまた絶世の美女にも見える笑みを浮うかべた。

「たまには奢おごってやろう。モルトの新たなる門出を祝わせてくれ。……ん？　その手に持っている広告、新しい仕事のか？
ちょっと見せてく―」

　モルトの手は素す早ばやかった。広告を瞬しゅん時じにクシャッとやって口に放ほうりこみ、咀そ嚼しやくし、そして飲み込んだのだ。

　唖あ然ぜんとして言葉を失うサシャに、モルトは背を向けると共に長なが柄え刀とうを握にぎる。

　楽して稼げる仕事なんてありはしない。女の体をさするだけで賃金を得ようなどと考える方が間ま違ちがっている。

　汗水垂らして地道に頑がん張ばってお金を稼ぐ……それこそが正しい。

　そう……人生というのは、堅けん実じつこそ一番の近道なのだ。

「さぁて今日も何でも屋の仕事、頑張るか!!」

　そうして、結局変わらない愉ゆ快かいで楽しいモルトの日常が今日も続く……かに思えたが、おろしたての包丁を手にしたリッツと、ジュクセンの共犯者として屈くつ強きような男達に追われるという苛烈ハードで笑えないシリアス展開が待ち受けていたのは言うまでもない。



●第三話『追つい跡せきと追つい撃げきと』

何でも屋の朝は遅おそい。より正確に言うのならば、モルトの朝は遅い。

それは彼なりの経験に基もとづいた理論に即そくしているが故である。

通常、彼のような何でも屋は街の中央、そこにある掲けい示じ板ばんにて主おもに仕事を探す。様々な宣伝広告や、公共機関からの告知、そして誰だれかに依い頼らいしたいこと、困ったことなどが貼はられており、仕事人はそれを見て受けるか否いなかを決めるのである。

それ故に、朝早く起きたところで依頼主も寝ねているだろうし、昨日から貼られているのに同業者が受けていない仕事はろくでもないものに違ちがいない……と、ろくでもない理論を打ち立てて、大たい抵ていモルトは昼辺りまでベッドで眠ねむり続けるのだ。

「ねぇ……モルト」

感覚からしてまだ午前中、それもかなり早い時間だろう。

だというのに、女性の声がモルトの眠りを妨さまたげようとする。

「気持ちいい？　……ねぇ、モルト」

気持ちがいいか悪いかと問われれば、前者である。ベッドの上はいつだって、そうだ。

そして、いい男の眠りを甘い囁ささやきで妨げるのはいつだって美女と相場が決まっている。……ならば、考えるまでもない愚ぐ問もんと言えた。モルトは夢の中で苦笑する。

「ねぇ……モルト、どう？」

　そう優やさしげに耳に囁いてくる、彼女。

　上着を脱ぬいで寝ているモルトに跨がってその身を添そわせ、柔やわらかな唇くちびるをモルトの耳に触ふれる程ほどに近くにしての、言葉。

　モルトの腰こしに触れる彼女の細い太ももの感かん触しよくや、胸むな板いたに感じるその彼女の体の柔らかさ……そして、耳に触れる声に伴ともなわれた吐と息いきの温ぬくもりや湿しめりを含めた、その心地ここち良さ。

　さすがに……目覚めないわけにはいかなかった。

「ねぇ、聞こえてる？　……気持ちいい？」

　モルトは自分の上に覆おおい被かぶさっている彼女の髪かみにその手を這はわせた。

「あぁ、もちろんだ。気持ちいいよ、凄すごく……いい。さぁ、今度はこっちの番だ……」

　そうしてモルトはそっと彼女を抱だきしめようとするのだが……何故か、抵てい抗こうされる。

　ぐぬぬぬぅ、と唸うなりのようなものが聞こえた気がした。

「何言って……こぉのぉ……寝ぼけてんじゃ……なっ……クッ！」

　彼女の小さな体は抱かれるのを良しとせず、己おのれの体に巻き付いてきたモルトの腕うでを振ふり払はらう。と、同時に、モルトの左の乳首を思いっきり捻ひねり上げた。

「働かずに寝てるのは気持ちいいかって訊きいてんのにィ!!」

　細い指が繰くり出す全力の捻りが、モルトの乳首を襲おそう。

　その衝しよう撃げきたるや、まさに拷ごう問もんのそれ。

「ぎゃああぁああぁあ!!　よせよせよせよせ!!　リッツ、それダメだ、乳首取れちゃう!!　千切れちゃう!!　いやああぁあぁめぇえええぇろおぉおぉぉおおぉ!!」

モルトは幼い少女のリッツを跨がせたまま、陸りく揚あげされた魚のように全身を震ふるわせてベッドの上を跳はね回るのだが……そうすればするほど振り落とされまいとして彼女は乳首を捻る指に力を入れてくる。

「家賃払ってない部屋でよくもまぁ堂々と寝ていられるよねホント！　ふざけてんの!?」

「ふざけてないないないなくなっちゃう乳首が、俺の乳首がなくなっちゃうからダメダメダメだぁああぁぁあ!!」

フンッと、鼻息荒あらくして、リッツはモルトの体から飛び降りると共に、捻り上げていた乳首を投げ捨てるようにして指を離した。

モルトはベッドの上で身を丸めてしくしくと乳首をさするのだが……何だかちょっと伸びている気がする。……正直、寝起きにはかなりキツイ哀かなしみが生まれていた。

「ったくもう。ほら、さっさと起きて働いてきてよ」

モルトはしくしくと哀しみを抱かかえたままベッドの上で半身を起こすと共に、左右の手を交差させ、どこぞの女め神がみ像のように己の両乳首を隠かくす。

「……何、そのポーズ」

「大家の娘むすめに乳首を持っていかれそうになった哀しき男のポーズ、かな……ん？」

ベッド脇わきに立ち、腰に手をやりながら呆あきれ顔でいるリッツ……そんな彼女を見返していると、モルトは気付いた。

いつものように白を基調としたフリル付きのワンピースに、基本ショートボブなのに左側だけ伸ばしている三つ編み、それ以外はさほど飾かざり立ててはいない、いつもの彼女。

いささか白過ぎる肌はだは今し方のやり取りでわずかばかりに紅潮しているものの……それを除いても、どこか普ふ段だんとは違う。

髪のセットがいつもより、丁てい寧ねい？　そして、うっすら

と、ほんのわずかに……化け粧しようをしているかもしれない。そのくりくりとした猫ねこのような目の周りに、ほんのわずかに。

　母親のそれをバレない程度に使った、という感じである。

　また、モルトの空の酒さか瓶びんが転がっているテーブルの上には今、ちょっと大きめのかわいらしい鞄かばんが載のっている。

「あ、今日はひょっとして登校日か」

「そ。だから早めに起こしに来たの。……ほら、さっさと起きてよ。一いつ緒しよに出るからね」

　今日は一週間に一度の、リッツの登校日だ。通常この街の学校の授業は七日の内五日あるのだが、リッツは体が弱く、頻ひん繁ぱんに登校することができないため、普段は家で自習か、教師が出張で教えに来るのだが、それでも週に一度、登校することになっていた。

　今し方の乳首断だん裂れつ未み遂すい事件を始め、三階への階段の上り下りなどを考こう慮りよすると、とても体が弱そうには思えなかった。けれど、実際、昔は通学の途と中ちゆうで幾いく度ども倒たおれているので、嘘うそというわけではないのだ。

「俺が一緒に出る理由、あるか……？」

「あたしが言わないと、モルト、夕方まで寝るでしょ？　そして日が暮れたから今日はもう仕事がないって言って酒場に行くでしょ？　ダメでしょ？」

　ぐうの音も出ず、モルトは仕方なくクタクタのシャツに、クタクタのネクタイを締しめ、重い鉄板の入ったブーツを履はき、革かわのロングコートを羽織る。そして、鏡で無ぶ精しよう髭ひげの生えた己の顔を見つめながら、頭を手ぐしで押さえつけた。

　ボサボサの寝ね癖ぐせは毛先を少しアレンジするだけで、一いつ瞬しゆんにしてクールな無造作ヘアへと変化。そのお手軽な毛質はモルトの自じ慢まんである。

　そうして、モルトはいつものように身み支じ度たくを整えると、最後に、鞘さや代わりとして帯バンドが巻かれた身長と同じだけある得物を担かつぎ上げた。長なが柄え刀とうである。

「さぁ行くよ。私は学校、モルトは仕事探しで頑がん張ばらないとね。今日は課外授業もあるんだから」

　今日はリキュールの裏手にある山の麓ふもとで、食べられる野草や薬草を採ったりするらしい。

　その課外授業のせいか、それとも久しぶりの学校そのものが楽しみなのか、乳首を捻り上げていた頃ころとはうってかわって、リッツは上じよう機き嫌げんだ。

　彼女は着き替がえが入っていると思おぼしき鞄を揺ゆらし、モルトの前を歩いて部屋を出る。

　手を後ろにして振り返ったリッツの顔には、はにかむような笑え顔がお。

　それを見た時に、モルトは察した。

　きっと彼女は学校まで送っていって欲しいのだろう。けれど素す直なおに言えず……というか、お願いしようにもモルトの眠りがあまりに深くて、結果、乳首が酷ひどいことになったのだ。

　少しばかり延えん伸しんした左乳首のことを忘れれば、かわいい奴やつめ、と思わずにはいられない。

「ったく。しょうがないな。行くか、学校。ほら、はしゃいでいると階段から落ちるぞ」

「学校？　うん、行くけど……モルトは来ないでいいよ？　ってか来る意味ないじゃん」

「恥はずかしが……じゃなくて、遠えん慮りよするなよ、リッツ。送っていくよ」

　また余計なことを言って気分を損そこねてしまわないよう、モルトは気を遣つかった。それがリッツよりも十年長く生きている大人としての気き遣づかいである。

　あのさぁ……と、アパートの階段を下りていたリッツは、腰に手を当て、呆れ顔で振り返る。

「いい加減さぁ、そうやってダラダラしてないで、きちんと働いて

先月分の家賃ぐらいは払ってくんない？　毎日毎日起こしに来て、働けって言うのも楽じゃないんだからね」

　恥ずかしがるなよ、リッツ。モルトはニヤニヤしながら心の内で呟つぶやくのだが……アパートを出てすぐに、彼女はモルトを置いてさっさと学校へ向かっていった。……一人で。

１

　午前中の日差しは、何故なぜこうもダメ人間に厳しいのか。

　青く晴れ渡わたった良い天気ではあるのだ。だが、何となく体力をもっていかれる気がするし、妙みように目に染しみる。単なる寝不足のせいかもしれない。

　朝から大通りは賑にぎわっていた。いや、朝だからこそ、賑わっているのだろう。

　いつものように露ろ天てん商しようはすでにいくつも並び、店を構える商人も負けじと声を上げ、大勢の旅人達を引きつける。恐おそらく今商店に立つ者達はこれからロテ国、はたまたオードビー国へ向けて旅立とうというのだろう。だからこその賑わいなのだ。

　実際この時間帯の屋台は、干し肉やナッツ類を始めとした保存食がよく売れている。どちらの国に辿たどり着くにもここからしばらくかかる。備えがなければ途中で飢うえて渇かわくか、未熟者をカモにしようと待ち構えている旅商人から割高の商品を買うことになるのだ。

　次いで人気があるのは土産みやげ物の屋台である。街を過ぎるとロテ国のものもオードビー国のものも、土産と呼べる物は売ってはいないため、家族を持つ者にとっては重要な買い物である。旅慣れた者ならあえて国を出る時に土産を買わず、身軽にリキュールまで来て、そこで初めて土産を買う、というのが常じよう套とうなのだとモルトは酒場で聞いたことがあった。

　モルトはそんな賑やかな屋台でのやり取りを眺ながめながら、歩いて行く。

朝は苦手だが、街が活気づいている様子は好きだった。

街が生きている。そう感じられると共に、自分もまたその中の一人であり、しっかりと生きているのだと感じられる。

そして……その体の魅み力りよくを強調して商売しようとする娘達の姿も実に眩まぶしい。店を構えている商人達と違ちがい、露天商の娘達はいささか奔ほん放ぽうだ。特に旅商人のそれともなれば、薄うす手での服を着て、その胸の先の輪りん郭かくまではっきりと見せつつ声を張り上げているのだから、弛ゆるんでいたモルトの身も心も朝から張りが出るというものだ。

「あー、たまには朝早く起きるのも悪くないな」

モルトはやる気を得て、きびきびと掲けい示じ板ばんへと向かった。

リキュールという街の中央部は、楕だ円えんを描えがくように街道が造られている。その楕円の内側にある区画をアルコ・ホールと呼ぶのだが──モルトの住むアパートもそこにある──それを四つに区切るように東西南北に街の大動脈たる大通りが走っていた。

その二本の大通りが交差する十字路に、巨きよ大だい掲示板はある。

所ところ狭せましと貼はられた紙の文面に、モルトは素早く目を通していく。

──告白の手伝い。──トイレ詰づまりの対処。──新料理の指南。──あがり症しよう克こく服ふくのための練習相手募ぼ集しゆう。──書庫整理の手伝い。──『漢おとこ祭まつり』に備えての特訓指南。

「柄がらじゃねぇ……専門の業者がいるだろうが……料理はプロに訊けばいい……犬相手に喋しやべれ……安すぎ……特訓指南か、悪くはないな。だが、これをやるとなると……伸びた乳首を晒さないといけないだろうしな……」

早朝とはいえ、意外と依い頼らいがあるのはモルトにとって嬉うれしい誤算だった。

だが、あまり〝コレだ！〟というものがない。

「やぁ、モルト。不景気な顔をしているな、どうかしたのか」

　軽かろやかな声がして、そちらを見やれば……そこには綺き麗れいな男がいた。白に近い金きん髪ぱつを簪かんざしで留め、腰こしには刀を帯びた細身の色男。同業者の、サシャだ。

「逆に訊くけど、俺の景気が良かった時があったか？」

　それもそうか、とサシャはカラフルな異国のマフラーに顔をうずめるように頷うなずき、色いろ香かの漂ただよう目を細める。この男、わかっていて言ったのだ。皮肉である。

「ふむ。……今日の依頼の量はまぁ、そこそこだな」

「どれもやる気がしねぇ。先に選ばせてやるよ」

「そうか、悪いな。なになに……告白？　私に惚ほれられても困るしな……柄じゃない……朝から重いのだったら嫌いやだな……私相手じゃむしろあがるだろう……ホコリにまみれる趣しゅ味みはない……祭りの特訓など美しくない……ふむ。割としけている」

　サシャとしても今日の依頼はパッとしないようだ。

　彼は悩なやんだあげく、強しいて言えば新料理の指南ぐらいか、とやや難しい顔をした。

「お前、料理できるのか？」

「まさか。そんな特技があれば刀など帯びたりせずに、料理屋で腕うでを振ふるうさ。ただ、それなりにいいものを食べてきた自負はあるから、舌には自信がある」

「……一割でも報ほう酬しゅうが支し払はらわれることを祈いのっててやるよ。俺は、どうするかなぁ……」

　モルトが顎あご先の無精髭を撫なでて掲示板を見やり、サシャが依頼内容の書かれた紙に手を伸ばしかけた……と、その時だった。二人の傍かたわらに人の気配。

「じぃや、ここに貼ればいいのかしら」

「はい、お嬢じょう様さま。恐らくそれで仕事人を探す手はずにな

るかと」

　そこにいたのは、白髪しらがの老いた執しつ事じ。しかし、背筋などに衰おとろえは見えず、むしろそのシャンとした様はそこいらの若者よりはるかに研とぎ澄すまされていた。

　そして、それほどの執事を従えているのは、十代半ばほどの小こ柄がらな少女である。

　桜の色をしたシーサイドアップの長い髪かみを揺らし、まるで花の精であるかのような柔やわらかで華はなやか、そして繊せん細さいなドレスを纏まとう彼女。石いし畳だたみの道で軽やかな音を立てる高級そうなハイヒールを見るまでもなく、この街以外の人間であると知れた。

　このリキュールという街は大国の首都間を繋つなぐ旅の中ちゅう継けい地点。雑多な街に、こんなお嬢様は住んでなどいない、が、ここを抜ぬけていく金持ちやその家族は無数にいた。

「お待ちを、お嬢さん」

　新料理指南の依頼書に手を伸ばしていたサシャが、驚おどろくべき速度で少女の前で膝ひざを突つく。その顔にはいつの間にか、柔にゅう和わで、男が見ても美しいと感じる微笑ほほえみが貼り付いていた。

「その依頼、このサシャが引き受けさせて頂きましょう」

　サシャが恭うやうやしく少女の手を取った。

「ケッ、女と見るとすぐにこれだ。ガキ相手に……」

　その時、モルトは見た。少女が手にし、今まさに貼らんとした依頼書に書かれた報酬の額を。

　──ひと桁けた違いやがる……。

　これが金持ちか。世間知らずのガキはこれだから恐ろしい。モルトは思わず心の中でそう呟いた。もしかしたらサシャが即そく座ざに動いたのも、相手が女だからではなく、その数字を目ざとく見つけたからなのかもしれない。

モルトは即座にサシャを排はい除じよし、彼女の依頼が何であれ、それを奪うばい取ろうと、長柄刀を握にぎっていた手にわずかに力を込こめた。

「あら、素敵な剣けん士し様ですわね」

「ありがとうございます。私の後ろであなたの依頼を奪い取ろうとしている男よりはマシな外見だと思いますが、お気に召めして頂けたのならこれほど嬉しいことはありません」

……急に攻こう撃げきし辛づらくなった。伊達だてにサシャもこの街でモルトと長くやっていない。

「自らの姿に自信がおありなのですわね。……ですけれど、わたくし、失礼ですが後ろの殿との方がたの方が……好みですわ。男はやはり、ある程度のたくましさが欲ほしいですもの」

モルトという男は、朝は遅おそいが決断は早い男である。

即座にサシャの隣となりで膝を突き、依頼書を持っていた少女の手を取った。

「よろしければ、その依頼、こんな軟なん弱じやくな男ではなく、このたくましきモルトが引き受けさせて頂きます」

「……自分でたくましきとか言うな、モルト。恥ずかしいぞ」

「うるせぇ、お前も似たようなこと言っていただろうが」

クスクスと両手を二人の男に取られている少女は笑った。

「あらあら、仲がよろしいようで」

「「良くはないです」」

モルトとサシャは声をハモらせて返答した。

「フフ。では、こうしましょう。依頼はあなた方お二人にお願いいたしましょう。そうすれば言い争いをしなくて済みますものね」

モルトはサシャと互たがいの顔を見合わせた。

間近でサシャを見れば、如何いかにその男が美形であるのかがわ

かる。目元だけなら完全に女のそれだ。こいつが原因で禁断の趣味に目覚めた奴がいるというのも頷うなずける。

「依頼は逃にげたわたくしの大切なペットの追つい跡せきですの。生まれた時からずっと一いつ緒しよに暮らしてきたのですが、慣れぬ土地に興奮したのか……いなくなってしまって。いかが？」

　何と簡単な依頼だろうか。モルトは思わず驚きよう嘆たんする。

　確かに逃げたペットの捜そう索さくとなると手間はかかるが、遅かれ早かれいずれ見つかるのだ。

　というのも、このリキュールの周りには不毛の荒こう野やが広がっているし、北の山トルシユ・オマロンへと続く森は奥に行けば魔ま獣じゆうの気配が濃のう密みつになるので、野生の勘かんが少しでも残っていれば深い所へ入っていくことは、まず、ない。

　今の状じよう況きようを今一度考える。報酬は莫ばく大だい。折半することになっても、かなりの額だ。自分ほどではないにせよ、それなりに使えるサシャと組むのは何をするにしても都合がいい。

　向こうも同様の判断をしたのか、モルトとサシャは同時に「「やります」」と声をハモらせた。

　少女はニッコリと笑った。

「それで、そのペットというのは……？」

「実はとても特とく殊しゆなペットで、形容がし辛いのですけれど……全身に毛が生えた、動きの素す早ばやい、ころころと丸っこいかわいい生き物ですわ。名はピーちゃん。優やさしく名を呼べばフギューっと鳴いてくれますの」

「なるほど、ケダモノか」

「おい、モルト、失礼だぞ。……では、そのペットの特とく徴ちようというか、目印は？」

「それが丁度三日前にコレと同じ物を二つ、体に付けたところでしたの」

　少女がモルト達から手を離はなすと、執事から一個の球体を受け

取り、見せてくれた。

　金持ちの趣味らしく、何だかよくわからない素材で作られたそれ。

　乳白色の色合いからすると魔獣の牙きばや角からくり抜いたものかもしれない。

　それに穴がいくつも空けられた、見事な工芸品である。

「三つで一つの魔ま導どう具ぐですわ。お貸しいたしますわね。これは取り付けたペットが逃げた時にも役立つように、三つが近くにあると振しん動どういたしますの」

　何て都合のいいアイテムを取り付けているのだろう、とモルトは密ひそかに思ったが口に出すといろいろ面めん倒どうそうだったので、黙だまっていた。

「それは捜さがしやすくていい。助かります。ちなみに逃とう走そうした際の様子をお聞きしても？」

「一昨日おとといこの街に辿たどり着きまして、宿で休んでいると繋いでいた鎖くさりを断ち切って、開いていた窓から……。すぐに召めし使つかいに追わせたのですが、逃げられてしまいまして。それで土と地ち勘かんのある者に依頼を、と思いまして」

「ちなみに最後に見かけたのはどこで？」



楽な仕事になりそうだ。そうモルトが考えて何気なく訊きいたのだが……。

「召使いが急いで追ったところ、ここの下水道に通じる穴に入って行ったそうですわ。……せめて地上にいればわたくしの手で連れ戻もどせるのですけれど、さすがに地下はお洋服が汚よごれてしまいますので」

その言葉に、モルトもサシャも言葉を失った。

「では、よろしくお願いいたしますわね」

ニッコリと笑った彼女は、リーフィと名乗った。

2

「どうするモルト、かなり厄やつ介かいな仕事になったぞ。まさかの下水道だ」

わかってる、とモルトは頭をポリポリ掻かきながら、サシャを引き連れ、大衆酒場・安あん美び亭ていのドアを潜くぐった。

まだ開店前のようだが、モルトが気にすることはなかった。どうせ、馴な染じみの店である。

「まずは作戦会議といこう。下水道に行くとなると、かなりきちんとした装備がないと……アレ？　どうした、クラッツ？」

安くて美味うまくて美しい店だから……ということで安美亭の名を持つその店の、主に三つ目を一手に担になっている看板娘むすめのクラッツが、今日はいつものコルセット・ベストではなく、パーカー姿でカウンターに入っていた。大きな瞳ひとみを大人っぽく魅みせる化け粧しようや、美しい金色の前まえ髪がみを右目が隠かくれるように垂らしつつ、後ろ髪はバレッタでまとめてアップにした髪型等々はいつも通りではあるのだが……。

「あら、いらっしゃい。朝からどうしたの、まだ開店前だけど？

……あぁ、アタシ？　今日は学校の課外授業で山に行くの。卒業生が特別講師ってことで、食べられる野草と薬草の見分け方と採集、ついでに調理法とかも教えてくるから遅くなるのよね。だから叔父おじさん一人でやれるように、ちょっと準備してたの」

「あぁ、リッツもそういえば課外授業がどうたら言っていたな。まぁ、頑がん張ばってきてくれ。先に俺達に一いつ杯ぱい、何か頼たのむ」

　クラッツが料理を運ぶ姿も美しいが、やはり彼女の最大の舞ぶ台たいはカウンターの中だろう。

　その細い身を躍おどらせるようにライムを搾しぼり、氷、酒と共にシェイカーを鮮あざやかに振ふる。

　見る者を引きつける見事な手て際ぎわ。それによって生まれるカクテルは……ギムレットだ。

　本来のそれは、ジンに甘いライム・ジュースを合わせてシェイクするのだが、この店では搾りたての爽さわやかな香かおりに拘こだわり、生のライムを搾る。ただ、これでは辛から口くちになってしまい、本来のギムレットにある大事な甘あま味みがない。そこで安美亭では蜜みつ漬づけのスライス・ライムを一枚浮うかべることで、見事な味わいを醸かもしだしていた。

　出て来たそれを口に付ければ、最初に蜜漬けライムの甘さが来るも、喉のどを過ぎる際にはライムの爽やかさとジンの辛さが実にさっぱりとした後味を残していく……はずだ。

　何せ、カクテル・グラスが出されたのはサシャだけ。モルトには大きなグラスだった。水である。クラッツは未いまだ一七歳だが、金のあるなしを見分ける能力はすでにプロ中のプロといって良かった。

　せめてもの哀あわれみにか、蜜漬けのライム・スライスを一枚グラスに入れてくれるのだが……それが余計に悲ひ惨さんさを増していた。

「……ふぅ、いい酒だ。朝からこの手のを飲むと清すが々すがしい気分になる。だが、先を考えると暗あん鬱うつだ。下水道となるとかなり厄介だぞ、モルト」

「あぁ、そうだなサシャ。だが、俺は今現在進行形で暗鬱だ。……ライム風味の水だぞ」

「とりあえず、明かりが必要だな。下水道はガスが充じゅう満まんしているはずだから、火を使うランタンは御ご法はつ度とだろう。携けい行こうできる魔光球か何かを……リーフィから前金を貰もらうべきだったな。失敗してしまった」

「あぁ、今回ばかりは俺のミスだ。とりあえずは金を持っているとクラッツにホラ吹ふいて、一杯注つがせるべきだった。あとはツケだろうが何だろうがどうとでもなったものを」

　男達が嚙かみ合っているのか嚙み合っていないのかわからない会話をしている間に、出発時間になったらしく、クラッツがリュックを背負い始めた。

「携行用の魔光棒なら、うちの店にあるけど。サシャ達、使う？」

「クラッツ……君のその優しさを私は神々からの贈おくり物だと信じて疑わないよ」

「クラッツ……君のその優しさで俺に酒さか樽だるからの贈り物をくれると信じて疑わないぜ」

　クラッツは男達の言葉に何ら反応することなく、カウンターの下をごそごそと漁あさり、ガラス玉を先せん端たんに添そえた小型の杖つえのような、二○センチほどの棒状のものを二本出す。それを一本をサシャに手て渡わたし、そしてもう一本でモルトの頭を叩たたいてからカウンターに置いた。

　モルトが不満げにしつつも先端部をこすると、棒の先が煌こう々こうと光り出す。

　店の非常灯用のものらしいが、これなら十分使えそうだ。

「魔力満充じゅう塡てんして返してくれればいいから。壊こわさないでね」

　その魔光棒アイテムは紐ひもも付いていて、首からかけておくこともできる物で、地下に潜もぐるには丁度良さそうなアイテムだった。

「ありがとうクラッツ。後はこの魔導具で居場所を特定すれば仕事は終わったも同然だ」

　ライム風味の水をちびりちびり口にするモルトをよそに、美男美女の二人のやり取りが続いていたのだが……それは、唐とう突とつに終わった。

　サシャが持っていたあの球体の魔導具が彼の手から転がり落ちたのだ。

　そして、床ゆかに落ちたそれは激しく振動し、カラカラと音を立てて床を転がっていく。

「……なぁ、クラッツ、店の下って……何がある？」

　モルトの問いかけに、クラッツは不思議そうな顔をして首を傾かしげる。

「地下室は一応あるけど、その辺りにはないわよ？　下水道が通ってて造れなかったって叔父さんから聞いたけど」

「モルト、準備はやめだ」

「あぁ、手っ取り早く終わらせようぜ。……地下へ潜ろう」

3

　リキュールの特色の一つに、辺境の地でありながら上下水道がある、ということが挙げられる。普ふ通つうは大国の首都でもなかなかないようなものが、古いにしえよりこの街には当たり前のようにあり続けていた。

　だが、その歴史故ゆえか、地下の構造は極きわめて複ふく雑ざつ怪かい奇きなことになっており、特に下水に至ってはもはやちょっとした迷めい宮きゅう並の造りとなっているのだ。実際に施せ工こうした者がすでにいないどころか、誰だれが造ったのかもわからないため設計図も現存しない。

　必要に応じて首都から呼び寄せた職人が下水道をいじくり回し、試し行こう錯さく誤ごの末に結果として使えているに過ぎなかった。

「……ひでぇ臭においだな。サシャ、明かりを落とすなよ」

　モルトとサシャは安美亭近くの地面にあった、雨水を受け入れる排はい水すい穴の格こう子しを外して下水道へと下りた。街から流れ込む汚お水すいが一堂に会するその場所の臭いは形容しがたいものがあり、最初モルトもサシャも鼻と口に布を巻き付けていたが、ほとんど意味を成していなかったため、すぐに取り外したほどだ。……鼻が慣れるのが何気に早く、心が折れて悪あく臭しゅうを受け入れる諦あきらめを得るのはそれ以上に早かったせいもある。

　下水道はアーチ状の天てん井じようであり、その下に人が一人歩ける程度の歩道が用意され、傍かたわらを汚水が流れていた。大雨が降ったりすれば、その歩道の上にも水が流れるようだ。

　歩道はレンガだが、壁かべや天井は岩を組んで造られているようで、見事なバランスを保っている。それだけで職人技わざであり、新しく造られたか補修したかした部分では同様の仕様は再現できないらしく、腐ふ食しよくするのを承知で金属板が使われていた。

「おっと、十字路に出たか。安美亭の位置は……多分、こっちだな。……うん、わずかに振動を始めたぞ」

　サシャが魔光棒をかざしながら先導する。

　彼が持つ魔導具の振しん動どうは割と激しく、手に握にぎっていると先さき程ほどのように落としてしまいかねないため、現在は球体の穴に紐を通して首からかけていた。

「本来なら地図でも用意したいところだったが、球体これさえあれば何とかなるだろう」

「サシャ、知らないのか？　この下水道の構造を記しるした地図なんてどこにもないんだぞ」

「設計図がなくとも、職人ぐらいは知っているだろ？」

「上下水道の職人はロテ国かオードビー国の首都にしかいないっての。問題が起こったらどちらかから連れてきて修復してもらうんだ

が……職人曰いわく、毎回構造が変わってるって話だ。冗じよう談だん交じりにいつも言っているぜ？」

「バカな。それでは、まるでこの下水道が生きているかのようじゃないか。さすがにそれは……ん？」

　サシャが首から提さげた魔導具に手を当てた。

　あまりに振動が激しくなり、サシャの胸むな元もとを跳はね回って音を立てているのだ。

　二人は耳を澄すませつつ魔光棒をかざしてみるのだが、汚水の流れる音が聞こえるだけで他は何も聞こえず、視界にも深い闇やみが佇たたずむだけで何もない。

　振動音がうるさいサシャを待たせ、モルトは前に出てゆっくりと、すり足で進んでいく。

　正直担かついでいる長なが柄え刀とうが邪じや魔まではあったが、これを手放すわけにはいかなかった。

　モルトが魔ま光こう棒を前に突つき出すようにして進んでいくと、ようやく、何かが見えてきた。

　歩道の隅すみに黒っぽい塊かたまり。モルトの予想を超こえて、かなり大きい。

　てっきり変わった種の犬・猫ねこの類たぐいだと思っていたが……ペットが何であるのか、確かく認にんしなかったのが今いま更さらながら悔くやまれた。

　全身に毛が生えているとのことだったが、暗すぎてその全容はよくわからない。だが、振動音はそこからも聞こえている。てっきり飼い主側の球だけが振動するのかと思えば、三つの球はそれぞれ振動する物のようだ。

「モルト、警けい戒かいしろ。……恐おそらく、それだ。……ブタ、なのか？」

　モルトが近づいていくと、その黒いのは毛皮ではなく、布で覆おおわれているのだと知れた。

「何だ、こいつ。何で布を被かぶって──」

　モルトが長柄刀を壁に立て掛かけ、魔光棒を持ちつつその布に覆われた〝何か〟に手を伸のばした……その時だった。

　モルトの視界を〝黒〟が覆った。一いつ瞬しゆん魔光棒の魔力が切れたのかと思われたが、そうではない。ペットが覆っていた布をモルトに被せたのだ。

　慌あわてたモルトの腹部に衝しよう撃げきが走る。強きよう烈れつな打撃のようなそれによって、モルトは思わず尻しり餅もちをついた。視界を覆っていた黒が消える。

「モルト何して……まずい!!　逃にげられ──何!?」

　サシャの声を聞きつつ、モルトは体勢を立て直すと共に反射的に長柄刀を拾い上げ、即そく座ざに構える。だが、その時はすでに目の前には闇が広がっているだけだった。

「サシャ、何だ、何があった」

「走ったんだ、モルト。お前の魔光棒の光が布で覆われたからはっきりとは見えなかったが、間ま違ちがいなく走っていた」

「……どういう意味だ？」

「二足歩行していた。あいつ、黒い布かローブのようなものを纏まとっていたのだが……何だか、鞄かばんを抱かかえていたような……」

「……ペット、だよな……？」

　不意を突かれたとはいえ、それなりに警戒していたモルトに一撃を打ち込んだのだ。街のチンピラ程度ならどれだけ酒が入っていても対処できる……そんなモルトに、だ。

　ただのペットじゃない、少なくともモルトはそう判断した。

「そもそも考えてみればこんな危険地帯である下水道の入り口がぽっかり開いている場所なんてこの街にはないはずだ。金属製の柵さくなんかをこじ開けない限り……」

「……チッ、依い頼らい主はただのお嬢じようさんってわけじゃなさそうだぞ、サシャ」

「綺き麗れいな花にはトゲがあるように、美しい女性には何かしら秘密があるものさ」

　サシャは腰こしに帯びていた刀の鯉こい口ぐちを切って、わずかにその刀身を覗のぞかせると、再び鞘さやに収めた。戦せん闘とうに備えた、そういうことなのだろう。

　モルトもまた、長柄刀に巻いていた帯バンドを取る。

「何にせよ、俺達向きな仕事になってきたぜ」

「殺すなよ、モルト。お前の長柄刀は強すぎる」

　わかってるさ。モルトは呟つぶやきながら長柄刀の白はく刃じんにそっと指を這はわせる。

　硬かたく、冷たく、そして金属の塊が放つ独特の力強さが、そこにはあった。

4

「待て、サシャ止まれ！」

　モルトの声に、刀の柄つかに手を伸ばしながら進んでいたサシャの足がピタリと止まる。

　硬こう直ちよくした彼の足あし下もとをモルトが魔光棒で照らすと、ピンッと張はられた極ごく細ぼそのワイヤーが闇に浮うき上がってくる。

「また罠トラツプか。クソッ。……モルト、お前良くわかるな」

　これまでに二回、罠トラツプが仕し掛かけられていた。一度目は歩道にボロきれが張られた落とし穴、二回目は今回同様のワイヤートラップだった。

「こう見えて目の良さと反射神経はライよりも上だからな」

　ワイヤーは通路部にピンッと斜ななめに張られており、一方は汚水の中に、もう一方はその歩道の壁の中に吸い込まれていた。

「恐らくさっきのと同じタイプだな。ワイヤーを足に引っかけると、壁の中に埋うめ込んだ石が抜ぬけて──」

「このアーチ天井が落らく盤ばんするってヤツだろう。さっきもその説明を聞いたが、本当にそんなうまくいくものなのか？」

「あぁ。その石一つで落盤するようにうまく詰つめばな。得意じゃないが、時間をかければ俺でも作れるはずだ」

「……だが、何故なぜだ？　何故、こんなのがここにあるんだ」

　サシャは一発目の罠トラップに引っかかりかけた時と同じ台詞せりふを口にした。

「誰かが仕掛けていたか……いや、そうなると雨の日とかにワイヤーが引っ張られて発動して消える、か。……そう考えればここ最近に仕掛けられたものなんだろうな」

「……誰が、仕掛けたというんだ」

　サシャは呻うめくように呟き、首から提げている魔光棒で今一度ワイヤーの位置を確認する。そして、刀の柄に手をやり──白はく刃じん一いつ閃せん。

　彼が抜き放った刀はわずかもワイヤーを引っ張ることなく切断し、動きを止めることなく鞘へと戻もどった。瞬まばたきすらする間もない──と、その瞬間だった。

「サシャ伏ふせろ！」

　モルトは長柄刀を振ふり、サシャの頭に向かって飛来したレンガを砕くだく。

　見やればワイヤーが伸びていた汚水の中から、簡素な投石器が顔を覗かせていた。

　下水にあったガラクタを組み合わせて作ったと思おぼしきものだ

が、水中から水面へ飛び出してなおレンガを投げ飛ばしてきたところを見ると、かなり良くできている。

「た、助かった、モルト。罠トラップを解除すると……っていう、二重罠トラップか」

「いや、二重じゃねぇな。壁の方はフェイクだ。……さっきのを避よけた相手だからと仕掛けたんだ」

　そう言ってモルトは長柄刀を担ぎ直すと、壁から伸びていたワイヤーを力任せに引っ張り抜く。かなり強固に喰くい込んでいたが、案の定、何も起こらなかった。

「……まるで私達の行動を見てから仕掛けたかのようだ。跨またぐ者もいるだろうに」

「プロ中のプロなら、一いつ杯ぱい飲むより早く設置できる奴やつもいる。サーカスには人間よりもうまく彫ちよう刻こくを作る猿さるがいるって話だ。……罠トラップを設置できるヤツだっているかもしれない」

　サシャが忌いまゝいましげに舌打ちし、今一度罠トラップの様子を見やった。

「……モルト……私達は一体、何を追っているんだ……？」

「かわいいペットだろ。……ったく、楽な仕事がどんどん厄介ハードになっていきやがるぜ」

「こういうのは苦手だな。真っ正面からやり合う方が性しように合って……ん？」

　サシャが首から提げていた魔ま導どう具ぐが振動を始めていた。

「罠トラップが作動したから、様子を見に来た？　……死んだフリでもしてみるか」

　モルトは歩道にうつ伏ぶせになり、サシャは壁かべに背を預けるようにしてグッタリとした。

　魔導具の振動が徐じよゝじよに強くなっていき、サシャの胸むな元もとで跳ね、音を立てる。

同様に、下水道の先に広がる暗くら闇やみの中から振動音が二つ。

ズリズリと足をこするようにしてペットが近づいてくる。比ひ較かく的てき夜目の利きくモルトは、暗闇の中の影かげをその瞳ひとみに捉とらえた。

ボロ布を全身に纏っているせいでかなり大おお柄がらに見え、また、その体勢は居合いの構えをしているかのように重心を低くし、動きは実質的にすり足のそれである。

様子を見るにかなり警戒しているのが窺うかがえる。……人ならば、だ。

サシャが言ったように確かに二足歩行をしているようだが、それで歩くのが人間だけとは限らない。噂うわさに聞く大型の猿や芸達者な犬、さらには魔ま獣じゆうなどいくらでもいるものだ。

気のせいか振動音の他ほかに、黒ずくめからはカチャカチャという金属音が聞こえてくる。牙きばか爪つめだろうか。モルトは目を凝こらしてみるのだが、やはりイマイチわからなかった。

だが、黒ずくめが鞄のようなものを肩かたから提げているのは確かに見て取れる。

そう、肩があるのだ。ならば、やはり大型の猿か？

モルトはより良く見ようと目を凝らす。すると、ふと、黒いボロ切れから何かが垂れているのが見えた。

モルトの長なが柄え刀とうの柄と同じほどの太さの、長く、黒い綱つなのようなもの。尻尾しつぽだろうか。

ペットの足がモルトとサシャから七歩の距きよ離りでピタリと止まり、そして、尻尾が唐とう突とつに振られた。

それは尻尾ではない──触しよく手しゆだ。先せん端たんに膨ふくらみのある、かなり長いそれが空気を切り裂さきながらモルト達を狙ねらう。

こちらの体を打って本当に死亡、または失神しているのかを確かめる気だ。

そして、この距離。モルトとサシャの得物の間合いから見事にギリギリで外れていた。

二人の体格、得物、それぞれを踏ふまえて距離を測っている。

こいつ、戦い慣れている。野生の獣けものではない。知性を持つ化け物――魔獣だ。

モルトが感じたそれはサシャも同様だったらしく、二人同時に体を起こすと、飛び来た触手をかわし、一いつ斉せいにペットへ飛びかかった。

鞭むちのような触手ならば打てて一人。かつ、剣けん技ぎと違ちがって振りかぶる予備動作を必要とするはずだから、即座に次の攻こう撃げきは放てない。

仮に打てたとしても、どちらか一方の刃ははペットに届くはずである。

体が細く、素す早ばやいサシャがモルトの前に出て、一気にペットとの距離を詰める。

ペットは虚きょを突つかれたのか体をビクンと震ふるわせ、後方へ大きくジャンプすると共に再び触手を振るう。サシャは接近し過ぎてすでに触手の間合いから外れており、その先せん端たんは迷うことなくモルトへと向かった。

モルトの長柄刀が片かた刃ばなのはこういう時に役に立つ。

モルトのブーツがレンガを砕く程ほどに強く歩道を叩たたく。急激な停止。走り込んでくることを想定していた触手の先端はモルトの目前で空から振ぶり、床ゆかのレンガを砕いた。

そこにモルトは長柄刀を振り下ろす。それも肉圧な刃の、峰みねの部分で、だ。

それは切断することなく触手の先をレンガの床へと強力に縫ぬい付けた。

突とつ如じよとして触手が捕つかまり、ペットは引っ張られる形となる。奴がしていた後方へのジャンプは実質的に半歩下がっただけで、その足は再び歩道に落ちた。

「グッ……！」

　ペットが呻きつつ、触手を引っ張るも、長柄刀からは逃にげられない。

　サシャが己おのれの間合いに黒ずくめを捕とらえた。

　サシャが抜ばつ刀とうすると同時に斬きり付ける。居合い。斜ななめに斬り上げるその一撃は確実にペットを包むボロ切れ、そしてその肉を捉えたかに思えたのだが……。

　ペットの触手が、根元から千切れた……かに見えたが、違う。――手放したのだ。

　火花、甲かん高だかい金属音。

　サシャの刀がその軌き道どうを大きくずらし、その切っ先を天てん井じようへ上げさせられる。

「なんだと!?」

　思わずサシャが叫さけんだ。

　モルトの目に映ったのは、ゴツイ腕うでに、ゴツイ金属製の腕うで輪わ。

　鞭のような触手とモルト達が思っていたそれは、触手のような鞭だったのだ。

　そして、その鞭を握にぎっていた腕にはゴツイ腕輪があり、それでサシャの一撃を受けるでなく、いなすでなく、下からすくい上げるようにして当てて、刀の軌道を大きく逸そらしてみせた。

　受ければ金属製の腕輪ごと手首を切断、いなせば即そく座ざにサシャの第二撃が来る……それ故ゆえに、逸らしたのだ。

　それらを瞬しゆん時じに判断し、そして斬ざん撃げきの鋭するどさと速さに関してはリキュールで右に出る者のいないサシャの攻撃に動きを合わせて……やってのけた。その動き、尋じん常じようではない。

　サシャ、居合いを真上へと誘ゆう導どうされたがために、まるで

剣を天へ掲かかげるような体勢──死に体で身動きが取れない。

　一方、ペットもまた腕輪を付けた拳こぶしを掲げていたが、こちらは居合いで踏み込んできたサシャと違い、如何いか様ようにも動ける余よ裕ゆうがあった。──そこから放たれる、蹴けり。

　サシャの体が枯かれ木のように、横一直線にぶっ飛ぶ。

　モルト、脇わきを締しめて長柄刀の柄を腰こしに備え、地を這はうが如ごとくに身を低くして、走った。

　ぶっ飛んで来たサシャの体の下をくぐり抜け、ペットへと肉にく薄はく。

　すくい上げるように、斬り上げる。

　ひらり、と大柄のくせに軽かる業わざ師しのようなバク転で、ペットはたやすくかわした。二撃目も同様にかわす。

「チィッ、なら──!!」

　どうしても大おお振ぶりになる長柄刀の斬撃では捉えきれないと判断し、突きを繰くり出す。

　だが、驚おどろくべきことにバク転でかわし続けていたペットは、突きが来るや否いなや、その長柄刀の上に飛び乗り、そこを足場としてモルトの顎あご先さきを蹴り上げた。

　モルトの脳が揺ゆれ、視界が踊おどる。膝ひざから下の力が急激に失われていく。

「コイツ……!?」

　動きの速い獣ならいくらでもいる。だが、大柄でありながらこの動き……並じゃない。

　仰あお向むけに倒たおれたモルトの視界の中で、ペットが天井に跳とび上がり、そこで体を引き絞しぼる。全身のバネを使い、真下へ跳び、モルトにトドメを刺ささんとしているのだ。

　だが、その黒い体は突如飛来した黒い筋によって吹ふっ飛ぶ。──鞭だ。

「フヒィッ……！　ホノフィチフェキファフォウフィナフィスフィロ……!!」

　妙みような声を上げて、ペットが歩道を転がった。

　ペットが先程手放した鞭を持つサシャが、モルトの脇を走り抜けて追撃を仕し掛かけていく。

「モルト、立て！　ここが勝負所だぞ！」

　ヘッドスプリングの要領で立ち上がると、モルトはペット、そしてサシャの背を追う。

　ペットがよれよれと下水道の奥へと逃げていく。

　幾いく度どか角を曲がり、直線に出た所でサシャが再び鞭を振るった。

　間合いが長い鞭の先端は再びペットの体を激しく打ち、転てん倒とうさせる。

　いける！　そう言うサシャだったが、その足あし下もとに一筋の煌きらめきがあるのにモルトは気が付いた。ワイヤー。罠トラップだ。

「サシャ！」

「わかってる!!」

　三度目ともなれば、さすがにサシャも察していたようだ。

　彼はワイヤーを大きく跨またぐようにしてかわし──落とし穴に落ちた。

　ワイヤーを跨ぐ、または飛んでかわすと予測し、すぐ隣となりに落とし穴を設置するという、二重罠トラップである。

　しかも大きく跨いで落ちていったせいもあってか、サシャの地を蹴っていた長い足がワイヤーに引っかかった。

　汚お水すいの中に仕掛けられていた簡易投石器からレンガが来る。モルトはうまく長柄刀で叩き落としたのだが、その直後に、頭

上の落らく盤ばんが始まった。

「三重罠トラップ⁉」

　落盤、その三つ目のトリガーがどこにあったのかわからないが——恐おそらく落とし穴の中か——ペットにとって、ここの罠トラップこそが、初めから狙いだったのだとモルトは理解した。

　これまで仕掛けられていた罠トラップを経験させることで、あえてワイヤーは引っ張るのはもちろん、切るのも発動させる畏おそれがある、そのため跨ぐしかない……と、すり込ませた上で今回の罠トラップが仕掛けられている。

　つまり、ここここそが本番であり、他は全すべて前座でしかなかったのだ。

　三重罠トラップは追つい跡せき者を穴に落とし、落盤で蓋ふたをして生き埋うめにする仕様である。

　追い詰つめた気でいたが、実際には自分達こそが追い詰められていたのだと、モルトは初めて理解した。

　今のサシャの鞭を喰らったのも、全て誘さそいでしかなかったのかもしれない。

　この罠トラップのために、全てがあったのだ。

　——私達は一体、何を追っているんだ……？

　先程のサシャの言葉が、モルトの脳のう裏りを過よぎった。

「俺の長柄刀を、舐なめるな‼」

　柄えすら鋼鉄で拵こしらえられ、刃は極きわめて肉厚な長柄刀は斬ることだけが役割ではない。

　その重量、その頑がん丈じようさが生み出す業わざは他の武器では為なし得ないことを為す。

　モルトはサシャが落ちた穴に降り注ぐ無数の瓦が礫れきを、横よこ薙なぎに払はらう。刃は寝ねかせず、立たせたまま、その白はく刃じんの腹で叩はたく。

　並の剣ならば折れるか曲がる扱あつかいではあったが、長柄刀は大きな瓦礫を砕くだき、無数の破は片へんとして横の壁や汚水の中へと吹き飛ばしてなお、健在だ。

　だが、それでもやはり全ては防げない。

　大きな瓦礫が来た。モルトは薙いだ長柄刀から手を放す。長柄刀は壁に突き刺さり、そして自由になったモルトの手足は降り来る瓦礫を次々に弾はじいていく。

「よし、これで……！」

　落盤の終わりが見える、凌しのぎ切れた。

　そう思った時、何かが漆しつ黒こくの中から真まっ直すぐに、飛来する。

　モルトは己おのれに迫せまり来たそれが、青い薬品を腹に収めた小型の注射器であると見て取るも、両手を拳にして瓦礫を払っていたせいで対処ができない。

　喰くらうのを覚かく悟ごした……だが──。

「クッ……！」

　落とし穴の中からサシャの左ひだり腕うでが伸のび、飛来する注射器をつかみ取ったのだ。

　モルトはすぐさまサシャの体を引き上げると、その握り締めた手を見る。

「……まずいな」

　針は彼の親指の付け根に刺さり、しかもガラス製の注射器はつかんだことで砕け、サシャの左手に無数の裂れつ傷しようを作っていた。

　注射器内にあった薬品がその傷口から体内に入ったのは間ま違ちがいないはずだった。

「これでは吸い出しようもないな。……気にするな、力の加減を間違えた私のミスだ」

そう言いつつも、サシャは魔ま導どう具ぐが振しん動どうしなくなっているのを確かく認にんしてから手をハンカチで拭ふき、傷口から血と共に薬品を少しでも吸い出そうと唇くちびるを這わせる。

だが、それで全てを抜くのは無理だろう。

「……奴やつは何なのだろうな、モルト。ただのペットじゃないというのはわかったんだが……魔ま獣じゆう、いや、人間か、やはり」

「それもただ者じゃない。相当な腕だ。プロだぜ」

サシャとモルトを手玉に取る体術、こちらの行動を予測した上での三重罠トラップ……しかも、恐らくはモルトとサシャが最初に地下に下り、接せつ触しよくしてから仕掛けられたものだとすると、そんじょそこらの仕事人ではない。

「私はそれほどその手の界かい隈わいに詳くわしくないんだが……そうなのか？」

「あぁ、下水道という特とく殊しゆな空間だから断言はできないが……かつて、この手の業わざを使う連中にとっちゃ伝説レジエンドと呼ばれたオッサンがいたよ」

それはその場にあるもの、全てを武器として用いることができる一流の暗殺者。手ぶらで現れ、仕事を為して手ぶらで消える。そんな冗じよう談だんのような男だった。

武器ではない物を武器とし、当たり前の家々や木々、草花、地面や風さえも、そいつにかかれば人を殺あやめる武器と化す……そう言われていた。

しかもその男はそうした能力だけでなく、身体能力も極めて優すぐれ、徒と手しゆ空くう拳けんはもちろん、剣、弓、斧おの、槍やり、ナイフ、鞭むち……ありとあらゆる得物を得意としたとされている。

「その場にあるものを何でもうまく使う、っていう技術者だ。あらかじめ攻こう撃げきのために作られている道具……つまり武器なんて使えて当然、というわけだよ」

「大した暗殺者だな」

「暗殺者ってのも、怪あやしいもんさ。どちらかといえば俺達と同業者だ。何でも屋さ。……だが、その能力の特とく徴ちよう故、暗殺に最も利用され、暗殺者として伝説になった……そういう男だよ、そいつは」

「待て、モルト。今回の罠トラップは仕掛けるのが速いだけで、それほど特殊でもないし……やられた身で言うのも何だが、同じ物をわずかにアレンジして繰り返しているだけだ。それほどには……」

「だからこそ、さ。罠トラップ……つまり技能は、言うなれば遣つかい手にとって手札だ。持っている手札を全て見せていては、どんなに強力なカードを有していても、すぐに対処されるだろう。……奴は今のところほとんどカードを切っちゃいない。簡単な罠トラップを一つ二つ組み合わせるだけで、これだけ俺達を追い込んでる」

「……では、やはりアイツはお前の言う伝説レジエンドだと？」

「そうは言っていない。アイツは……えーっと、俺がリキュールに来るより前だから……一〇年以上前に表はもちろん、裏の世界からも消えている。噂うわさじゃ、その技わざを完かん璧ぺきに伝授した三人の弟で子しの手にかかったとされているんだが……その誰だれかなら、ありえるかもな」

「……伝説レジエンド殺しの後こう継けい者しや、三人の内の一人、か。なるほどな、面おも白しろくなってきたじゃないか。だが、依い頼らい主のペットは……あぁ、小こ脇わきに抱かかえていたあの鞄かばんの中か。ようやくいろいろ見えてきたぞ」

　サシャは己が相対する敵がどれほどヤバい奴なのかを理解してか、冷ひや汗あせを流しながら、手の平にハンカチを包帯代わりに巻き付けた。そして、立ち上がろうとするのだが、ぐらり、とその体をよろめかせる。

　モルトは慌あわてて抱だき留とめる。サシャの体が恐ろしく熱くなっていた。

「……毒だったかな、やはり。回ってきてる。すまん、モルト、悪いが立てそうにない。私は置いて行ってくれ」

　らしくもないサシャの言葉に、モルトは「ったく」と一言漏もらした。

「大の男がこんなザマの奴を置いて行けるかよ。……たとえ商売敵がたきでもな」

「……モルト……」

「一度諦あきらめて上へ戻もどろう。少量でこの効き目だ。ヤバい毒かもしれない。医者が必要だ」

　すまない、という言葉と共にサシャが呻うめく。呼吸が乱れ、苦しいのか、自らを抱だくようにして身を縮め、体を捩よじり出す。

「急いだ方がいいな。……サシャ、帰ろう。ルートを教えてくれ」

　モルトは彼に背を向けてしゃがみ、背中に乗るよう促うながすのだが、なかなか乗って来ない。

　サシャのプライドが商売敵に背負われるのを良しとしないのか、それとももうそこまで動けないのかと、モルトは焦あせって振ふり返るのだが……赤い顔をしたサシャが眉まゆ根ねを寄せてモルトを見ていた。

「……おい、モルト、私はお前がルートを記き憶おくしていると思っていたのだが……」

　その瞬しゆん間かん、しばらく二人の間の時が止まったのをモルトは確かに感じた。

5

「クソ……また行き止まりか！」

　サシャを背負って、モルトが下水道を彷徨さまよってからすでにかなりの時間が経過していた。地上はそろそろ夕暮れだろう。

　進めば進むほど迷い込んでいる気がした。

　魔光棒は一本が魔力を使い切って消え、モルトの首からさがる一本だけが頼たよりだが、それも光が段々と弱くなってきており、も

う幾いくばくもなく消えてしまうのは間違いなかった。

　これが消えれば、あとは手て探さぐりで進むしかない。

「モルト……すまない……」

　背負ったサシャを一度歩道に下ろし、その様子を見る。手の傷口は化か膿のうしたりはしていないのだが、体調が良くなる気配がない。赤い顔、乱れた呼吸、高い体温、時折身を捩り、痙けい攣れんするように震ふるえる体……強力かもしれないが、それでも毒の量が少なかったせいか、痛みなどの症しよう状じようが出ていないのが幸いだった。

「お前の体調もだが、そろそろ光もヤバい。一か八か天てん井じようを崩くずしてみるしかないな」

　モルトはサシャの額に湧わいた汗を手で拭ぬぐってやる。

　するとサシャはよほど辛つらいのか、目め尻じりに雫しずくを溜ためてモルトを見てくる。

　その瞳ひとみの憂うれい、息を乱れさせた赤い顔の妖よう艶えんさに、モルトは思わずたじろいだ。

　綺き麗れいな男ほど顔は中性的になっていくものだが、今のサシャは顔だけ見れば完全に女にしか見えず、その気ケがないモルトでさえ、おかしな気持ちが湧きそうになる。

　サシャが膝ひざ同士を擦こすり合わせ、身を縮めるようにして悶もだえる。

「迷めい惑わく……かける、すまん……モルト……」

「……さっさと行こう。上の階層に近いと思える場所を見つけて、それで……」

　モルトがサシャに背を向け、再び背負うのだが……。

　サシャの腕うでがモルトの首に巻き付き、キュッと首が締しまらない程度に力を入れてくる。

　まるで抱きつくかのようなその仕草と、耳元に感じる彼の吐と息

いきの温もりと湿しめり気けに、モルトは何かが湧き起こりそうになるのを必死に堪こらえた。

「……奴め、一体何の毒を……」

　モルトは呻くように呟つぶやきつつ、花屋のオリービーが有するあの男達の浪漫ロマンの結けつ晶しようである豊満な胸を必死に思い出し、かつ、それを全力で揉もみしだく感かん触しよくをイメージし、行ってはいけない世界に足を踏ふみ出さんとする己を元いた世界に繋つなぎ止める。

　──おっぱいだ。今の俺にはおっぱいが必要だ。おっぱいおっぱい。あぁ、おっぱい……モルトは呪じゆ詛そのように胸の内で繰くり返した。

「上の階層なら、水の流れを逆に進んで行けば……うっ、あっ……んっ」

　背負っているサシャの声は途と中ちゆうで途切れ、モルトにしがみつく腕に力が入る。しばし体を痙攣させ……それから苦しげに息を吐はいた。

「くそ、毒を喰らったのは初めてだ……こんなに、苦しいものなのか……」

　モルトもそれほど毒に詳しくはないが、楽なものではないのだろう、と想像はつく。

　モルトは下水の流れを逆に辿たどるようにして進むが、幾いく度どとなく行き止まりに出くわし続けた。汚お水すいが流れ込む穴はあっても、人が歩けるルートがほとんどないのだ。

　そんな迷めい路ろのような下水道を進んでいると……ふと、モルトの足が止まる。

「……ん、おい、嘘うそだろ……」

　背中の感触に思わず声が出た。

　モルトの背とサシャの胸むな元もとで挟はさまれていた魔導具が振動しているのだ。

ペット、否いな、黒ずくめの男が、近くにいる。

「確かにマズイな、モルト。……だが、逆に言えば地上に近いんじゃないか。よくよく考え……あっ、クッ……考えると、アイツは私達が潜もぐってすぐに出くわした。それに、こんな場所に食料もないんだから、地上近くに身を潜ひそめていると考えた方が……あ……」

それもそうか、とモルトは警けい戒かいしつつも汚水の流れを遡さかのぼっていく。

そして、下水道内に湯気が漂ただよい出した袋ふくろ小路こうじに、そいつはいた。

熱水が下水に流れ込む穴が開いているだけの行き止まり。そこに黒いボロ布を纏まとった男が重心を落として、構えるがごとくに佇たたずんでいた。

「……よぉ。結果として追い込んだ形になっちまったな」

「チャンスだ、モルト。すっきりして地上に戻ろう……私は、まだ、耐たえられる」

黒ずくめの男は鞄を手に提さげたまま、二つの振しん動どう音を響ひびかせながら体をわずかに震わせるばかり。

モルトはサシャを下ろすと、長なが柄え刀とうを構えた。

ジリジリと靴くつ底ぞこをこするようにして間合いを詰めていく。

奴が、かの伝説レジエンドの後継者の一人だというのならば、恐らく真っ正面から相対するとなるとモルトとてただでは済まないはずだ。だが……やるしかない。

背後でサシャが片かた膝ひざを突つきながらも、居合いの構えを取る。

万全ではないだろうが、それでもモルトをかわして逃にげようとすれば、黒ずくめの男に一撃を放つぐらいならばできるだろう。

ペット探たん索さくのはずだったが、今、三人を囲む空気は完全

に殺し合いのそれになっていた。

　靄もやがかかるほど湿しつ度どの高い空間ながら、モルトは唇くちびるの渇かわきを覚える。

　肌はだがひりつく程ほどの緊きん張ちよう感かん。久々の、本気の命の遣やり取りだと頭ではなく体が察していた。

　しばらくの静止。それを動かしたのは三人の誰でもなく、光だった。

　モルトの首から提げていた魔ま光こう棒の光が、失うせた。━魔力切れだ。

　訪おとずれた漆しつ黒こくの闇やみ。それと共に黒ずくめの男が動いたのをモルトは肌で感じる。

　目は使えない。耳と肌、その二つだけが敵を捉とらえ、モルトに長柄刀を振るわせる。

　まずは壁かべを強力に打った。それは無数の破は片へんを生み出し、跳とび来ていた黒ずくめの体に激しく当たっていく。敵の動きを乱すと共に、破片が当たる音で奴の位置を把は握あく。

　モルトの前、二メートル。空中。━すでに長柄刀の間合い。

　モルトは壁から刃やいばを奔はしらせ、斬きり上げる。激しい火花と金属音。その光によって黒ずくめの男が刃を手首の腕うで輪わで受けたのだと知れた。

　その火花が照らす視界の中、長柄刀の刃は腕輪を砕くだくと共に、黒ずくめの男を袋小路の奥へと跳はね飛ばしたのが見える。

　再び訪れた暗くら闇やみ。息吐つく間もなく、モルトは距きよ離りを詰める。

　風切り音。また毒入り注射器か。モルトは音で位置を把握してかわした。

　裸足はだしの黒ずくめの男が地面を蹴ける音……跳んだ。だが、長柄刀の切っ先がその音を追つい随ずい。━捉えた。

「そこだ!!」

　モルト、跳び上がった黒ずくめの男を渾こん身しんの力で斬り上げる。

　長柄刀の切っ先に感触。石造りの天てん井じようではない、金属の感触。ボロ布の下に金属製の鎧よろいか何かを纏まとっていたようだ。

　……だが、モルトにはもはや敵が何を装備していようが、関係なかった。

　切っ先は敵を捉えたのだ。ならば、もはや金属だろうが何だろうが、関係なかった。

　有う無むを言わせない力と技が、モルトと長柄刀にはある。

　モルトは長柄刀の柄えの先へ持ち手を移し、黒ずくめの男を串くし刺ざしにするように突き上げる。奴の体を天井に叩たたきつけると、そこからなお、ありったけの力で天井へ押し込んだ。

「うおぉおおらあああぁあああぁあああぁぁあぁ!!」

　モルトが雄お叫たけびを上げる。ブーツの底が歩道を砕く。モルトの体中の筋肉がありったけの力を発揮し、その全すべてを長柄刀へと注ぎ込む。

　刃の先で金属製の鎧、そしてその後ろにあった石天井が砕ける。地が弾はじける。

　そのあまりの衝しよう撃げきに……下水道の崩ほう落らくが始まった。

6

　崩落の際、頭に大きな石を喰くらったせいもあって、モルトは半ば無意識にぽっかりと空いた下水の天井から這はい出した。

天井をぶち抜ぬいて吹ふっ飛ばした黒ずくめの男を捜さがそうとしたのだが……意識が朦もう朧ろうとしていて、モルトはたまらず、力が抜けそうになる。

辺りが明るい。地上に出たのだろう。しかし、白い靄がかかっていて、そこがどこなのかわからない。それとも、この白い靄は自分の目が霞かすんでいるからなのか――。

モルトは様々な可能性を考こう慮りよしつつ、何とか冷静さを保とうと頭を振った。だが、それのせいで思わずふらつき、数歩で膝を突き、近くにあった何かに手を突いた。

「……ん、何だ、コレは？」

ぬるりとした手て触ざわり。滑すべる。だが、それは妙みように温かで、柔やわらかで、モルトの指の動きに合わせて形状を巧たくみに変えるくせに……跳ね返すような弾だん力りよくがあった。

球体のようなそれではあるが、モルトの手の平の中心にツンっとした感触もあり、完全な球体ではないようだ。

靄の中、目を凝こらすとすぐ隣となりにも同じようなものがあり、モルトは長柄刀を置くと無意識に左右の手でそれを触さわり、揉んでみる。

何故なぜだかわからないが、モルトの中の何かが〝そうしろ〟〝そうしなくてはならぬ〟と強きよう烈れつに訴うつたえていた。

それが男の本能だというのを……靄が晴れていくに従い、モルトは察した。

そう、そこにあり、モルトの両手にすっぽりと収まっているのは――おっぱいだ。

紛まごうことなきおっぱいである。

もちろん男のそれではない。女性の、それも成長に膨ふくらみが追いつかず、張りの良い第二次性せい徴ちようを思わせる十代半ば過ぎの――少女と女の境目といった、いろいろな意味で一番楽しみな頃ころ合あいのそれだと、モルトは手触りから感じた。

揉むと指先を跳ね返してきて、何とも心地ここち良い。手が止ま

らない。

「……まずいな、死んだのか、俺は……それとも頭打って幻げん覚かくを……。さっきサシャを背負った時におっぱいおっぱいとバカみたいに連呼していたから……」

　とりあえず幻覚であれ何であれ、目の前に乳がある以上は、揉む。それがモルトであり、男という生き物だった。

　そして揉みつつ辺りを見回せば……靄の中、十代そこそこ……というよりは、十代になり立てといった少女、二〇人程が一糸まとわぬ姿で周り……大量に……。

　今現在モルトの手に収まるような、素す晴ばらしいおっぱいとは違ちがう、申し訳程度に膨らんだそれらを持つ少女達は、まさに天使か妖よう精せいの類たぐいでしかなく、いやらしさなど微み塵じんもない。

　ただただひたすらに美しさと愛いとおしさを感じるばかりで……そこが現世とはとても思えぬ光景だった。

　だが、哀かなしいかな。たとえ天使や妖精の類であっても老いはあるのか、目を凝らすと年老いた老ろう婆ばやオバチャンといった年ねん齢れいのそれらもいるようだ。……皆みな、全ぜん裸らで。

　それも当然の理ことわりなのだろう。

　老いぬ者などいないのだ。現世でも、あの世であっても……。

「……空むなしいな。だが、それ故ゆえに今少女達が持つ若さや、この俺の両手に収まる胸の感触がより素晴らし……ん？」

　どこもかしこも白く、少女達が呆ぼう然ぜんと突っ立っている幻げん想そう世界の中に、黒い塊かたまりが落ちているのに気が付いた。モルトは名残なごり惜おしみながらも目の前のおっぱいから手を放し、長柄刀でその黒い塊──黒いボロ布を纏った男を突っついてみる。

　そして、その切っ先でボロ布を引っ掛かけ、剝はぎ取る。すると……。

「なっ⁉　何だ、コイツ……⁉　こ、これは……‼」

　ボロ布の下から現れたのは、腹がデップリと出た中年太りの体毛の濃こい、男だった。しかも両足に鎖くさりの切れた足輪を嵌はめ、全身を荒あら縄なわ━で亀きつ甲こう縛しばりに拘こう束そくされ、かつ、股こ間かん部にはモルトの一撃を食らってもなお砕けず、ヒビが入っただけの金属製の異様に頑がん丈じようそうなパンツ……というより鍵かぎ付きの、貞てい操そう器具を穿はいた七三分けのオッサンである。

　しかも目元に蝶ちよう々ちようを模したようなマスクをし、革かわのバンドで口に咥くわえるように固定されたどこかで見たことがある魔導具があったりと……あらゆるガジェットを総合し、一言で表現するのならば━。

「へ、変態!!　……変態が出たわ!!」

　どこからか上がった女性の声に、モルトは神しん妙みように頷うなずいた。

「……あぁ、こいつ、変態だ。大変な変態だぞ……俺達はこんな奴に……」

　モルトは男の脇わきに落ちていた鞄かばんを見つけ、慌あわてて開ける。

　中に件くだんのペットがいるかと思いきや……出てきたのは、注射器や妙な薬品の他ほか、大人のみが使うことを許された不ふ審しんな夜のオモチャの数々である。

「なん……だと……。いないぞ!?　ピーちゃんはどこだ!?」

「フギュー！」

「……ん？　何で今、このオッサン、呻うめいたんだ？　いや、そんなことよりもピーちゃんを━」

「フギュー！」

「チッ、うるせぇな。黙だまってろ、俺はピーちゃんの━」

「フギュー！」



「……………………え、えーっと……ピーちゃん？」

「フギュー！」

「ピー……」

「フギュ……」

　意識のないデブの変態が反射的に体をビクンビクンと震ふるわせながら、口に咥えた魔導具の隙すき間まから必死に声を上げていた。

　モルトは今一度そのオッサンを見つめ直す。

　全身に毛が生えた、動きの素早い、ころころと丸っこい、かわいい生き物……問題がないようで、問題だらけな目の前の事態に、モルトは頭を抱かかえた。

　何となく合っているが、これがペットであるということ、そして最後のかわいい生き物という一点に関してだけはさすがに納なつ得とくできないものがある……。

「……………………オーケー、いいだろう、まず落ち着こうじゃないか。そうだ、落ち着け、モルト。ペットとは言われたが、確かに人でないとは一言も……」

「……え？　モ、モルト……？」

　聞き慣れた声が聞こえ、モルトはそちらに手を伸のばして〝待ってくれ〟とやろうとしたのだが……何故か手はまた柔らかな何かに触ふれた。

　見やればそこには小ぶりな……かわいいというよりは若じやっ干かんかわいそうなほどの小ぶりなおっぱいがあった。

　そして、少女が目を見開いて唖あ然ぜんとし、自分の胸に起こっている事態を見下ろしていた。

「すまないが、少し待ってくれ。今、この変態と依い頼らいの内容で頭が一いっ杯ぱいなんだ、リッツ。……リッツ？」

　モルトはその手の平に収まりが良いというか、まだまだ物足りないものを宿した少女を見やる。

　見まごうことなき全裸のリッツがそこにいた。

　アレ？　と、モルトが辺りを見回すと、先さき程ほどの絶ぜつ妙みような触り心地だったおっぱいの主──全身に泡あわをまとって啞然として固まっているクラッツが立っているのを見つけた。

　そして、彼女の胸むな元もとに付いている、マシュマロのようなふんわりした泡から顔を出す薄うす紅べに色いろにモルトの視線は自然と引きつけられ──

「……へ、変態……」

「あ、あぁ、変態なんだ。見ろよ、この変態を。こんな見事な変態はそうそうお目にかかれないぜ。だろ、ピーちゃん」

「フギュー！」

「な？　凄すごい変態だぞ、クラッツ」

「う、うん、そうね……って、アンタが変態でしょうが!!　何女湯の床ゆかぶち抜いて入ってきてんの!?」

「ははっ、何をバカな。ここが女湯のわけが……」

　そう言ってモルトは辺りを見回してみるのだが……何となく覚えがあった。

　とはいえ、知っている景色とは左さ右ゆう対たい称しようではあるのだが……街の大通りに面した、アルコ・ホール五番街にある大衆浴場だろうか。左右対称なのは、女湯だからで──。

「なん……だと……？」

「覗のぞきどころか堂々と侵しん入にゆうって……しかも、アンタ、さっきアタシの胸思いっきり……リッツちゃんのまで!!」

「待て待て大浴場にお前らがいるわけが……！　今日は山へ行ったんだろ!?」

「それが終わってみんなでこうして汗あせを流しにお風ふ呂ろに来ているんでしょうが!!」

　その次の瞬しゆん間かん、辺り一帯から二○人を超こえる老ろう若にやくそれぞれの女性の耳を劈つんざく悲鳴が響ひびき渡わたった。即そく座ざに、次から次に桶おけや椅い子すを始めとした物が飛んでくる。

「ち、違う！　違うんだ、俺はただこの変態を……ピーちゃんを追って──！」

「フギュー！」

「ピーちゃんを捕つかまえる依頼で下水道に──！」

「フギュギュー!!」

「ピーちゃんを──！」

「フギュギュギュー!!」

「うるせぇなブタ野や郎ろう!!　弁明ができ……痛ッ！　痛い痛い!!　ちょっと待って、俺は本当にサシャとピーちゃんを──！」

「フギュー！」

「あ、ほら、今穴から這はい出てきてるだろ、サシャが！　サシャ、弁明しろ、早く！」

　物が次々に飛び交かう中、穴から必死に出てきたサシャだったが、彼は立つこともなく浴場の床にそのまま倒たおれてしまう。

「あぁ、も、もう限界だ……モルト、私はどうなって……うっ……！」

「寝ねてんじゃねぇよ!!　事態を説明しないと殺されるぞ!!　俺達はピーちゃんを──!!」

「フギュー!!」

「あら？　この声は……わたくしのピーちゃんじゃありませんこと!?」

半日前に聞いた声と共に、脱だつ衣い所の扉とびらが開かれる。

すると、立ちこめていた浴場内の湯気が逃にげ出し、辺りの景色がはっきりとした。

また、裸ら体たいの少女達の姿までもはっきりしてきたため、モルトへの投とう擲てきが止やんでそれまでとは違ちがった悲鳴が上がり、体を隠かくそうとして大おお騒さわぎを始める。

そんな中、あのお嬢じよう様さま……リーフィが満面の笑え顔がおで脱衣所から走り込んできたのが見えるのだが、その姿は黒い革でできたピチピチのきわどいボンデージ衣い装しようであった。

「んっまぁ！　まさしくわたくしのピーちゃん！」

「フ、フギュー！」

「程良く痛めつけられて、快楽に失神してしまわれたようですわね！　あら、サシャさん、わたくしのなくしていた鞭むちまで捜さがしてきてくださったんですのね、ありがとうございます。……ほら、ピーちゃん起きて！」

バチンッと凄すさまじい音で鞭の先せん端たんがピーちゃんの肌はだを叩たたく。その衝しよう撃げきに意識を失っていた変態こと、ペットのオッサンピーちやんが飛び跳はね、四よつん這ばいで走り回った。

「まったく手て錠じようを壊こわしてしまうなんて……あら、魔ま導どう具ぐもサシャさんがお持ちでしたのね。お返しいただきますわ。……ほぉらピーちゃん、近づけると振しん動どうが強くなりますわよ……」

リーフィがサシャの首から提さげていた球体を取ると、ピーちゃんの体に近づける。

ピーちゃんが仰あお向むけになり、ブタのような悲鳴を上げ、全身を震わせていた。

「……リ、リーフィ、これは……いったい……」

荒あらい息で身を捩よじりながらサシャが尋たずねると、彼女はニッコリと笑った。

「依頼は完かん了りようですわ、何でも屋さん。報ほう酬しゅうは後ほど。……あら？　サシャさん、お薬を使ったのかしら？　……大だい丈じよう夫ぶですわ、わたくしが特別に作らせたペット専用の媚び薬やくですの。快楽に身を委ゆだねるか、時間が経たてばすぐに代謝されますわ。……ではでは、わたくしはこの二日間調教できずに鬱うつ憤ぷんが溜たまっているのでこの辺で。……たまには庶しよ民みんを真似まねてお風呂に来てみるものですわね。さぁ、ピーちゃん、行きますわよ！」

「フ、フギュー!!」

　そう言って四つん這いのオッサンを引き連れ、リーフィは浴場を出て行こうとするのだが……時折、ピーちゃんが逃げようとする素そ振ぶりを見せる度たびにリーフィが球体の魔導具を投げつける。その度にピーちゃんの咥くわえていた球が激しく振動し、オッサンが絶ぜつ叫きようしながら浴場のタイルの上で腰こしをビクンビクン震わせて悶もん絶ぜつするのだが……。

　ふと、その光景を見ていて、モルトは思い出す。あの球体の魔導具は〝三つで一つ〟だとリーフィが言っていたことを。

　一つはリーフィの手に、一つはオッサンの口に……では、最後の一つは……？

　去って行くリーフィとオッサンの貞操帯を見つつ、モルトは思い出す。

　──それが丁度三日前に、コレと同じ物を二つ、体に付けたところでしたの。──一昨日おとといこの街に辿たどり着きまして、宿で休んでいると開いていた窓から……。

「……ひょっとして、あの魔導具を付けられたのが嫌いやで、というか取り外そうとして脱だつ走そうしたんじゃ……」

　何となくあの鍵かぎ付き金属製貞てい操そう器具から、最後の一つが仕込まれた場所の想像はついていたが……想像したくはなかった。

「ったく、とんでもねぇ変態だったな。……ともかく、これで一件落着だ。帰るか」

「……ほーぅ？　……タダで帰れると思っとるんかい？」

まさに殺気と呼ぶに相応ふさわしいものが含ふくまれた声。モルトが振ふり返ってみれば、クラッツやリッツを始めとした少女達が浴場の片かた隅すみで身を寄せ合って必死に体を隠そうとしている姿……の、傍かたわらで、五〇を過ぎたたくましき女性陣じんに両手足をタオルで縛しばられて浴よく槽そうに沈しずめられつつあるサシャの姿があった。

そして、歴戦の猛も者さが如ごとく〝見たいなら見るがいい〟と言わんばかりに……いや、むしろ熟うれきったどころか乾かわき出している自らの体を見せつけるようにして、老婦人がモルトの前で仁に王おう立ちしていた。

「このあたいらの魅み惑わくのボディを見てタダで帰ろうなんて虫が良すぎるんじゃないかい？　え？　何でも屋さん」

ババアからおぞましき気配が漂ただよい出していた。その垂れきった乳が凶きよう悪あくな武器のように揺ゆれている。

「モ、モルト、た、助け……いやぁあぶばばうばぶあうばぶぶあ……!!」

甲かん高だかい女のような悲鳴を上げつつ、サシャが、沈んだ。というか、沈められた。

そして……浴場の外から無数の怒ど声せいが聞こえてくる。

—なに？　変態が現れただって？　それもとんでもない大変態だと？　—動ける自警団員を全員集めろ!!　—大浴場の周りに人員を配備し、包ほう囲い網もうを敷しけ!!　—えぇいリキュールの宝である女達を守るんだ!!　—念のためライを連れてこい！　奴やつの業わざが必要かもしれん！　—全自警団員、突とつ入にゅう準備完了!!　—行くぞ、リキュール自警団の力を見せてやれ!!　皆みな殺ごろしだ!!

前門の虎とら、後門の狼おおかみならぬ……目の前に全ぜん裸らのババア、外に屈くつ強きような自警団員という凄まじい有様だった。しかも最初から命令オーダーが〝殺せ〟である。

最強と謳うたわれた部隊の技わざと魂たましいを受け継ついだリキュール自警団の猛たけ々だけしさは並ではない。

—突入開始!!

その野太い声を聞いた時、モルトは膝ひざを突つき、神に祈いのった。

生きてまた、うまい酒が飲めますように……と。

なお、一ひと桁けた違ちがった報酬は、破は壊かいされた浴場の修理費と被ひ害がいを受けた女性陣への慰い謝しゃ料りようとして、安あん美び亭ていでの食事会費用、そして、モルトとサシャ二人の治ち療りよう費にその全すべてが使われることとなったのだった。

●第四話『お祭り前夜と占うらない師し』

　アルコ・ホール三番街にあるアパートの三階の角部屋、昼過ぎの日差しを取り込むそこの窓からは、明日あしたからの祭りに備える街の様子がよく見えた。

　街の大動脈たる大通りに面しているのもそうだが、それよりも周りに三階まである建物がほとんどないせいだ。おかげでかなり広々と見み渡わたせ、至る所に立ち並び始めた屋台や、街の飾かざり付けはもちろん、祭り目当てに遠方より訪おとずれた者達の姿まで見て取れる。

「祭りってのはいいもんだ。仕事がそこら中にいくらでも転がってる。家賃ぐらいちょろいちょろい」

　モルトは自室で腰に手を当て、ふんぞり返りながら言った。

　リッツは呆あきれ顔で、渡されたお金を計算していく。

「何を偉えらそうに。まだ先月分までの分際で。……今月分を請せい求きゅうしたいけど、まぁいいか。……ところで、モルト」

　リッツがお金から顔を上げる。ワンピースのフリルと左側にある三つ編みが揺れた。

「どうした、リッツ」

「今夜ってさ、空いてる？　ちょっと……その、手伝って欲しいことがあるんだけど。荷物運び的な……」

「あー、すまん。今夜はちょっと野や暮ぼ用があってさ。ダメだ」

「そっか。まぁ……それならそれで、別に……いいんだけど……問題なのはさ」

　リッツがため息を一つ。モルトは彼女の顔から視線を逸そらした。

「何で微び妙みように足りないわけ？　確か今朝、昼までの稼かせぎで丁度先月分までの家賃になるって言ってなかった？」

「……実は、いろいろあってな……」

　モルトは窓の外を見やる。そこからは少し離はなれた大通りが見え、そして……オリービーの花屋が見える。この時期は落ち着いた雰ふん囲い気きの彼女もゆったりと構えてはいられない。

　祭りの出し物への花飾りはもちろん、彼女から買ったブーケを店に飾ると商売が繁はん盛じようするというジンクスが、ここ数年まことしやかに囁ささやかれ始めたせいだ。

　今年は屋台からさえも注文が相次いでいるのだという。

　遠目に見ても、精力的に働く女性は魅み力りよく的である。それがオリービーほどの巨きよ乳にゆうともなれば尚なお更さらだ。動く度に彼女の豊満な胸が揺れ、行き交う男の視線もまた動く。

　……後でまた挨あい拶さつにでも行くか。モルトがそんなことを考えていると、不意にリッツの手が伸のびてきて、羽織っていたロングコートのポケットをまさぐられる。

「あっ、ちょっ……リッツ、よせ、エッチ！」

「何がエッチなんだか。……何だ、やっぱり丁度あるんじゃん」

　ポケットから抜ぬかれたリッツの手には、モルトの財さい布ふがあった。

「ダメだ、リッツそれはダメだ！　今夜の飲み代が！　折角まとまった収入もあって、お祭りで、祝いの一いつ杯ぱいを……!!　ってかそれがないと夕飯も喰くえないし……！」

「家賃滞たい納のうしている分際でどの口が言ってるわけ？　……そもそもこの微妙に足りない金額を渡わたしてどうにかなると思ってたの？」

「リッツ様の優やさしさによってお値引きされるのではないかと期待を込こめ……いや、ダメ、行かないで！　待って待って！」

　モルトが膝を突き、部屋を出て行こうとする華きや奢しやなリッ

ツの腰に腕うでを回し、追いすがる。

　えぇいもう！　と振り払はらわれそうになるものの……力を込めたら折れてしまいそうな腰、朝にひとっ風ぷ呂ろ浴びたのか、柔やわらかなソープの香かおり……何より白いワンピース越ごしに感じる彼女の体温を、モルトは意地でも放さなかった。

「……ったく。じゃ、まだ日暮れ前なんだから、今から働きに行ってきなよ。前夜祭みたいなものなんだから、どっかに働き口ぐらいあるでしょ？」

「……逆に前夜ぐらいまで来ちゃうとさ、肉体労働系のはあんまりなくって。専門的なのはいくらでもあるんだけど」

　祭り前でモルトが稼げるとなると、大たい抵ていは屋台などの大工に頼たのむ程ほどではない工作や荷物運びが主である。これはさすがに前夜までやっているところはそう多くはない。日中に片付けて、夜は明日からの祭りに備えて一杯飲み出す連中が大半なのだ。

　また、この期間は人が大量に流入してくるので、その関係で増えるトラブルへの対処という仕事もありそうなものだが……仕事を受けられるか否いなかは運の要素が大きい。

　そんなことを懇こん切せつ丁てい寧ねいに泣き言を混ぜ込みつつリッツに熱弁すると、ようやく部屋を出て行こうとするのを止めてくれる。

「まぁ、夜まで粘ねばってどうにもならなかったら……うち、来てもいいよ。パンぐらいならあげるから。……だから……この手ッ、放してよ！　もぅ、私もこの後用事あるんだから！　っていうか、なんで段々顔をお尻しりに近づけてくわけ!?」

　そりゃ……と、モルトは渋しぶ々しぶリッツの細ほそ腰ごしに巻き付けていた腕を解ほどくと……そのまま彼女の尻を撫なで上げる。

「そりゃ女性の尻は男のロマンの一つだからな。リッツ程度のでもそりゃ……んー、あと五年も待てばなかなかの――ふごぉ」

　リッツのサンダル履ばきの足が放った蹴けりは、見事にモルトの顎あごを捉とらえたのだった。

1

　夕暮れに差し掛かかった時刻。無ぶ精しよう髭ひげの生えた顎をさすりながら、モルトは人の多い大通りを歩いていた。

　東西南北に延びる大通りはまだ祭りが始まる前だというのにすでに混雑を始めている。というのも、通りの左右に屋台が立ち並び、すでに商売を始めているせいだ。しかも通りに軒のきを連ねる家や店に屋台を密着させるわけにはいかないので、行き来できるだけの道（隙間スペース）を用意する……つまり、通りは真ん中、左右にそれぞれと、三つの道に分かれているような状態なのだ。

　さすがにこうなるといくら大通りとはいえ、道は狭せまく、そこに他ほかからやって来た観光客が流れ込めばこうなるのは当然と言えた。

　辺りからイカや肉の焼ける音と匂におい、甘い菓か子し、酒、フルーツ……人々の食しよく欲よくを刺し激げきする香りが混じり合い、独特の匂いが生まれていた。

　遠方からやって来た屋台の売り子が声を張り上げ、クジ引きで良い物が当たった時だけ使われるベルがけたたましく鳴り、大道芸人が球体の上で笛を吹ふき、ドラが叩たたかれ、子供が歌声を上げ、人々の拍はく手しゆと歓かん声せいが上がり、老ろう若にやく男なん女によの笑い声と雑談が溢あふれ……様々な音が混じり合い、独特の音楽が作られている。

　それらに人々の活気と明日への期待と興奮が混ざり合い……前日だというのに、すでにリキュールの街では〝祭り〟の雰囲気が生まれつつあった。

　モルトは、こういう空気が何より好きだ。年に何回もない、盛せい大だいな大おお騒さわぎ……街が、生きているのを感じる。そして、その中を歩くだけで自分もまたその街、そしてその祭りのワンピースなのだと思えて、不思議な心地良さを感じるのだ。

　……たとえ、金がなかろうとも。

　これで夜ともなれば、行き来は難しくなるほどだ。とはいえ、それはこのリキュールの街の中央部、アルコ・ホールと呼ばれるエリアだけであり、それを除けば渋じゆう滞たいが起こるようなことはないので、街の人間ほど裏道を使う。

　夜に比べればまだマシとはいえ、今でも十分な混雑具合。それなのにモルトがあえて人混みの中を長なが柄え刀とうを担かついで歩いているのは、何も祭りが好きだからというだけではない。トラブルを求めているのだ。

「しっかし、こうなると仕事を探すどころじゃねぇなぁ。自警団め、マメに仕事しやがってからに」

　人が増えれば比例して数を増すのがトラブルだ。

　だが、そんなことは何でも屋であるモルト以外も当然承知であり、見知った同業者が徘はい徊かいしているのはもちろん、それ以上の数で、街の治安を預かる自警団の連中が目に付く。

　この街の伝統的な武器であり、モルトもまた現在肩かたに担いでいる一八〇センチにもなる長柄刀は人混みの中では異様に目立つ。

　そしてそれを持つ連中はどこかで罵ば声せいが上がろうものなら、何でも屋よりも早くに現場へ駆かけつける。彼らの勤勉さこそ、何でも屋にとって最大の敵と言えた。

　──なんだコノヤロウ⁉　──おぉうおおぉう、威い勢せいがいいじゃねぇか！　一発やるかこのぉ⁉

　人混みの向こうから怒ど声せい。身長がやや高いモルトには、かろうじて二人の男が胸むなぐらをつかみ合っているのが見えた。

　罵声を聞く限りだと、道ですれ違ちがう際にぶつかり、それで……ということらしい。

　この街の大通りでよくもまぁ大声を出せるものだと、モルトだけならず、罵声を聞いていた街の住人は誰だれもが思う。

　十中八九彼らは街の外の人間だろう。酒が入っているのかもしれない。

　そこに「どうした⁉」という、自警団の声が上がるわけなのだ

が……それは、若き自警団団長ライのものだ。

　その小こ柄がらな風ふう貌ぼうが人混みをかき分けていくのを見た街の住人達は、さらに苦く笑しようした。

　よりにもよって、運のない……と。住民達はこの後の展開を想像して、男達に同情した。

「よせよ、折角の祭り前なんだ。……で、どうしたんだ？」

　─なんだぁ、このちっせぇガキはよぉ。─邪じや魔ますんじゃねぇよ!!　ぶっ殺すぞ!!

　ライの外見は無む駄だなど欠片かけらもない鍛きたえ上げられた体をしているものの……服の上からはわかりづらく、また姉のオリービーと同じ温かみのある亜あ麻ま色いろの髪かみに童顔とあって……というか実じつ年ねん齢れいからして一八歳なので、もはや長柄刀を担いでいるだけの少年にしか見えないのは致いたし方なかった。

　ライは自分がこの街の自警団団長であり、大通りでもめ事を起こすのは見過ごせないと真しん摯しな対応をするのだが……当然、彼に対して余所よそ者ものが「はい、わかりました」と応じるわけもない。

　─ぷっはー！　笑えるぜ、この街の自警団ってのはガキを担いでるのかよ!?　─あれか、そんだけ平和な街だってアピールしたいのか!?　─ガキは家でママのおっぱいでも飲んでろや！　─お酒の味がわかるようになったらまたおいで！　ぷははははは!!

　先程までいがみ合っていた男達は途と端たんに息の合った暴言を吐はくのだが、その間に、近くにいた住人が事の次し第だいをライに伝えた。

「……ふーん。状じよう況きようはわかった。そんじゃこの問題を解決するのは簡単だ。互たがいに目め障ざわりだというのなら、見えないところに行けばいい。ということで……軽く、ぶっ飛べ」

　ライの担いでいた長柄刀が動く。人混みの中で、一八〇センチもの鋼鉄の固まりが重さを感じさせることなく凄すさまじい速度で振ふられた。

祭りの雑ざつ踏とうを斬きり裂さく、風の音。そして二つの鈍にぶい音。

男二人が物の見事に長柄刀の石いし突づきで突き上げられた。

小柄なライの放ったそれらによって、男二人が声を上げることもなく屋台はもちろん、大通りに並ぶ家々を飛び越こす高さにまでぶっ飛び、道の左右、それぞれの裏道へと姿を消していったのだった。

死んではいないだろうが、少なくとも祭りの間、彼らを街中で見ることはないだろう。

「……平和な街だよ、まったく」

歓声を上げる住人と、唖あ然ぜんとする旅行者の間でモルトがぼやいていると、ライが「あっ！」という顔でやって来る。

彼は周りの反応に少し照れたのか、それとも自警団団長でありながら大人げない対応をしてしまったことを恥はじているのか、少し頬ほおを赤らめながらモルトに声を掛けてきた。

そんな顔をするライは、どう見ても普ふ通つうの少年だ。

「よ、よぉ、モルト。どうした、不景気そうな顔をして」

「俺に景気のいい時があったのなら教えてくれ。……相変わらずやり過ぎじゃないか？」

「見せしめってわけじゃないけど、祭り前に一発やっておくのはいいことだと思うんだけどなぁ。これで問題を起こそうという奴やつが少なくなるって」

「お前さ、去年も同じようなこと言って、オリービーさんに手を出そうとした奴を失神させて、男好きな男達に引き渡していたよな」

「リキュールの祭りは『漢おとこ祭まつり』だからな。そういうのが好きな旅行者も多い。折角来た彼らに楽しんでもらいたくて……仕事とサービス精神の両立だよ」

てへっと、ライはかわいらしく舌を出すが、やったことはおぞましいものがある。

モルトはあの時ほどこの男を怖こわいと思ったことはなかった。

「まぁ変なのが来るのも祭りってもんだろ。モルト、どうだ、今自警団は臨時で人手を募ぼ集しゆうしているんだけど」

オリービーの花屋の前で一日中彼女を警備するというのなら別にいいが、必ずしもそんなおいしい仕事が回ってくるわけがない。

また、漢祭り最大の出し物である〝命を懸かけた度ど胸きよう試だめし〟に挑ちよう戦せんするには、自警団員であってはいけないとする決まりがあるし、祭りの間に酒が飲めないのは地じ獄ごくだとして、モルトは断った。

「まぁ漢祭りの参加者がこれ以上減るのも問題かぁ。けど、どうせまた家賃が払はらえなくて……とかで悩なやんでいるんだろ？　あのアパート、アルコ・ホールにあるせいでそれなりに高いよな。自警団員になって寮りように来いとは言わないけど、もう少し街外れに引ひっ越した方がいいんじゃないのか」

ライの言葉に、モルトは苦笑して、返答を濁にごした。

数年前にも、ライには同じことを言われた。その時は……断っている。

それは、モルトはもちろんだが、ライも覚えているのだ。

だからこそ……彼は、笑え顔がおだった。どうせ断る、そう、わかっていて言っているのだ。

あのアパートは出ない。過去にモルトは、そう、決めた。そう、約束したのだ。

「喰くえなくなったらいつでも来い。お前が最後に来るのは自警団だと信じている」

ライは年上の弟弟子モルトの肩を叩き、人混みの中へと消えて行く。

彼の長柄刀が見えなくなるまで、モルトは人混みの中で見送っていた。

数年前の決心と約束……最近は思い浮うかぶことが少なくなっ

た。

　それもいい。忘れてしまえるぐらいになったら、出て行ってもいいはずだ。

　だが、それまでは……。

「……働かないとなぁ」

　モルトは一人苦笑してぼやき、頭を掻かいた。

「やぁ、モルト。その様子じゃ〝壁かべの花〟といったところか」

　背後から声を掛けられ、振り返ってみれば……相変わらず異国感のあるカラフルなマフラーをまとい、白に近い金きん髪ぱつを簪かんざしでまとめた小柄で細身の男、サシャだ。

　腰こしにはいつもの刀を差しているが、今日はもう一つ差しているものがあった。

　耳元に、一輪の花である。シックな紅べに色の薔ば薇らだ。

　元々中性的を通り越して、女性的でさえある美男子であるため、華はなやかな薔薇を飾かざり付けていても、違い和わ感かんはほとんどない。

「ここは別にダンス・ホールじゃない。仕事がない奴を壁の花とは言わねぇだろ」

「アルコ・ホールで仕事がない奴をそう呼ぶのさ。知らなかったのか？」

　そんな話は聞いたことがないので、サシャの冗じよう談だんなのだろうが、言い得て妙みようだ。

「で？　どうしたんだサシャ、頭に花なんか付けて。女と勘かん違ちがいした男が寄ってくるぞ」

「オリービーさんに貰もらったんだ。今年から売り出す、壁の花にならないためのおまじないだそうだぞ」

　それは帯たい紅こう色しよくという、紅色とは、実はちょっとば

かり違う色合いの薔薇なのだそうだ。その花言葉が『私を射止めて』だから、ということらしい。

　トゲを取り除き、茎くきに覆おおいを付けて髪や服に飾れるようにして販はん売ばいするのだそうだ。

「何気に商売熱心だなぁ。……しかし壁の花にならぬための花、か。面おも白しろいじゃないか」

　と言いつつも、モルトはふと考える。今日、二度もオリービーに挨あい拶さつに行ったのに、彼女からそんな花を貰ってもいないし、話されもしなかった。

　サシャにだけ話して贈おくった理由は何だろう？

　あぁ……外見の差か。と、モルトはサシャの顔を見つめて結論付ける。

　さすがにモルトのうらぶれた顔に、花は似合わない。

「おやぁ？　アンタの髪かみ飾かざり、オリービーさんのトコのかい？　じゃ、暇ひまなのかな？」

　モルト達が歩いていると、屋台のオッサンから声を掛かけられた。客引きかと思ったが、屋台はまだ出店準備中なので、違うようだ。

「どうだい、お嬢じようさ……あ、男かい？　どちらでもいいや。暇してんなら、うちで一仕事していかないかい。売り子が足りないんだ」

「構いませんよ。俸ほう給きゆうははずんでくれるんでしょう？」

「ははは、うまく稼かせいでくれたらな」

　サシャはニッコリと笑ってモルトの肩を叩くと、屋台の裏へと回っていく。

　看板を見れば、髪飾りの店らしい。

　サシャの中性的で端たん正せいな顔に加え、彼の長い金髪との相あい性しようはいいだろう。

　サシャはこれで祭り期間の仕事を手にしたも同然だ。

　チッ、と舌打ちだけを場に残し、モルトは腹はら立だち紛まぎれに酒を求めて歩き出した。

　金も仕事もないが、安あん美び亭ていでクラッツをうまいこと言いくるめて一いつ杯ぱい出させるか、はたまた、飲んだくれに「祭りだ」「めでたい」と浮かれてご相しよう伴ばんに預かるかしよう、そう思ったわけなのだが……。

　人混みをかき分け、モルトは笑顔で安美亭の扉とびらを潜くぐった……と、それは同時だった。

「はい、ダ～メ～♡」

　いきなり舌を出したクラッツに迎むかえられた。

「……何だよ、クラッツ。何がそんなにダメなんだ？」

　酒場が本領を発揮するには早い時間といえども、時期が時期だけに安美亭はいつも以上に賑にぎわっていた。

　モルトは視線を彷徨さまよわせ、カウンターの隅すみの隙すき間まをめざとく見つけると、まだ日暮れ前だというのに飲んだくれて潰つぶれかかっている爺じいさんを押しのけ、席を確保する。

「どうせ一杯たかりに来たんでしょ？　無一文で」

「……何でそう思うんだよ」

「さっきリッツちゃん来てたの。モルトが来たら確実に無一文だからさっさと追い返してって言われてるからね」

「おいおいクラッツ、たかだか一二歳の小こ娘むすめと目の前にいる二十代のイケメンと、どちらの言葉を信用するというんだ？」

「じゃお金持ってる？」

「……今日のクラッツ、一段と綺き麗れいだよ。眩まぶしい程ほどだ」

「うん、素す直なおでよろしい。はい、お水」

　そう言ってクラッツはグラスを乱暴に置いて、さっさと他ほかの客のためにシェイカーを振り始めてしまうのだった。

「……別に媚こびを売ったわけでもないんだけどな」

　苦笑しつつグラスを傾かたむけ、水で唇くちびるを湿しめらせると、モルトはカウンターの向こうで働くクラッツを見る。

　右目を隠かくすように前まえ髪がみを垂らし、いつもならばバレッタでまとめてアップにしている彼女の金髪は、今日は祭りに合わせてか、造花の花飾りで纏まとめられ、服もまたコルセット・ベストではなく……浴衣ゆかただった。

　いつの頃ころからか、祭り期間に着るものとして、若い女性の間で流行はやっている服装である。

　暖かい地域ではないリキュールとはいえ、この時期はさすがに夜でも暑く、その間を快適に過ごすために浴衣は肌はだ触ざわりの良い生き地じで作られているわけだが……これがいい。実にいい。しかも働く女性となれば尚なお更さらだ。

　浴衣の醍だい醐ご味みはうなじだと人は熱弁するが、モルトは断然腰こし回まわりだった。より具体的に言うのなら、かがんだ時の尻しりである。

　モルトの視界の中で、クラッツがカウンターの下にある棚たなから乾かわき物のつまみを出そうとしているわけだが……それには涎よだれが出そうだった。

　かがんだ際に浴衣の生地がピッチリと張られ、現れるヒップライン。そこに浮き出る下着のライン。それは細身でありながら出るところは順当に張り出している健康的に育った一七歳の少女、クラッツの魅み力りよくの表れでもある。

　それは、何とも言えないほどに扇せん情じよう的で、裸はだかのクラッツを見る者に容易に想像させる。本人がそれらの視線を理解せずに受け止めているのもまた、そそるものがある。

「えぇのぅ、えぇのぅ……若いおなごは実にえぇのぅ……グェフッ」

　大きなゲップをかます隣となりの老人の言葉に、モルトは頷うな

ずいた。

　店内の雑音を聞きながら、クラッツの姿を肴さかなに一杯やる。

　……これでグラスの中が酒ならば完かん璧ぺきだったのだが……。

「腹も減ったしなぁ。ひもじい。……今日は一段と良い匂においさせやがって」

「叔父おじさん、明日あしたの漢祭りのために最後の調整に入っているからね。だから今日は炒いため物しか料理出してないの」

　浴衣姿でシェイカーを振ふりつつ、クラッツはモルトのぼやきに応こたえてくれる。

　耳を澄すませてみれば、なるほど、確かに巨きょ大だいな金属の塊かたまりを振り回すようなガッチャンガッチャンという音が響ひびいていた。

「おぉう、炒めものかぁ。そうじゃな、飲んでばかりじゃいかんなぁ。どれ、アスパラとベーコンのバター炒めをおくれ」

「はぁ～い……って、アレ？　そういえばお爺さん、一杯やったら配達に行くって言ってなかったっけ？」

「もうえぇ、もうえぇ、今日はもう店じまいじゃ」

「いいわけないでしょ？　今が一番忙いそがしい時じゃないの、魔ま導どう士しギルドなんて」

　モルトはギョッとした。隣で飲んだくれている爺さんは、確かに良く見ると黒系のローブを纏っていて……魔導士ギルドの者だとわかる。

　この街の魔導士ギルドは、室内で明かりとして使う魔光球の充じゅう塡てんなどで年がら年中忙しい……というか、爺さん三人が毎日せっせと働いているものの、供給が追いつかない状態なのだ。それが祭りともなれば忙しさに拍はく車しゃもかかるものだというのはモルトにだってわかる。明かりがなくては、祭りの夜は始まらないのだ。

「この人混みの中を配達なんざ、年寄りにはキツ過ぎるんじゃよ。それより飲んでた方がいいんじゃ」

「いいわけないでしょ！　働きなさいよ、まったく。それ、どこの？」

　爺さんは足あし下もとにあったカバンを持ち上げた。

「おぅ、町外れの、占うらないの館やかたじゃな」

「……あぁ、あの当たらないことで有名な占いの……」

　クラッツがうんざりした顔で言った。その様子を見るに、彼女も女の子らしく、何かを占ってもらったことがあるのかもしれない。……そして、外れたのだろう。

「そうじゃそうじゃ、当たらないのに何故なぜかやっていけとる。長くやっとるのにいつ行っても若い占い師しかおらん、あそこじゃ。……お、そうじゃ。隣のお主、確か何でも屋じゃなかったか？」

「俺か？　あぁ、仕事なし金なしの何でも屋だ」

「後で一いつ杯ぱい奢おごってやるから、これ、届けといてくれんかのぅ」

「マジで!?　やった、いいの!?」

「おう、ワシがまだ潰れとらんかったらのぅ」

　思いがけない仕事にモルトはグラスの中の水を一息に飲み干すと、鞄かばんを持ち上げる。子供の頭程の魔光球が三つほどもあるので、なかなかの重量があり、爺さんが諦あきらめるのも何となくわかるものだった。

「モルト、別に止めないけど、アンタも明日出るんでしょ？　遅おそくならない内に帰りなさいよ」

　クラッツの忠告にモルトは頷くと、占いの館の場所を訊きき、安美亭を出……ようとした時、アスパラとベーコンのバター炒めを持って来たクラッツの叔父にして、店主のグレーンに声を掛けられた。

「……行くなら、これも、届けて来い」

　グレーンは相変わらず、慣れない者からするとオーガのような図ずう体たいといかつい顔で調理場からボトルを持ってくる。黒い瓶びんのそれは見るからに古く、異国の言葉で書かれたボロボロのラベルが張られていた。

「おやっさん、これ、何だ？　恐おそろしく古い……ビンテージ・ワインっぽいけど」

「その、占い師の、注文だ。……たまに手に入る。入荷次し第だい届けることに、なってる。金は後で、支し払はらいに、来る。……だから、届けるだけで、いい」

　これだけ寝ねかせたということは、相当に良い物なのではないか？

　モルトは受け取るなり、そんな感想と共に、いっそ途と中ちゅうで……と誘ゆう惑わくが湧わく。が、グレーンの切れ長の目はモルトの心を見み透すかしていたように「未み開かい封ふうで、届けろ。そうしたら、夕飯ぐらい、喰くわせてやる」と言い残して厨ちゅう房ぼうへと戻もどって行ったのだった。

2

　アルコ・ホールからかなり離はなれた場所、それこそリキュールの片かた隅すみにある森の中に、その小さな占いの館はあった。

　中に入ってみてモルトは驚おどろいた。占いの館ではあるのだが……想像していたのとはかなり趣おもむきが違ちがうのだ。

　日の光を拒こばむかのように窓が一枚もなく、床ゆかを転がっている黄色い魔光球だけを光源としている。それはきっと占いの持つ神秘的な雰ふん囲い気きを演出しようとした結果なのだろうが……どの魔光球もグリコゥ国産のかなり質の良いものらしく、如何いかんせん光が強く、また滲にじむこともなく鮮あざやかで、見事にオカルト感を拭ぬぐい去っているのだ。

　また足下に敷しかれた絨じゆう毯たんの魔ま方ほう陣じんや、壁かべや棚に飾かざられた怪あやしげなグッズもどこか安っぽく、どこをどう見ても胡う散さん臭くささが漂ただよっている。掃そう除じせずに埃ほこりを被かぶっている魔導士ギルドの詰つめ所の方が、意図せずしてここよりはるかにそれらしき雰囲気を持っていた。

　これでメインの占いすら当たらないというのだから、どんな客が来るのか……モルトにはわからなかった。

「これは特別なお酒でなかなか手に入らないのよねェ。いろんな土地から人や物が来るから、お祭りの期間はチャンスなのよぉン」

　占い師の女はボトルに頰ほおずりしつつ、鮮せん血けつのように真っ赤で厚みのある唇を艶なまめかしく動かした。

　深しん紅くのローブを羽織ってフードもしっかり被った彼女の顔は青白く化け粧しようしているせいで、その赤い唇がやけに目立つ。

　年の頃はモルトと同じく二十代前半のようだが、はっきりとはしない。

　低血圧なのか、どこか憂ゆう鬱うつそうな顔をし、覇は気きのない声で喋しやべるのだが、そこに妙みような色いろ香かが漂っていて、モルトは嫌きらいではなかった。

「いろんなトコに頼たのんでるんだけれど、安美亭が一番優ゆう秀しゆうなのよねぇン。どういうルート使ってるのかしらぁン」

　酒場にはいろいろな客が訪おとずれるせいだとも思うが、グレーンは相当遠くの国で生まれ育ったらしく、その関係があるのかもしれない。極ごく希まれに遠方から来た客と、モルトでさえ知らぬ言葉で会話しているのを幾いく度どか見たことがあった。

　占い師はボトルを大事そうに布のかけられたテーブルの裏にしまうと、これ見よがしに置かれている水すい晶しよう玉だまをテーブルの上で転がし、弄もてあそんだ。

「それでぇ、モルト君はこのお酒のご相しよう伴ばんに与あずかりたくてお尻を上げないでいるのぉン？」

「……バレたか。珍めずらしいお酒と見たもんで、軽く味見程度に……」

「ダメよぉン♪　あれはとても貴重なものだし、何よりモルト君のお口には合わないものよぉン」

「酒は何でもいけるクチでね。……どうか、お願い！　舐なめる程度でいいから！」

「残念。そもそも私もアレを飲むのは満月の夜だけって決めてるのよぉン。……ンー、でも折角持って来てくれたのに、何もお礼せずに返すのはかわいそうだし……あ、そうだ。館の裏に七輪があるんだけど、それでお肉でも焼いてくれないかしらぁン。そしたらそのお肉と一いつ緒しよに赤ワインの一いつ杯ぱいぐらい一緒に……どぉう？」

　パチンっと占い師が指を鳴らすと、水晶玉の載のるテーブルの下からワインのボトルとグラスが二つ……さらには、銀の皿に載った骨付き肉を取り出してみせるのだった。

「え？　そこにずっとあったのかよ⁉」

　占い師は続けてテーブルの下から塩と胡こ椒しようのミル、そして粉の入った小瓶を取り出した。

「だぁいじょぉうぶぅ～。血も滴したたるような、新しん鮮せんなお肉よぉン。ミディアム・レアで、味付けは塩しお胡こ椒しようと、あ、焼く前にこの特製ハーブを振りかけてねぇン」

　わけもわからずそれらを受け取り、モルトは館を出る。

　確かに肉は良さそうだ。見た目からするに羊の肋肉リブ・チヨツプだろうか。山羊やぎかもしれない。

「ま、まぁ肉が食えるんならいいんだけどさ……」

　何だか手品か、とんでもない魔法を見せられた気分で、釈しやく然ぜんとしないモルトではあったが……それより何よりぶったまげたのは、この後だった。

　肉を手に館の裏へ回ってみると、本当に網あみとうちわ、そして七輪があった。

炭に火が付いた状態で、だ。

まるで今まで誰だれかがここにいて、火を熾おこしていたかのようである。

モルトは辺りを見回しつつ神経を尖とがらせてみるが……人ひと影かげは見えず、野生の小動物以外の気配もない。

「……ここ、本当に何なんだよ……」

不気味さを感じるものの、まだ明るい時間である。

オカルトに鳥とり肌はだ立だたせるにはいささか早い。

モルトは腹を決めると、調理に入った。普ふ段だんは料理などしないが、苦手ということはない。一〇年も昔は世界を旅して回っていた身なのだ。道中、捕つかまえた小動物を捌さばいて焼き上げるのは日常と言っても良かった。

モルトは近くの井い戸どで手を洗うと、まず肉の塊に小瓶のハーブを振りかける。香かおりからするにローズマリーとセージを粗あらく砕くだいたものだろうか。もう少し何か入っているような気もするが、モルトの鼻ではわからなかった。

それを万まん遍べんなく振りかけ、肉を揉もんで馴な染じませると、網を洗って、七輪に置く。

それが熱せられるまでに肉の上で塩と胡椒のミルを躍おどらせ、下した拵ごしらえを済ませる。酒の肴さかなにする関係もあって、少しパンチを効かせるために、下味はやや強めに付けてみた。

そしてうちわで七輪の下方に付いている通風口に風を送り込み、炭火を強められるだけ強めると、モルトは肉から行ぎよう儀ぎ良く並んで伸のびている四本の骨を摘つまみ、網の上へ。

ジュジュッ、といい音がする。

焼き方はいろいろあるが、今日はまずリブ・チョップの表面を強火で焼くことにした。そうすることで肉の旨うま味みを漏もらさないようにするのだ。

肉が焼けていく。うまそうだ。立ち上る煙けむりすらモルトの腹

を擽くすぐる。

　表面全体に焼き色が付いたところで、一度七輪の通風口を閉じ、火力を弱める。そして今度はややしっかりと肉の内部に火を通していくのだ。

　豚ぶたなどに比べればその脂あぶらの量が少ない肉……しかも最初に表面を焼いて封ふうじた……だというのに、それでもなお肉の表面を肉にく汁じゆうが滴る。

　それが炭火に落ちる様は見る者を空腹にさせ、齧かじり付く未来への期待を高めていく。

「もうすぐできるぞ～」

　モルトが館の中に声を掛かけると、「ん～ッ、中でェ～」と妙に艶つやっぽい声で応じられ……要は持ってこいと言われた。

　折角炭火で焼いたのだから、網から取って文字通りに焼き立てを喰らえばいいものを、とモルトは少し思う。

　東の空が夕暮れに染まりゆく中、肉は実にイイ具合に焼き上がりつつあった。

　モルトは一度それを洗った銀の皿に取り上げると、再び七輪の通風口を開き、うちわを全力で使い、火力を再び強める。

　網を通り越こし、炎ほのおが高々と躍る。そこにとどめと肉をくぐらせ、表面全体をカリッと仕上げて完成としたのだった。

「あいよぉ～、いっちょ上がり～」

　店の中に入っていくと、商売道具……というより、この占うらないの館やかたで一番大事であろう水晶玉が床に転がされ、テーブルの上には取り皿とワインの注がれたグラスが二つ用意されていた。

　モルトがテーブルの上に銀の皿を置くと、すぐさま占い師からナイフを渡わたされる。それで、骨を持ち手として食べやすいように、骨に沿って肉の塊かたまりを四つに切り分けた。

　それは９の字のようになった肉。その中心部は未いまだほんのりと赤みを残しており、実に程ほど良く焼き上がっているとモルトは

内心自画自賛する。

　二切れずつに分けると、二人はグラスを掲かかげ、唇くちびるを湿しめらせた。

　ワインはそれほど詳くわしくはないモルトであったが、それが結構良い物なのだろうというのはすぐに理解できた。

　若くない。しっかり寝かせたものでありながら、嫌いやな風味もない。落ち着いて、深い味わいだけがある。ガブ飲みしたい欲よっ求きゅうもあるが、大事に飲んだ方が良さそうだ。

　モルトは早さっ速そく肉へと手を伸ばす。骨を摘まみ、大だい胆たんに喰らい付いた。

　多めに塩胡椒したことに加え、最後の仕上げをしたことで表面がパリッと香こうばしい。そのくせしてレアな内部は淑しとやかに、柔やわらかだ。もちろん、間ま違ちがっても強火でやらかした時のように、生ぬるくなく、しっかりと熱を持った状態である。

　骨から肉を引き千切り、万感を抱いだいて頬ほお張ばれば、まずは爽さわやかで上品なハーブの香かおりが鼻に抜ぬける。ローズマリーとセージ……あとは何だろう？

　やはり何か入っている。わからない。だが、肉の臭くさみを消す効能があるものなのだろう。

　新鮮さもあってか、羊や山羊が持つ臭みは皆かい無むだ。またハーブも変に主張し過ぎることもなく、香るだけで肉が持つ旨味を邪じゃ魔ましていない。

　味の濃こいパリパリの表面、しっかりと火が通った表面近くの部分、そして中心部の柔らかなレア部分の三重奏。口で咀そ嚼しゃくするに混ざり合い、溶とけ合い、肉汁が迸ほとばしる。

豚や猪いのししの肉を使うともっとワイルドかつ、アナーキーな程パワフルになるが、この羊か山羊の肉は繊せん細さいだ。しかし物足りなさもない。絶ぜつ妙みようである。

焼き方、味付け、そして肉そのものも申し分ない。

一口で大きくいってしまったのをモルトは少し後こう悔かいした。ゆっくり味わえば良かった。

惜おしみながら肉を喉のどに通し、ワインのグラスに口を付ける。

しっかりとした味のそれは、肉の名残なごりに負けずに風味を主張してくれた。

うまい。落ち着いた、大人の味がした。

「うめぇ~。いいなぁ、コレ。……おっと」

モルトは一息吐つくと、ようやく余よ裕ゆうが出てきたこともあり、対面に座る占い師を見る。

それは、実に、そそった。

占い師は肉をそのダークな色合いのマニキュアで飾かざった指先で摘まみ、ぷっくりとした深紅の唇を這はわせていた。モルトのように摘まんでガブリとはいかず、その尖った八重歯で肉を引き裂くようにして、喰くい千切る。

唇が、脂でてかっていた。同様の指先がその唇の間に吸い込まれ、ちゅぱっと、誘さそうように音を立てる。その全すべての動作がやけに婀あ娜だっぽく、モルトの視線を釘くぎ付づけにした。

「あらぁン、おいしいじゃない。上手ねぇ、モルト」

左手に骨を摘まんだまま、彼女もまた横を向くようにしてグラスを呷あおる。隠かくれていた白く細い喉やうなじがモルトに見せつけるように現れた。

──うなじも、悪くない。モルトは一人胸の内で呟つぶやき、確信するように頷うなずいた。

　占い師はワインを半分ほど飲み干すとグラスを置いた。唇の端はしからワインの雫しずくが零こぼれそうになるも、思いの外長い舌先でペロリと拭ぬぐう。そして彼女はモルトに向かって微笑ほほえんだ。

　その顔が、指先が、唇が……所作の全てがやけに妖よう艶えんで、モルトはたじろぎそうになり、慌あわてて残っていたもう一つのリブ・チョップに喰らい付き、酒を呷る。

　まだ明るい時間。しかし、街外れに男女二人だけ。酒も入った。明日あしたは祭りという浮うかれたこの状態……そこに占い師の今の姿を見せられては、いろいろと考えてしまうのは仕方のないことだろう。

　予想外の展開だが、スマートにいこう。モルトはそう心に決めた。

「ンー、汁しるまで、おいしぃ。……あらン？　どうしたの、モルト、急に顔作っちゃって」

「……いや、喜んで頂けて何よりだな、と」

　仕事は大事だし、金と酒も好きだが……女はさらに大事で大好きなのがモルトだった。

　というか、男は基本、そういう生き物だった。

「こんなに上手なら、これからもちょくちょくいろいろお願いしちゃうかもン」

「それはこちらからもお願いしたい。……それこそ、仕事以外でもお近づきに……」

「ンー、そうねェ。あ、それじゃ……特別サービスしちゃおうかなン。みんなには内ない緒しよよぉン」

　──特別サービス。これほどまでに夢のある言葉があるだろうか。

　この言葉を女性の口から出された時、男は様々な期待を抱いだかずにはいられない。

　どんな……いったい、どんな素す敵てきなサービスをしてくれる

というのか。

　酒と肉を納めたモルトの腹の底……というかもう少し下の辺りが熱くなる。

　みんなには内緒だというのも、全てに拍はく車しやをかけるというものだ。

　この女、男心を操る言葉を知り尽つくしている。

　占い師が立ち上がると、座っているモルトの前にやって来る。

　膝ひざを突つき、そっとその頭を下げ、モルトの股ももの間に顔を埋うめるようにし……そして、水晶玉を手に立ち上がった。

「……あらン、どうしたの？　何がっかりそうな顔をしてェ。タダで占ってあげるわよォ」

「いや、その……いろいろと膨ふくらませたものが……あぁいや、期待に胸をっていう意味ですけどもね？　えぇ、もちろん、えぇ」

　モルトはクールを装よそおいつつ、内心地じ団だん駄だを踏ふんだ。しかし、ここで諦あきらめるようなことはない。女め々めしく、そして執しつ拗ようなのがモルトでもある。……チャンスを待つことにした。

「何を占って欲ほしぃン？」

　占い……あぁ、当たらないと有名な……。モルトが胸の内でため息を吐ついた。

「あらぁン？　失礼ね、当たらないわけじゃないのよぉ～」

「……へっ？」

「ちゃんと本気で占えば当たるのよぉン？　安あん美び亭ていの娘むすめの話なんて忘れちゃいなよぉン」

「……あの、俺の心読むの、止やめてくれる？」

「今のもサービスしとくわぁ～ン。で、どんなのがお好みィ？」

　虚きよを突かれたものの、チャンスはやって来たようだ。モルト

は仕し掛かけることにした。

「そうですね、それじゃ……魅み力りよく的な女性をお持ち帰りできてしまうにはどうしたらいいか、とかかな。それも今、手を伸ばせば届きそうな、そんな身近な人がいいな」

　回りくどくもストレート……そんな言葉をモルトはキリッとした顔で言ってみるが、対面に座り直した占い師はどこ吹ふく風で、水すい晶しよう玉だまに両手を翳かざすばかりだ。

「しょうのない子ねェ。……じゃ、たまには本気で占っちゃおうかなン」

　占い師は水晶球を独楽こまのように回すと、如何いかにもそれらしく手を掲げて、そのぷっくりとした赤い唇を震ふるわせるようにして小さく呪じゆ文もんを唱えていく。

「ンッ！　……いっぱい、出たぁン♪」

　占いにいっぱい出るもクソもないだろう。

　モルトはそんなことを思いつつも胡う散さん臭くさい占いの結果を黙だまって待った。

　すると彼女はまたテーブルの下をガサゴソとやり始め、そこから火の付いた一本の線せん香こうを取り出すのだった。

「……ここ手品の館じゃないよな……」

　マッチを擦する音もなく、火の付いた線香を魔ま法ほうのように取り出す様を見ていると、そう思わずにはいられなかった。

　実際、目前にその細い一筋の煙を上げる線香が現れるまで、何の匂においもしなかったのだ。

「これを持って、外に出たら左手に体を向けて、ずぅ～っと……そのまま歩いて行くのよォ。火が消えるまでは絶対に一言も喋しゃべっちゃダメよォン。喋ったらおしまい。途と中ちゆうで折れてもおしまい。黙って行って、火が消えた瞬しゆん間かんに『綺き麗れいだよ』って言うのン」

「……それって、要はこの店から出るってこと？」

「そうよォン。……いい？　途中でモルトがどうしても喋りたくなる瞬間が一度だけあるけれどォン、その試練を無事に乗り越えられたらあなたの願いが叶かなうわぁン」

　はい、と線香を渡されるのだが、受け取る際にわずかに触ふれた占い師の指先は驚おどろく程冷たかった。

　恐おそらく、冷え性しようの類たぐいなのだろう。俺が温めてあげますよ的な台詞せりふが思い浮かぶも、もう使う場面はなさそうだった。

　名残惜しくもモルトは線香を手に立ち上がり、店を出ようと出入り口の扉とびらを開く。

　赤い夕日の空が見えるも、店内の方が魔光球の明るさが強いために、モルトの影かげは外に向かって伸のびていた。

「ところで占い師の……えっと、悪い、そういえば名前、何だっけ？」

　振ふり返ってみると、目ま深ぶかにフードを被かぶり直した彼女が、猫ねこが顔を洗うように、その青白い顔をダラリとしたローブの袖そでで隠していた。

「チョココよぉン♪」

「そうか。チョココ、また来るよ」

「うん、そうしてェ。あなたとはいろいろ楽しい関係になるような気がするものォ」

　俺もさ、と、モルトは言い残して店を出た。そして言われるがままに左手──街へと向かう道を進んでいく。

　しばらく歩みを進めてから、モルトはふと気が付いた。そういえば自分の名をチョココに名乗ったことがあっただろうか？　以前どこかで顔を合わせている気もするが、名乗った記き憶おくは皆無だった。美人相手に忘れはしないだろう。

　もしかしたら、占いとは違ちがうにせよ、本当に何かしらの力を彼女は持っていて……。

「仮にそうだとしたら……本気出すとこ、絶対間違ってるだろ、あの占い師……」

　今度金に余裕がある時に本気で占ってもらうのもいいかもしれない。

　そんなことを考えながら夕暮れの中、線香の煙けむりを漂ただよわせつつ木々が立ち並ぶ道を歩いて行けば、川が見えてきた。

　リキュールには二つの水脈が存在しており、一つはこの川と水源を同じくする山の湧わき水で、街の上水に利用されている。もう一つは街の直下から湧き出ている温泉だ。これは大浴場に利用されており、リキュールにおいても一ひと際きわの歴史を持っていた。

　大浴場の建物自体は定期的に修復や改築が行われているが、その湧き上がる温泉を利用した浴場の基き礎そ構造自体は例の大戦よりもはるか以前、山を崇あがめる少数民族の集落があった頃ころからのものをそのまま利用しているらしい。

　そんな豊かなリキュールの水源の一つであるその川は、信じられないほどに高い透とう明めい度を誇ほこっており、これを頼たよりに生きる動植物も数多い。

　川沿いを歩いていれば様々な動物を見つけることもできるし、川の水を吸っている植物は他ほかでは見ない程ほどに生命力に溢あふれていた。

　リキュールの山で採れる薬草類は一際効果が高いというのも、いい水を吸っているからだとしたり顔で言う学者もいるぐらいだ。

　また、川、それ自体にも小ぶりな魚がいくらでも泳いでいて、子供の遊び場としてはもちろん、お金のないモルトのような輩やからの生活を支える資源の場としても重要な役割を担になっていた。

　モルトが吊つり橋を渡わたり、何となく川かわ面もを覗のぞくと、七センチ程の魚が幾いく匹ひきか泳いでいるのが見える。小骨が多いのが難点だが、本当に喰う物に困った時は頼りになる連中だ。

　と、その時だった。橋の上にあった小石がモルトのブーツに当たり、下へと落ちていった。川面がざわめき、魚達が一いっ斉せいに逃にげ回る。

「あぁぁああぁぁん!?　ちょっ、おまっ……何してくれてんだぁあぁああ!?」

　橋の下から怒ど声せいが聞こえ、モルトが今一度身を乗り出すようにして覗き込んでみると、そこには釣つり竿ざおを持った中年のいかつい男と、その舎しゃ弟ていらしき白はく髪はつの若者の姿があった。

　リキュールではそこそこ知られたゴロツキである。

　チョココが言っていた試練というのが、これなのかもしれない。

　……いや、まず間違いなくそうなのだろう。モルトは確信し、閉じる口に力を入れた。

　白髪の若い方──ジュニパーがわざわざ土手を上り、橋の上へとやって来る。

「てぇんめぇ！　あぁん!?　モルトォ、てめぇ何してくれてんだ、このクソガキィ！　お前が石を投げ入れたせいでジンのアニキが釣るはずだった魚が逃げちまったじゃねぇか!!　どう落とし前つけようってんだぁ!?　アァアン!?」

　ガキと呼ばれたが、どう見ても彼の方がガキだった。ジュニパーはライに負けず劣おとらずの童顔……というか、実じつ年ねん齢れいも恐らく十代そこそこなのだ。

　ジュニパーはがなり散らしつつ、柄物の小こ袖そでから伸びる生っ白い両足をがに股またにして距きょ離りを詰つめてくる。そして体が密着しそうな程の距離になって、〝あぁん!?〟と再び唸うなりを上げ、その吊り目でモルトを見上げた。彼の身長は一六〇を下回っていて、モルトとは大人と子供ほどの差がある。

　また、がに股歩きや今し方の言動とは裏腹に、生意気そうなジュニパーの顔は意外な程端たん正せいな目鼻立ちをしているのだと、近くで見るとわかる。その整った顔を歪ゆがめて作る今の彼の表情はどこか滑こっ稽けいだった。

　ジュニパーが体をモルトに押しつける。彼の懐ふところからわずかばかりの木の棒のようなものが顔を出しており、それが短刀の類であることはモルトもわかっていた。

リキュールで長なが柄え刀とうを担かついだ男に喧けん嘩かを売ることほど命知らずのことはないのだが、この男の場合はそんなことお構いなしだ。

腕うでが良いのではない。根こん性じようが据すわっているわけでもない。

……単に、頭が良くなかった。

ジュニパーが〝ジンのアニキ〟と呼んだ羽は織おりの強面こわもてが、ゆっくりと橋の上へと下げ駄たを鳴らしてやって来る。

「……ジュニパー、離はなれなさい……」

ヘイッ、アニキ！　と、訓練された犬がごとく、ジュニパーは素す早ばやくモルトから離れるとジンの後ろへと下がる。

「アニキ、こいつ、やっちまいます⁉　やっちまいます⁉」

ジンは懐からパイプを取り出すと、マッチでそれにそっと火を付け、煙を吐はいた。

いかつい体にいかつい顔、そして威い圧あつ感かんを与あたえるかのように両目の間を走る大きな傷きず跡あとが、その風ふう体ていによく似合っていた。

「落ち着きなさい、ジュニパー。何でも屋風ふ情ぜいにそんなに強く当たってはいけない。……かわいそうに、怯おびえて身動きが取れなくなっているじゃないか」

「へぃッ！　アイツ、超ちようビビリッすよ！　超弱ぇ！　オレっちがちょちょっとボッコボコにしちゃいやしょうか⁉　やっちゃいやしょうか⁉」

「まったく、これだから若者は。ジュニパー、いつも言っているだろう。我々は任にん侠きように生きる漢おとこ。むやみやたらに暴力を振るうゴロツキではない。……いいね？　落ち着きなさい」

「……へ、へぇ、アニキがそう言うんでしたら」

うんうん、とジンは頷うなずくと、優やさしげな眼まな差ざしでモルトを見てくる。

「若き何でも屋、怖こわい思いをさせてしまったね。私から謝ろう。……だがね、釣り人がいるかもしれない、そんな場所で川に石を投げ込むのは良くないことだ。わかるね？　今回は見み逃のがすが……これに懲こりたら今後は気をつけるんだ、いいね？」

「おい、アニキの寛かん大だいなお心で見逃してやるんだ！　ありがたく思いやがれ!!」

　これこれ、とジンはジュニパーの頭をポンポンと優しく叩たたいた。ジュニパーが借りてきた猫がごとく大人しくなり、それでいてどこか嬉うれしそうに笑えみを作った。

「また怖がらせてしまったじゃないか。まったく。……ジュニパー、下から釣り竿を持って来なさい。日も暮れそうだし、今日はもう帰ろう」

　ヘイッ、とジュニパーは走り、そして、橋から飛び降りた。橋の下まで三メートルもないところなので、その方が確かに早い……のだが──。

「うわぁあぁ!!　痛ェ!!　あ、足がぁ……痛ぇよぉ～……!!」

　橋の下からジュニパーの悲鳴と涙なみだ声ごえが聞こえて来ると、ジンはやれやれと首を振って、彼の元へと向かった。

　モルトはボーっと遠くの夕日を眺ながめながら、二人の会話を耳に入れた。

　──足が、アニキ、オレっちの足がぁ～！　──これこれ落ち着きなさい。──アニキ、オレっち、もうダメだぁ、アニキに何の恩返しもできなかった……。クソォ……これじゃ明日あしたの漢祭りも……あっ、アニキ、グッ、痛ェ！　──ふむ、骨は大だい丈じょう夫ぶだ。軽い捻ねん挫ざだろう。──え？　って、ことは大丈夫なんっすか!?　オレっち、またアニキにお仕えできるんっすか!?　──当然だ。捻挫はもちろん、骨が折れたって、それぐらいでできなくなるわけがないだろう。──そうなんっすか！　アニキ凄すげェ！　物知りっすね！　オレっち、死ぬのかと思ってやしたよ！　──これぐらい普ふ通つうさ。さぁ、帰るぞ。ほら、来い。俺の背におぶさるといい。──ア、アニキィ……!!

　しばらくすると、カランコロンと下駄を鳴らしてジュニパーをお

ぶったジンがモルトの視界に戻もどって来た。

　彼らはどこぞへと向かって、ゆっくりと歩いて行く。

　ジンの背に横顔を押しつけるジュニパーの目め尻じりには、夕日に煌きらめく雫しずくがあった。

「へへッ……一日かけても魚は一いつ匹ぴきも釣れなかったけど……このアニキのでっけぇ背中が、今日一番の釣ちよう果かだぜ……」

「何、バカなことを言っているんだ、お前は。まったく」

　ジンは満まん更ざらでもなさそうに、優しげに笑い、そしてカランコロンと下駄の音と共に、去って行った。

　……石を落としてから一歩も動かず、一言も発することなく、事態が発生し、展開し、勝手に終わっていったのだというのをモルトは感じつつ、夕暮れの空を見つめ続ける。

　この川で一日粘ねばって一匹も釣れないことなどあるのだろうか、そんな疑問と共に。

　きっと、釣り竿にエサか針のどちらかを付け忘れていたのだろう。

　そんな結論に達した時だ。

　──何だかなぁ。

　思わず、そんな言葉が口から出そうになるも、慌あわてて開きかけていた唇くちびるを意思の力で無理矢理に閉じて言葉を封ふうじる。

　危なかった。今のは、完全に危なかった。緊きん張ちようを強しいた後の、気が緩ゆるんだ瞬間ほど危ないものはない。

　これがチョココの言っていた、本当の試練なのか。

　だとしたら、相当にひねくれた試練である。普通は〝痛み〟や〝驚おどろき〟で来るところを、まさかの〝呆あきれ〟で仕し掛かけてくるとは……。

モルトは冷ひや汗あせをかきながら、止めていた足を再び動かし、街へと向かって行く。

長かった線せん香こうは段々と短くなるも、煙は変わらず立ち昇のぼり続ける。

不思議なことに燃え尽つきても灰がモルトの手に落ちることもなく、全すべて風に乗って消えていく。何らかの特別な線香なのかもしれない。

モルトがそんなことを考えていると、人でごみごみとしたアルコ・ホールに入った時にはすでに日が暮れ、夜の装よそおいとなっていた。

時刻はすでに夕ゆう餉げ時。一足早く屋台で祭りの味わいを楽しもうとする旅行者や住民がごった返している。賑にぎやかで、温かくて、気持ちのいい空気感だった。

しかもよくよく考えてみれば、モルトはこの後、安あん美び亭ていへ行けば魔ま導どう士しギルドの爺じいさんから酒、おやっさんからは夕飯がいただけるのだから最高だ。

それに加えてチョココの占うらない通りに美女が手に入るとなれば……今年の祭りは最高のオープニングセレモニーから始まることになる。

短く、小指の先程になった線香を落としてしまわないように、モルトは人混みの中を巧たくみに進むと……見慣れた通りへと近づいて行く。

このまま進んで行けば……あるのは……オリービーの花屋である。

モルトの胸が高鳴る。ときめく。顔に邪よこしまさを含ふくめた笑みが湧わく。

あの占い師、もしや正しよう真しん正しよう銘めいの凄すごい能力を持っているのではないか。

モルトは早足になりそうな己おのれの体を宥なだめつつ、一定のリズムを保って進んで行く。

余計なことをして店を通り過ぎたりしたら大変だ。間違っても道を通り過ぎて、その場でたむろしていた男好きな男達の前で「綺き麗れいだよ」の台詞せりふをぶちかまそうものなら、昨年モルトが見た中で一番悲ひ惨さんだった男の後追いになる。

事は、慎しん重ちょうを要した。

人混み、人混み、人混み……その先に、オリービーの花屋が見えてくる。

小さなお店から溢れる魔光球の光と花々の華はなやかさ。

そこにいるであろう、店長で、巨きょ乳にゅうのオリービーが……自分を待っている。

綺麗だよ。この花々の中で君が、一番綺麗だ。

では、この一番美しい花を一輪、お持ち帰りテイクアウトさせていただこう。

モルトは鼓こ動どうの高鳴りを覚えつつ、そんな台詞を考え……線香に細心の注意を払はらう。

そして、まさにオリービーの花屋、その真ん前に来た時だった。摘つまんでいた線香の最後の一欠片かけらが、指先にわずかな熱を残して砕くだけ散るように燃え尽きたのだった。

「──綺麗だよ」

モルトは自身が持つ限りのイケメン要素を総動員し、最大限の格好良さでその一言を店の中へと放った。

決まった。これは確実だ。来年の祭りにはオリービー似のかわいい娘むすめを抱だき上げながら夫ふう婦ふでイカ焼きを喰くっていることだろう。焼きトウモロコシでもいい。

モルトは明るい店内の光に細めていた瞼まぶたをゆっくりと開く。するとそこに、満面の笑みを浮うかべるオリービー。

長い亜あ麻ま色いろの髪かみを揺らし、彼女は頷き……浴衣ゆかたを着て、帯たい紅こう色しょくの薔ば薇らを髪に挿さしたリッツに、「ね！」と声を掛かけていた。

……何だか嫌いやな予感を、モルトは覚えた。

目を見開いていたリッツは、髪かみ飾かざりに負けないぐらいにみるみる顔を赤らめ、視線を泳がせた。

「ほら、リッツちゃん、言った通りでしょう。あなた今、凄く綺麗なんだから」

「い、いや、でも……やっ、やっぱり派手だし……」

「それ、あげちゃう。お代なんていらないんだから。リッツちゃんにプレゼント。その代わり、お友達とかに宣伝してね」

「そ、そんなの悪いし……そ、それに」

「いいからいいから。ほら、モルトさん、リッツちゃんを壁かべの花にしちゃダメですよ」

オリービーが赤い顔のままでおろおろしているリッツの手を取ると、先さき程ほどまで線香を摘まんでいたモルトの手と繋つなげさせる。

そして、バイバイ♪　というように、彼女は手を振ふった。

モルトは瞼を閉じ、夜空へと顔を上げる。

魅み力りよく的な女性で、手を伸のばせば届きそうな、そんな身近な人……確かに間ま違ちがいじゃない。

間違いではないのだ。リッツはまだ幼い……というか幼児体型とはいえ十分にかわいらしく、将来への期待を抱いだかせるだけの魅力を持っている。何より同じアパートに住んでいるわけだから、そりゃいつだって手を伸ばせば届くわけで……。

だが、違う。違うのだ。そういうことを言いたかったんじゃねぇ……。

モルトは心の中でチョココへ苦情を述べた。すると、気のせいか「え～、ミスはしてないわよぉン♪」とクスクス笑うチョココの声がかすかに聞こえた気がした。

モルトは再び瞼を開く。手を繋ぎ、顔を赤らめたまま俯うつむく

リッツと手を振るオリービー。ここで手を放してオリービーを口説くというのは、さすがに違うと、モルトにもわかった。

「……い、行こう、か」

　コクン、とリッツは頷く。髪に挿した薔薇が、揺ゆれていた。

　人混みの中、モルトは小さな手を握にぎったままゆっくりと歩く。

　リッツもまた、はぐれてしまわないよう、モルトに身を寄せて、歩いていた。

「えーっと、どうしたんだ、リッツ。祭り前に浴衣なんて、珍めずらしくないか？」

「……うん、クラッツがお古をくれるっていうから。それで、オリービーさんに寸法直すの手伝ってもらって、それで……」

　早くに両親を亡くしてしまった関係から、オリービーは弟の母親代わり。それ故ゆえに家事は一通りできるし、裁さい縫ほうに至っては昔から習っていることもあってかなり得意らしかった。

　家が近くということもあって、リッツがいろいろと昔から教わっているのも、モルトは知っている。彼女が普ふ段だん着ているワンピースの飾り付けなど、まさにオリービーから教わりながらリッツ自身が取り付けたものなのだ。

「それで、でき上がったのを着てみたタイミングだった、ってわけか」

　ワンピースが入っているであろうリッツの手に下がる鞄かばんを見ながら、モルトは言った。

　リッツが小さく、頷うなずく。

「ちょっと、寸法間違ったかもだし、でもオリービーさんがこれでいいって言うし……それにこんな……」

　リッツは髪に挿した薔薇を手で押さえた。

　普段、淡たん白ぱくな色合いのものを身に纏まとうことが多い

リッツなので、シックな色合いとはいえ、帯紅色の花は少々華か美びに思えるのかもしれない。

　モルトはリッツの体に目をやった。寸法を間違えたかも、と言っていた理由もなるほど、という気がする。サイズが少しピッチリしていることに加え、少し生き地じが薄うすめのせいもあって、リッツの体のラインが如によ実じつに表れている。

　とはいえ、別に失敗したという感じではなく、むしろ体にピッタリにできているようにモルトには見えた。

　一二歳とはいえ、それでも段々と女性的な体つきになりつつあるのだと、胸はともかく、その腰こしのラインを見てモルトは察した。朝に五年は……と言ったが、それは訂てい正せいした方がいいかもしれない。もう、くびれもある。お尻しりの張り具合も、まだ寂さびしいものの、一人前だと言いたげではある。

　だから、モルトは言った。

「似合ってるって」

　リッツは顔をまた真っ赤にして、俯いてしまった。

「……ありがと」

　モルトの手の中にある、まだ子供っぽさを残す小さな手がきゅっと握り返してくる。

「あ、晩ご飯、モルト、もう食べた？　お祭りだから、ママが今日料理多めに作ってたはずだから……その……」

　えーっと、と、モルトは安美亭での約束を思い出すものの……俯いたまま、とぼとぼとモルトにくっつくようにして歩くリッツの横顔を見て、ため息と共に首を振った。

「相変わらず無一文だよ。あとは察してくれ」

「なら、さ……」



　リッツが立ち止まる。手が、思わず離はなれた。

　振り返かえったモルトが見たのは、少女が浮かべる頰ほおの赤みと、はにかむような笑え顔がお。

　彼女の髪を飾る帯紅色の薔薇。

　その花言葉は、『私を射止めて』。

「一いつ緒しよに、帰ろうよ」

　あぁ、お持ち帰りか……。と、モルトは苦く笑しようする。

　もしここまで読んでいたというのなら、あの占うらない師、やはりただ者ではなさそうだ。

「あぁ、帰ろう。一緒に」

　モルトは笑顔のリッツの手を引く。人混みの中を、二人は身を寄せ合い、歩いて行く。

　アルコ・ホール三番街の、アパートへ。

　街は一足早く、もう、祭りの雰ふん囲い気きに包まれていた。

●第五話『開かい催さい、漢おとこ祭まつり』

　気が付けば祭りももう、最終日の三日目だった。

　──よぅ、モルト！　今年も参加するんだろ？　ったくしょうがねぇなぁ、それじゃ前祝いだ、これ、持ってけや！　──お、我が町の切り札モルトじゃねぇか！　いいもん喰って、今年こそ最下層まで行ってくれよな！　──今年の最終組に確かお前の名もあったよな？　ありゃここ一〇年じゃ最高のパーティだろ。ご神木が呼んでるとしか思えねぇ……ほれ、これ喰ってけ！

　祭り最終日ともなれば、屋台のおっさん達は相変わらず気前がいい。

　昨日までは、モルトが屋台前をこれ見よがしにうろうろしても、酒や食料が両手から溢あふれるなどあり得なかった。

　モルトはアルコ・ホールの片かた隅すみで、長なが柄え刀とうを民家の壁に立て掛ける。そして、その民家の玄げん関かん前の階段に座ると屋台主からいただいた品々を並べた。

　軽く一往復するだけで、その手にはビールに赤ワイン、鶏にわとりの足の山さん賊ぞく焼きにソーセージバーガーと、祭りのクライマックスに挑いどむには十分なものが揃そろっていた。

　ワインはともかく、ビールは炭酸が抜ぬけて温くなると悲ひ惨さんなので、品々を眺ながめて愉ゆ悦えつを噛かみ締しめるのも程々にして、この日最初の食事をモルトは始めることにした。

　まずはビールを一口。冷たいそれはできればグラスでやりたいが、木製のジョッキ（要返へん却きやく）でも十分にうまい。

　喉のどに流れ込む刺し激げきを楽しみつつ、口の中を湿しめらせると、モルトはすぐさまソーセージバーガーに取りかかる。これは、たとえ具材がソーセージであっても、ホットドッグではない。あくまでバーガーだ。

　未まだ包み紙にくるまれているというのに、溢れ出ている匂においとギリギリ手で持っていられる熱量がモルトの空腹を存分に刺激する。

　ジョッキを置いて、包装を解く。早さっ速そく顔を出すのは焼き色の付いたバンズ。白っぽいそれは、水分の少ないパサパサのパンであり、厚みも薄かった。

　それに挟はさまれているのは……渦うず巻まき状にぐるぐると巻かれ、鉄板で焼かれた、モルトの親指よりも太いソーセージだ。香こうばしく炭火で網あみ焼やきにされたそれは脂あぶらでてらてらと光りつつも、しっかりと焦こげ色を有するソーセージの様子は扇せん情じよう的と呼ぶに相応ふさわしい。

　思わずモルトは唾つばを飲む。

　そして香ばしさと共に吸い込んだ匂いでわかるが……このバーガー、チーズがたっぷりと仕込まれているのだ。

　つまり、網で焼かれ、香ばしい焦げを与あたえられたソーセージの上に大量のチーズがぶっかけられ、熱で溶とけきる前にバンズに挟まれた一品……現在それは、持ち手が少しでも力を入れるとバーガーの隙すき間まからチーズがとろりと垂れ落ちてしまいそうな最高の具合だ。

　だが、それより先にモルトのヨダレが垂れた。

　モルトはそれを拭ぬぐいもせずに……バーガーに喰くらい付く。

　やや硬かたく、薄く、そしてパサつくバンズをメシッという感じに上下の歯で突つき破れば……ブリュッビュリュッ、という最高の状態に仕上がっているソーセージの食感。渦巻き状にしてあることで、複数本を同時に口に含ふくんだかのような弾け具合、それは最高の贅ぜい沢たくであり、快感であり……このバーガーの一番の〝感動〟といえた。

　薄うす皮かわの下で弾はじけるのを待っていた肉にく汁じゆう達によるカーニバルだ。豚ぶたと牛の粗あら挽びき肉から放たれたそれらは暴力的なまでにモルトの口内で激しく躍おどる。

　メロディの代わりに流れるのは肉に混ぜ込まれたバジルの香かおり。振ふりかけられてる粗挽き胡こ椒しようがアクセント。表面に

まぶされた岩塩の塩気の強さパンチも、たまらない。

　肉汁に名残なごり惜おしさを引かれながらもバーガーから口を離せば、チーズの橋が伸のびる。これが、また、いい。チーズの悦えつ楽らくだ。舌で巻き取り、口にその芳ほう醇じゅんを招き入れれば、濃厚さが一ひと際きわに立ち、ビールを呼ぶ。

　口の中のものを堪たん能のうして喉に通すと、モルトは即そく座ざにジョッキを呷あおった。

　ビールの苦味と強い炭酸の刺激、そしてその冷たさが口の中を快感と共に洗い上げ、モルトに声を上げさせる。

「っだぁはっ!!　フォゥッ！　これだよこれ！　祭りの時でもないと喰えねぇもんなぁ」

　バーガーこれに特別な味付けなんてない。だが、それがいい。それがうまい。一見するに安っぽいパサつく薄いパンも、最高だ。パンとしては最低かもしれない。だが、このバーガーにおいてはパサついているからこそ、ソーセージから溢れる肉汁を余よ裕ゆうで受け止めてくれるのだ。そしてまた、酒の邪じゃ魔まにならない極きわめて控ひかえめな風味もいい。

　あくまでメインはソーセージであり、この料理は酒の肴さかなにするためのものなのだ。食事とは少し違ちがう。だからこそ変にバンズが分厚かったりして、穀物の甘さや食事感を主張されても困る。野菜がこれっぽっちも入っていないのもそのせいだ。

「これとビールがありゃ最強だぜ。……まっ、付け合わせでピクルスか何かありゃさらに言うことなしだが……さすがに贅沢が過ぎるか」

　もらい物に文句を言えるほど、モルトは強ごう欲よくではない。これで十分だ。

　モルトはバーガーを齧かじり、アルコ・ホールを行き交かう人々を眺めた。

　東西南北より老ろう若にゃく男なん女にょが活気を持ち寄り、生まれた屋台通り。

　溢れる祭りの気配。笑顔と声と歌声と雑ざっ踏とうと……ありと

あらゆるものがごちゃ混ぜになって、心地ここち良さが生まれている。

　特別な時間、特別な空間。

　たった三日間だけの、終わりが約束された非日常。

　しかし来年にまた訪おとずれることが約束もされている、そんな、非日常。

　うまい酒と肴と共に眺めれば、最高だ。

「ったく、うまい酒だよ」

　バーガーを食べ切り、ビールを飲み干すと、モルトは続けて鶏とり肉にくの足を塩胡椒、山さん椒しよう、ニンニク、生しよう姜がでこれでもかと強きよう烈れつに味付けした山賊焼きに手を伸ばす。こっちのお供には赤ワインだ。

　──にゃ～。

　気が付くと、モルトの隣となりに背中に翼つばさのようなものを持った猫ねこが行ぎよう儀ぎ良く座って、彼を見上げていた。

「よう、兄弟。お前も祭りが好きか？」

　モルトは山賊焼きのパリッと仕上がっている表面に喰らい付く。パンチの効いた塩味と刺激的な香り。それを堪能しつつ、皮の下にある、やや脂分の少なく、できるだけニンニク等の成分が浸しん透とうしていなさそうな部位を少量むしって、猫の前に投げてやった。

　普ふ段だんはセコいモルトも、祭りの時ぐらい大らかにもなる。そうでなければ猫のエサを強ごう奪だつすることすら厭いとわないのがモルトという男である。

　猫は礼を言うように今一度鳴き声を上げ、肉を喰らった。

「まだ熱いから、ゆっくり喰えよ。……おっ⁉」

　猫から人混みに視線を移すと……ハッとする程ほどの美人が通りかかり、思わずモルトは声を上げた。

黄金と白金を混ぜて作った極ごく細ぼそ糸いとのような、美しく長い髪かみと荒あら編あみのケープを揺ゆらして歩く色白の彼女。髪にいくつもの民族的なアクセサリーを付けて飾かざり立ていて、華はなやかだ。

どこか身分の高さを窺うかがわせる。華か美びだからとか、アクセサリーが高そうだからというのではない。歩み一つとっても堂々としているのに淑しとやかで、洗練されているせいだろう。

つまりは、彼女が纏まとっている雰囲気が、そう思わせるのだ。

それはモルト以外も同様だったらしく、人混みの中、彼女とすれ違った者は誰だれもが振り返っていた。

「……あれ？　モルトじゃん」

その美人の陰かげから、ひょこっと顔を出したのは、燃えるように赤い髪に赤い目をした……ガーナだ。

「あ、ガーナ姐ねえさん！　ちょっとちょっと！」

モルトが手招きすると、串くしに刺さった肉を頬ほお張ばりながらガーナがやって来る。

気の強そうな目つきをした彼女は、種族的なものから成人していても身長は一四〇センチほどしかない。恐おそらくそのせいで祭りに着る浴衣ゆかたがなかったのだろう。子供用のものを着ているらしく、帯がかわいらしい大きなリボンのようになっている代しろ物ものを着ていた。

だが、自分は子供ではないと主張しているつもりなのか……浴衣の丈たけが尋じん常じようではない短さで、ほとんど超ちようミニなスカート状態であり……しゃがもうものならモルトは笑えみが浮うかぶのを止められないだろう。

何せ、小さいとはいえ、出るところは出ていて、しっかりとした女性的な体つきをしているのだ。溢れる色気は体のサイズ通りではない。

また、いつもは垂らしている長い髪も、今はアップにまとめているせいで、雰ふん囲い気きが違って見えて……これまた、いい。

「どうしたんだい、モルト。ナンパかい？」

　そんなことを言いながら、ガーナは当たり前のようにモルトが脇わきに置いていた赤ワインに口を付ける。代わりにモルトは串に刺さった牛肉を一つ貰もらって頬張った。至極、うまい。シンプルな塩胡椒や香こう辛しん料りようでの味付けというのもいいものだが、この肉は粘ねん度どの高いステーキソースのようなものを纏わせているようで、甘みが強く、味が濃こい。

「いや、まぁその……そっちの極上の美女は誰なんだ？　いや姐さんも美人だけど、その……できれば軽く紹しよう介かいでもし──」

　ブホォッ！　と、赤ワインを盛せい大だいに噴ふき出し、ガーナが笑い声を上げた。

「姐さんっ、もったいなっ……!!」

「アンタが……よりにもよってアンタがそう言うのかい、モルトぉ！　ちょっと、ははははは、勘かん弁べんしてよ、マジでさ～！」

　何故なぜ爆ばく笑しようされているのかわからずにいると、美女がゆっくりとやって来る。

　彼女は顔を赤らめ、伏ふし目がちにしてモルトと目を合わそうとしない。

　ほぅ、恥はずかしがり屋と来たか。モルトは尚なお更さら目の前の美女に惹ひかれた。

　放ほう埓らつな女も好きだが、こういう女もモルトは大好物だった。

　目が合った時のために、とモルトは口元の脂を拭い、キリッとした眼まな差ざしで彼女を見つめ……そして、気が付いた。彼女が腰こしに帯びている刀に。

　それには、嫌いやというほど、見覚えがある。

「……サシャ……の、妹？」

「……どう見ても私本体だろ、モルト」

　数秒の沈ちん黙もくの果てに、モルトは立て掛かけていた長なが柄え刀とうを取り、目の前の美女ぶった男に斬きりかかりそうになるも、ガーナに抱だきつかれ、それを為なせない。

「放せガーナ！　俺は全すべてをなかったことに……!!」

「言っておくが、べ、別に私が好きでやったわけじゃないぞ!!　ガーナさんに是ぜ非ひと言われて、それで……」

　ガーナがモルトにしがみつき、笑い過ぎてヒィヒィ苦しそうになりながら話してくれたことによると、こういうことだ。

　サシャが屋台の髪飾り屋で雇やとわれ、働いていたところ、雇い主から実演を要求され……気が付くといつもは簪かんざしでまとめている髪を下ろして、サンプルとしていろいろと商品を付けていたのだそうだ。

　それを見たガーナが面おも白しろがり、商品を買う代わりに休み時間のサシャを借り受け、通りをエスコートさせていたらしい。

　……つまりは、モルトのように引っかかるバカを見て笑うために。

「服まで変えるのは面めん倒どうだったから、ケープで誤ご魔ま化かしたわけなんだけど。でもさぁ、店主まで面白がってあれこれ飾り立ててくれちゃってさ、なかなかの状態に仕上がったと思わない？　……ま、全部あたしの悪ふざけだから赦ゆるしてやってよ」

　女男が……！　と、モルトは悪態を吐つきつつも、長柄刀をすんなりと納めた。

　同業者としてやってきた男を美女と間ま違ちがえるという盛大な恥ち辱じよくは拭えるものではなかったが……しがみつかれた際、ガーナのおっぱいが大変心地良くモルトの腕うでに当てられたことで、モルトは若じやつ干かん満足し、刃やいばを納めたのだ。

「いやぁ、アンタら最高だわ。いっそもう付き合っちゃいなよ。二人共それなりに長身だし、お似合いだよ」

　モルトは一八〇センチほど、サシャは一七〇ほどはあるだろうか。

　確かにサシャが今、見たままの美女だというのなら美男美女として悪くない絵になるな、と一いつ瞬しゅんモルトは考えたものの……さすがに男がもし女だったら、そして付き合ったら、ということを想像するだけで結構キてる考え方だと気づき、すぐに頭の中から打ち消した。

「勘弁してくれよ、姐さん。折角の祭りだぜ？　男なら誰しもがアバンチュールな大人の関係を結ぶのを夢見るわけだが……その相手が男じゃな」

「……私だって、モルトなんか、お断りだ」

　フンっと、モルトとサシャは互たがいから顔を逸そらす。……と、その時、モルトの視線の先で、花火が打ち上がった。白い煙けむりを引く、昼間の花火だ。光のそれではなく、パァンっという音を響ひびかせるものである。

　これが鳴った、ということは……。

「……ライが、封ふう印いんを解いたか」

「祭りもいよいよシメってわけね。モルトは今年も出るんでしょ？」

　モルトは返事の代わりに、先程まで齧かじり付いていた鶏肉を見せる。

　だから貰えたんだ、と暗に伝わったことだろう。

「どれ、様子でも見てくるか」

　モルトは鶏肉を骨だけにしてから、長柄刀を担かつぎ直す。

　今いま頃ごろ、地下神殿ダンジヨンから祭りを祝うように、大量の魔ま獣じゆうが躍おどり出てきていることだろう。

　その駆く逐ちくを見学するのも、この祭りの醍だい醐ご味みの一つであった。

この祭りがいつから始まったのかは定かではないが、少なくとも一〇〇年や二〇〇年といったものではなく、かの大戦より前に遡さかのぼると言われていた。

元々はこの地に住み、山やそこに棲すまう神々を崇あがめる少数民族が行っていたものだったのだが……大戦時に一度その伝統が途と切ぎれたとされている。

だが、終戦後、ロテ国の最前線基地だったこの地に人が集まり、街が、リキュールが、アルコ・ホールが出来上がっていくにつれ、誰かがさらなる発展を願い、街まち興おこしとして祭りを復活させたのだ。

そのため本来の伝統とは細部でやや違ちがうと思われるものの、過去の文ぶん献けんや老人達の話を頼たよりに可能な限り再現し、祭りは復活し……今では極めて血腥い祭りとして世界にその名を轟とどろかしていた。

漢おとこ祭まつりの会場となるのは、山の麓ふもとから石階段をしばし上ったところにある地下神しん殿でんだ。とはいえ、その階段脇には商しよう魂こんたくましい連中が斜しや面めんに無理矢理屋台を建てていたり、荷を担いで売り歩きをしているので、山に入った段階ですでに祭り会場とも言えるだろう。

そこでは屋台通りとは違って、飾りのついた刃は物もの類や食器、大工道具や何に使うのかわからない不思議アイテム、さらには珍めずらしい植物の種や苗なえ、薬に調味料……といった様々なものが売られており、祭りに興味がなくてもそれらを目当てに人は集まっていて、とても賑にぎやかである。

それらの誘ゆう惑わくを退け、階段を上りきれば、そこは平らな広場になっており、観客達がイカ焼きや綿わた飴あめを喰くい、住民達や遠方からの観客達が酒を飲み交かわしていた。

そんな中に、モルト達へ柔やわらかな笑みを向ける者が一人。桜色の長い髪を揺らし、今日もまた場違い感を漂ただよわせる豪ごう奢しやなドレスを纏まとった、リーフィだ。

暑い季節ということもあり、肩かた周りを大だい胆たんに露ろ出

しゆつしている彼女は観客達の視線を釘くぎ付づけにしていたが……モルトが引き連れているサシャとガーナとて負けてはいない。

　彼女らは広場に来るなり男達の目を一気に引いた。ガーナは軽く愛あい想そを振ふりまき、ちゃっかり酒さか瓶びんを貰ったりしていたが、サシャはといえば顔を赤らめ俯うつむくばかり。そしてそれがまた男達の興味を引きに引く。前を通ると酔よっ払ぱらいから歓かん声せいすら上がるほどだ。

「こんにちはですわ、何でも屋さん。あら、そちらは……まぁ、お似合いですこと。それがサシャさんの本当の姿、ということかしら？」

　クスクスと飾りのついた扇せん子すで口元を隠かくして笑うリーフィに、サシャは俯き加減を深くするばかりだ。

「こ、これにはいろいろとわけが……」

　リーフィが一目でサシャと見み抜ぬいた辺り、大したものだとモルトは思う。

「ところで開幕式はもう終わったのか？　えっと……」

　モルトが地下神殿の入り口を見やれば……凄せい惨さんな現場が例年通りに広がっていた。

「……今年はいつもより多いな」

　数百年では済まないような、古いにしえに建てられたと思おぼしき神殿前の広場は、今や完全に鮮せん血けつで染め上げられていた。

　辺りに散らばるのは、新入り及および若手の自警団員と……大量の魔獣だ。

「お？　よぉ、モルト……今年は例年以上にしんどかったぜ」

　神殿の入り口に続く階段の上で絶命している豚ぶたに似た巨きよ大だいな魔獣の上にいたのは、上じよう半はん身しん裸はだかのライだ。亜あ麻ま色いろの髪かみが、今や赤黒くなっていた。頭から鮮血を浴びたのだろう。

「そのようだな。……開幕いきなりで大物とは、新人共には酷こくだったろう」

　関係ないさ。ライは軽く言うと魔獣に突つき刺していた長柄刀を軽々と抜き、モルト同様に肩に担ぎ上げた。

　そしてぶっ倒たおれている新人達に罵ば声せいを浴びせ、数十体に及ぶ魔獣の死体の片付けを命じたのだった。

「噂うわさに違たがわぬハードなお祭りですわね。ちなみに今のこれはどのような出し物ですの？」

「いや、これ自体は別に出し物ってわけでもないんだけどさ……」

　漢祭り自体はとても簡単だった。

　参加志願の男達は事前にクジでパーティを決め、順次神殿の地下へ入り、最下層に生えるご神木に豊ほう穣じようと平和を祈いのりに行く……というだけである。パーティの一つでもこれを為せればそれから一年、リキュールの街は安あん泰たいだ……とされ、やり遂とげた男達──否いな、漢おとこ達たちは街の英えい雄ゆうとしてしばらくの間、持て囃はやされるのだ。

　とはいえ、ただ行けばいいというわけではない。何故なのかは誰だれも知らないが、この地下神殿には一年経たつだけで、どこぞからか湧わき出る大量の魔獣が住み着いてしまうのだ。

　これが大変危険なために地下への入り口は、平時、厳重に封印されているのだが、祭りの時に限り自警団団長が新入り・若手を引き連れてそれを解き……まず最初に溢あふれ出てくる魔獣を駆逐するのが恒こう例れいとなっている。

　それがこの祭りのクライマックスにして始まりを宣言する開幕式でもあった。

　これが一段落すると、パーティの第だい一いち陣じんが地下へと入っていくことになる。

　そんなことをモルトが語っていると、丁度その第一陣の準備ができたと司会の男が声を上げる。

「ほら、リーフィ。あれだ」

「んまぁ！　これは素す敵てきですわ!!」

　一〇〇人に及ぼうかという観客達が歓声を上げ、手を叩たたく。

　それらを受けるのは四人の……褌ふんどしと呼ばれる神聖な帯状の純白パンツを股こ間かんに巻き付けただけの、ほぼ裸はだかの漢達である。

「これが漢祭りの由来だ。武器はおろか服すら持たず、四人ないし三人の男達が魔獣の跋ばつ扈こする地下神殿へと突き進んでいく。持ち込めるのは神聖な褌と……己おのれに最も相応ふさわしく、最も己を示す、武具以外のアイテムを一人一つだけ」

「実に命の無む駄だ遣づかい感が半はん端ぱないお祭りですわね！」

　元々ロテ国最強の部隊が、戦後も当たり前に居座ったことで街となった経けい緯いもあり、基本的に住民全員が血の気が多い連中なのだ。

　昔は少数民族時代の伝統に則のつとり、基本褌姿ではあったものの、いろいろ武具を持って潜もぐていったそうだが……段々と「それじゃ面白くねぇ」ということで武具が禁止され、その当人の個性をアピールするために一番それっぽいものを使うようになり……結果、漢祭りは集団自決イベントと笑われる盛せい大だいな催もよおしとなったのだった。

「なるほど、噂では粗そ暴ぼう無む謀ぼうで野や獣じゆう染じみた漢達が己のプライドと命をかけて盛大に血を流し、悲鳴を上げ、苦く悩のうに打ち拉ひしがれる祭りだと聞いておりましたが……意外ときちんとしたお祭りでしたのね」

「……まぁ、あながち間違ってないけどもさ」

　最後に地下神殿最下層の二九階に到とう達たつしたのは、実はもう一〇年近く前で、それ以来いつも途と中ちゆうで全パーティが潰かい走そうしている有様であり、当然のように怪け我が人続出、それ以上も出てくるし……酷ひどい時になると、地下から逃にげてくるパーティを追い掛かけて大量の魔獣が山を下って街を襲おそったり……と、なかなかに笑えないエピソードが盛りだくさんである。

　ちなみにリキュール図書館にある『リキュールの歴史』コーナー

にはそういった内容が綿密に記録された書物が並んでいるが、それを目当てに街を訪おとずれる者も少なくないほどにパンチの効いた内容であったりする。

　この祭り、やはり裸同然であるということに加え、武器がないというのがあまりに苦しいのだ。魔獣は爪つめや角つの、場合によってはどこぞから持ち込んだ剣けんや鎧よろいを着ている場合すらある。

「モルトさんは参加なさるのですわね。では……そちらのサシャさんは？」

「私は不参加です。……さすがにあんなのは……」

　サシャが見やった先には、褌姿で腕を組み、横一列になって観客の間を抜けてくる漢達。

　街外れで養よう鶏けい場を営むサケノッグ、トマト栽さい培ばいを生きがいとするトマトマ、そして街の荒あらくれ者であるジンとその舎しゃ弟ていであるジュニパーだ。

　ジュニパーこそ白はく髪はつ色白の美少年然とした痩やせっぽっちだが、他ほかの三人は揃そろえたように中年太りにほのかに加か齢れい臭しゅうを纏まとい、なかなかの凄すごみを辺りに発していた。

　そこに漢祭り運営委員会のスタッフ達が、持ち込むに適正であると審しん査さしたアイテムを返していく。

　サケノッグは野獣染みた面ツラをした雄おすの鶏にわとりで、トマトマは案の定トマトである。

「サケノッグはわかるけど、トマトマのトマト、どうする気だ？」

　あぁ、とガーナが思い出したように声を上げる。

「何でも凄い毒を持ったトマトを数年かけて開発したとか。……それで先月辺りサラダ喰って病院に運ばれた奴やつが大量発生したんだよ」

「へぇ～……って、おい!?」

確かに先月辺りに謎なぞの食中毒事件が起こり、街の病院に大行列ができたことがあった。それがまさか……。

「多分、虎こ視し眈たんゝたんと作ってた毒トマトが他のと交わって、それが当たり前に出荷されて……って感じじゃないの？」

「……相変わらずおぞましいな、この街は……。ってか、あれ？　ジュニパーとジンの奴、何も返してもらってないぞ」

モルト以外の観客達も同様の疑問を抱いだいたらしく、辺りから声が上がる。

それに応こたえるように、ジュニパーが一人、前へ出た。

「聞け！　オレっちのアニキに最も相応しく最もアニキを示すもの……それは、漢気だ!!」

その声を聞いた瞬しゅん間かん、観客達が一いつ斉せいに歓声を上げる。

要は素手で行くと宣言したも同然であり……そうなれば、当然盛り上がる。

この街の住民は勇ゆう敢かんで無む謀ぼうな命知らずほど、好きなものはない。

「そしてオレっちは……アニキへの忠誠心だ!!」

また歓声が上がる。モルト達もまた、そこまでの潔いさぎよさには拍はく手しゆせざるを得なかった。

—こいつぁ期待できるぜ！　—第一組から行っちまうんじゃねぇの!?　—ひっさびさの最深部到達が見えてきたな！　—オレ、ゴロツキとか今まで大っ嫌きらいだったけど何か好きになれそうだ！

そんな声が次々に上がる中、胸を張った四人の男達は血に濡ぬれた神しん殿でんへと足を踏ふみ—。

「……あっ」

魔ま獣じゆうの血でジュニパーがぬるっと滑すべり、グギッと嫌

いやな音を響ひびかせると、神殿入り口の階段で盛大にすっころび、それを切っ掛けとしてドミノ倒しの如ごとくにジンを除く男達三人が地面を転がった。

「……うっ!!　ぐぁあ……っ！　し、しまった、こ、こんなところにトラップがあるだなんて……ぐぬっ!!　う、嘘うそだ、こ、こんな……ア、アニキィ、オレっちもうダメだ、足が……足がぁ……」

「まったく……仕方ないな」

　ジンがジュニパーの体をお姫ひめ様さま抱だっこで持ち上げ……そして、去って行く。

「……え!?　神殿行かねぇの!?」

　モルトは思わず声を出したが、それは辺り一帯の誰もが思ったらしく、大勢が頷うなずく。

「私が用意したのは漢おとこ気ぎ……そうである以上、大切なジュニパーがこうなってしまっては致いたし方ない。退くのも勇気、あえて自ら罵声を浴びるのもまた漢気なり」

「アニキ、アニキすまねぇ……オレっちのミスで。あんなスゲー罠わながあるなんて思わなかった……。アニキとオレっちなら最深部まで余よ裕ゆうだったのに、畜ちく生しよう……！」

「もういい、いいんだジュニパー。さぁ、帰ってイカ焼きでも一いつ緒しよに齧かじろうじゃないか」

「アニキィ……」

「気にするなジュニパー。私は街の英雄よりも、お前のような者を守り、導いていける……そんな一人の漢でありたいのだ」

　そんな二人が去って行くのを、モルトを始めとした全員が見つめ……気が付くと誰からともなく拍手が上がったのだった。

　そんな中、あら？　と、リーフィが声を上げる。

「鶏ニワトリさんが毒トマトを食べてますわ」

「あ、鶏ニワトリが泡あわ吹ふいてる」

　モルトの声で意識を取り戻もどしたサケノッグとトマトマが悲鳴を上げ、それぞれが持ち込もうとしていたアイテムに飛びかかるも……時すでに遅おそし。トマトは半分近くがなくなり、鶏は泡吹きながら痙けい攣れんしていた。

　この瞬間、二人はほぼ素手で地下神殿攻こう略りやくに挑いどむことが確定となったのだった。

　観客達から一ひと際きわ大きな歓かん声せいが上がり、今日一番の盛り上がりをみせたものの……二人が一階層も攻略できずに撤てつ退たいしたのは、言うまでもなかった。

2

　日が暮れ、祭りはいよいよクライマックスへと差し掛かっていた。

　神殿前では盛大に火が焚たかれ、大勢の人々が集まり、漢祭りの行く末を見守っていた。

　というのも、この祭り、当然といえば当然なのだが、最深部に到達できる可能性は後ろの組であればあるほど高くなる。そのため夜になると昼とは比べものにならない人数が集まってくるのだ。

　そこでは祭りの行く末を肴さかなに一いつ杯ぱいやる飲のん兵べ衛え達、たくましい男達を見てみたいとする子供達はもちろん、血ち腥なまぐさい祭りを一目見ようと押し寄せた怖こわい物見たさの旅人達……そんな大勢の人々で、賑にぎやかだった。

　地下神殿からペンとメモ帳を持った三人の男達が飛び出てくる。

　彼らは地下に潜るパーティの随ずい伴はん者であり、パーティの様子をメモに取り、地上に出てきて観客に伝える〝語かたり部べ〟と呼ばれる者達だった。

　彼らが現れると会場の賑やかさは唐とう突とつに失うせ、誰もが耳を澄すます。

「第二二組、全員満まん身しん創そう痍いのため、一九階層で撤退を決断！　繰くり返す、一九階層で撤退を決断!!」

　あぁ～……。そんなため息のような声が辺りから漏もれた。

　──二二組はいけそうな雰ふん囲い気きだったんだけどなぁ。──二階層攻略しただけでも大したもんだよ。──今年の魔獣、強くねぇか……？　──それもあるけど、多分……あの二人がまだ出てきてないせいで、攻略が遅いんだよ。──え？　でも、今年って二三組しかないって……まさか!?　──そのまさかだよ、一〇年前、最深部に到達した一人とその前年の最深部到達者である奴が、最終組で一緒なんだ。──なん……だと……？　──だが、いけるのか？　あと一〇階層もあるんだぞ!?　──奇き跡せきを信じよう、今年こそは……!!

　そんな声が聞こえる中……ついに漢祭り最終第二三組の漢達が、控ひかえ室より着き替がえを終えて観客達の前に姿を現した。

　若手である褌姿のモルトを中心とした、三人の漢達が観客の瞳ひとみに映った時、地鳴りのような歓声が辺りに響き渡わたった。

　漢祭りには運営上の観点から自警団員の参戦は認められていないのだが……それらを除けば、恐おそらく最強といえる者達である。盛り上がりは当然と言えた。

「リキュール、そして祭りにやって来たみんな……あとは任せろ！」

　モルトが歓声に両手を挙げ声を放つが、返ってきたのは、「期待背負ってんのはてめぇじゃねぇだろ（笑）」という笑いを含ふくんだ反応である。

　モルトはしょんぼりすると、観客エリア最前線で浴衣ゆかた姿のクラッツが苦笑いし、リッツが恥はずかしげにため息を吐つき……オリービーが「私は応おう援えんしてますからねっ」と口にして両の手を拳こぶしにして応援してくれている。

　モルトは彼女らに向かって何とも言えない気分で小さく手を振ふった。

「……まぁ、仕方ねぇか」

　モルトが振り返れば、納なっ得とくもできる。

組むこととなった二人があまりに強力だった。

クラッツの叔父おじにして安あん美び亭てい店主──グレーン。

街外れのパン工こう房ぼうにて日夜高みを目指し続ける職人──ピンガ。

グレーンは二メートルを越こえる大男であることに加え、筋骨隆りゆう々りゆう、顔はいかつく、体毛も濃こいため、普ふ段だんでさえオーガ染じみた雰囲気を纏まとっているのに、脱ぬぐと余計にそれが際立っていた。

一方のピンガは炭水化物が如何いかに栄養豊富で太りやすいのかを示すかのように、腹はおろか全身がでっぷりとした肥満体型ながら、その脂し肪ぼうの下には日々パンをこねるために蓄たくわえた尋じん常じようではない筋力を有している。特に肩かたから両りよう腕うでにかけてなど、別人のを取り付けたのではないかというように立派で、彼が鼻下に蓄えた立派な髭ひげ同様、実にたくましい。

それら二人の男が胸を張り、腕を組んで並び立つ様は圧巻と言って良かった。

身長一八〇、しっかりとした筋肉を持ち、世界を旅して修しゆ羅ら場ばを抜ぬけてきたことを示すように無数の傷きず跡あとを持つ体、その内にライと共に鍛たん錬れんを積んで蓄えた技わざを有するモルトとはいえ……この二人に挟はさまれてしまえば貧ひん相そうな印象でしかない。

会場は異様な熱気に包まれ、歓声で辺りの木々が揺ゆれるようだった。

そこに司会者の声が上がる。

「さぁ皆みなさんお待ちかね！　クライマックス！　漢祭りの名はこの組のためにあったと言っても過言ではありません!!　もはやこのパーティを相手にするには一個中隊規模の兵力が必要とさえ思われます……がっ!!　運営委員会よりここでご連れん絡らく!!　なんと、最終組は三人でしたが緊きん急きゆう参加する命知らずが現れたとのことです!!」

誰だれだ、誰だ！　そんな声が上がる。モルト達も聞いてなかっ

たので顔を見合わせていると……何だか見知った奴が闇やみ夜よの中から現れたのだった。

「モルトさん、お願いいたしますわ！」

　そう言って綱つなを引っ張るリーフィである。そしてその綱の先には……褌ふんどしを締しめて、とことことこヒヨコ歩きのピーちゃんの姿。

　会場内が、ざわめく。リーフィは先さき程ほど同様の豪ごう奢しゃな姿だが……その彼女が連れているのは、どう見ても中年を幾いくらか過ぎたオッサンなのだ。

　それも不健康なメタボ体型、濃のう密みつな腹毛ギヤランドウ、褌から若じやつ干かん溢あふれている公開していいのか微び妙みょうなラインである太もも周りのやや長い体毛……。そのくせして頭とう髪はつは薄うすく、すだれのような七三分けは脂あぶらぎった頭皮に貼はり付いているだけという有様である。

　そして一番の特とく徴ちようとしては、相変わらず穴の開いたボールを革かわバンドで口に固定されていることだろう。またそれと一体型になっている顔を隠かくすための蝶ちようを模した大きなマスク状の眼鏡めがねもまた……変態感を強く煽あおっていた。

「あのさ、リーフィ……？」

「こんな危険で面おも白しろそうなお祭りですもの……是ぜ非ひともうちのピーちゃんも参加させたいと思いましたの」

　フギュ……と、ピーちゃんオツサンは切なげに鳴いた。参加などしたくないのだろう。

「運営委員会の方々にお酒を差し入れたところ、快く承しよう諾だくしてくださいましたのよ」

　リーフィがニッコリと笑う。

　モルトがちらりと運営委員会の連中が控えているテントを見やれば……街の老人達が盛大に酔よっ払ぱらい、中には裸はだか踊おどりをしている奴やつまでいる始末である。

　司会者が続ける。

「こちら旅の途と中ちゆうであるリーフィさんの……えっと、ペット……ですか？　ペット、ピーちゃんを含んだ、モルト、グレーン、ピンガの四名が最終第二三組として最深部を目指します！……では、得物の返へん還かんです」

　グレーンは例年よりも大きい、膝ひざを抱かかえたガーナぐらいなら丸ごと上に乗りそうな鋼鉄製の巨きよ大だいフライパン。

　ピンガは、自分で今朝方焼いてきたとする一メートル半もある世界一硬かたいブレッドパン。

　ピーちゃんはすでに装着している口のボールボールギヤグ及およびそれを押さえるためのバンドや一体型となっているマスク状の眼鏡がそれらしい。

　そしてモルトはいつも履はいているブーツを申しん請せいしたのだが……何故なぜか返されたのは鞄かばんだった。しかも手て渡わたしてきたのは占うらない師しのチョココだ。運営委員会の一人だったらしい。

「あのさ、チョココ……俺のブーツは？」

　相変わらずフードを目ま深ぶかく被かぶった彼女は肩をすくめて、色白の顔で笑え顔がおを作る。

「この鞄の中よぉン？　裸はだか褌ふんどしにブーツだけだなんて、変態チックが過ぎるから地下に潜もぐってから履いてねぇン」

「例年その格好でやってたんだけど、俺……。ってか、変態チックって……」

　モルトやグレーン、ピンガは自然と隣となりに立っていたピーちゃんを見た。ピーちゃんは不思議そうに首を傾かしげて「フギュ？」と見返してくる。

　妙みような沈ちん黙もくが漢達の間に流れた。

「さぁ、アイテムの返還も終わりました。これより、地下への進しん撃げきの始まりです!!」

　司会者の声に背を押され、モルト達は若干の疑問を抱いだきながら、歩みを進める。

「頑がん張ばって、叔父さん！　モルトもしっかり！」

　クラッツからの応援──。

「モルトさん達ならいけますよ！」

　オリービーからの応援──。

「勝って一いつ緒しよに一杯飲もう、モルトぉ～！」

　若干酔っ払い気味のガーナの応援──。

　そして……。

「報ほう奨しょう金は丁度家賃三ヶ月分、あとはわかるでしょモルト！　頑張って！」

　……最深部まで潜っても賞金は全すべて持っていかれるのだろうな、という予感を若干感じさせるリッツの応援を受け……そして、大勢の観客の期待に背を押され、モルト達は地下神しん殿でんへと足を踏ふみ入れたのだった。

3

　地下は地上にある神殿の数倍の広さがあった。それが二九階層となると相当なものであり、とても今の技術でもってしても到とう底てい造れるとは思えないものだ。

　しかもただ掘ほった、というだけでなく、まさに内部も神殿然としていて、造りはしっかりとしている。

　床ゆかはところどころ朽くちたり割れたりもしているものの、石板が敷しかれ、壁かべには黄色く光る地下ヒカリ苔ゴケが拡ひろがっていて、視界も通る。何より古代の少数民族が作ったと思おぼしき、レリーフが壁一面にあったりと相当なものである。

　レリーフは、川の氾はん濫らんや、山の土ど砂しゃ崩くずれ、はたまた大昔の噴ふん火かといったこの地の歴史……特に、忘れては

ならない災害や争いなどの記録だとされていた。

　今では苔が繁はん殖しよくし過ぎてレリーフ表面を覆おおってしまい、その大半が見えないが……魔ま獣じゆうが跋ばつ扈こするここでゆっくりと観光する者など、誰もいないので放置されたままだ。

「ウォオアラオラアアオオアオオアオアアアアアァアァァァ!!」

　野や獣じゆう染みた声と共に巨大フライパンを振りかぶり、二メートルの巨体が、それ以上に巨大なゴーレム然とした魔獣に襲おそいかかる。

　数十キロの鉄の塊フライパンに加え、グレーンの巨体のエネルギー全てをかけたその一撃は、岩でできたゴーレムの頭を轟ごう音おんと共に粉ふん砕さいし……一九階層に居着いていた全ての障害を退けたのだった。

「さすがだな、グレーン。おれ様の見せ場がどこにもなかったぜ」

　肩に巨大なパンを担かつぐ髭デブこと、ピンガが鼻で笑う。

「……先は、長い。次、行くぞ」

　短く言葉を区切って喋しやべるいつものグレーンの口調は、今し方の戦せん闘とうなどなかったかのように落ち着いていた。

　ピンガが笑いながら先頭を歩いて行く。モルトは鞄を持ち上げると、背後で語り部達が地上に走って行くのを横目に、壁のレリーフに見取れていたピーちゃんに声をかける。

「ピーちゃん、次行くぞ。……どうした？」

　ピーちゃんが苔をかき分け、その下にあったレリーフを見ていた。それは街を襲う、背中に翼つばさを持った四本足の魔獣か何かの光景である。魔獣は山のように巨大だが、恐らくこれは制作者が意図的に比率を変え、恐ろしさを強調したものなのだろう。

「ピーちゃん、残念だがそれは一見すると犬や猫ねこみたいに見えるかもしれないが……お前のようにペットとかじゃないんだよ……。仲間意識とか持つなって。ほら、行くぞ」

「フギュ……」

　どこか名残なごり惜おしそうにしているピーちゃんを引き連れ、モルトはフロアの隅すみにある石階段を下っていく。するとすでに次の戦いが始まっていた。……今度はピンガが大活かつ躍やくだ。

　髭デブが、無数の鎧よろいを着込んで剣けんを持つガイコツ達を次々に打ち砕くだいていく。パンで。

「ピンガ、そのパンどうなってんだ？　金属製の鎧ぶち抜いて、剣を逆にへし折るって……」

　思わず出たモルトの言葉にピンガは鼻で笑いつつ、巨大な斧おので襲いかかってきたガイコツを鎧ごと貫つらぬいた。パンで。

「おれ様が研究に研究を重ね、そしてコネにコネ、焼きに焼いたこのパンは木よりも軽く、金属よりも硬いのさ。……パンでハニカム構造を再現するテクを編み出すのに二年かかっちまったぜ」

　二年かかって人間が喰くえないパンを作り出すパン職人というのはさすがにどうかと思うものの、余計なことを言うと自分もあのパンで貫かれかねないと判断したモルトはあえて黙だまった。

「さぁ、次行こうぜ」

　モルトがちらりと見やれば、語かたり部べ達がまたも地上へ駆かけて行くのが見えた。

　二〇階層近くまでなると移動に時間がかかるため、三班で情報伝達を行っているのだが、それでもなおあまりの攻こう略りやくの速さに語り部達も大おお慌あわてだ。休きゆう憩けいに入っていた第四班と第五班も参加するといった業務連絡をモルトは小耳に挟む。

「……まずいな、このままじゃ何もせずに最深部に行くぞ、これ」

　レリーフに興きよう味み津しん々しんのピーちゃんが活躍しないのはともかくとして、モルトが何もせずにいるのは今後の仕事に関かかわってくるかもしれない。何よりモルトの狙ねらいは報奨金と、街の英えい雄ゆうになることで奢おごってもらえる酒なのだ。

　いくら最深部に行った者が英雄扱あつかいされるとはいえ、何もしていない最強の二人にくっついていただけの奴に酒を奢ろうとす

る奴が果たして何人いるというのか。

「そろそろ活躍しねぇとな」

　二一階層では頑張ろう、とモルトは思うものの……ピーちゃんを引き連れ、語り部らと共に下へ下りてみれば……すでに骸むくろの山が築かれ、毛深い巨漢グレーンと髭デブピンガの姿がない。さらに下へ潜ったようだ。

「ヤベェ!?　急げ、ピーちゃん、進行が尋じん常じようじゃなく速いぞ！」

　語り部連中が青ざめるのを余所よそに、モルトは慌あわてて階段を下っていくのだが……地下二二階で見たのは、フロア一いつ杯ぱいに拡がる魔獣の肉にく片へんで彩いろどられた血塗られた道ブラッデイ・ロードだ。

　広いフロアの真ん中に一筋の道があり、その両りよう脇わきに大量の肉片が転がっているのだ。

　少し前までここに一体何がいたのか、そしてどうやってフライパンとパンでこれを為なしたのかは、その痕こん跡せきからはわからなかった。

　ただ、真ん中の道を、得物を肩かたに担ぐ二人の男が悠ゆう々ゆうと歩いて行く光景だけがあった。

　その光景はもはやこの地に降り立った鬼き神しんの背であり、見る者に畏い敬けいの念を抱かせる。

「……い、急げ、地上へ伝えろ！」

　語り部達もまた激戦の様相を醸かもし出しつつ、走り出す。

　二人のタフガイの後を追ったモルトはあまりの危機感に冷ひや汗あせを掻かいていたが、それは杞き憂ゆうだと二三階で知れた。

「クッ！　いきなり捕つかまっちまうとは……！」

「ぬ、抜ぬけ……出せん……」

　二三階層の魔獣は一体だけのようだが……これがなかなかにイン

パクトが強い。細い触しよく手しゆを何千本も集めて二メートル台の団子にしたような化け物がフロアの中央で蠢うごめいていた。そして、ピンガとグレーンがその触手に捕まって縛しばり上げられているのだ。

「こいつオレ様が突ついても、グレーンが叩たたいても平然としやがって……クッ!!」

　いよいよだ、モルトはそれを直感した。だが、あえて語り部達がこの絶望的な光景を目に焼き付けてから行動しようと、しばらく魔獣に近づかないでいると……ふと、何の警けい戒かいもなくピーちゃんが進んでいく。

「ピーちゃんとやら、よせ！　お前まで捕まっちまうぞ！　お、おいっ変態!?」

　ピンガの警告空しく、無数の触手がピーちゃんを襲い、縛り上げる……のだが……。

「なん……だと……？」

　いつも冷静沈ちん着ちやくなグレーンが驚おどろきの声を上げた。

　十数本の触手で縛り上げられたピーちゃんだったのだが……彼はまるで「やれやれ……」とでも言うかのように、首を振ふったのだ。

「ふぃばりふぁ、ふぁらいッ……!!」

　何らかの言葉を発すると、ピーちゃんが動く。怪かい力りきで知られるグレーンでさえ身動きができないほどに縛り上げる触手だというのに、まるで緩ゆる過すぎると言わんばかりにピーちゃんがするりと抜け出、自由を取り戻もどす。

　触手は再び襲おうとするものの……ピーちゃんは捕まらない。壁、天てん井じよう、そして迫せまり来た触手の先せん端たんに次々と、そして超ちよう高こう速そくで飛び移りながら魔獣の本体へと迫っていく。

　そういえばアレと初めて接せつ触しよくした際、結構な体術使ってたもんなぁ。モルトはそんなことを思いながら、多分今回も自分

の出番はないことを確信した。

　ピーちゃんが本体部に迫るにつれて、魔獣もまた焦あせりが出てきたのか十数本だった触手がさらに増え、数十本の触手がピーちゃんを追い掛かける。

　もはや触手は捕まえようとするのではなく、突き刺さして動きを止めようとしているのか、かわされた触手がカキンカキンと硬かたい音を立てて次々に壁に突き刺さっていく。

　しかしそれもさしたる問題ではないのか、ピーちゃんは重力を無視するかのように苔の生えた壁を走り、触手と触手の間をくぐり、跳とび……まさに舞まうが如ごとくにかわしにかわし、ついには本体へと迫り、その腕うでを伸のばす。

　直径二メートルもの触手の塊かたまりにピーちゃんは右腕を肩まで刺し込み、その巨体を跳び越こすと共に腕を引き抜く。

　着地したピーちゃんの手には……拳こぶし大の赤い宝石のような石。

「ふぁらいら……ッ」

　パリンッと、音を立て、ピーちゃんは片手でその石を握にぎり、砕く。

　その瞬しゅん間かん、フロアを埋うめ尽つくす触手が一瞬ビクンッと激しく反応した後、床の上を力なく転がった。グレーンとピンガを縛っていた触手も、同様だ。

「フゥ～……今のはヤバかったぜ。おい、変態。いい仕事だ」

「グッジョブ、だ」

　触手から脱だつしたタフガイ二人はそれぞれ親指を立て、ピーちゃんに微笑ほほえみかけた。ピーちゃんは照れたように頭を掻く。

「よぉし、変態。いい仕事をした奴やつにはご褒ほう美びだ。……おれ様の褌ふんどしと交こう換かんだ」

　ピーちゃんの動きがピタリと止まった。マスクのような眼鏡めが

ね越ごしにでもはっきりとわかるほどに、彼は「……え？」という表情で顔を上げた。

「……フ、フギュ？」

「いい活躍をした奴とは褌の交換を行う、それが漢おとこ同士の絆きずなを強めると共に、漢祭り最高の褒ほう賞しようなのさ。
さぁ、このピンガと褌交換だ」

　言いながらも早さつ速そく褌を解ほどきつつ、ピーちゃんに近づいていくピンガ。

　ピーちゃんが一歩、二歩と後あと退ずさりするものの……その背をグレーンが押さえ込んだ。

「さぁ、受け取れ、おれ様が朝から巻いていた褌だぜ？　……代わりにお前のをもらおう。安心しろよ、きっちり巻いてやるからな」

　褌を解かれていくピーちゃんが今まで聞いたことがないような悲鳴を上げ、いやいやいやとするように首を振るものの、グレーンに押さえられてはどうしようもない。

　股こ間かん丸出しのオッサンが二人になると、いよいよ褌の交換である。

「フ、フギュ――――――――――――――――――――――――!!」

　絶ぜつ叫きようが迸ほとばしる中、ピンガの汗と温ぬくもりが染みこんだ褌がピーちゃんの股間にグイッと宛あてがわれるのを、モルトは震ふるえながら見ていた。

　汚よごされちゃった、私、汚されちゃったよ……。そんな言葉が聞こえてきそうなほどに、哀かなしげに俯うつむき、マスク越しに涙なみだを拭ぬぐう仕草をしつつ……何故か自分の手を握ってくるピーちゃんを若じやつ干かんキモいとモルトは密ひそかに思った。

「こいつ、うれし泣きかよ。まったく、純じゆん朴ぼくな奴だぜ」

「あぁ、まったく、そうだ、な」

　ピンガとグレーンが「うんうん」というように満足げに腕を組み、快活に笑った。

「よし、絆が深まったところで次へ行くぜ！」

「あ、ピンガ、待ってくれ。……そろそろ疲つかれたろ。次は俺がメインで行くよ」

「大だい丈じよう夫ぶか、モルト。無理すんなよ」

「これでも何でも屋で日夜腕を振るってるんだぜ？　行こう」

　モルトはピーちゃんの手を引きながら先せん陣じんを切って二四階層へと下りた。

「……これはこれは、またおあつらえ向きなのが出てきやがったな」

　二四階層で待ち構えていたのは、人間の体をバラして作り上げたような……巨きよ大だいな蜘蛛くものような魔ま獣じゆうだ。

　ピンガやグレーンのものよりも筋肉質な太い腕が六本、それで人間の腹のようなボディを支え、そこから伸びる巨大な単眼の頭には大きな口が。

「これこれ、こういうのが俺にはお似合いさ」

　お手並み拝見といったように腕を組むグレーンとピンガにモルトは視線で手を出すなよ、と告げる。そして、語り部達がペンを持つ猶ゆう予よを与あたえてからモルトはそっと鞄かばんを床ゆかに下ろし、愛用のブーツを取り出す。

　モルトのブーツは特注品だ。数年ごとに足の形に合わせて職人に

作らせているそれは、足の裏、つま先、踵かかとを覆おおうように分厚い鉄板が入っている。おかげでやたらと重いが、それを身につけて繰くり出す蹴けりは鈍どん器きの一いち撃げきをはるかに上回る強きよう烈れつなものとなるのだ。

　そして何よりも、モルトはこれを履はいていなければいけないと自分に課していた。

　七年前、鋼鉄製の長なが柄え刀とうを扱あつかいこなすために手に入れた重しである。自分がその場にいることができるようにと、そんな祈いのりを込こめた重し──。

　だからこそ、今の彼にとって長柄刀を除けばブーツこそが己おのれに最も相応ふさわしく、最も己を示すアイテムだとしていた。

「ん？　この鞄、どうやって開けるんだ？　こうか？　あ、違ちがう、んーっと……？」

　モルトと一いつ緒しよに鞄を見やっていたピーちゃんが「フギュ」と唸うなると、素す早ばやい手口でさらりとその鞄の留め具を外してみせた。

　まるで魔法か凄すご腕うでの怪かい盗とうのような手さばきで、モルトは思わず驚く。

「あ、ありがとう、ピーちゃん。……何気にいろいろできるんだな」

「フギュッ！」

「よし、それじゃ早速俺のブーツ……が、ないんだよな……」

　モルトは鞄を壁かべのヒカリ苔ゴケの近くに持って行き、中を見るが……どう見てもブーツが入っているとは思えない。というか、入っていたのは石と封ふう筒とうが一つだけだった。

『例年ＯＫ出してたけどぉ～、委員会内でモルトのブーツってぇ、ちょっと武具臭くさくない？　って議題になったのぉ。それでこれはやっぱりダメってなったからぁ、代わりに私がモルトにピッタリのぉ、モルトらしい、如何いかにもモルトだなぁ～って思えるものを入れておいたからぁン、それをたっぷり使ってねェ～。　チョココより』

「……な、何言ってんだ、コイツ!?　それがこの石か!?　って、こんなのどう見てもただの石……いや、まさか何らかの魔力が込められたもの、とか？」

　モルトは鞄の中に入っていた二つの石を持ち上げ、魔獣に投げつけてみる。ごく普ふ通つうに当たって跳はね返って、床を転がっただけだった。

　魔獣さえも、どうしていいのかわからないようで、一つだけの目で困ったようにモルトを見つめてくる。

「……チョココ……あいつ、ただの石入れやがったのか!?　ってか、なんで石が……重しか!?　俺にブーツが入っていると思わせるために!?　嫌いやがらせか!?」

　愕がく然ぜんとするモルトに、何故なぜだかわからないが、ふと、チョココの声が聞こえた気がした。

〝あらぁん？　失礼ねぇ～、確かに石はただの重しよぉ～。でもそれとは別にちゃんと私が選んだアイテムが鞄の底に入ってるわぁン。よく見てぇ～〟

　妄もう想そうか何かのような気もしたが、モルトは頭に響ひびいた言葉に従い、鞄の底を漁あさる。すると、妙みように軽く小さい宝石箱のようなものがあるのに気が付いた。

　それを開ける。出てきたのは……女性物のパンティーだった。

　それを両手に持ち上げ、掲かかげたモルトは……しばし、固まった。

　手紙を回し読みしていたグレーン達もまた、頭に〝？〟マークを浮うかべてそれを見やるのだが……。

「お、おいモルトよ、それ、どういう意味だ……？」

　ピンガに問われたが、モルトにもわからなかった。

　たっぷり使ってというのはコレをその、いわゆるエログッズとして使っていいぞ、ということなのだろうか。確かにあの低血圧そうで、鬱うつ々うつとしながらも美人といえば美人であるチョココの下着だというのなら魅み力りよく的と言えなくもないアイテムでは

ある。使用感も多少あって悪くない。

　だが、問題なのは……。

「おい、モルト、お前、いつからあの、占うらない師しと、そういう……関係になったんだ？」

「いや、おやっさん、俺、そんな関係になった記き憶おくがない……っていうか……」

「っつぅか何だな、チョココの奴、案外ガキくせぇパンツ穿はいてんだな」

　……そう、年ねん齢れい不ふ詳しようながらどう見ても二〇歳は超こえていそうなチョココではあるが、モルトが掲げているパンツは白ベースの爽さわやかな水玉模様のパンツのそれであり……どう見ても、十代かそこらの子が使うタイプのものに見えた。

　そして、何よりの問題として……モルトにはそのパンツに見覚えがあるのだ。

「……これ、リッツのだ」

　━ざわっと、その場の漢達が後退った。

　当然と言えば当然だが、ほぼ裸はだか同然のいい歳としした漢達四人（内一人変態）が少女のパンツを掲げて囲んでいるという状じよう況きようは……いろいろな意味でヤバい。

　嫌な汗あせがモルトの全身に湧わく。

　間ま違ちがいない。これは、リッツのものだ。

　彼女が穿いているのを何度か見た記憶がある。

　お気に入りのものなのか、結構頻ひん繁ぱんに穿いていたはずだ……。

「こ、これでどうしろってんだよ!?　ってかこんなもんチョココアイツどうやって持ち出したんだ!?」

〝それは企き業ぎよう秘密よぉ～ン♪　あはっ、うふふふふ♪〟

恐おそろしく楽しげな声がまた頭に響いた気もしたが、それどころではない。

モルトはパンツを掲げながら……奴らを見た。

そう、語かたり部べ達だ。

「モルトの持ち込んだアイテムはアルコ・ホール三番街アパートの大家、その娘リッツのパンツだ！　水玉パンツッ！　メモを取れ、取ったら走れ！　地上の観客へ伝えるのだ！」

「モルトが己に最も相応しく、最も己を示すのは一二歳の女の子、リッツの夏を思わせる爽やかな水玉パンツとの判断、了りよう解かい!!」

「いやいやいや待て待て待て!!」

モルトは慌あわてて制止しようとするも、彼らは彼らで祭りの中で戦う猛も者さだ。止める間もなく凄すさまじい速度で駆かけ出して行ってしまうのだった。

「……俺、もう地上に戻もどれねぇよ……」

「諦あきらめろ、モルト。あの、占い師……気に入った相手、には、いつもイタズラ、する。それより、魔獣が、待ってる」

グレーンにポンと肩かたを叩たたかれた。

「けど、リッツのパンツでどう戦えってんだよ。……チョココの奴、たっぷり使えって……。使い道なんかねぇよ、こんなの」

モルトが掲げていたパンツにピーちゃんがそっと手を伸のばしてくる。

変態には欲ほしいものなのかもしれない。

何となく渡わたしたくなかったが、ピーちゃんはピョンっと跳とびはねて素早く奪うばい取ると……そっと、モルトの頭に被かぶせたのだった。

「……ちょっおま、こ、この変態、何して──!?」

　ビッとピーちゃんは最高の笑え顔がおで親指を立てて見せた。

「モルトはリッツのパンツを頭に装着！　頭に装着ッ!!　メモを取ったら地上へ急げ!!」

「モルト、少女のパンツは頭に被るものであると宣言ッ！　了解!!」

「そんな宣言してねぇよ!!　いろいろ不ふ可か抗こう力りよくだろうが!!」

　だが、そんな叫さけびなど聞く者はおらず、語り部班が全力疾しつ走そうで駆けて行ったのだった。

　ピンガが肩に手を置き、諦めろ、というように首を振ふった。

「まっ、何だ。とりあえず、あの魔獣倒たおしちまえよ」

「ちっ……ちくしょおおおおぉおおぉおぉぉおおめえぇぇええぇええぇえぇ!!」

　そうしてモルトはリッツのパンツを頭に被ったまま、巨大な魔獣へと立ち向かって行くのだった。

●

「第二三組、地下二四階層を突とつ破ぱ!!　何でも屋モルトが驚おどろくべき力でもって蜘蛛にも似た魔獣を駆く逐ちく!!　その様、まさに鬼き神しんが如ごとく!!　恐らく一二歳の少女が穿き慣らしたパンツの効力と思われる!!」

　地下神しん殿でんから飛び出して来た語り部の報告に、数百人、もしかすると一〇〇〇を越こえる数が詰つめ寄せている広場に、盛せい大だいな歓かん声せいが上がった。

　それが落ち着くと語り部が二四階層での激戦の様子を詳しよう細さいに語っていく。広場の者達は誰だれもがその言葉に興奮を隠かくせない。そして、商売人達はまた違った意味でざわついていた。

―モルトの奴やつ、妙に強くねぇか？　魔獣の超ちよう高こう速そくの連続攻こう撃げきや大量の糸攻撃を目にも止まらない速度でかわすとか、アイツ、そういうタイプじゃなかっただろ。―あぁ、しかも素手で魔獣の足を……。妙だな。―やはり……パンツか！―あぁ、一二歳のパンツが鍵キーだな。―確かにそんな幼い少女のパンツを頭に被るっていう発想がなかった。もしかしたら魔術の供く物もつとしての意味があり、何らかの特別な効能が発揮され、モルトに力を与あたえているのやもしれん。―ほぅ……金の臭においがしてきたな。―あぁ、来年から滋じ養よう強きよう壮そう・強運・健康のお守りとして祭りの名物にできる!!　―今から準備しようぜ!!　来年はパンツを被るのがトレンドだ!!

　そんな商しよう魂こんの塊かたまりのような商人達の声がところどころから聞こえてくる中、サシャの隣となりでは当のパンツの持ち主であったリッツがそれらを語り部の言葉と共に耳にし、赤い顔で震ふるえていた。

　彼女の口の端はしが片側だけ吊つり上がり、ピクピクと痙けい攣れんしていて……手元には、いつの間に買い求めたのか、会場近辺で売られていたカナヅチが握にぎられていた。

「……モルト……モルト……あんのぉクソモルトめ……絶対、許さない……」

　―この子は、ヤる気だ。サシャは直感した。身震いした。

「リッツ、あの……いや、うん……」

　ギロリと睨にらみ付けられたサシャは、それ以上何も言えなかった。

「リッツちゃーん、オイラの頭にもおパンチュッちょーだぁい！ウエヘヘヘ!!」

　酔よっ払ぱらいがそんな言葉を放った次の瞬しゆん間かん、パンツではなく、カナヅチが会場の空を鮮あざやかに舞まったのだった。



●第六話『祭りの後に残りしもの』

　漢おとこ祭まつり最終組……何でも屋・モルト、安あん美び亭てい店主・グレーン、パン職人・ピンガ、そして変態・ピーちゃんは、褌ふんどし姿でそれぞれの得意とする得物を手に神殿の最深部を目指し、二四階層に至っていた。

　そこで、ついにモルトは己おのれが愛用し、最も己らしいものであるとした得物を装備する。

　──そう、リッツのパンツだ。

1

　パンツを被ってからのモルトはまさに鬼神が如き活かつ躍やくを見せた。

　恐らく語り部によって、あの何百人、ヘタをすれば一〇〇〇人以上という観客に多大な誤解を含ふくんだ情報が伝えられ、チョココが笑い、リッツが衆しゆう人じん環かん視しの中で恥ち辱じよくと憤ふん怒ぬに顔を赤らめて震えているのが容易に想像ができたせいである。

　ヘタをすればリキュールの歴史の一ページに『何でも屋モルトは、一二歳少女の水玉パンツこそが自分であると口にした』と記録されるかもしれない。

　……もはや、何もせずに地上に戻ればどうなるかわかったものではない。

　何としてでも一〇年振ぶりに最深部に到とう達たつし、祈いのりを捧ささげて報ほう奨しよう金を得、その全すべてをリッツに納めたりでもしないとアパートから追い出されかねなかった。

だからこそ、彼は粉ふん骨こつ砕さい身しん、暴ぼう虎こ馮ひょう河がで魔ま獣じゅうを次々に打ち破っていったのだった。

その姿にピーちゃんは「ホォレロ、ロウリョウヒャ、ファ……？」と謎なぞの言葉を紡つむぎ、「モルト、お前、普ふ段だんより、動き、いいな」とグレーンが高い評価をし、そしてピンガが「よし、褌の交こう換かんだ」と迫せまった。

……そうして、いろんな意味で満まん身しん創そう痍いになりつつも、四人の男達はついに最後の障害である地下二八階に棲すまっていた魔獣を打ち破るに至ったのだった。

それより下の最深部の二九階層は神木が生えているだけで、魔獣はいない。

「……これで、終わり、か。やったな」

「おぅ、グレーン、ついにやり遂とげたな。……ハハッ、オレ様特製の世界一硬かたいパンも……この粘ねん液えきの前には軟やわらかくなっちまって、さすがにビビったぜ」

二八階層にいた最後の敵は、巨きょ木ぼくのような胴どうの太さを持つ、巨きょ大だい蛇へびの魔獣だった。

それだけなら良かったのだが……問題はこの蛇のような魔獣が、体中からぬるぬるとした粘液を大量に生み出すので、フロア全体がぬめり、滑すべり、とても立っていられる状態ではなかったことだ。

「あぁ、俺やピンガ、おやっさんだけじゃ、この蛇の化け物みたいなのは倒たおせなかったかもしれない。……ピーちゃんのおかげだよ」

全身に粘液を纏まとまとわせながら尻しり餅もちついているモルトは、魔獣の死体の上で腰こしに手をやってポーズを取るピーちゃんを見やる。

パンがふやけ、フライパンが折れ、リッツのパンツがずれて股こ間かん部がモルトの顔を覆おおいそうになったりと、様々な意味で危機的状じよう況きように追い込まれながらも、彼らが無事に打ち勝てたのはモルトが言うようにピーちゃんの活躍ありきだった。

　最後の最後、もうこのままでは負けるとなった時……漢達は最後の賭かけに出たのだ。

　牙きばが生える魔獣の巨大な口をグレーンが押さえ、その開いた口の中にモルトとピンガで褌をつかみ、粘液を全身に纏わせたピーちゃんを投げ込んだのだ。

　ぶよぶよとしたメタボ体型のピーちゃんの体は粘液と相まり、ヌルンッと魔獣の喉のどを滑って体内に入り込み……そして腹の中から攻撃を繰くり出して、この最後の戦いにケリをつけたのだった。

「この四人だったからこそ、手にできた勝利だな」

　ピンガが口にすると、三人の漢達は一様に頷うなずき、互たがいを見やった。

　最後の戦いと互いの健けん闘とうを称たたえる様子をも見届けた語かたり部べの一人が走って行く。

　きっと最深部に到達したことを知った観客達は一様に笑え顔がおで歓声を上げ、漢達の美しい友愛に心を震わせることだろう。……リッツ以外。

「さてと、それじゃ、やるべきことをやっちまおうぜ」

　ピンガが言うと、グレーンが頷いた。

「あぁ、下へ……祈りに、行くぞ。ご神木が待っ──」

「おいおいグレーン。……それじゃねぇだろう」

　ピンガがニヤリと笑う。

「……さぁ、褌の交換だ。全員でな」

　疲ひ労ろう困こん憊ぱいした最後の最後に、さらなる追い打ちをかけるような仕打ちだったが、もはや誰もこの流れに逆らうことはできなかった。

　しかしながらモルトがグレーンのを受け取るものの……汗あせだくになるほどに戦い、そして不ふ審しんな粘液が纏わり付く温ぬくもりたっぷりな褌はさすがに装着への抵てい抗こうは凄すさまじ

かったが……今いま更さら逃にげ道などないのだ。やるしかなかった。

「……もう、引き返せるところじゃねぇよな……畜ちく生しょう……」

　モルトは驚きよう異いのタフネスを見せ、グレーンの温もりがたっぷりと残った褌で己の股間を締しめ上げる他ほかなかった。

　頭にリッツの穿はき古したパンツ、股間にグレーンの使用済み褌……。

　その時、彼の目め尻じりから垂れた雫しずくが粘液だったのか、それとも違ちがうものであったのか……それは誰にもわからなかった。

　股間に違い和わ感かんと不快感を覚えたまま、ぬめりに足を取られそうになりつつ、モルト達は最深部、地下二九階へと階段を下る。

　そこはそれまでの広かったフロアとは違い、縦長の細く、狭せまいエリアだった。

　何故かヒカリ苔ゴケがここだけ生えていないのだが、それでもかろうじて視界は通っている。フロアの奥に神木とされる木が一本生えており、これが淡あわく光っているのだ。

　その光によってうっすらと壁かべのレリーフが浮うき上がっていた。木を挟はさむようにして左右の壁にあるのは、等身大の美しい女性のものである。

　粘液を纏わり付かせた漢達四人は作法に則のつとり、神木の前で片かた膝ひざを突つき、手を組み合わせ、頭を下げる。

　リキュールの平和と豊ほう穣じよう、商売繁はん盛じよう、よりうまい料理を作れるように、より硬いパンを焼けるように、リッツの怒いかりがほどほどで済みますように、そしてフォリフォイファイファンフォ……漢達はさりげなく自分達の願望を混ぜ込みつつ祈りを捧げた。

「よし、これで、終わりだ。オレ達は、街の英えい雄ゆうだ。しばらく」

　しばらくといっても、大体一週間もすれば祭りの熱気が消え、忘れ去られる英雄である。だが、その間の飲み食いは豪ごう勢せいにいけることだろう。

　英雄となった者に飯や酒を奢おごれば、その勇ゆう猛もうさの一部を得られるとされているのだ。

　ピンガが肩かたを回しながら、ふぅ、と一息ついた。

「全て滞とどこおりなく終しゅう了りようだな。……じゃ、帰ろうぜ！」

　祈りの様子を伝えるために残っていた語り部達全員がモルト達に先立って地上へ向かって走って行く。

　彼らが詳しよう細さいを語り伝えれば、観客達が今年の英雄を出で迎むかえる準備を始めることだろう。

　……リッツ以外。

「さぁ俺達も行こうぜ、ピーちゃん……ピーちゃん？」

　ピーちゃんが何故か床ゆかに耳を押し当て、下を指差す。何かあるのかと思って、モルトもまた耳を付けてみると……何やら水の流れる音がしていた。

「あぁ、ここは相当に深いからな。多分、アレだ、街の大衆浴場で使ってる温泉か、川の方の水脈があるんだよ、きっと」

　モルトの言葉にピーちゃんは首を捻ひねる。何か納なつ得とくできていないようで、彼はまるで虫か何かのように床に耳を当てながら辺りをウロウロし始め……ついには神木の裏側にまで回り、モルト達を慌あわてさせた。さすがに神木の裏に行くなど、バチが当たりかねない。

　モルト達が変態を取り押さえようとフォーメーションを組んだ、まさにその時だった。

「フギュー！」

　ピーちゃんの声が上がり、モルト達も神木越ごしに彼を見やれば……なんとそこには、地面に扉とびらのようなものがあったのだった。

「何だ、コレ。……取っ手がある……まさか、開くのか？」

　モルトもまた裏に回ってみると、壁のレリーフと同じようなデザインが入った扉だった。

　今まで誰だれにも気付かれなかったのは、神木の裏にあるということに加え、どうも天てん井じようからの瓦が礫れきや砂などが降り落ちて、表面を覆ってしまっていたせいらしい。ピーちゃんが這はいずり回ったことでそれらが─体に纏う粘着液によって─除のけられたようだ。

「……開けてみる……？」

　モルトが言うと、他の漢達も好こう奇き心しんに負けて、迷った挙げ句に頷いたのだった。

　モルトがその扉の取っ手をつかみ、引き上げる。

　金属なのか石なのか、何なのかよくわからない感かん触しよくの扉はかなり重く、固い。だが、モルトの踏ふん張りによって、それは鈍にぶく、ゆっくりと、轟ごう音おんを立てて開かれたのだった。

「……マジかよ。階段があるぞ。しかも何か、下の方が明るい……」

「おい……この、地下神しん殿でん、まさか、二九階、が、最後じゃねぇ……のか」

　ピンガとグレーンが愕がく然ぜんとしていると、「フギュッ、ギュー」とピーちゃんが楽しげに階段を降り始めてしまったので、慌てて他のメンバーもまた後を追った。

「他の階もそうだったが……何で空気が淀よどんでないんだろな」

　モルトの呟つぶやきに他の漢達も首を捻るように、頷いた。

　確実に一〇〇年や二〇〇年は開かれていないと思われるその扉で

はあったが……空気はむしろ他の階よりも澄すみ切っているほどだ。

　降り行くに従い、かすかに聞こえていた水の音がはっきりと聞こえてくる。

「こ、こりゃすげぇや……」

　地下神殿の最深部に降り立ったモルト達が見たのは……それまでのフロアよりもはるかに広い空間を有する地底湖だ。しかも何故なぜだかわからないが、水面が淡く青く光り、仄ほのかに明るく、どこか浮き世離ばなれした雰ふん囲い気きで充みち満ちていた。

　ピンガが地底湖の水に触ふれる。

「……程ほど良く温かいな。源泉にしちゃ入るに丁度良すぎる気もするが……まぁいいか」

　ピンガが唐とう突とつに褌ふんどしを脱ぬいだ。その様子にモルトとピーちゃんがビクッと反応する。

　このパターンはまさか、と二人の傷を負った心が地じ獄ごくの褌交換会に怯おびえたのだ。

「せっかくだ、ひとっ風ぷ呂ろ沿びてから上に戻もどろうぜ!!」

　その声に、モルト達はホッと胸をなで下ろし……できることなら一分一秒でも早く褌を脱ぎ捨て、また体中の粘液を洗い流したかったので、即そく座ざに賛同し、そしてついに全員が下半身を露ろ出しゅつさせた。

　ピンガを先頭に漢おとこ達は温かい地底湖の中に足を踏み入れる。

　足から波は紋もんが広がり、地底湖全域に拡ひろがっていくのだが……。

〈おぉ……懐なつかしや、懐かしや……人だ、人だ、人が来た……あぁ懐かしや、懐かしや〉

　信じられぬほどに澄すんだ女の声が辺りに優やさしく響ひびき、漢達は互いに顔を見合わせた。

漢祭りはその特性上、女性参加者はいない。というより、恐おそらく現在地下神殿にいるのは地上に向かっている語り部を除けばモルト達しかいないはずである。

「な、なんだ……誰だ？」

モルトは思わず呟く。いるとすれば魔獣の類たぐいしかないのだが……。

〈そんなことまで忘れてしまったのか……人の子よ……わらわはこの地、この山を治め、水の恵めぐみをもたらすもの……。どれ、今、姿を見せよう。あぁ、懐かしや……〉

モルト達が立ちすくんでいるというのに、湖面に波紋が起こる。それは広い湖の中央から穏おだやかに広がり、水中の光もまた、強まっていく。

そして……その水中から、光を纏った女性がゆっくりと現れたのだった。

淡くグリーンに光る薄うす手でのベールに身を包んでいる彼女は、同色の髪かみを足首まで垂らし……水面に立って、俯うつむいていた。

「こりゃ、すげぇ……」

──これは人なのか？　モルトの中に素そ朴ぼくな疑問が生まれた。

何せ……纏うのが半はん透とう明めいのベールである。様々なものが見えに見える。薄暗い地底湖で柔やわらかに光を放つものだから、そりゃもう大変に目立っている。

まるで理想を形作る彫ちよう刻こくそのままの、大きくも型かた崩くずれのない張りのある胸、柔らかに、しかしきちんと締まった腰、大きくも扇せん情じよう的な尻しり……そして、無毛。

これほどまでに美しい剃てい毛もう・脱だつ毛もうをモルトは見たことがなかった。髪と眉まゆとまつげ以外の毛という毛が存在せず、初めから生えていなかったかのようにツルツルだ。

「人の子よ……恐らく覚えてはおらぬであろう、人の子よ。……わ

らわがこの山を治め、水の恵みをもたらし女め神がみ、エビ……………………………………………え？」

　俯いていた彼女が顔を上げ、その瞼まぶたを開き──固まった。

「エビ……？　エビの、女神……か？」

　グレーンが顎あごをボリボリ掻かきながらそんなことを言うのだが……返ってきたのは──。

「ふぅわあぁあああぁあぁああぁぁああぁあぁあぁぁぁあああぁあぁあぁぁああぁ!?」

　──絶ぜつ叫きょうだった。

　あ～……とモルトは思う。

　彼女が何者かわからないものの……女神だろうが何だろうが、女性であるならこの状じよう況きようは凄まじいだろう。

　体毛の濃こい野や獣じゆうの如ごとき巨きよ漢かんのグレーン、両りよう腕うでだけ太いデブ体型のピンガ、メタボ体型でギャランドゥだけはグレーンにも対たい抗こうしうるボールギャグの間からヨダレ垂れ流しのピーちゃん……。

　全員がそこそこいい歳としなのに加え、激戦の結果、若じやつ干かん息を荒あららげ、全身に粘ねん液えきと汗が入り交じったゲル液を纏まとわせているのだ。

　しかも、全ぜん裸らで。

　この三人がなかなかの変質者に思われないわけがなかった。

　こりゃ面めん倒どうな誤解を招くかもしれない。そうなった時は一番まともな俺がなんとかしないといけないだろう。

　モルトはそんなことを考えつつ、頭に馴な染じみ出していたリッツのパンツの位置を直した。

　無論、全裸で。

　モルトは彼女に落ち着けとジェスチャーするように手を伸のばし

つつ、そっと近づく。

「あのさ、エビの女神さん？　とりあえず落ち着いて欲しいんだけど……」

　はわわわわあわあわわぁあぁっ、と女神は水面の上でしゃがみ、近づくモルトに指先でパシャパシャと水をかけてくるのだが……その体勢が良くなかった。

　半透明のベールを羽織っただけの実質全裸の女がしゃがむと、いろいろと見えてしまうもので……思わずモルトは男として当然の反射行動により、彼女の体のいろいろを凝ぎよう視ししてしまう。

　その結果、男の本能がモルトの体にとある変化をもたらしてしまうわけなのだが……。

「ひっ、ひぃぃいッ!?」

　女神は女神でモルトの股こ間かんを凝視し、愕然とし、そして……目尻から雫しずくを垂らすと、ふらりと力なくその場に倒たおれるのだった。するとそれまで当たり前に水面に立っていた彼女の体は水しぶきを上げて沈しずんでいく。

「こりゃ、やべぇ！」

　グレーンの声に漢達が一いつ斉せいに動く。地底湖は中央に近づくに連れて意外なほど深くなっていき、女神が沈んだ場所はもはや足をつけてなどいられないほどになっていた。

　しかも粘液が水でもなかなか落ちず、水中に潜もぐったモルトも容易に女神を引き上げられない。……えらく、滑すべるのだ。

　しかし、そこは最下層まで辿たどり着いた英えい雄ゆうたる猛も者さ四人である。

　彼らは力を合わせ、沈んだ女神を担かつぎ上げると何とか湖から引き上げることに成功したのだった。

「……で、この美人さん、どうする？」

　モルトが訊きくと、グレーンが頭を掻く。

「とりあえず、上に、連れてくしか……ねぇ、だろ。魔ま獣じゆう、出るかもしんねぇし」

　その後、褌を穿はこうとしたものの、救助作戦の際に湖の深みに沈んでしまったらしく……仕方なく、たくましき漢達は全裸のまま、ほぼ全裸の美女を担いで地上に戻るという夢のような状態で帰き還かんすることになったのだった。

　途と中ちゆう、モルトは二九階層の神木を囲むレリーフの女性の姿と、今彼らが神み輿こしが如くに「わっしょいわっしょい」と担ぎ上げている女性とが少し似ているような気がし、それが何を意味しているのか、この街、この山トルシユ・オマロン、そしてこの地下神殿ダンジヨンの意味とそこに隠かくされた真実に気付き……そうになったが、地上に出た後、全すべて忘れた。



頭にパンツを被かぶったモルトを先頭として、英雄なる漢達四人が全身をぬめぬめさせながら全裸の女性を担いで地下より現れたことで、漢祭りはここ数年で一番の謎なぞの盛り上がりを見せると共に、モルトの頭にリッツが放った鈍器カナヅチが強きよう烈れつに叩たたきつけられたせいである。

そうして自じ称しようエビの女神とモルトはそのままリキュール総合病院へと急ぎ担ぎ込まれることになるのだった。

無論、全裸で。

2

「……っていう、夢を見たんだ」

病院のベッド脇わきの椅い子すに座りながら、リンゴの皮を剝むいてくれているクラッツに、モルトは夢の中での壮そう大だいな物語を語った。

クラッツがため息と共にそっとどこかを指差す。

モルトの目がその指を追うと、それはカーテンで区切られた隣となりのベッド。

モルトはベッドで半身を起こし、失礼、と口にしながら手を伸ばしてカーテンを払はらってみれば、そこには淡あわいグリーンの長い髪をした女が唸うなりながら眠ねむっていた。

「そうそう、こういう感じの美人さんでさ」

モルトは払いのけたカーテンを戻すと、クラッツからリンゴを受け取って頰ほお張ばった。まだ少し青いようで、シャクシャクとした歯は触ざわりはいいのだが、甘みより酸味の方が強い。

「そりゃもう、凄すごい体をしていたもんだよ。……激戦後ってのもあったんだろうが、つい男としての本能がな」

「あ、そう。それさ、あたしに聞かせて自分って最低だなぁっとか思ったりしないわけ？」

　クラッツは呆あきれ顔で包丁を置くと、近くの棚たなに体を捩よじるようにして肘ひじを置き、頬ほお杖づえをついて、足を組んだ。

　彼女は仕事の合間に看病に来てくれたらしく、いつものシックなスカートにコルセット・ベストで胸を強調するように絞しぼり上げた格好だ。腰こし周りのくびれが相変わらずいい。

　祭りの期間であったら浴衣ゆかたを着ていたので、さらにいい光景になったのだろうが……。

「まぁやたらにリアルな内容だったけど、全部夢の話だからな。与よ太た話だよ。……この紳しん士したるモルトがたかだかスタイル抜ばつ群ぐんの自称女神（全裸でしゃがみ体勢）を見たからといって、そんなそんな興奮しまくりだなんて……ははっ、何をバカな」

　ぺちっと、クラッツはモルトの包帯が巻かれている額を指で弾はじいた。酷ひどく痛い。

「ところで、クラッツ。俺は何故なぜ頭に包帯を巻いて病院のベッドで寝ねていたんだ？　怪け我がの具合や体に残る疲ひ労ろうからするに割と強敵と戦ったような気がするんだが……俺は一体どんな化け物と……というか、今いつだ？　祭りってどうなって……」

「お祭り？　終わったよ？　ここ最近じゃ一番盛り上がってた」

「何だよクッソー、俺が寝ている間にやっぱり終わっちまったのか。……で、俺は何と戦ったんだ？」

　クラッツが再びどこぞを指差したので、そちらを見やれば……わずかに開いた窓、その縁ふちにカナヅチが置かれていた。

　まるで誰だれかを撲ぼく殺さつしたかのように、乾かわいてこびりついた黒ずんだ血の跡あとのあるそれは、モルトの目からすると一目で鍛冶かじ職人が一流の大工職人に向けた逸いつ品ぴんだと知れた。しっかりとした重量がありながらも握にぎる手によく馴染む、そんなハイクラスの品だろう。

　リキュールの祭りの露ろ天てん商しようではこういった高品質な

品も売られているが、これはその中でもなかなかの部類である。

「そうそう、夢の中でこんなカナヅチでリッツにさ。あいつ、もう、人混みかき分けるんじゃなくて、人混みの上を飛び跳はねて襲おそいかかってくるとは、さすがに予想がつかなかったなぁ。あの夢の中じゃリッツもまたリキュールの住民っつぅか、最強部隊の末まつ裔えいだってのを如によ実じつに感じたぜ。……まあ現実は相変わらず病弱で――」

「……あの、さ」

　クラッツがグイッと顔を寄せてくると、モルトと額を突き合わせた。

「これ、いつまで続ける？」

「……そ、そろそろいいかな……」

　クラッツはモルトの胸むな元もとを押してその反動で離はなれると、腰に手を当てて立ち上がった。一方のモルトはしくしくと、泣きの演技をしつつベッドに倒れる。

「……だ、だってさぁ、リッツの奴やつ、完全にアレ、殺しに来てたぜ……。プロの暗殺者だってあそこまで殺意一いつ辺ぺん倒とうで襲ってこねぇって……」

「そりゃそうでしょうが！　自分のパンツを勝手に持ち出されて、これぞ己おのれを示す最たるアイテムだって言って、祭りのクライマックスで頭に被られて、街中が注目する中で意い気き軒けん昂こうで暴れられて、商売人達が来年度はそのパンツのコピー商品を大々的に売り出そうぜって真しん剣けんに会議始めたら……思春期の女の子だって殺意の一つや二つ抱いだくに決まってるでしょ!? むしろ自殺しようとしなかっただけで立派よ！」

「……いろいろ言いたいんだけどさ。今し方語ったように、根本原因はチョココだし、被ったのはピーちゃんのせいだし、最後に至っては俺関係ないじゃん……」

「じゃ、なんで出てくる時まで被ったままだったの？」

「クラッツは知らないだろうがな、一度被るとリッツのパンツって、こう、結構頭に馴染むん……痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛

い痛いッ！」

　クラッツの指先が包帯の巻かれたモルトの額をグイグイと押して来る。

　モルトはベッドの上で藻も掻がいて逃にげると、必死だったんだから被ってるの忘れてもしょうがないだろ、と少し拗すねた。

「冗じよう談だんでもそういうこと言わない。リッツちゃん、まだ一二歳よ？　アタシだってそれされたらマジギレどころじゃないってのに」

　実は冗談ではなく、不思議とリッツのパンツはモルトの頭にピッタリと収まり、被っていると意識しなくなるぐらいの装着の良さであり……気が付くと、少女のパンツって頭に被るものだろ？　と、そんなことを当たり前に考えるほどだったのだが……モルトとて伊達だてに二〇年以上生きてきたわけではない。ここは黙だまっていた方が好感度が高いと感じて、口を噤つぐんだ。

「モルト今、街中の評判凄いよ？　変態、変質者、ロリ野や郎ろう……何でも屋ってのはそういう意味か……とか」

　一通り受け入れないでもないが、最後のだけはどういう意味だというのか。

　……ひょっとしてピーちゃんに手を握られていた辺りのことを語かたり部べ連中が面おも白しろおかしく脚きやく色しよくして大変な事態を招いているのではないか……。

　モルトの脳のう裏りにおぞましい想像が浮うかんだものの……怖こわかったので、とりあえず考えないことにした。

　何より仮にそうだとしても、一いつ瞬しゆんでそれを払ふつ拭しよくすることは可能である。

　モルトはキリッとした顔でクラッツの手を取った。

「……でも、そんな俺を信じ、こうして看病に来てくれた……嬉うれしいよ、クラッツ。どうだろう、そんな噂うわさを払拭するためにも俺達、そろそろ━痛い」

　ぺちっと、クラッツはモルトの頭を叩いた。

「さて、帰ろうかな」

「もう少しいて欲しいな」

「いや、帰れよ」

　声は意外な方向から聞こえ、モルトはクラッツと共に見やれば……そこにいたのはヨレヨレの白衣に、ボサボサのショートボブをした眼鏡めがねの女。

　リキュール総合病院の若医院長こと、女医のソイである。

「祭り期間は漢おとこ祭まつり運営委員会の連中から金貰もらってベッド空けてあったし、面めん倒どうも見る契けい約やくにもなってる。……が、いくら意識が戻もどらないといったってもう祭りが終わって半日だぞ。いい加減出ていけ」

　彼女の父親である前医院長が半ば引退して、ソイに全権が移ってからというもの、この病院はあらゆるところでシビアになったと聞いていたが、まさか入院患かん者じやに出ていけとまで言ってくるというのは、驚おどろきだった。

　しかもたった半日が過ぎただけである。

　そんな不満を述べてみると……女医が愚ぐ痴ちる。

「では、別料金を取るが、それでいいのか？　お前、無一文だろ、モルト。最深部到とう達たつの報ほう奨しよう金はもう大家の娘むすめだかが代わりに受け取っていったと聞いたぞ。入院費となるといろいろと高くつく……確かく認にんするが、まだ、いたいのか？」

「……もう、いたくないです……」

　哀かなしみに暮れるモルトはカナヅチを再び窓の縁に置くと、病院のベッドを下りた。

「あと、そっちの剃てい毛もうが恐おそろしく綺き麗れいな女も誰かに引き取らせろ。どう見ても無一文な以上、面倒見切れんぞ」

　そんなことを言われても、とモルトとクラッツは少々顔を見合わせた。

「怪我や病で意識がないわけじゃないのが面倒臭くさい。起こしようがない。医者の出番じゃないだろう」

「そう愚痴られても……。あー、ともかく着き替がえるかな。……そういや、俺の服は？」

「あ、それならあたしが預かってる」

　はい、とクラッツから服が渡わたされたので、モルトは更こう衣い室にて病衣から着替える。

　誰の手によるものかわからないが、すっかり洗ってあって、気持ちが良かった。

3

「ねぇ、先生、さすがに厳しくない？　モルト、結構……その、アレだったんでしょ？」

　少し躊躇ためらいがちに訊きいたクラッツに、ソイは「はんッ」と小こ馬ば鹿かにしたような声を返した。

「病院ここで寝てようが、家で寝てようが変わらんさ。何より少し調べりゃわかるが、アイツはそんなヤワな体はしていない。他ほかの奴ならともかく、あの何でも屋の体なら大した怪我じゃないのさ。……そこの小さいのにもそう伝えておけ」

　やはり無毛の女の方こそどうにかせんとなぁ、とボヤきながら彼女は病室を出て行った。

　クラッツは大きく息を吐はくと、わずかに開いていた窓を大きく開けた。

「……だってさ」

　反応はない。

　チラリと横目で見やれば、窓の脇わきの外がい壁へきに体を預

け、俯うつむいているリッツがいた。

　哀しげで、寂さみしげな彼女を見ていると、クラッツは思わず微笑ほほえんでしまう。

「もう、いいかな？　そろそろ夜のお店の用意しないといけないのよ。お祭り後はお客さんが多くってねー」

「……ありがと、クラッツ」

「あとは自分で、しっかり、ね。できるわよね？」

「……え、う、うん……。あ、いや、でも……だって……」

「はっきりしないなぁ」

「……だって……」

　クラッツは窓からいくらか身を乗り出して、リッツの頭を撫なで、笑ってみせる。

「だってだって。そんなことばかり言ってちゃダメだって」

　相も変わらずかわいい子だと、クラッツは思う。

　生意気で、年ねん齢れいの割にしっかりし過ぎていて、そのくせして一ひと皮かわ剝むけば弱々しい幼い少女が顔を出す。どちらが本当の彼女なのか、長い付き合いのクラッツでもわからない。多分、本人もわからないだろう。

　モルトは……どうなのだろう？

「ん？　どうしたクラッツ。窓から落ちるぞ。危ないなぁ。どれ、俺が……」

　モルトが着替えて来たようだ。クラッツははいはい、と応じながら窓を閉め……ようとしたのだが、尻しりを撫で上げる感かん触しよくに「うひゃっ」と声が上がった。

　そして、窓の縁に置いてあったカナヅチを反射的につかむと、クラッツは何ら躊躇いのない、殺意一辺倒の一いち撃げきをニヤニヤしていたモルトに放ったのだった。

　目の前でガタイのいい男が頭から血を噴ふき出しながら倒たおれていき、カーテンを押しのけ、エビだかの女め神がみの上に覆おおい被かぶさった……というか、モルトの肘ひじが女神の鳩尾みぞおちに入り、彼女もまた「オブチッ！」と謎なぞの呻うめきを上げ、二人が同時にベッドから落ちて病院の床ゆかを転がったのだった。

　荒あらい息のまま、今一度血に濡ぬれたカナヅチを手にしたクラッツと、その足あし下もとに転がった男女二人。まるで恋こい人びとの浮うわ気きを目撃し、激情に駆かられてついやらかしてしまった殺人事件かのような状態であった。

　クラッツが冷ひや汗あせを流しつつ、窓の外を見やれば……もうリッツの姿はどこにもない。

「……ん？　おいっ！　お前、何している⁉　ここは病院だぞ⁉　怪け我が人増やして何しようってんだ⁉」

　女医が戻って来るなり怒ど濤とうの勢いでまくし立てて来たので、クラッツはたまらず呻いた。

「……だってぇ……」

4

「つまり、こういうことか。自分は女神なる存在であり、遥はるか古いにしえよりこの地に住まう生命と共存し、特に人と深く交流をしてきたものの、ある時を境にぱったりとそれがなくなって、割と寂さびしく思っていたところだった……と？」

「うむ。そうだ。どれだけの時間であったかは、もう、はっきりとはしないのだが。……人は勝手なものだ。たまに会いに来るかと思えば、途と端たんに来なくなるのだな」

　病衣のまま、すまし顔でエビにして無毛な女神──エビーザは匂においを嗅かいでからハーブティーを口にする。苦手だったのか、少し渋しぶい顔をしてカップを戻した。

　一方、穏おだやかではないのが、彼女を囲むリキュールの政治を

執とり行う一三人の議員を始めとした大勢の街の人間達である。

　ちなみに安あん美び亭ていの看板娘にして、とりあえずモルトが肘打ちを叩たたき込んだ責任もあるとして仕方なしにエビーザを店に連れてきたクラッツと、今年の英えい雄ゆうが一人にして彼女を地下より連れ出してきたグレーンもまた穏やかではいられない。

　大衆酒場らしく広い店内は人という人でごった返しているものの……誰だれも彼もがエビーザの話に注目する余り、日が落ちて幾いくらも経たつのに誰も食事や酒を注文しないのだ。席が埋うまって立ち見が出ている以上、新しい客も入って来られず、開店休業状態である。

　そんな店内のカウンターの隅すみにて、新しい包帯を頭に巻いたモルトは、慰い謝しや料りよう代わりにクラッツからウィスキーを一いつ杯ぱいいただいたので、それをチビチビと貧びん乏ぼうたらしく舐なめつつ事の成り行きを見ていた。

　医者からしばらく酒を止められていた気もしたが、グラスの中の琥こ珀はく色いろの方がそれよりもはるかにうまくモルトを従える。

　本当ならばリッツに頭を下げに行った方がいいのかもしれないが……何分、自分達が連れてきてしまったエビーザが気になる……という建前の元、問題を先送りにしていた。

　帰宅したら鍵かぎが替かえられている可能性が十二分にある。そんな哀しみを急いで味わうこともない。今は芳ほう醇じゆんな香かおりに身を委ゆだねていたかった。

　議員達がそわそわと落ち着きなく、相談を繰くり返す。

　──これはまさか、本当に本当なのでは？　──漢祭りの英雄達の事情聴ちよう取しゆとも矛む盾じゆんはないが……。──確かに山を崇あがめていた少数民族は女神の像を作っていたと記録があったはずじゃ。──ということは間ま違ちがっても頭のおかしい、かわいそうな美女というわけではないのですな？　──ほう、これは実に興味深い。

「フンッ、なるほどな。……ところで、そんな女神を勝手に連れ出してしまって、問題はないのか？」

　若き議長マドラーの至極もっともな意見に、野や次じ馬うま達もまた同様に疑問に思ったらしく、女神に視線が集まる。

「大だい丈じよう夫ぶだ。山から流るる水や湯はわらわがいなくとも数百年は変わらぬだろう。……しかし人の服というのはどうして、このような……」

　エビーザは言うなり、着ている病衣を摘つまんだ。

　それは入院患者などが着る服で、ボタンで押さえる前開きのワンピースのような作りになっていたのだが……そのボタンを唐とう突とつに彼女が外し始める。

　その豊満な胸の谷間を見せつけたかと思えば、さらにその下へと手を伸のばしていき、野次馬達から歓かん声せいが上がる。女性陣じんが慌あわてるものの、エビーザの手は止まらず、その無毛な体がどんどんと露あらわになっていく。……が、下腹部に到達する直前に素す早ばやい身のこなしで前に出た野次馬の一人、サシャが止めた。

「なんだ？　人の子よ」

「おやめください、女神様」

「わらわは人ではない。このような格好は本来の姿ではない」

「それ以上は人の身には眩まぶしすぎるのです、女神様。どうか、お赦ゆるしくださいませ」

　優やさしげな美青年の微笑みは、人でなくても共通の効果があるらしく、女神はその手の動きを止めた。

　露ろ出しゆつした胸をサシャに向けると、彼は膝ひざをついて恭うやうやしくボタンを留めていく。

　その姿はまるで女王に仕える騎き士しのような所作であり、絵になっていた……が、そんなもの男達には関係がない。

　──カッコつけてるんじゃねぇ！　と辺りから本気の罵ば声せいが轟とどろく。

　そして、即そく座ざにゴンッ、ガンッ、ボンッ、と、クラッツが

手にした銀の盆ぼんで声を上げた男達の頭をぶん殴なぐっていった。

「……お前、反省の色ないのな」

　モルトがボヤくと、歪ゆがんだ盆を手にカウンター奥に戻もどるクラッツは肩かたをすくめて見せた。

「お客ならともかくだけどね」

　気が付くとサシャが質問役となって女神に疑問を投げかけていくスタイルとなり、進行がスムーズになり、ようやく事の次し第だいが明らかとなっていった。

　山を治め、水の恵めぐみをもたらすその女神は……元々は精のようなものだったらしい。しかしながら、ある時を境に、緩ゆるやかに人との交流が始まったものの……ある年、とてつもない日照りの日々が続き、水が大量に必要になった時期があったらしい。それで、村を助けて欲しい、と、一人の少女が自らを人ひと身み御ご供くうとして捧ささげたのだそうだ。

「それがこの体だ。……わらわは人身御供など欲ほしいと思いはしなかったが、人と会話をするのに都合が良かったのでな」

　それまでの精としての彼女は人と交流するとなると、一部のシャーマンを介かいしていたらしい。それが煩わずらわしかったので、少女と混じり合い、一つになったのだという。

　それによって女神となり、人々とより一層の交流を深めたのだそうだ。

「しかし、時を経へたことでわらわの助けはもう必要とされなくなったようだ。……戦争を経て、辺りは荒あれたものの、集落は活気に溢あふれ、見事な発展を遂とげている。喜ばしいことだ。暮らしの変わった街を見られたのは思わぬ収しゅう穫かくだ。……あのようなおぞましいものを見せられたことの引き替えに見合うかは、甚はなはだ疑問だが」

　野次馬達の視線がそれとなく店内にいたモルトに集まる。ピンガはパン職人である以上夜が早くてすでに寝ねているし、ピーちゃんはリーフィの元でかわいがられていることだろうし、グレーンは調理場に逃にげ隠かくれて顔をわずかに覗のぞかせるばかりだし

で……一人で全すべての視線を受けるモルトは針のむしろであった。

「……そうはいっても、正式な祭りを実行しただけで……いや、まぁ、最後に全ぜん裸らだったのは問題かもしれないけどさ……」

「おぬしのおかしなものを見たせいで、わらわの中の娘むすめの魂たましいが長き時を経て無理矢理起こされ、さすがに慌てたぞ。……そもそも──」

　漢おとこ祭まつりは元来、この地に根付いていた儀ぎ式しきを再現したものである。だが、女神が言うには、現在のそれは過去のものとまったくの別物であり……モルト達を見た瞬しゅん間かん、悪あしき輩やからが攻せめ込んできたのかと思ったレベルだったという。

　本来この地にあったのは年に一度、女神との交流を行うために山の湧わき水で禊みそぎを終えた乙女おとめ達が裸はだかのまま、祭さい儀ぎ用の剣けんのみを携たずさえて地下三〇階へと降り、その地底湖で歌と舞まいと祈いのりを捧げる……といったものらしい。

　それが今や、年に一度、命知らずの屈くつ強きような漢達がケツに褌ふんどし喰くい込ませながら、雄お叫たけびと悲鳴、汗と血、そして勝利と敗走を貪むさぼりながら最下層の一つ前の神木に祈って帰ってきたら酒を飲む、というようなイベントに取って代わってしまっていた。今年に至ってはそれが粘ねん液えきまみれの裸のオッサン達という有様である。

　一度は途と絶だえた伝統を街まち興おこしのためにと、文ぶん献けんを漁あさって復活させた以上、どうしても差異は出るものだが……真実はあまりにも残ざん酷こくな様相を呈ていしていた。

　しかもとどめに、神木だと思っていたのは女神曰いわく、ヒカリ苔ゴケとは敵対関係にあるヒカリダケの一種で、神聖でも何でもなく、人の来ない戦時中に勝手に生えて大きく育ち、それっぽい木になっていただけの、何らありがたみもクソもないものだったらしい。

　先さき程ほどまで盛り上がっていた店内はまさに水を打ったかのように静かになり、全員がどこか申し訳なさげに俯うつむいていた。

─祭りの後はいつだって寂しく、切なさが溢れている。

　そんなことを口にした詩人がいたな、とモルトは何となく思うが、今店内を占しめているのは明らかにそれらとは違ちがう切なさだった。

　ほぼ裸で地下へ降りて祈りを捧げる、という概がい要ようこそあっているものの……それ以外の全てがことごとく違う上、誤った伝統を重んじてアホほど毎年盛り上がっていた自分らが恥はずかしいやら哀かなしいやら……そういう感じである。

「まぁ、そう気を落とすな。昔の祈き禱とうのそれも、わらわが求めて行われていたものではなく、人々が勝手にやっていたものだ。祭りは神のためではなく、人のためにある。魔ま獣じゅうが出るようになった以上は以前のようにはできん故ゆえ、今後も好きにすればよい」

　そうして硬かたい口調とは裏腹に、ニッコリと柔やわらかに女め神がみが笑ってみせると店内に歓声が上がった。

　─話がわかる女神様だぜ！　─こりゃ逆に来年から盛り上がるぞ！　美しい女神に会うために漢達も熱くなるってもんよ！　─しかも地底湖じゃほぼ全裸なんだろ、若ぇ連中が鍛きたえまくるぞ、これは！　─絵師を連れてこい、来年の宣伝ポスターにこの女神様の似顔絵を！　─いや、裸ら婦ふの絵を……!!

「しかし、男共の全裸はやめるのだぞ」

　やれやれといった様子に女神が言えば、店内がドッと笑いに包まれた。

　─いやぁいい女神様だ、こりゃいいぞ！　─そうだ、最深部に行った漢には絶世の美女たる女神が妻になるやも……と噂うわさを流せばさらに人が増えるんじゃねぇか！　─いや、そうなると嘘うそくさい、最深部に到とう達たつした漢達は女神といいことができてしまうという噂をだな……。─それらをまとめて古代からありし伝説として歴史をねつ造すれば真実味が増すんじゃねぇか!?　─いける、これはいけるぞ!!　─今すぐ運営委員会に来年までに噂を流る布ふするよう伝達じゃ！　─フンッ、いい流れだ。金の臭いがしてきたぞ。

　議員達が一気に精力的に喋しゃべり出したのを小耳に挟はさんでいると、リキュールの街がどうしてこうも発展し続けられたのか、そしてどうしてこうも真実から遠ざかった祭りになってしまったのかが、よくわかった気がした。

　モルトはウィスキーを飲み干すと、カウンターの中で呆あきれているクラッツに空いたグラスを翳かざして見せる。クラッツはすぐに気付いてグラスを受け取ると……そのまま流しの洗い物の中に入れてしまうのだった。

　チェッと舌打ちして、モルトは席を立つ。ほろ酔よいにはいささか遠く、これから辛つらい現実に立ち向かうには少々心こころ許もとないが、懐ふところはもっと心許なかった。

「……仕方ねぇさ、今いま更さらどうしようもねぇもんな。パンツが頭に馴な染じんでたのは紛まぎれもない事実だ……土下座でもするか……」

　モルトが諦あきらめと共に店を出ようとした時、背後から声を掛かけられる。女神だった。

「わらわを連れ出した一人たるお前。そう、お前だ。名は何という？　……モルト、か。では、モルト、ひとつ責任を取ってわらわを地下へ送り届けてもらおうか」

　店内が女神の言葉にざわついた。てっきり誰だれもがこの街に今しばらく居座ってくれるものとばかり思っていたようだ。

「うむ、おぞましいものを見せられ、勝手に連れ出され、意識混こん濁だくしているところに肘ひじ打ちを喰らわせられたりと、なかなかの体験をさせられたわけだが……」

　モルトは何となく俯く。厨ちゅう房ぼうの陰かげからわずかに顔を覗かせていたグレーンも、今や奥に完全に引っ込み、気配を殺していた。

「何にせよ、結果として悪いものではなかった。……だが、人とわらわがあまりに多くを接しているのは自然とは言えぬ。今までうまくいっていたというのなら、また離はなれていた方がいいだろう。互たがいに今回は希け有うな体験の記き憶おくとして胸に留とどめるだけで十分に過ぎる」

そう言われてしまうと、さすがに誰も何も言えず、引き留めようとする者も出なかった。

「いや、でも、送り届けるにせよ魔獣がもう出ているかもしれないから一人じゃ……」

「わらわの責任を取れ、モルト」

胸に手を当て、エビーザは言う。美女に言われてこんなにも嬉うれしい言葉はないが、しかし、あの地下神殿ダンジョンに一人で挑いどむというのはさすがに無む謀ぼうが過ぎた。

気配なく店内にいた議長の秘書、クリミオが呆れるように言葉を紡ぐ。

「祭りではないので、長なが柄え刀とう、使ってもよろしいのでは？」

「あ、それならまぁ……一人でも最深部まで行ける、かな」

「さらばだ、人々よ。楽しい邂かい逅こうであった。今後は祭りの賑にぎわいと共に誰かしらが訪おとずれるのを、気長に待つとしよう」

モルトとやら、頼たのむぞ。女神はモルトに声を掛けると共に、人々の視線の中、席を立つ。

彼女と共に店を出ようとする際、モルトはクラッツから小ぶりな酒さか瓶びんとサンドウィッチを渡わたされたが……恐おそらくは、事の成り行きを隠れながら見ていたグレーンからの差し入れだろうと、モルトは察した。

5

「恐らく魔獣が出るようになったのは、辺り一帯が戦火で焼かれたせいだろう。荒れ地となっては魔獣とて暮らせぬ。山に逃げ込み、そして神殿の中に入り込んだのだろうな」

そんな女神の話を聞きながらモルトは山の階段を上っていた。

議員や野や次じ馬うま達は女神に「見送りはいらぬ」と一いつ蹴しゆうされると共に、歪んだ盆ぼんを持ったクラッツから椅い子すに座った以上は必ず何か注文しなければ店から出さない、と脅きよう迫はく紛まがいに言われたがために、今は二人だけだった。

薄うす着ぎの美女と男、モルトが手にした魔光球が収まるランタンを提さげているとはいえ、暗い階段を上り行くというのは……その後の展開をいろいろと考えさせるものだが、さすがに意識混濁から目覚めて数時間の今のモルトに手を出す気力はなかった。

何より空がいつの間にか薄うす曇ぐもりになっていて、軽く一雨来そうなのが、モルトを憂ゆう鬱うつにさせる。さっさと終えて屋根の下に逃げ込みたかった。

「女神自身が魔獣を配置していないっていうんなら……やっぱりどこかに穴か何かあるんだろうな」

「そうだろう。そして、居い心地ごこちの良い下層に強きよう靭じんなものが居座ることを考えるに、上の階のどこかか」

裸一丁とはいえ、全力で戦っているモルト達では感じる余よ裕ゆうはないものの、温泉の一部が流れ込む地底湖の関係から階を下った方が暖かく、居心地がいいものらしい。

そんな話をしつつ、サンドウィッチをかじり、ワインを飲み、神殿までエビーザを案内した時……ふと、モルトは気が付く。

今は、祭りが終わった翌日の夜である。ということは……。

階段を上りきり、祭りの観客が押し寄せた広場にして神殿前に到達した時……モルトは自分の予想が当たっていたことを確信した。

「お？　よぅ、モルト。どうしたんだ、こんな時間にこんな場所で」

「お、おぅ、ライ……」

　地下神殿ダンジョン前の広場に、先客としていたのは自警団の若き団長、ライである。相変わらず快活な少年染じみた顔をしてモルトを迎むかえた。

「そっちは誰だ？　あ、アレか、確かお前達が地下から連れてきただかいう……？」

「エビーザだ、人の子よ。この山を治めるものでもある。……モルト、行こうか」

「え、おい、アンタ……ちょっと!?」

　止めようとしたライの目の前で、エビーザが躊躇ためらいなく服を脱ぬぎ始める。

　暗くら闇やみの中でも眩まぶしい肌はだ艶つやが現れ、それを直視したライは、石像のように固まった。

「安心するといい、人の子よ。わらわは人ではない。この姿でいる方が自然なのだ」

　文字通りに一糸纏まとわぬ体で、女神は神殿へと歩いて行く。

　姉以外の女の裸を見慣れぬ、というより相変わらず一八でも未いまだ初心うぶが過ぎるライをその場に残し、モルトは内心ハラハラしつつ、女神の後を追った。

「あ、あのさ、エビーザ。とりあえず、服を……」

「もう神殿だ、問題はないだろう。……ムッ、何だ、この扉とびらは……」

　神殿の入り口は、鋼鉄の扉がネズミ一いつ匹ぴき出入りできぬほどびっちりと塞ふさぎ、巨きょ大だいな錠じよう前まえがしてあった。

　エビーザが触さわってもビクともしない。モルトがやっても同様

だろう。

　何せ、物質的な鍵かぎではないのだ。

「うほぉ！　なんじゃモルトぉ、その美女はぁ～！」

「こりゃたまらんっ、たまらんのぅ!!」

「若返るのぅ～～～!!」

　神殿の脇わきで酒盛りをしていた三人の老人が、いい肴さかなが来たとばかりに騒さわぎ立て始める。魔導士ギルドの爺じいさん達だった。

「……おい、モルト、これは……どういう……」

「いや、実は……」

　魔獣がやたらと潜ひそむ関係で、ある時から神殿には鋼鉄の扉が取り付けられ、それをリキュールに派は遣けんされている魔導士ギルドが総力を挙げ、自警団団長の指揮の下もと、魔導を用いる鍵によって約一年間、開かないように封ふう印いんしてしまうのだ。

　次に開くのは来年の漢おとこ祭まつりである。

「……その鍵をかけた者達に……ほれ、今すぐ開けさせ……」

　モルトはチラリと飲んだくれの三人を見やる。彼らは顔を見合わ

せ爆ばく笑しようした。

「そりゃ無理じゃ、グリコゥ国が最盛期を誇ほこった頃ころに作られた最高品質の時限錠じゃもの！　わしらが束になって魔力を注いでも破れん破れん。制作したメーカーの技術屋共でもなけりゃぁ、どこぞの大魔導士を連れてこようが、悪あく魔まを喚よぼうが無む駄だじゃてのぅ～」

「……モルト、取り急ぎその者達を……」

「エビーザ、そのグリコゥ国って国自体が、もう一〇年前に滅めつ亡ぼうしてて……」

「……つまり、開かぬ、と？」

「うん」

「……一年、開かぬ、と？」

「うん」

　エビーザは今一度鍵を触り、モルトを見、また鍵を触り、モルトを見……を繰くり返した。

「……ぇ？」

　女神の切なすぎるか細い声が、無む慈じ悲ひに山に消えていった。

6

　霧きり雨さめが止やむのを待っていたら、夜はすっかりと更ふけていた。

　しかしおかげですっかり空は明るい。

　星々と月が輝かがやく空の下……モルトは重い足取りでアルコ・ホールへと戻もどってきた。

　これから自分の部屋の鍵が付け替かえられているか否いなかを確かく認にんする……そう考えるだけで気が重い。

　仮にまだ大だい丈じよう夫ぶでも、今後も大丈夫とは保証されていない。単に替えの鍵の在庫がないだけで今現在発注している最中かもしれないのだ。これから毎日の帰宅が怖こわくなる。

　その前に何とかしてリッツに謝罪をし、全すべてを有う耶や無む耶やにしなくてはならない。

　今まで散々いろいろなことをやらかしてきたものの、大半がチョココとピーちゃんのせいだとしても、今回ばかりはさすがにやり過ぎていた。

　安あん美び亭ていにランタンを返し、モルトはアルコ・ホールの大通りを進み、三番街へと向かう。

　先日までそこいらの通りには屋台が並び、道は人々で埋うめ尽つくされ、賑わいがアルコ・ホール外にまで漏もれていた。

　けれど、祭りが終わってしまえば、ここはこうも閑かん静せいなものだったかと思い知らされる。

　──祭りの後はいつだって寂さびしく、切なさが溢あふれている。あれだけあった活気が何もない。だからこそ、代わりにそれらが満ちている。街は器うつわ。いつだって何かで満たされている……。

　そんなことを書いた詩人は誰だったか。

　そんなものを読んだのは、いつだったか。

　そんなふうに考えつつ、モルトは足を進めていく。

　どこか現実逃とう避ひのそれなのだと、若じやつ干かん感じつつ……。

　そうして辿たどり着くのは、この街では珍めずらしい三階建てのアパートだ。

　ここを我が家と、帰る場所だと思い決めてから何年が経っただろうか。

　街に来て十年、その後自警団の団員寮りようでライと共に数年を過ごしたから五年か六年……そんなところだろう。

　そしてその帰る場を維い持じするための五年か六年だったといってもいい。

「いよいよ……かな」

　再び根無し草として世界を彷徨さまよう日々に戻るのだろうか。

　それともライに誘さそわれているように、再び自警団に所属してその寮に住むのか……。

　何にせよ、切ない苦笑いを漏らさずにはいられない。

　モルトがアパートの前に来ると、不意に何かの気配を感じ、反射的に長柄刀を握にぎる手と、ブーツの中の足の指に力が入った。

「……モルト？」

　その声に、モルトは一気に力を抜ぬく。……リッツだ。

　彼女はアパートの入り口の壁かべに寄りかかっていたようなのだが、すでに時刻は夕ゆう餉げのそれをとうに越こえている。子供が出歩く時間ではない。

　こんな時間にどうしたのかと思ったが……ひょっとすると長い時間ここにいたのではないかと、モルトは気付いた。

　アパートの前は軒のきこそあるが、雨が降れば足下に水が来るのは避さけられない。リッツのサンダルに雨染みが見受けられた。

「……はい、これ」

　リッツは躊躇いがちに、顔を背そむけながら手にしていたバスケットをモルトに差し出した。

「……絶ぜつ縁えん状じよう？」

「バカ。違ちがうから」

　モルトが受け取って中を覗のぞいてみると……そこには、大きめの布に包まれたサンドウィッチが詰つめてあった。

「えっと……リッツ、どうしたんだ？」

「その、三ヶ月分の家賃として……最深部到とう達たつの報ほう奨しよう金、先にもらっちゃったから……だから、その……モルト、お金、今ないでしょ？　だから夕食に……」

　やっぱり、長くここにいたのだろう。

　サンダルの雨染みもそうだが、それと同じぐらい、サンドウィッチのパンの端はしが乾かわいていることからも、それは察せられた。

　彼女は、ずっと、ここで待っていてくれたのだ。

　絶縁状ではないと彼女は言った。ということは部屋もある。食事もある。リッツは怒おこっていない……こんなに嬉うれしいことはなかった。

「ありがとう、リッツ。いただくよ。……そして、ごめんな。漢祭りの時は……実は……」

「知ってる。……あの占うらない師しのせい、でしょ？　だから、いいよ。謝らなくて。むしろあたしが……その……」

　その様子を見て、モルトは思う。恐おそらく自分が神しん殿でんに向かっている間にクラッツ辺りから真相を聞いたのだろう。いや、そうするとサンドウィッチの準備ができないが……ともかく、そんな感じだろう。

「……あの、さ、モルト……」

　子供らしい中ちゆう途と半はん端ぱなプライドが邪じや魔まをして、素す直なおに謝れないでいるのかもしれない。

　夜でもわかるほどに顔を赤らめ、視線を彷徨わせ、そのくせして絶対にモルトと目だけは合わせようとせず……ただ、息が苦しいかのように、当たり障さわりがないクセに自分の気持ちを代弁してくれる、そんな都合のいいありもしない言葉を探し続ける……そんなリッツの姿が、モルトはたまらなく愛いとおしい。

　モルトの左手はバスケットで、右手は長なが柄え刀とうで塞がっていた。一いつ瞬しゆん躊ちゆう躇ちよしたものの、モルトは長柄

刀を壁に立て掛かけ、空いたその右手でリッツの頭を撫なでた。

　触ふれられた瞬間、ビクッとリッツは反応するも、頭を撫でられているとわかると、顔の赤みはそのままに、どこか不満げな顔でモルトを見上げてくる。

「ありがとう、リッツ」

　もう一度、言った。リッツの顔の赤みが増し、表情に先さき程ほどよりも不満が色いろ濃こく表れた。

　地下で本当は何があったのか、それはもうリッツはわかっている。

　祭りの時は思わず殺す気でカナヅチを振ふるってしまった。それを悪いと思ってサンドウィッチを作り、こうしてずっと待っていて、あの時はごめんなさいと謝ろうとしていたのだ……というのが全部、モルトにはわかっている。

　そして……それをリッツもわかっている。

　お互たがいに相手を理解し合い、その結果、自分が負けている、子供っぽい……そう思っているが故ゆえに、リッツの顔は赤く、不満げなのだ。

　そして、そんな様子をモルトは愛らしく思っているということも、きっと彼女は察していることだろう。だから、恥はずかしくて、表情が変えられない。

　一方、そんな様子を見て、モルトの微笑ほほえみは深くなる。

「傷も大したことはない。あの女医に、もういたくないって言って、出てきたんだしな」

　どんな謝罪よりも、今のこの表情が、モルトにとってはたまらなく嬉しいものだった。

　だから、もういい。大丈夫。わかっている。謝らなくていい。むしろ謝るのは被かぶったまま出てきた俺の方。……そんな気持ちを込こめてモルトは微笑みながらリッツの頭を撫でた。

　目と目、手と頭、けれど、それで言葉以上に伝わる気持ちという

ものがある。モルトはそう思い……リッツの表情が氷のように固まった時には、確信もした。

　リッツの視線が明らかにモルトではなく、その後ろを見ており……彼女の温かかった心が急激に冷え切っていくのが、モルトには嫌いやというほどわかった。

「どうしたのだ、モルト。この建物か、お前の住すみ処かは。早く案内するのだ。いい加減この服とやらを着続けるのも辛つらくなってきた……ふぅ」

「……モルト、説明をしてもらえる？　その地下から連れてきたストリッパーとどういう関係なのか」

　先程まで赤らめつつ不満げだったリッツの顔は、今や冷静な色を取り戻し、冷たい視線をモルトに向けている。

　モルトはリッツの視線に耐たえきれず、逃にげるようにして背後を振り返る。エビーザがすでに病衣を脱ぬぎつつあった。

「あぁ、その……実は、このエビーザは……その、いろいろあって……」

「わらわの責任を取る、モルトはそう約束したのだ。そのためこれから共に寝しん食しよくを……」

「へぇ、責任を……へぇ？」

「あのな、リッツ、これは……」

「モルトよ、なんだ、それは？　おや、お前、先程それをたらふく喰くらっていなかったか？　まだ食べようというのか」

「……あ、何だ、もう夕飯っていうか、サンドウィッチ食べたんだ。へぇー。じゃ、迷めい惑わくだったよね。ごめんね、モルト。もういらなかったよね」

　何故なぜこうも冷たい〝ごめんね〟はさらりと出てくるのだろうか。先程までの言いたいけど言えないという状態のかわいいリッツはどこへ行ったというのか。

　モルトは考える。興味のない壁へき画がを見るような顔をする

リッツの頭に乗せた手から、違うんだ、これは誤解が……と必死に弁明の気持ちを伝えようとしつつ。

　しかしそんな気持ちなどいらぬ、とでも言うかのように、リッツはモルトの右手を弾はじき飛ばし、彼の左手にぶら下がっているバスケットを奪うばい返そうとするのだが……モルトは必死にそれだけは阻そ止しした。

　バスケットを抱だきかかえるモルトだったが、リッツの手がそこに伸のびてきて、引っ張り出そうとする。

「どうせもう食べたんでしょ!?　ならいらないでしょ!?」

「いやだいやだ！　食べる、食べたいんだ、リッツのが食べたいんだよ！」

「随ずい分ぶんと欲よくが深いのだな、モルトは。あれもこれも食べたいなどと……まったく」

　閑静な夜にそんなことをやっていたせいか、気が付くと辺りには人が一人、また一人と増えていき、気が付くとアパート前には大勢の物見が現れていた。半はん裸らのエビーザの魅み力りよくも強いが、彼女はおろか、幼いリッツをも食べたいとするモルトの強ごう欲よくさに人々の興味が引かれて、集まってきているようだ。

　──おいおい、モルトの奴やつ、強欲がすぎねぇか。──なんてひでぇんだ。一人最愛の者がいりゃそれで十分だろうに。──あの地下から来た女、いい乳してんなぁ。──いやわかる、わかるぞ。男なら女はいくらいてもいい！　そういう生き物だものな！

「何だか騒さわがしくなってきたな。……どれ、モルト。わらわは先に部屋に行っているぞ。三階の端の部屋だったな」

　そう言って一人さっさとアパート内に入っていくエビーザをリッツは見送ると、愕がく然ぜんと呟つぶやいた。

「え、なに、本当に……一いつ緒しよに……本気で…………？」

「と、とりあえず一晩だけだって！　明日あしたにはちゃんとどこかに放流して……！」

　──おいおい、モルトの奴、非情すぎねぇか。──なんてひでぇん

だ。女なんて一度抱だけばそれで満足だってのかよ。──あの地下から来た女いい尻しりしてんなぁ。──いやわかる、わかるぞ。男なら責任なんて負いたくはない、一度抱ければそれでいいんだもんな！

　そんな外野の声がしばらく続き、最終的に、モルトはクソだ、という意見で統一され、騒ぎを聞きつけた自警団員が駆かけつける事態に発展したりしたのだった。

　一方その頃ころ……そんなモルトとリッツを中心とした状じよう況きようとは特に関係ないところで、一人深刻な事態に陥おちいっている者がいた。

●

「どぅれ、そろそろ帰るかのぅ。夜も更ふけて寒ぅなってきた」

　魔ま導どう士しギルドの一人が空いた酒さか瓶びんを集め始めると、もう一人は神殿前に広げていたツマミを片付け、寝ねていた同どう僚りようを起こす。

　そうして三人は程良く酒が残った良い気分のまま、神殿を後にしようとしたのだが……。

「しかしのぅ、アイツはあのままでいいんかな？」

　彼らが見やった先では、広場の中央で、神殿の方に手を伸ばしかけた状態で固まっているライの姿があった。

　無論、先程まで降っていた霧きり雨さめの時もその状態である。

「若き自警団団長じゃ、よほどの鍛きたえ方をしとるじゃろうし、大だい丈じよう夫ぶじゃろう」

「えぇのぅえぇのぅ、女の裸はだかを見るだけであそこまでカチンコチンになれる若さはえぇのぅ。羨うらやましいのぅ」

「なぁに言っとるんじゃ、ワシらだってまだまだカチンコチンになれるわ！　どれ、証しよう拠こ見せてやるから、このままちょいと

そっちの店でも覗いてみんか!?」

「うほぅ、えぇのぅえぇのぅ！」

「今日は朝までフィーバーじゃな！」

　そんな元気な爺じいさん三人が去った後、魔ま獣じゆうの住すみ処かとなっている神殿前に放置されていたライがどうなったのかは……また別のお話。

●第七話『女め神がみの座、モルトの場所』

朝だった。

窓から差し込む太陽の光は勤勉だ。毎朝飽あきもせずに寝ているモルトの顔を照らし、その眠ねむりを妨さまたげる。

モルトは寝返りを打って光から顔を逃がすのだが……どのみち、長くは寝ていられない。

アパート内にはいくつもの部屋があり、幾いく人にんもの人々が住んでいる。そんな彼らが全員無職というわけもなく、モルトのように昼まで寝ているのを日課としているわけでもない。皆みな、当然のように朝は慌あわただしく動き回り、そして働きに出るのだ。

普ふ段だんならば気にならないそんな朝の〝当たり前〟に……今のモルトは敏びん感かんに反応せざるを得なかった。

—おはようございます、モルトさん。—あぁ、今日も……お疲つかれ様です。—あら、モルト、毎日飽きないわね。

アルコ・ホール三番街では珍めずらしい三階建てアパート、その三階の住人達である。生活リズムが違ちがうせいで、せいぜいお互いに顔と名を知っている程度なものなのだが……最近のモルトは彼らと何かと交流が深かった。

毎朝強制的に顔を合わせるとなると、それも当然だ。

階下から軽かろやかなサンダル履ばきの足音が聞こえてきてたので、モルトは寝たまま頭を掻き、眩まぶしい太陽の光に目を細めた。

「モルト、起きてる？」

階段を昇のぼってきたのは、案の定のリッツである。

「そりゃ起きてるさ……。階段前の廊ろう下かで寝てりゃ嫌でも

な……」

　モルトがベッドにしていたのは、言葉通りに階段前の廊下、その床ゆかである。

　下に敷しいていたのはマットなどという贅ぜい沢たくなものではなく、モルトが普段着ている革かわのコート一枚で、その上で毛布を被っているに過ぎなかった。

　木製の床板は経年劣れつ化かなのか、それとも職人が技わざの限りを尽つくした上で手を抜ぬいたのかはわからないが……微び妙みょうに一枚一枚が歪ゆがんでおり、普段は気にならないわずかな凹おう凸とつが容よう赦しゃなしにモルトの背中を刺し激げきし、一晩も横になっていれば全身が酷ひどく痛んだ。

　モルトが半身を起こし、背中に手を回してしばし揉もむ。相棒に腕うで枕まくらをしていた左腕も同様に。無論、相棒というのは鞘さや代わりの帯バンドを巻いた長なが柄え刀とうである。

「なぁリッツ……そろそろさ……」

「早く起きるのはいいことでしょ？　何より、そろそろも何も全部モルト次し第だいなんだし」

　リッツが呆あきれ顔で言って、モルトの部屋の扉とびらに鍵かぎを差し込んだ。

　錠じようを開けてもらい、リッツ同どう伴はんでようやくモルトは自分の部屋に入ることが許されるようになる。これが最近のモルトの朝だった。

「……相変わらず、アレ、怖こわいんだけど」

　扉を開けるなり、リッツは頭を抱かかえるようにしてため息。

　リッツとモルトの視線の先にあったのは……部屋の中央の椅い子すに座り、両足を水の張った桶おけに入れつつ、膝ひざの上に大きな樽たるを抱えてそこに頭を突つっ込んでいる女性だ。無論、樽の中にも水がたっぷりであり、そこに耳まで浸つかっている状態なので、特とく殊しゅな拷ごう問もんを受けた死体以外に見えようがなかった。

「おい、エビーザ、朝だぞ。目を覚ませよ。というか水から頭出せ」

　モルトの声に応じるようにして、樽の中に気き泡ほうが発生し、水面からエビーザがのそりと顔を上げる。

　水の滴したたる長い髪かみを掻かき上げつつ、憂ゆう鬱うつそうな目で彼女はモルトとリッツを見み据すえた。

「おぉ……朝か。また随分と長い夜であったな」

　肌はだ触ざわりの良さそうな薄うす手での木も綿めんのワンピースだけを着たエビーザは、抱えていた樽を持ったまま椅子から立ち上がるのだが……細腕ではなみなみと水の入ったそれは支えきれなかったのか、それとも一晩膝の上に載のせていたせいで足が痺しびれていたのか……彼女は樽を頭から被かぶるようにして、盛せい大だいにすっ転んだ。

　エビーザは全身を濡ぬらし、モルトの部屋に大量の水がぶちまけられ……そして、リッツとモルトの悲鳴が上がる。

「……何故わらわがこのような仕打ちを受けねば……はぁ……」

　エビーザは、肌に貼はり付き、透すけるワンピースを指で摘つまみながら、不満げに言った。

○

　ぶちまけられた水の片付けを終えると、モルト達は無言のまま安あん美び亭ていへと場所を移した。

　リッツはテーブルに肘ひじを突き、頭を抱える。

「いい加減、あの居い候そうろう女神を追い出さないと……」

　そんな彼女と額を突き合わせるように、モルトもまたテーブルに腕を置き、ずいっと身を前に出す。



「ようやくやる気になってくれたか、リッツ！」

　さすがに二日連続で水がぶちまけられる事態となったことで、リッツも他人ひと事ごとではなくなったのだ。アパートは木材で組まれているため、頻ひん繁ぱんに水をこぼすと腐くさってしまう。

　二日連続ということは、三日連続も十分にありえるし、そうなれば当然四日、五日連続はお手の物だろう。

　そうなればまだ腐りはしないまでもカビの繁はん殖しよくと下の階への漏れが始まるに違いなかった。……ちなみにその下の階は大家が住んでいる大部屋であり、つまりはリッツの自宅であり、本当に他人事ではないのだ。

　何よりモルトの部屋の床は過去に一度ぶち抜かれた歴史があり、修しゆう繕ぜんしたとはいえ、通常のものより耐たい久きゅう性せいが低いことは容易に想像できる。

「……だがな、リッツ。俺が部屋で当たり前に寝ね泊とまりしていれば面めん倒どう見られるし、あぁいう事態は避さけられると思うんだよ。どうだ、そろそろ鍵を返してみてくれないか？」

　漢おとこ祭まつりの際に女神・エビーザを連れ帰って来てしまって以来、なし崩くずし的にモルトが彼女の面倒を見ることになったのだが……幾つか問題があった。

　水に関係している女神であるためか、リラックスするには水に体を浸けることが一番らしい。そのため、寝る際はあのような状態なのだ。モルトの部屋に風ふ呂ろがあればまた違ったのだろうが……アパート三階には風呂が備わっていなかった。

　結果、あの樽と桶で部分的に浸ひたすことで急場を凌しのいでいる、というわけだった。

　水さえあればいいというので川にでも放ほうり込んでおけばいいのだろうが……何せ服を着たがらない女神のため、野に放とうものなら完全に無毛の痴ち女じよとして川かわ縁べりに君臨することとなり、リキュールの議会からいろいろな意味でそれはやめろと諭さとされ、治安を預かる自警団からは団長ライを殺す気かと恫どう喝かつされ、結果としてモルトの部屋に置いている状態だった。

　しかし、部屋に女神が来ることと引き替かえにモルトは鍵を没ぼつ収しゆうされてしまっていた。

「……モルト、エビーザと二人っきりで密室になったら何する気？」

「そりゃお前、密室に男女が二人となりゃすることなんて……おっと子供には少し早すぎるかな？　フフッ、なぁに毛穴がなくとも他ほかの──痛い!!」

「もぅ！　マジメに!!」

　リッツがやんわりと頰ほおを赤らめつつも、今し方モルトの眉み間けんを殴なぐりつけた手をさすった。

「とりあえず来年のお祭りには封ふう印いんが解けるんだから、それまで適当に置いておけるような場所を捜さがし……あ、どうも」

　二人のテーブルに、新メニューの〝試ためし〟だという料理がクラッツの手によって運ばれてくる。まだ正式メニュー前なのでお値段控ひかえめという嬉うれしい品で、リッツがやや早めの昼食として頼たのんだものだった。

　彼女はお得が好きなのだ。それはわかる。しかし……とモルトは苦く笑しようした。

「はい、新メニュー候補。牛肉のネギ巻き。叔父おじさんとこの二種までは絞しぼったんだけど、どっちがいいかなって。紛まぎらわしいからどちらかに統一したいんだって」

　皿に盛られた二種類の牛肉料理に、リッツは少し不思議そうな顔をした。

　これがネギ？

　と、リッツが首を傾かしげると、クラッツは厨ちゆう房ぼうから一二歳の少女が知らない食材、七割白く、三割緑の棒状のネギ──長ネギを持って来て見せてくれる。

　幼少期、世界を廻めぐっていたモルトからするととても懐なつかしい食材だが、リッツは初めて見るものなのだろう。

最近、長ネギを始めとした東側の食材を取り扱あつかう商人が増えてきて、安定した供給ができそうだということでメニューに取り入れたいのだという。

リッツはそれで納なつ得とくし、一度頷うなずくと今一度まじまじと皿の上を見る。

二種の料理はどちらも薄うす切ぎりの牛肉によって長ネギを巻いた料理なのだというが、趣おもむきがだいぶ違う。

モルトはフォークで、その内の一つを刺さして顔の近くに持ってくる。

その薄切り牛肉は飴あめ色いろのタレを纏まとい、それに包まれるようにして、食はむ前からシャキシャキという食感を予見させる新しん鮮せんな長ネギの千切りが顔を覗のぞかせていた。

クラッツが右目にかかっている金きん髪ぱつを軽く掻き上げると、尻しりを突き出すようにしてテーブルに両肘を突いて、その手の上に細い顎あごを置き、モルトの顔を上うわ目め遣づかいのようにして見てくる。

コルセット・ベストで強調されているクラッツの胸が重力という名の友を得て、なお強調される。花屋を営むオリービーのように素すで豊満さが誰だれしもに伝わる大物は当然大好物だが、クラッツのように程ほど良いサイズの胸を強調させているのも、またそれとは違う美しさと好ましさを持つものだと、モルトは思う。

モルトはそんなことを考えながら、リッツにバレない程度にクラッツの胸むな元もとへ視線を這はわせた。

当のクラッツは気付いているだろうが、彼女の場合見られるのも仕事の内だと一七歳でありながら達観しているので、嫌いやがることはない。

そういったところも含ふくめて、彼女はモルト好みな女である。

「それはタレに漬つけ込んだ薄切り肉で、千切りにして水に晒さらした生の長ネギを包んで軽く焼いて、最後に煮に詰つめたタレをもう一度かけたもの」

リッツと共にモルトはそのタレ味だとする牛肉のネギ巻きを頬ほ

お張ばった。

　タレがかかっていなかったら指で摘まんで一口に食べる、というのに丁度良いサイズのそれは、口に入るなりまずはタレのパンチが効いてくる。

　甘あま塩じよっぱいとろりとした醤しよう油ゆベース。醤油、砂糖、味み醂りん……それに摺すり下ろした玉ねぎでも使っているのだろうか。ほのかに糖類とは違ちがう、別の優やさしい甘さを感じた。

　それに覆おおわれている薄切り牛肉……。タレに漬け込んだものを焼いた、というのがはっきりとわかるほどに、咀そ嚼しやくする前段階で香ばしさが口に、そして鼻へと抜ぬけてくる。

　──肉の表面に付く、焦こげたタレの香ばしさだ。

　醤油系のタレが焦げた時の香ばしさは東の出の人間にとっては最も食しよく欲よくをそそる香かおりだというが、東西南北関係なく誰にとっても魅み力りよく的な風味だろうとモルトは思っていた。

　そんな香ばしさを感じた途と端たん、口が、歯が、そして舌が急げ、と食べるのを促うながしてくる。

　その欲求オーダーに従い、食む。牛肉の柔やわらかさの先に、長ネギのシャキッと感が待ち構えていた。

　タレと牛肉で意識が持って行かれつつあったが、そういえばコイツがいたな、とモルトは思い出す。

　タレの甘さ、牛肉のこってりな脂あぶら、醤油の香ばしさ……それらの中に眠ねむっていた、ほとんど生の長ネギの千切りが、フレッシュな辛からみを走らせる。

　これが、三種の味わいを良い意味でぶっ飛ばした。

　甘さ、こってりさ、香ばしさ……この三つは確かにうまい。モルトの好きな味だ。だが、いささかまどろっこしくもあるのが実際のところでもある。

　一つ一つが良く、揃そろったらなおいい……けれど、これを一皿となると口の中は馴なれ合いでダラダラと過去の同じ話をする老人

達の飲み会のようになってしまうかもしれない。だが、そこに長ネギの刺し激げきが心地ここち良く颯さつ爽そうと現れれば話は違う。

　夏の夕暮れという、悪くないけだるさの中に汗あせ拭ぬぐう心地良い風が吹ふいたかのように……爽さわやかで、新鮮で、目が覚める。──シャキッとする。

　また牛肉の厚さと、包んでいるネギの量のバランスが絶ぜつ妙みようで、食べ始めでは肉とタレが圧あつ倒とう的てきに有利なものの、咀嚼するにつれて長ネギが優勢になっていく。だからこそ、喉のどを通る時にはわずかばかりの脂と旨うま味みを残すばかりで、また食べたいと思わせてくれる……そんな絶妙な逸いつ品ぴんである。

「うまいな、これ。悪くないんじゃない？」

　よし、とクラッツは得意げに頷うなずく。

　が、一方でリッツは少し難しげな顔をして、コメントを控えた。

「一つ、いいか？　今はいいとしても夜になってランプや魔ま光こう球頼だよりの明るさの中だと、ちょっと色合い的に地味だから、白ゴマとか軽く振ふりかけるとなおいい感じだと思うけど、どうかな？」

　モルトは言いつつ、もう一種の牛肉巻きに意識を向ける。

　こっちは一口大にカットされた肉巻きを竹たけ串ぐしに刺したものだったので、フォークを置いて指で串くしを摘つまみ上げる。

　確かに、牛肉のネギ巻きだ。今度はそれが一目でわかる。というのも、こっちのにはタレはかかっていないのと……串に刺さる三つの牛肉巻きの断面には白い長ネギの断面がはっきりと見えているのだ。

「まず長ネギを丸ごと炭火で焼いて、それに牛肉を巻き付けてカット、それから串に刺してもう一度最後に焼いたもの。味付けは岩塩のみ」

　太くて立派な長ネギを使ったのだろう。串に刺さっているそれの断面は実に見事なサイズで、汁しるがとろりと垂れていて……モル

トを怪あやしく誘さそう。

　リッツと共に口を大きく開けて、喰くらい付く。

　肉の表面に振りかけられた岩塩の粗あらい、ざらざらとした食感。それを砕くだくようにして咀嚼すれば……口内に汁が

迸ほとばしった。肉にく汁じゅう、そしてネギの汁。熱いそれら。

　リッツと二人で身を震ふるわせ、モルトは喘あえぐ。

　しっかりと焼かれた肉汁の旨味はもちろんのこと、ネギの甘い汁がたまらない。先程の牛肉巻きにあった刺激などこれっぽっちもなく、ただただ、とろりと甘い。

　砂糖菓が子しや果くだ物ものの持つ甘さとはひと味もふた味も違う、その滑なめらかな甘さ。

　しかもその味わいは牛肉の脂とぶつかることなく咀嚼するに交じり合い、濃のう密みつな旨味へと繋つながっていく。さらに多めに岩塩の粗い粒つぶが、口内でそれらの汁に溶け、塩味を強めに発揮するのだが……それがまた甘味や旨味を底上げするのだ。

　二種の食材に塩だけのシンプルな料理だが、岩塩の塩しお辛からさが素材の味を引き立て、味わいに箔はくを付け、頭で想像していた以上に強い味わいとなって喰い手モルトを驚おどろかせる。

　これも当然のように、うまい。しかしやはりリッツは難しい顔をして首を捻ひねる。

　どう？　と、クラッツが視線で尋たずねてくるので、モルトは頷いて応じた。

「うまいよ。串で出てくるのも一々フォークを持たなくていいから楽だし」

　あのさ、とリッツが難しい顔のまま、どこか不満げに口を挟はさんだ。

「どっちもおいしいと思うけど……味、濃こすぎない？　それにパンとかにも合わなそう。というか、多分、この長ネギって食材自体がパンに合わないと思う。サラダにも……」

　案の定のリッツの意見に、モルトは笑いを堪こらえつつ、クラッツと顔を合わせる。そして、二人して〝ふぅ、やれやれ〟というように肩かたをすくめて見せた。

「リッツ、この料理は食事用じゃなくて酒の肴さかなだよ」

　モルトの言葉に、あっ、とリッツが声を漏もらす。彼女もそれで察したようだ。

「注文してくれた時に言っておけば良かったかな。ごめんね、リッツちゃん。……でも、確かに長ネギは穀物にはなかなか合わないかも。お米料理でもちょっと工く夫ふうが必要かも」

　少量の薬味として長ネギを用いるのではなく、今回のようにガッツリとした食材として前に出すとなると、やはり東や南の地域で食べられるようなシンプルに炊たきあげたご飯としか、まず合わないだろう。あちらの地域ではあまり生野菜サラダは食べられないし、パンも食べることは少ない。食にはお国くに柄がらが出るものなのだ。

「とりあえず貴重なご意見をどーも。叔父さんに伝えておく」

「うん。……んじゃまぁ、腹減ってるし、ガッツリ食べようぜ」

　さりげなくモルトは酒を注文しようとしたものの……現在財さい布ふを握にぎっているのはリッツだけなので、当然のことながら却きやつ下かされた。

　ちぇっ、と、モルトは舌打ちするも、リッツはそんな二十代前半の男を無視し……店内の隅すみで四よつん這ばいになって水を張った桶おけに顔を突つっ込んでいる、酷ひどい有様の女め神がみに声をかける。

「えっと、エビーザさん。これ、少し食べます？」

　水面が揺ゆれる。首を振っているようだ。

　彼女は基本、何かを食べる必要はないらしいのだが、リッツにはまだその辺りのことを理解できないのだろう。

　リッツではなくても、張りのある肌はだをした娘むすめが水だけ──しかも飲むのではなく、浸つかっているだけ──で生きているというのを理解できる者はまずいないだろうが。

「……やっぱりエビーザって、お金を稼かせぐ必要はないのかな。食べ物はいらない、服とかもいらないってなると……」

「水があって、痴ち女じょ扱あつかいされないような屋内で、一年は放置しておける場所だな。……やっぱり街外れの賭と場ばに水すい槽そうでも用意して大人向けの見世物として……」

「それ、あのゴロツキの……えーっと、ジンとかいう人が拒きょ否ひしたんでしょ？」

「あぁ。〝無自覚な女を男達のゲスな視線に晒さらすようなマネはできない〟とか、何かカッコイイこと言ってたよ」

　当然、賭場でそれなら街外れの大人の遊園地といったお店でも拒否されるだろう。ジンのようなまじめというか、昔むかし気質かたぎな連中が多いのも、通りすがりの余所よそ者ものが多いリキュールが今もこうして当たり前に平和を維い持じしている理由の一つである。

　表向きの事件は自警団が、そうじゃないのはゴロツキ連中の出番である。そして、どちらの事件にも属さない特とく殊しゆな問題はモルトやサシャのような何でも屋の出番なのだ。

　……そう、今回のような、女神をどこに放置するか、というような問題などである。

　モルトに金があれば風ふ呂ろのある家なり部屋なりを借りてそこで肉にく欲よくに溺おぼれるがままに過ごすのもアリだと思っていたが、金銭面からの問題でそれはできないし、いっそ彼女を金かね儲もうけの道具として男達の元へ派は遣けんする仕事をも考えたりもしたが……そっちはモルトのプライドと世間体が許しはしなかった。

　リッツとモルトが頭を悩なやませていると、遠くの方から視線を感じる。それとなく見やればエビーザが四つん這いのまま水面から顔を上げてモルト達を見てきていた。

　その視線は語る。迷めい惑わくそうにしているが連れ出した上に締しめ出したのはお前達だぞ、と。

　モルトは、その視線から逃にげるようにカウンター奥の厨ちゆう房ぼうを見やる。そこでは顔をわずかに覗のぞかせている店主にして女神を連れ出した一人、グレーンおやつさんがいた。彼はモルトに気付くと、クラッツに何事か囁ささやき、芋いもから作られた酒、焼しよう酎ちゆうなるものを一いつ杯ぱい、奢おごってくれたのだった。

　彼の面めん倒どう事を嫌きらう性格を利用すれば、もう少し酒を絞しぼり出させることも可能かもしれないな、とモルトは少しばかり考えたのだった。

1

　女神を連れ出したのは、モルト、グレーン、パン職人のピンガ、そして変態の名をほしいままにするピーちゃんの四人だ。

　グレーンは面倒を嫌って引き取りを拒否、ピンガは家に置いておくと奥さんに殺されるとかで拒否、ピーちゃんの場合は、というか、その飼い主であり、現在街に滞たい留りゆうしているリーフィの場合は……お金持ちな彼女ならば受け入れてくれそうな気もしたが、リキュールの街に恵めぐみをもたらしてくれていた女神を彼女の特殊な性せい癖へきのオモチャにしてしまうのはさすがに問題がある気がしてできなかった。

　結局、モルトが責任を持つことになったものの……リッツと相談の末に思いついた場所は二つしかなかい。

「ほぅ、大量の水が！　うむ、ようやくわらわに相応ふさわしい場を用意したな、モルトよ」

　そこは、恐おそらく一番可能性が高いであろう場所だ。そこに来

るなり、苛いら立だってばかりいたエビーザがようやく上じよう機き嫌げんになり、服を脱ぬぎ出す。

　さすがにそこで服を脱ぐことをリッツはもちろん、現オーナーの老夫ふう婦ふも止めはしなかった。

　そこは、アルコ・ホールの五番街にある、街の最古の建造物、大通りに面した大浴場。

　お昼ということで、まだギリギリ開店前だったので女神を女湯に解き放させてもらったのだった。

　脱だつ衣い所でワンピースを脱ぎ捨てると、女神は小走りに浴場へ入り、浴よく槽そうに飛び込んで盛せい大だいな水みず飛沫しぶきを上げた。

　頭の先までを水に沈しずめ、数分の後に再び顔を出すと、思いの外子供っぽい満面の笑えみをモルト達へと向ける。

「うむ、悪くない。ここで我が慢まんしてやってもいいぞ、モルトよ。……初めからここに連れてくればいいものを出し惜おしみしおって、まったく」

　言葉とは裏腹の笑顔で、エビーザははしゃぐようにして浴槽の中を泳いだ。人間の泳ぎのように慌あわただしいものではなく、水中をまるで滑すべるように泳ぐのでまるで人魚のようだ。

　いけるな、とモルトと隣となりにいたリッツと顔を見合わせ、頷き合った。

「……なぁ、爺じいさん、どうだろう。女神がいる風呂ってのも乙おつなもんじゃないか？　いい観光名所になるって」

　飲食しない、排はい泄せつもしない、ただ水に浸かっていればいい。たまに光ったり、沈んだり、水面に仁に王おう立ちしたりするだろうが……それだけで、美しい女神が常に風呂にいる……商売として考えた場合、これはかなりの引きとなるだろう。

　鼻の下をやや伸のばして女神の裸ら体たいを見やる爺さんは婆ばあさんに足を踏ふまれつつ「えぇのぉ、えぇのぉ」と頷いてくれていた。

　爺さんはそろそろ開店準備をせねばと後うしろ髪がみ引かれつつも浴場を後にしたので、モルトは婆さんとの交こう渉しようの末、ようやく女神の寝ね床どことすることを許されたのだった。

「そんじゃ、そういうことで。……よし、リッツ、帰るか！」

　女神に、たまに会いに来るよ、と告げてモルトは浴場から出て脱衣所に戻もどると……そこには今し方入店して来たと思おぼしき女性客の姿が。

　一いつ斉せいにキャーキャー騒さわがれるのだが……モルトは苦く笑しようする他ほかない。何せ、脱衣所に現れたのはあまりにうら若き乙女おとめ達だったのだ。

「……さすがにリッツより年下の娘は無理だよ……」

　二〇人程の半はん裸らの幼女達が慌てて服を体に当て、いっちょ前に物を投げつけて来るので、モルトはさっさとその脱衣所を後にしたのだった。

　リッツ曰いわく、一〇歳未満の初等学校の子供達なので、多分、以前のリッツ達同様、外での実習終わりなのだろう、とのことだった。

　教師らしい、やや小太りというよりは全身がムッチリとした何とも健康的な体つきの女教師が追い掛かけてきて謝罪してくれたのだが……それによれば……。

　何でも屋モルトは老ろう若にやく男なん女によ関係なく全すべてが性せい欲よくの対象であり、特に女性は赤あかん坊ぼうから老ろう婆ばに至るまでであり、その性欲は大浴場の床ゆかをぶち破って侵しん入にゆうする程に凄すさまじい……と、初等学校ではある種の都市伝説として子供達の中で最近話題なのだという。

　その語り口はもはや幻げん獣じゆうの類たぐいである。

「……酷い言われようだな、俺……」

「ともかく、子供達がすみません。モルトさんがいくら凄い何でも屋だからって、さすがにそこまで……その、酷いわけじゃ……ない、ですよね？」

女教師は視線を外しつつ、どこか含ふくみのある言葉で、二メートルほどの距きょ離りを取って、言った。明らかに警けい戒かいの色を含んでいて、モルトを苦笑させる。

さすがに子供はもちろん、化け粧しようっ気けのないムッチリした女教師にまでは興奮しねぇよ……と言いたかったものの、それはそれで失礼な気がして、モルトは口を閉とざした。

……何より、少し怯おびえるようにしている教師の横顔は素そ朴ぼくさがあって、見ていると段々これはこれで悪くないように思えてきたせいもある。そばかすが残り、さほど長くない髪を後ろで雑にまとめただけの彼女は二十代になったかならないか程度。化粧っ気のない裸の肌は何とも艶つやがいい。ややピッチリとしたパンツルックに包まれたその体つきは健康的だが、女らしさというものが欠片かけらもない。……だが、それ故ゆえに悪くない。

恐らく子供が好きで、まじめに勉学に打ち込み……そして念願の教師になって……という流れだろう。彼女の人生に男が入り込む隙すきはなかったのかもしれない。それとも彼女がそれを拒否したか。

どちらにせよ、と、モルトは確信する。──この教師に男の匂においは微み塵じんもない。

そう考え始めた途と端たん、何故なぜだか彼女がますますおいしそうに見えてくるからたまらない。ムッチリとした体つきも、魅み力りよく的である。見る分にはオリービーのような柔やわらかな線で女性特有のボディラインが強調されていたり、クラッツのように全体が引き締まった線ラインをしていたりする方がいい。

……だが、抱だくとなると……少しばかり肉があった方が良かったりするものである。

悪くない。むしろ、いい。こんな女にじっくり男の良さを教えるのは……楽しいだろう。

「モルト、そんな顔でジロジロ先生を見ない！」

ベシッと尻しりをリッツに叩たたかれ、モルトは正気に戻る。気が付くと、自分がどんな顔で彼女を見ていたのかわからないが……青い顔をした教師との距離は三メートルほどに広がっていた。それ

となくジリジリ逃げられているようだった。

「そ、それでは、これで……！」

　教師はそんな言葉を残して、大浴場へと逃げるようにして入って行ったのだった。

「……ったく！　一いつ緒しよにいるあたしまで恥はずかしくなるっ！」

　少しばかり顔を赤らめたリッツが苛立たしげにモルトのブーツを踏みつけるが……体重の軽い小娘のサンダル・アタックである。分厚い鋼鉄が中に入っているモルトのブーツでは痛くもなかった。

「いや、そう言うけどな。逆に、女性に対して男が何も反応しないってのは失礼なもんで……痛いっ！」

　脛すねに蹴けりが来た。これは痛い。

「時と場合と相手を選べってんの！　だいたい……あれ？」

　リッツが拳こぶしを振ふり上げたまま固まった。彼女の視線の先には、小走りにやって来るエビーザである。

「待て、待つのだ、モルト、リッツ！　わらわを置いていくな！」

　濡れた髪のままでワンピースを着たせいで、染みを作ってやや肌はだを透すかせた彼女はモルト達の前に来ると、大きく息を吐はいた。

「……どうした、エビーザ。俺達との別れが辛つらく──」

　違ちがうっ、とわざわざイケメン風な声を出していたモルトの言葉をエビーザは遮さえぎった。

「何だあの場は!?　水が大量にあるのはいい。だが……子供を始めとした大勢が毎日来るというではないか!?　わらわの求めているものとあまりに違う！」

　エビーザ曰く、もっと人ひと気けのない場所じゃないと落ち着いて寝ねていられない、とのことだった。

　無理もないか、とモルトは言われてみて初めて気が付いた。

　何せ、これまで一〇〇〇年、ヘタをすれば何千年とほとんど人と交流してこなかった存在が、いきなり街で一番活気のある大浴場を寝床とするとなると、環かん境きようの差があまりに激しすぎるかもしれない。

「……どうしても、我慢できないの？」

「できん！　うるさいにも程ほどがある！　わらわを何だと思っているのだ！」

　リッツのため息交じりの言葉に、エビーザは小さなリッツに顔を押しつけるように身を曲げ、憤ふん懣まんの表情で喚わめく。何千年と生きている女め神がみのはずだが、案外中身は子供っぽい。

　最近廊ろう下かで寝ているモルトも、小うるさく人が行き来する寝床などうんざりで、女神の気持ちに共感するところはあった。

　やはり静かで、落ち着いたプライベートな時間というのは大事なのだ。

「きちんと責任を取れ、モルト！」

　往来の多い大通りだったこともあって、エビーザの言葉にモルトは少しばかりたじろぐ。

　髪が濡れたままの、薄うす着ぎの女が責任を取れと迫せまられる光景は人々に様々な想像をさせるものだ。誰だれも彼もが「おやおや（笑）」という顔を向けてくる。

「……参ったな」

「それほどわらわが難しい事を言っているわけでもなかろう!?　どうしてモルト、お前はそこまでわらわを苦しめる！　これまでだって毎晩毎晩お前の部屋で責めを受けるように身を悶もだえさせて夜を越こえているというのに、ずっと我慢しているというのに……いつまで経たってもお前はわらわに応こたえてくれぬ！　いったいわらわをお前はどうしたいのだ!?」

「うん、あのな、エビーザ。言いたいこともわかるし、言っていることも真っ当なんだが……何故だろうな。今、凄く往来の方々に誤

ご解かいを招いている気がするから止やめてくれ……」

　モルトは〝あの何でも屋は実はＳＭ、特に放置プレイが趣しゆ味み〟という新たなる噂うわさを立てられる前にどうにかしようと、助けを求めてリッツを見やる。

　彼女はやや呆あきれながら、まぁ大だい丈じよう夫ぶじゃない？　と軽く応じた。

「第二候補の方なら、屋内で、静かだよ、きっと。多分、水も用意してくれるだろうし」

２

　モルトにとってそこに入るのは久しぶりだったが、前に来た時と何ら変わっていないように思えた。

　白しろ髭ひげを蓄たくわえた老紳しん士しに案内されるがままに中を歩いて行く。一〇〇〇年前の戦争の貴重な品々や、元々この地に住んでいた少数民族の遺物などが展示されているのだが……あまりモルトの興味を引くものはない。

　街の博物館というのは、大たい抵てい、そういうものである。学校で無理矢理連れて来られるのでもなければ、基本、一いつ般ぱん人が好んで訪おとずれるものではない。

　粉っぽい空気の中、最近増築したばかりということでまだほとんど展示物がない一角にモルト達は案内された。

「このエリアにはリキュール以前の、それもかの少数民族が暮らしていた時代の古きものを展示しようと計画中でして。それにそこの時代に詳くわしい女神様が水すい槽そうに入って展示……いえ、お住みになられるというのなら、これ以上の資料はないかと」

　知識と頭とう髪はつをトレードしたと思おぼしき老紳士──館長はニッコリと品良く笑った。

「わらわの座として、悪くはない。……それで、問題の人の出入り

はどうだ？」

「まぁ観光客が少々、という感じでしょうか。女神様がいらしたとなると少しは増えると思いますが……その、先程お話で聞いたような、大浴場のようなことにはならないかと」

　ふむ、とモルトは納なつ得とくした。第二候補としたが、割とこちらの方がエビーザを放置するには相応ふさわしいかもしれない。人はそう多くは訪れないし、静かであることを求められる場、さらには裸の像がそこかしこにあるような場所であるから、そこに生身の裸が水に浮うかんでいてもさほど問題にはならないだろう。

　……青少年に、いろんな意味で勉強をするいい場所になるかもしれない。

　モルトは街に住む大勢の青少年の気持ちを汲くみ、ここでいいじゃないか、と賛同した。

「わらわもここで良い。飾かざられている物品も懐なつかしい。……わらわが、というよりはわらわと交わったこの体の娘むすめの魂たましいがそれを感じている」

「ということは、かの少数民族の……その彼女の記き憶おくをお持ちで？　……なんと!!」

　館長は少年のように目を輝かがやかせると、あれやこれやと小難しい質問をし、女神が答える度たびに驚きよう嘆たんの声を上げる。今にも踊おどり出しそうな興奮と喜びようだ。

　邪じや魔まするのもなんなので、モルトは展示物を見やっていたリッツに声をかけてさっさと帰ることにした。

「何を見ていたんだ？」

「この、一〇〇〇年前の戦争で使ったっていう武器……モルトのと同じなんだ？」

「ん？　あぁ、長なが柄え刀とうか」

　長柄刀はリキュールにとって誇ほこりであった。最強の部隊とされた兵士達が特に好んで使用したとされる武器である。それは時代を経へて、戦争の経験を失った現代でも、街外れの鍛治かじ職人に

よって昔ながらの手法で生産されており、自警団の正式装備として支給されたり、伝統工芸品的な扱あつかいで外に売られたりしていた。

「鋼鉄の塊かたまりで、これ以上いじりようがないからな。伝説じゃ敵兵はもちろん、走っている騎き馬ばすら文字通りに一刀両断したとかいう話だ。……それとか、完全にそれ用だろうな」

　モルトを始めとした自警団員が扱うのは全長一八〇センチの長柄刀である。

　しかしながらかつての戦争では、全長三〇〇センチにも及ぶ、化け物染じみた鋼鉄製の長柄刀も用いられていたらしく、実際に一ひと振ふりだけ完かん璧ぺきな状態で残っていたそれが博物館の顔として飾られていた。

　恐おそらくこれを振り回せるのは今のリキュールでは数人いるかいないかだろう。武器として実戦で扱うとなれば、モルトは一人二人しか思いつかない。そんな、異常な武器だった。

「おぉ、そうだ！　あの遺物をご覧いただこう！　実はトルシュ・オマロンの奥も奥、人がまったく踏ふみ込まぬ場所で遭そう難なん者の手によって偶ぐう然ぜんに発はつ掘くつされたものがありましてな！　それが人工物であるのかどうかもわからず……ともかくご覧ください!!」

　館長が初体験に臨む少年のようなハイテンションで、モルトとリッツを突つき飛ばすようにして博物館内を走り回る。

　その様に苦く笑しようしつつ、モルトはエビーザに視線で「またな」と告げ、博物館を後にしたのだった。

3

「まぁ何だかんだで良かったんじゃない？　女神様も満足げだったし」

　アルコ・ホールを歩きながらリッツから鍵かぎを返されると、モ

ルトはそれをギュッと握にぎり締しめた。これで家賃を払はらっておきながら廊下で寝ね泊とまりという辛い日常とおさらばである。

「一年限定で無毛の女神様の展示だ。少し増える、とか館長言ってたけど、絶対大勢詰つめ掛かけると思うけどな」

「……そうかな？」

　まったく、とモルトはほくそ笑えんだ。

　リッツはいつも大人ぶって偉えらそうにしているが、所しよ詮せんは一二歳の小娘だ。安あん美び亭ていでのやり取り同様に、彼女はおこちゃまなのだ。何もわかっていない。

　男ってのは女の裸はだかのためならば地を駆かけ山を越え海を渡わたる熱き情熱を持つ生き物だ。若き男達は博物館の入館料など何ら躊躇ためらいなく払って、女神のボディを見に行くに決まっている。無毛なのも、最近の若者達には嬉うれしいだろう。

「裸を見に行ったって言われたくないから、地元の人は逆に行きづらくなると思うけど」

「……あぁ、なるほど……」

　常に人の多いリキュールではあるが、その内の多くは旅の者である。住人は街の活気からすると少なく、またやたらと結束が強いために何かしでかすとすぐにバレるのだ。

　それが性のネタに敏びん感かんな年とし頃ごろともなれば……
「●●さんのお子さんったら、毎日博物館に行かれるなんて勉強熱心よねぇ（笑）」とかいう主婦トークがそこここで繰くり広げられる可能性を考えるに……青少年にとって博物館は極きわめて難易度の高いエロ・スポットとなるのかもしれなかった。

　でしょ？　と、リッツに言われ、モルトは街全体の青少年の気持ちを代弁するように「ぐぬぬ……」と呻うめいた。

「うん、まぁそれはいいんだけど……何で今、モルト、大浴場前で立ち止まってるの？」

「……いや、帰る前にひとっ風ぷ呂ろ浴びていこうかと」

　大通りに面した大浴場の前で立ち止まったモルトを、人混みの中からリッツが冷たい視線を向けてくる。

「……あの先生、狙ねらってるんでしょ？」

「ははっ、何をバカな。自分の魅みせ方も知らないまじめ一いつ辺ぺん倒とうでやってきた初心うぶな女教師、このモルト様が少しアピールするだけで簡単に、抱だいて！　と俺の腕うでに飛び込んで来るに違いない、とかそんなことを思っているわけじゃないぜ？」

「せめて本心は誤ご魔ま化かしてよ！　リアクションに困るから!!」

　顔を真っ赤にして怒おこるリッツがベシベシと殴なぐりかかってくるのを、モルトは笑って受けてやる。

　当然、ただの冗じよう談だんだ。そんなふうになるとはモルトも思っていない。……口説くのは容易たやすいだろう、とは思っていたが。

　リッツは手をつかむと、ずんずんと怒いかりを示すように大おお股またでモルトを引っ張っていく。

「待ってくれよ、リッツ」

「ダメ、待たない」

「……ま、待て」

「だからダメって……ん？」

　今し方の〝待て〟はモルトではない。モルトの背後から、だった。

「待つのだ、リッツ、モルト……わらわをあんなところに置いていくな」

　振ふり返ればハァハァと息を切らしているエビーザがいた。どこかデジャヴを覚える光景である。

　何故なぜ博物館で別れたはずの彼女がそこにいるのか、リッツとモルトは顔を見合わせるのだが……問うよりも先に答えが全速力で

やって来た。

「どこですかな女神様!?　どこに行かれたのです!?　この発掘されし遺物が何であるのかをどうして教えくださらんのです!?」

　脇わきに巨きょ大だいな、卵の化石のようなものを抱かかえ、もう一方の腕には二メートル近い細身の銅像を担かついでいる……半はん裸らの館長であった。

　小こ柄がらな老人だと思っていたが、何気に汗あせが流れる上半身は半はん端ぱなくマッチョだった。

　そうか、彼もこの地に脈々と伝わりし最強と謳うたわれた漢おとこ達の末まつ裔えいだったのか、とモルトはどこか他人ひと事ごとのように考えていると、その背にエビーザが抱きつくように身を隠かくした。

「な、何なのだ、奴やつは。途と中ちゆうから目つきが変わったかと思えば、まるで一秒を惜おしむように次から次に、これは何だ、あれは何だ、これは何と書いてある、どういう時に使うのか……と、怒ど濤とうの勢いで質問を……」

「……うん、何か館長、目がイッてるよね」

　リッツが遠くを見るような顔で、大通りのど真ん中で、クソ重そうな二つの遺物を抱えたまま、空に向かって咆ほう哮こうを上げる館長を見やっていた。

　もはや最初にあった知識人の印象はない。荒あらぶる獅し子しのようなその姿に、モルトはこの街の古い住人は全員どこかおかしいのではないか、と少し思った。

「どこなのですか、マイ・スウィート・女神ゴツデス!?　我が積年の望みを叶かなえたまえ!!　膨ぼう大だいな知識の泉へ誘いざないたまえ!!　ふおぉぉおぉおおぉおおおおぉぉおおおぉおおおぉぉあ!!」

　大勢の人々が行き交かう大通りだというのに、誰だれも彼もが雄お叫たけびを上げる館長を遠ざけていく。

「……まるで童どう貞ていこじらせ続けてきた男がいよいよって時になって、女に逃にげられたかのような荒ぶり方だな」

　表現がゲスい、とリッツに諭さとされるものの……我ながら悪くない表現だと、モルトは自画自賛した。知識と引き替かえに頭髪を失ったが、同時に圧あつ倒とう的てきな知ち識しき欲よくと若者が持つ無限の性欲をもトレードしていたのかもしれない。そうすると全すべてに納得がいく。

　━そこっ！　何をしている!!　━自警団だ、自警団が荒ぶる獅子を止めにやって来たぞ!!　━待ってました!!　━いけ、自警団!!

　どこからともなく歓かん声せいが上がり、長柄刀を握る三人の若い自警団員が館長を取り囲んだ。

　━ムゥ！　我が知識の探求を邪魔しようというのか!?　貴様らが何であろうとも容よう赦しゃはせんぞ!?　━何だ、この爺じいさんは……!?　━この人、多分博物館の館長じゃないか……？　━あの銅像に悪あく魔まか何かが宿っていて、それに取り憑つかれたとかだったりするのかもしれません！　━えぇい、とにかく押さえ込むぞ!!　━オラァッ!!　……ぐッぬぅぅ!?　す、凄すごいパワーだ!?　オレの長柄刀の一いち撃げきを弾はじき飛ばしただと!?　━いや待て、何でお前今いきなり斬きりにいったっていうか、殺しにかかった!?　━あんな化け物染みた奴相手に手加減してられるか！　全力で行くぞ!!　━はいっ!!　━ふはははははっ！　軟なん弱じゃくな小こ僧ぞう共など我が知識欲の前では薄はく志し弱じゃつ行こう!!　━黙だまれ、頭デッカチが!!　━甘い甘いッ！　真の知識とは実じつ践せんが伴ともなってこそ!!　学業に邁まい進しんした我が人生、しかし歴代の英えい雄ゆう達が扱いし長柄刀を保管する身である以上、それらを使いこなせるよう鍛たん錬れんしておくのもまた当然のことよ!!　今ではかの三〇〇センチ長柄刀すらお手の物よ!!　━こ、このジジイ街の宝で何勝手にトレーニングしやがってんだよ!?　━えぇい、もう何でもいい、全員で行くぞ!!　━うおぉおおぉおぉおおぉ!!　━甘いッ！　緩ゆるいッ！　生ぬるいッ!!　━ぐわあぁぁあぁぁあぁ!!　━クソッ、ダメだ、オレ達じゃ無理だ！　ライを……団長を連れて来い!!　━ダメです、あの人、漢祭り以来、まだ本調子に戻もどって……ぐわああぁああぁあぁああぁあぁ!!

　モルト達の視線の先で、館長の銅像による一撃で、若い自警団員の一人が冗談みたいに空高くぶっ飛ばされた。

「……どうした、小僧共。貴様らの全力はそれだけか？　その程度の腕うで前まえでリキュールの長柄刀を振り回しておったのか？

……恥はじを知れ!!」

　残された二人の自警団員達が雄お叫たけびを上げ、防具を捨て、上着を脱ぬぎ去った。鍛きたえられた筋肉を昼の日差しに晒さらし、若き二人の自警団員は重心を落とし、長柄刀を構える。

　長柄刀は街の誇りだ。持ち手にとっても、当然そうなのだ。それを持つに相応ふさわしくないとされたことで、若者達の熱き魂たましいが刺し激げきされたようだ。

　二人の若者が生み出す、命を燃やしたような覇は気きが大通りを包む。

　それを見ていた誰もがわかった。仕事ではなく、彼らは今、一人の戦士として、否いな、一人の漢としての戦いをなそうとしているのだと。

　そんな二人に囲まれた館長は両りよう腕うでで遺物を抱えたまま、ニヤリと笑う。

「ほぉ、少しはリキュールの漢らしさを持っていたか。……来るがいい、小僧共。我が知識とそれへの欲よく望ぼうが生み出せし力にどれほど通ずるか、試ためしてみよ!!」

「「うぉおぉおぉおぉぉぉおぉぉおおぉぉぉぉおおおおおぉぉおおおおぉぉぉ!!」」

　若き漢達が雄叫びを上げ、今、己おのれの存在理由を示さんと長なが柄え刀とうを振りかぶる──!!

「帰ろう」

「うん」

　モルトの言葉に、遠い目をしていたリッツが頷うなずいた。

「あぁ、あそこの館長って何十年も前に自警団員だったのよ。しかも結構な名うてだったって誰かから聞いた気がする。『狂くるえし獅子』とかあだ名を持ってたって」

　安美亭に戻って来るなり、クラッツからそんな話を聞かされ、今いま更さらながらこのリキュールに根付くおぞましさを思い知らされた気がした。

　モルトが住むようになってから約一〇年、それでも未いまだにこうした話がポンポン出てくるからこの街は侮あなどれない。

「それで？　半日動き回って収しゆう穫かくなしってわけなんだ？」

　昼時のピークを過ぎた、そんな空き始めている安美亭の片かた隅すみのテーブルで、モルトとリッツは頷いた。

「川はダメ、賭と場ばや夜のお店もダメ、大浴場はうるさくて拒きよ否ひ、博物館も獅子が荒ぶりすぎてて嫌いやだ、と……どうすりゃいいんだよ」

　モルトとリッツが額を突き合わせるようにして頭を抱えると、腰こしに手を当てたクラッツがため息を一つ。

「館長の……その、知識欲だっけ？　しばらく質疑応答したら収まるんじゃないの？」

「どうかな。目を血走らせて半裸でデカい銅像担いだ上で、クソ重そうな変な球体抱えて突つっ走って来るような知識欲だぜ？　そのうちに人類誕生の謎なぞとか、魂の在あり方とは、みたいな質問に至るだけで永遠に終わらねぇよ、アレ」

　なにそれ？　と、クラッツは店の隅で、再び桶おけに顔を突っ込んでいる女め神がみに尋たずねた。

「銅像は知らない。恐おそらくこの地のものではなく、どこかで作られたものが土産みやげ品か何かで持ち込まれたのだろう。それを街の歴史ある品と勘かん違ちがいしているのだと思う」

「うわー……ありそう、そういうの。それじゃ球体の方は？」

「あれは昔の……そう、かなり昔の砲ほう弾だんだったように思

う。何らかの凄すさまじいパワーで敵てき陣じんや城じよう壁へきなどに撃うち込み、その衝しよう撃げきを得て爆ばく発はつを起こす……というようなものだ」

　女神の言葉が放たれた瞬しゆん間かん、モルト、リッツ、クラッツの三人は一いつ斉せいに頭痛がするように、眉み間けんを指で揉もむようにして俯うつむき、嫌な汗を浮うかべた。

「……ん、どうしたのだ？」

「エビーザ、ちょっと待ってくれ。……リッツ、あれからどのくらい経たつ？」

「……一五分ぐらい、かな」

「本調子じゃないにせよ、ライが呼ばれて到とう着ちやくするには十分な時間だな。……急げば爆発前に間に合うか」

　モルトが席を立つと、エビーザが不思議そうな顔をした。

「爆発なんぞせんだろう。あれほどの質量の物体を高速で城壁等の硬かたいものにぶつけなければ発火しない仕組みだ。人間が武器を叩たたきつけたところで反応はしない。何よりあまりに古いものだ。まともに作動は……」

　モルトは壁かべに立て掛かけていた長柄刀を手に取ると、それに纏まとわせていた帯バンドを剝はぎ取って肩かたに担いだ。窓から差し込む日差しに、長柄刀の刃やいばが煌きらめく。

「いいか、エビーザ。教えてやる。この街には俺の知るだけでも化け物みたいな力量の男が何人もいる。ライはその内の一人だ。そして何より……爆発物ってのは爆発する。この流れなら間違いなくな！　行ってくる！」

　まだ何か言いたそうな顔をしていた女神の言葉を聞く間もなく、モルトは安あん美び亭ていを飛び出した。

　街のため、友のため……モルトは、アルコ・ホールを走った。後ろからリッツ達も付いてくる気配があったが、女子供の足に合わせていては間に合わない。

　モルトはブーツで石いし畳だたみの道を砕くだく勢いで大浴場前

へと舞まい戻った……のだが……。

「地じ獄ごくか、ここは!?」

　往来を行き交う人々はすでに誰もおらず、場に残っている一いつ般ぱん人は近きん隣りんの家々、その屋根の上に立ち、腕うでを組んで事の成り行きを……否、漢達の魂のぶつかり合いを見守る、肝きもの据すわりきったこの街の住民達だけだった。

　大通りでは十数名に及およぶ若手の自警団員が地面を転がり、その人数分だけ、まるで墓標のように長柄刀が至るところに突き刺さっていた。

　その中心では赤い毛糸のパンツ一丁となった『狂えし獅子』が銅像と砲弾を抱えたまま仁に王おう立ちだ。エビーザを紹しよう介かいした時に七五歳だと聞いていたが、とてもそんな年ねん齢れいには見えないはち切れそうな筋肉を有した館長は、全身から湯気を上げつつ、目の前に立ち塞ふさがる少年然とした男を見つめる。

「ふんっ!!　今し方の腑ふ抜ぬけた一撃で全てが判わかる。いや、そこいらを転がっている若造共の練度の低さからもはっきりと判りおる。……小僧、今の貴様に三〇人で一個中隊を相手にできるとされたリキュール自警団の団長は務まらん!!　未熟者めが!!」

　亜あ麻ま色いろの短たん髪ぱつを館長から溢あふれ出る覇気に揺ゆらしている少年は、紛まぎれもなく年下にしてモルトの兄弟で子し、若き自警団団長のライだった。

　彼は長柄刀をラフに構えたまま、館長を見ていた。

「カウンターでこんなにいいのを貰もらったのは久々だよ、ジイさん。……そうか、確かに今のオレは腑抜けているかもしんねーな」

　ライは持っていた長柄刀を地面に突き立てると、あの若き獅子達同様に、上着を脱ぎ捨てた。肋あばら辺りに銅像の頭と同じサイズの大きな痣あざがあるところを見るに、相当に強力なのを喰くらったのだろう。

　半はん裸らとなったライの目つきは明らかに変わっていた。長柄刀を握にぎって低く構え、腹の底からの雄叫びと共に覇気を放つ。

　たかだか一八の、少年と青年の間のような、若い男が放ったそれ

に……街が震ふるえた。

　全てを止やめさせるために駆かけつけたモルトの足すら止める、それ。

　館長が、ニヤリと笑う。

「来い、力足らずのガキよ。我が知識欲をその小こ柄がらな身で打ち砕けるか、己おのが長柄刀で問うがいい」

「あぁ。……行くぜ、ジイさん」

　団長！　そんな倒たおれている自警団員達の声を受け、ライが踏ふみ切る。

　石畳を砕く程ほどの一歩一歩。ライが地を蹴けり上げるごとに彼の小柄な体は加速する。

　館長は動かない。カウンターの用意も何もない。愚ぐ直ちよくに受ける気だと知れた。

　距きよ離りが詰つまる。ライは長柄刀を振ふり被かぶるも上からではなく、胴どうを払はらうようにした一撃を放った。腑抜けてなどいない、ライ全力の一撃だ。

「ライッ!!　ダメだ!!」

　モルトはかろうじて言葉を発したが、そんなもので止まるような一撃でもなければ、状じよう況きようでもなかった。

「フンッ!!」

　館長が片手で銅像を握り、ライの一撃を受ける。火花が散り、衝撃波が轟とどろく。

　その一撃に大通りに並ぶ建物の窓が砕け、館長が押し込まれた。彼の素す足あしが地面を抉えぐり、踏ん張ろうとするが、叩き込まれた圧あつ倒とう的てきな力に後退を避さけられない。

　二ふた筋すじの溝みぞを作りながら、館長は五メートルほども後退する……が、受けた。受けきった。

「ムゥ!!　このリキュールに古いにしえより伝わりし銅像を一撃で半ばまで斬きり裂さくとは……!!　だが、まだ我が知ち識しき欲よくの方が上うわ手てよのぅ!!」



知識欲とは、銅像とは……あらゆるものの意味がわからなくなっていく目の前の光景に、モルトは正直、迷った。

止めに来たものの……あそこに介かい入にゅうすると死ぬかもしれない、という確信めいた直感を覚えたせいである。

「お喋しやべりが好きなジイさんだ」

ライが突とつ進しん、真まっ直すぐに突きを放つ。館長はこれに対して身を反らすようにしてかわし、カウンターでライの腹部に蹴りを放って、彼を吹ふっ飛ばした。

だが、空中を舞ったライはひらりと着地するなり、即そく座ざに長なが柄え刀とうを構える。蹴りの直撃前に自ら後方に飛んで威い力りよくを下げたようだが……しかし、モルトの目には見えていた。石畳を砕いて地を抉えぐる程に硬い館長の足先が、ライの腹にめり込んでいたのを。

ライは蹴りが来る直前に行ったバックステップによる威力減げん衰すいには成功していたが、常識外れの館長の蹴りが逃にげる体に追いついたのだ。そうでもなかったらライの事だ、着地と同時に再び仕し掛かけただろう。彼の性格ならそうする。だが、それができない程に──立て直すための間を必要とする程に喰らってしまっているのだ。

「……いい蹴りだぜ。老いぼれる前の現役時代に会ってみたかった。残念だよ」

「軽口は、合格だ」

ライが動く。館長が受ける。火花が散り、衝撃波が大気を震わせる……そんな死し闘とう以外の何物でもない光景ではあったが……そもそもこの戦いが何であったのかを理解している者がこの場に果たして何人いるのだろうか、と、モルトはふと疑問に思う。

何でもいいから騒さわぎたい、とりあえず漢おとこ気ぎを見せたり見せられたりしたい……そんなリキュール住人の気質が悪い方向に暴走しきっているような状態である。

恐おそらく、とモルトは思う。自分は流れ着いた身だから冷静なのだろう。もし元々の住人であれば自分もまた屋根の上で仁王立ち

し、魂たましいをぶつけ合う漢達の戦いを頷うなずきながら見守っていたかもしれない。

　そうしない自分の生まれをモルトは寂さびしく思いはしない。モルトは自らにしかできないこと……自らに課せられた使命を思い出した。

「……そう、この人外魔ま境きようのような場で俺がすることは一つだけだ……」

　モルトは地を駆け、やるべきことをなさんとする。

「みんなよく聞け！　今すぐ俺の言う通りにするんだ!!」

　モルトは大だい音おん声じようを放って胸を張る。

「ジジイいぃぃいいぃぃい!!」

「ガキめが!!」

　ライと館長の激しいぶつかり合いに背を向け、モルトは皆を見み渡わたした。

「大だい丈じよう夫ぶだ、俺の言う通りにすれば……すぐに安全だ。俺の言う通りに行動できるね？」

　モルトの視線の先にいるのは……大浴場の片かた隅すみで怯おびえて震える二〇人ほどの幼女と、あのそばかすが残るムッチリ女教師である。

　何せバトルが始まった場所が場所だったので、怯える子供を無理矢理動かすよりは大浴場の建物の中にいた方が安全だと判断したのだろう。……しかし、戦いは並のレベルではない。巻き込まれれば一撃で全員がお陀だ仏ぶつだ。

「先生、今いま更さらですがお名前は？」

「え、あ……ラ、ラミーです」

「ラミー……いい名だ。では、ラミー先生、いや、ラミー。まずはこの幼女達を……」

「モルトさん、こっちも誘ゆう導どうしてくれ!!」

　男児を連れた男教師もいて、彼が荒あらい息で言った。

　モルトは即座に「お前らは後だ！」と一いつ蹴しゆうして男児達をもー度男湯の奥へと押し戻もどした。

「さぁ、未来に希望を生みし幼女達よ。二列になって、静かに壁かべに沿って外へ出るんだ。大丈夫だ、怖こわがらないで。あそこで戦っている二人を俺はよく知っている。安心して。さぁラミーからも」

「は、はい！　みんな、モルトさんの言う通りに……！」

　モルトの指示に従い、子供達が怯えながらも素早く二列となった。

「よし、いい子だ。それじゃ出発だ。前後のお友達とぶつかったりしないように、ゆっくり落ち着いて進むんだぞ。いいね？　……よし。それじゃラミー先生は俺にそっとキスをして」

「は、はい！　……はい？」

　子供達が出発するどさくさに紛まぎれて勢いで行けるかと思ったが、思いの外ラミーは冷静だったようだ。

　しかしモルトはキリッとした顔のまま「こ・こ・さ」と囁さささやきながら自らの唇くちびるを指でトントンと叩たたいてウィンクを一つし……跳とび蹴げりを喰らった。側頭部に。リッツである。

「バカ言ってる場合じゃないでしょ!?」

　息を荒げながらそんな言葉を吐はき捨て、リッツは倒れたモルトにトドメを刺さすかのように蹴りつけてくる。

「はいはいー、子供達はこっちだよ～。あの人が一番危ないから早く離はなれようねー」

　クラッツの心ない誘導のおかげで、幼女達を始めとして男児達もが避ひ難なんしていく。その間、リッツの蹴りはずっと続いていた。

「痛い痛いリッツ、痛いよ……」

「ったく!!　珍めずらしく格好良く出て行ったと思ったら、何が『こ・こ・さ』よ!?」

「ゆ、許してくれリッツ……改めて言われるとなかなかに恥はずかしい……」

　一二歳の少女が二十代前半の男を蹴りつけている夢のような場に、クラッツと入れ替かわるようにして、女め神がみが呆あきれ顔で現れた。

「……その、何だ。確かにモルト、お前の言う通りだ。あれほどの一撃を互たがいに撃うち放てるとなると……もしかするともしかするかもしれん。まぁ、それでも正常に作動するとは思えないが……止めた方がいい」

「すまん、エビーザ。俺の実力であそこに介入する覚かく悟ごがない……。ヘタするとこっちがぶっ飛ばされる……」

「ならば避難した方がいいな。わらわの体も所しょ詮せん人間が基もとになっている以上、強い衝しょう撃げきを受けると肉体を失ってしまいかねない」

　役立たず！　と、リッツから罵ば声せいを浴びせられながらモルトはよろよろと立ち上がり、そそくさとその場から離れようと大浴場を出て歩き出すのだが……背後から凄すさまじい金属音が鳴り響ひびき、モルトの足を止めさせた。

「チィッ……やるな、若いの!!」

　銅像がついに両断され、館長が手に残った方をライへと投げつける。

　飛び来た金属の塊かたまりを長柄刀で弾はじき飛ばすと、汗あせをその空間に置き去りにするほどの素早い踏ふみ出しでライが畳たたみ掛かけに出る。

「ジジイ、前言撤てつ回かいさせてやるぜ!!」

「この程度で勝った気でいるなど未熟の証あかし!!　来るがいい、若き団長よ!!　己おのれが未熟なガキであることを教えてやる!!」

　モルトは思う。あ、これマズイパターンだ、と……。

「ジジイ!!」

「ガキ!!」

　二人の男が互いを罵ののしる。しかしその言葉にはどこか相手を認める響きをわずかばかりに含ふくんでいて、家々の屋根の上から状じよう況きようを見守っている住民はどこか微笑ほほえましさをその真しん剣けんな眼まな差ざしに混ぜていたりもしたのだが……モルト達にとってはそんなことはどうでもよく、それより何より、いよいよ武器が砲ほう弾だんだけになった館長がそれを両手で持ってガギンッ、ガギンッと金属音を上げてライの乱撃を弾き飛ばしていくことに震ふるえ上がった。

「ヤバイ!!　リッツ、エビーザ、来い!!」

　モルトは担かついでいた長柄刀を逃げる先に投げ飛ばし、強引にリッツを抱だき上げる。そしてエビーザをもその腕うでに抱き、全力で逃げようとしたのだが……。

「ヌゥ!?」

　一撃一撃が喰くらえば人間など両断する程ほどの重く鋭するどい一撃を何十発と受け続けた館長がついに膝ひざを突つく。ライ、長柄刀を振ふり被かぶり……飛ひ翔しようした。

「これが、最後だッ!!」

　上空からの渾こん身しんの一撃。若き団長の咆ほう哮こうが上がる。

　館長は、その様子をまるで眩まぶしいものでも見るかのように目を細めつつ、口元にわずかばかりの笑みを浮うかべて砲弾を掲かかげた。

「やるではないか、若いの」

　その言葉ははっきりとモルトの耳にも聞こえた。恐らくライにも届いていたことだろう。

　━古き時代を戦った狂くるえし獅し子しが、今、若き獅子を認

め、次なる世代へとその想おもいを託たくした歴史的瞬しゅん間かんだとかなんとかそんな雰ふん囲い気きが垂れ流されていたが、そんなものはお構いなしに長柄刀が砲弾にぶつかった瞬間……全すべてが吹っ飛んだ。

背後からの爆ばく風ふうを浴びるモルトはリッツを己の体の陰かげに隠かくして彼女を守りつつも、エビーザの手をつかもうと左ひだり腕うでを伸のばすのだが……。

「……モルト……」

エビーザもまたモルトへ手を伸ばすが……二人の手は、届かない。繋つながらない。

彼女は苦く笑しようするような顔をして、爆発の閃せん光こうの中へと姿を消してしまうのだった。

5

雨の夜は嫌いやで仕方がない。

まるで雨雲が悪いものを運んで、雨あま粒つぶがそれを体に貼はり付けるかのようだから。

瞼まぶたを開けたくない。このまま雨が去るまで眠ねむり続けていたい。まるで雨など降っていなかったのだと、そう思えるぐらいに晴れ渡わたる、その時まで。

何もかもを忘れてしまえる、そんな時まで。

──モルト！　モルト!!

誰だれかが名を呼んでいる。

この一〇年で馴な染じんだ名前だった。いくつも名を持っていたが、一番長く使ってきた名であり、一番自分らしい名だと、そう想う。

──モルト！　目を覚まして!!

誰かが名を呼んでいる。自分の名を、呼んでいる。目を覚ませと呼んでいる。

酷ひどく億おつ劫くうだった。瞼を開けるというのは、どうしてこうも大変なのか。

どうせ雨だ。夜の、雨だ。嫌な天気だ。瞼を閉じていればいい。

そう誰かが胸の中で誘ゆう惑わくするように、嘲あざ笑わらう。

誰だ、と暗くら闇やみの中で目を凝こらせば……細身で、小こ柄がらで、生意気そうな十代そこそこの少年が幾いく種しゆもの短刀を大道芸のように手の上で踊おどらせていた。

眠っていればいい。少年が言う。思わず、そうだな、と応じてしまいたくなる。

暗い。雨が降っている。夜の雨だ。嫌な天気、嫌な時間。

……だがおかしい。それに気付いた。自分は何故なぜ雨を防げぬ場所で眠っているのか。

自分の寝ね床どこは、雨になど濡ぬれはしない。

寝床は……アルコ・ホール三番街のアパートは、雨に濡れたりは──。

──モルト!!

誰かが自分を呼んでいる。瞼を開かなくては……そう、思う。何故かはわからない。けれど、瞼を開かなくては。そう思った。

たとえ雨の降る夜であっても、目を覚まさなくては。

それはもう、きっと嫌な時間ではないはずだから。

……だから、瞼を開く。

力ちから尽ずくでこじ開けた両目に飛び込んできたのは……真っ青な空だった。だが、それを邪じや魔まするように影かげがある。雨だと感じた雫しずくはそこから生まれ、モルトの顔に落ちてい

た。

「……リッツ……？」

　リッツだった。倒たおれているモルトの上に覆おおい被さるようにしてリッツがおり、その両目から涙なみだが零こぼれ、その影と共にモルトの顔に落としていた。

「あぁ、もうバカ!!　何でさっさと目を覚まさないの!?」

　リッツの影が消え、モルトは胸むな元もとに温ぬくもりを覚える。青い空が、目に痛い。

　そして、その時になって背中が痛むことに気が付いた。路上で横になっている痛みもあるが、それ以上に打ち身の痛みが酷かった。

　モルトはリッツを胸に抱いて半身を起こせば……アルコ・ホールの大動脈たる大通りはまるで戦場跡あとのような有様となっているのを見ることができた。

　道のど真ん中に大穴が空き、そこを中心にして無数の地割れが辺りに走っている。

「何が……どうなって……。あぁ、そうか、あの砲弾の爆発で……」

　恐おそらく爆風で吹ふっ飛ばされた際、破は片へんか何かで頭を打ったのだろう。それで意識を失っていたのだ。

　だが、爆風で吹っ飛ばされた経験は過去にもあったが、その時と違ちがって、今は耳にそれほどのダメージを感じないところを見るとかなりの時間意識を失っていたかもしれない。だとすると、リッツが心配するのも無理はなかった。

　モルトはその場でゆっくり立ち上がり、まるでぐずる子供のように抱きついてくるリッツの背に腕を回しつつも辺りを見み渡わたす。

　通りの建物の窓という窓は跡あと形かたもなく吹き飛び、扉とびらは外れ、全ては爆心地から放射状に薙なぎ払はらわれていた。

　そんな戦争跡地のような中を、女医のソイがナースを引き連れて

走り回り、ベテランの自警団員達が先程やられていた若手達を担ぎ上げている。

　モルトは何もつかんでいない左手を握にぎり締しめた。

「……みんな、吹っ飛んじまったか。館長も、ライも……そして……」

「死んでねぇっての」

　後ろから声がし、モルトが振り返ってみれば……全身黒くなりながらも、プルプルと震える足でかろうじて立っているライがいた。

「……生きてんのかよ、お前。古代兵器の砲弾、モロだったろうが」

「気が付いたら二本向こうの路地でぶっ倒れてたよ……ってか、アレ、砲弾だったのか……？　古代の……砲弾って、マジかよ、モルト……？」

　恐らく爆風で吹っ飛ばされたのだろう。だとしてもそれだけで済んでいる辺りがこの男の凄すごいところだと、モルトは思う。自分なら木こっ端ぱ微み塵じんだったろう。

「ふはははははは……そうか、あれは砲弾だったのか！　素す晴ばらしい、我が知識に新たなる一ページが加わったぞ!!」

「大人しくしてろ、両りよう腕うで折れて全身重度の火傷やけど負ってるんだぞ!?　死にたいのか!?」

　大浴場奥からソイの怒ど声せいと共に出てきたのは、担たん架かに乗せられた館長である。

　ライ曰いわく、爆風で吹っ飛ばされて男風ぶ呂ろの壁かべにめり込んでいたのを発見されたらしい。

「……あー、うん。あっちは生きてるだろうなっていう気はしてた」

　グズグズと鼻を鳴らすリッツによれば、当事者の二人を除くと、何だかんだでモルトが一番危なかったようだ。十数人はいた若手の自警団員達も地面に転がっていたことで、爆心地に近くても案外に

被ひ害がいは少なかったらしい。

「もう！　モルトのバカ！　何で無理して庇かばおうとするの!? 自分が死んだら意味ないでしょ！」

「別に無理したわけじゃないんだけど……うーん、まぁ、確かに……きちんとは庇えなかったな、俺」

　モルトは何もつかめていない左手を今一度見やった。

「……なぁ、リッツ、ライ……エビーザは？」

　ライは、あの女め神がみがどうかしたのか？　と、そもそもこの場にいたことを知らないようで首を傾かしげる。

　リッツは……モルトから顔を逸そらすようにして、俯うつむいた。

　モルトは左手を固く握り締しめる。

「エビーザ……悪いな、責任取れなかった」

「いやこれで？」

　声がした。エビーザの、声。それにハッとして顔を向ければ……誰もいない。

　体を失い、今再び精せい霊れいとしてその辺りを浮ふ遊ゆうしているのだろうか。

　そんなことをモルトが思っていると……リッツは「んっ」と俯いていた視先の先、その何もない、否いな、地割れのある地面を指さす。

「……何だ？」

　目を凝らしてもわからない。だが、その時、ザパンっと水の音がその裂さけ目から聞こえ……それでようやくモルトは気が付いた。

　ここは大通り、それも大浴場の前だ。ということは……。

　モルトはリッツを放し、ライに肩かたを借りて歩くと、爆心地の大穴を覗のぞき込む。

　モルトには見覚えがあった。

　以前ピーちゃんを探し求めてサシャと共に探たん索さくした……下水道である。

「……おい、お前……マジか!?」

　汚お水すいの中からエビーザの綺き麗れいな顔だけが出ているという、おぞましい光景が大穴の下に広がっていた。

「うむ。爆ばく破はの衝しよう撃げきで幾らか体は損傷したが、地割れから転がり落ちたこの場が実に都合が良かった。これだけの水があれば回復はたやすかったぞ」

　汚水の中を泡あわ風ぶ呂ろに浸つかるかのように、楽しげな様子でエビーザがくつろいでいるのだが……。

「いやいやいや待て待て待て、それでいいのかよ!?」

「うむ、落ち着く。やはり地下の方が都合がいい。わらわはここに籠こもることにした。普ふ段だん人はまったく来ないそうではないか。実にいい」

「だからそれ、汚水だぞ!?　それでいいのか!?」

「差別するのは良くないぞ、モルト。水は水だ。何よりわらわの力をもってすれば……」

　見下ろす下水道の中、汚水の底が青白く光る。そして、数秒と経たたずに悪あく臭しゆうを放つ汚水は信じられない程ほどの透とう明めい度を有した水へと生まれ変わったのだった。

「水は水、わらわにとって水はその一ひと滴しずくまでが手足も同然。水以外の不純物を処理するなど……おやモルト、隣となりの若いの、危ないぞ」

　あ、まずい!!　と、モルトは声を上げるも間に合わない。

　汚水が透明になったせいでエビーザの全身が露あらわになり、ライはそれをモロに目にしてしまっていた。

　目を開いたまま彼は硬こう直ちよくし、そのまま穴へと落ちてい

く。当然、彼に肩を借りているモルトもまた──。

6

　リッツの父親のだという、洗い立てのパジャマに袖そでを通すなり、クンクンっと、リッツの小さく形の良い鼻先が、風呂上がりのモルトの首筋や髪かみの毛を這はった。

　何だか……帰宅した飼い主にじゃれる子犬のようだ。

「……うん、臭くさくはない」

「エビーザが湧わき水と同じぐらいに綺麗な水にしたって言っていたし……大だい丈じよう夫ぶだよ。傷口も、一応ソイから貰もらった薬塗ぬってあるし」

「ライさんよりは、でしょ？」

　ライは大穴に落ちた後、全ぜん裸らのエビーザに抱かかえ上げられたのがトドメになったのか、心しん拍ぱく停止にまで陥おちいっていたのだが……とりあえずその後の処置で一応生き残れはしたらしい。現在も病院のベッドでモルトを担かついだ体勢のまま固まっているそうだ。

「それじゃ、自室でしばらく横になるよ。……いろいろ疲つかれたし」

　モルトは風呂場、そしてリッツの家族の住居である大部屋から出る。何やら畳たたまれた白い布を手に、リッツがついて来た。

　部屋に入るなり、リッツはその白い布を広げる。洗い立てのベッドシーツのようだ。

　それを使ってリッツは、モルトのクタクタのベッドを生き返らせてくれた。

「はい、どうぞ」

　ありがと、とモルトはリッツの頭を撫なでる。リッツは少しばかり赤い顔をして、俯く。

「……不潔なのだと、傷に悪いでしょ。だから……」

「心配してくれたんだな。ありがとう。嬉うれしいよ。……俺がぶっ倒れた時には、涙まで流してくれ……オブチッ!!」

　鳩尾みぞおちに拳こぶしが来て、モルトは呻うめいた。

　顔の赤みを増したリッツが「ん!!」とベッドを指差し、早く寝ねろと怒いかり顔で訴うつたえてくる。

　鳩尾をさすりながら苦く笑しようし、モルトは横になる。

　風呂上がり、洗い立てのパジャマ。窓から青空を見上げながら、洗い立てのシーツの敷しかれたベッドに横になるのは……最高だった。

　数日ぶりの自分の寝ね床どこである。下が凸でこ凹ぼこしていない、柔やわらかである。清潔な香かおりが漂ただよう。……至福だった。

　リッツが窓を開ける。心地ここち良い風が室内に流れ込み、カーテンが緩ゆるやかに舞まった。

　何もかもが満たされているような、そんな気分。

　罪悪感すら伴ともなう最高の贅ぜい沢たくをしているような……そんな気分。

　リッツはベッドの縁ふちに腰こし掛かけ、モルトの顔を無表情に見下ろす。

　無理して表情を隠かくしているのがすぐにわかって……モルトにはちょっと面おも白しろくて、嬉しい。頬ほおにまだ、ほんのりと赤みを残しているのだ。

　モルトはリッツの頭を撫でる。するとリッツの無表情が崩くずれ、むず痒がゆいような照れた顔をして、視線を逸らした。

「……俺、ここにいていいのか？」

　思わず口を突ついて出てきた疑問。それは一〇年前から続く自問自答。

　最近は忘れかけていた、けれど、忘れることなどできない……そんな疑問。

　思わず口を突いて出てしまった言葉を取り戻もどすことなどできない。

　モルトは少し慌あわてるのだが……。

「当然でしょ。……家賃、払ってるんだから」

　リッツは、むず痒そうな顔のまま、視線をモルトから逸らしたまま……言葉通りに、当たり前だという口調で……そう言った。

　モルトは、そうだな、と笑う。

　リッツはベッドから離はなれると、一度伸のびをして、部屋の扉に手をかけた。

「夕ご飯、用意しとく。それまではゆっくり寝ていて」

　ありがとう、とモルトは応じる。だが、眠ねむる気はなかった。

　今のこの心地良さをいっぱいに味わっていたかったから。

　今のやり取りを、今の気持ちを、全すべてが夢だったと思ってしまいたくなかったから。

　だから、眠る気なんてこれっぽっちもなかった。

　遠ざかっていく、リッツのサンダルの足音に耳を澄すます。

　人の気配を心地良いと感じるようになって、どのくらいが経つだろう。

「……いや、今でも怖こわいか」

　家賃滞たい納のう中は、あのサンダルの足音ほど怖いものはないのだと、モルトは気が付いて、一人苦笑した。

　……働こう。明日あしたも、明後日あさつても。そしてその次の

日も。

　稼かせいで、家賃を払って、飲み喰くいして……そして、みんなと一いつ緒しよに笑って生きていこう。

　この街で。このリキュールで。この、アルコ・ホール三番街のアパートで。

　風が部屋に入り込む。

　山から吹ふく風は、どこかもう、秋の匂においがした。

〈了〉



あとがき

　皆みなさん、どうも、大人になったら自分を含ふくめた多くの人がネクタイを締しめて毎日会社に行って同どう僚りよう達と力を合わせて敵企き業ぎようと激しいバトルを繰くり広ひろげた末に、いい仕事を終えて洒落しやれたバーに入ったらさっきまでコンペで争っていたライバルと出くわすも、そこで互たがいにネクタイを緩ゆるめつつ「……今回は負けたよ」「局長から褒ほめられるより、お前のその言葉の方がずっと嬉うれしい」「やめてくれ。それより……今夜は奢おごれよ？」「フッ。最初からそのつもりさ、ジョン」ってなノリで、二人でささやかに笑いながら小さく乾かん杯ぱいをして酒を……ってなもんだと思っていたんですが、気が付けばそもそもネクタイを締める時なんて冠かん婚こん葬そう祭さいと出版社のパーティぐらいなもんで、毎日会社じゃなくてカフェに通ってろくに注文しないクセに長居し続ける迷めい惑わくな客として降臨を続けた結果「そろそろ……お代わりの注文じゃないですかね？」と世界でもなかなか見られない希け有うな催さい促そくを受けるようになったアサウラです。お元気ですか？　私は順調に腹回りの成長を続けるぐらい元気です。ちなみに豆知識として、ニッコリ笑った店員さんから注文の催促を受けると、人間ってのは妙みような汗あせが出ます。

　さて、いきなりでなんなのですが、補足的なことでも。

　本巻は『ファンタジアBeyond』で連れん載さいさせていただいたものに、『ドラゴンマガジン』に掲けい載さいさせていただいたものと、書き下ろし短編を加えて構成されております。

　前巻よりもこちらの方が先に制作されておりますが、作中の時じ間かん軸じくとしましては巻のナンバリング通り、ということになっております。

　この辺はピーちゃんの存在で把は握あくしていただければ、わかりやすいかな、と……。

　そうそう、そのピーちゃんなんですけどもね。まさかこの子

が……というか、このオッサンがイラストになるとは……正直驚おどろきました。

　さすがにこの子はいろいろ無理があるだろう、肌はだ色いろばかりだし、何よりこれをだぶ竜りゆうさんに描かいていただくのは……と思っていたら、ラフ画が送られてきて「マジか!?」と衝しよう撃げきを受けたのを覚えております。……だぶ竜さん、本当に、ありがとうございました!!

　ではでは、折せつ角かくですので、この流れで謝辞の方をば。

　だぶ竜りゆうさん、前回に引き続き素晴らしいイラスト、特に今回はいろんな意味で肌色が多い感じになりましたけれども、どれこもこれも最高です！　ありがとうございます！

　担当の萩はぎ原わらさん、そして、前回のページ数をやらかした関連でちょっといい焼き肉店を押さえてくださったものの、集合場所は何故なぜか隣となり駅えきを指定され、仕方なくそこからムッチリ系の男二人が夜のホテル街を貫つらぬいて店に入るという素敵な体験をさせていただきましたファンタジスタ桑くわ水ず流るさん、まことにありがとうございます。ところであの焼き肉の夜、我々の後ろを若い男女のカップルが手を繋つないで歩いていたのをご存じでしょうか？　学生時代のバレンタインデーを思い出したのですが、何故でしょうね。

　校正さん、印刷所の皆さん、さらには本書を大勢の方に届けてくださる書店員さん……関わってくださった全すべての方に、感謝を。

　そして、今回もまた最後になりましたが、この本を最後までお読みいただきました読者の皆みな々みな様さま、本当にありがとうございます!!

　もし前作、そして今作でリキュールという街、そしてそこに住まう住人達を好きになっていただけていたら作者冥みよう利りに尽つきるというものです。

　よろしければ、今後ともどうぞ末長いお付き合いをよろしくお願いいたします。

　それでは皆みな様さま、次があることを祈いのりつつこの辺で。

それではまた！

アサウラ

【初出】

第一話『果てしなく透とう明めいなただ一つの純じゆん粋すいな願い』　ドラゴンマガジン　２０１６年１月号

第二話『職業：女体さすり』　書き下ろし

第三話『追つい跡せきと追つい撃げきと』

第四話『お祭り前夜と占うらない師し』

第五話『開かい催さい、漢おとこ祭まつり』

第六話『祭りの後に残りしもの』

第七話『女め神がみの座、モルトの場所』　ファンタジアＢｅｙｏｎｄにて連載された原稿を加筆・修正

英えい雄ゆう都と市しのバカども２

～女め神がみと漢おとこたちの祭まつり～

アサウラ

平成28年1月20日　発行

発行者　三坂泰二

発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8521（カスタマーサポート）

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

富士見ファンタジア文庫『英雄都市のバカども２　～女神と漢たちの祭り～』

平成28年1月25日初版発行